
イチについて用意ドン

Hegira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イチについて用意ドン

【Nコード】

N8727G

【作者名】

H e g i r a

【あらすじ】

能力が普通スキルに存在する平穏な現代、無個性な見た目の高校生、真面一が柳瀬瀬奈との出会いを契機にいろんな問題に巻き込まれながら人生の貴重な時間を失っていく様を長い目で見てやってください。（改作に踏み切ったため、申し訳ないですがこちらは途中で幕を下ろしました。『第二の手 ｾ ｃ ｏ ｎ ｄ ｈ ａ ｎ ｄ ｾ 』と題して改めて作っているので、そちらの方で願います）

第1話 曇りの入学式（前書き）

初投稿です。

私自身右も左もわかりませんし、内容も右往左往すると思いますが
ゆるく見てやって下さい。感想、評価歓迎です。

第1話 曇りの入学式

四月の入学シーズンとでも言えはいいのだろうか、何故かこの辺では桜が早咲きしたせいでこの時期にしては異様な早さで散ってしまっていて雰囲気の欠片もないとある入学式の日。

散った桜と同様に初々しい雰囲気を台無しにしてるどんよりとした雲の色。それに気味悪いほどにマッチした色合いの校舎を持つこの場所、二布にふ高校の1-Dに割り振られた教室の特色は校舎の1年のフロアである最上階の4階の中で、建物を二分する中央階段には最も遠く、非常階段には最も近い位置にある。ということらしい。利点は敷地の角に位置するので廊下からの眺めも良く、廊下を出たすぐの所から眩しすぎるくらいの夕陽が拝めるところ。と誰かが言っていた気がする。

今日はここの入学式で、今は昇降口前で『上級生だ!』とふざけているのか真剣なのか分からない文字の入った腕章を付けた先輩方が次々と配付しているクラス分けの紙(その辺に掲示するのとどっちが費用がかかるのかは知らない)を見て自分のクラスへ向かう新入生でにわかに廊下や教室やら活気に満ちあふれている。

そんな中を一人の少年が新入生の人混みをかいくぐり、真新しいスクールバッグを肩で担いで1-Dの教室へと入っていった。

この少年、真面まへ一は今年からこの公立高校の生徒となる1人だ。容姿は中肉中背の黄色人種で黒髪の直毛に眼は茶褐色の虹彩を持ち……何が言いたいのかと言えば、真面一という人間はどこからどう見てもまっとうな日本人だということだ。

一は配付されたクラス表で自分の名前だけ確認すると、友人その他の諸々の名前の所在の確認を忘れ、さっさと自分の席へと座りこんだ。後ろから2列目、窓際から2列目。

なんとまあ、自分（平民）にふさわしいというかびみよーな席だな。と感嘆する。

ふと横の窓を見れば校庭周辺が見え、正門からやや遅れ気味の生徒が小走りで来るのが分かる。

室内に目を向けるとクラスが一緒になって喜びのハイタッチしている奴らや、むせたようにケホツと音を立ててチョコクの粉を吐き出すという妙に生き物臭い故障をする黒板消しクリーナー（正式名称は知らない）に慌てる男子生徒とそれを見て面白がったりする周りのクラスメート……といった光景が繰り広げられている。

そんな中、一は呆けて頬杖をつきながらそれらをじいーっただただ見ているだけだった。その目にはどんな補正をかけても炎は宿ったように見えない。

それはひとえに友達がいない……のではなく、単に行動を起こす気になれないという単なる面倒臭がりの思考ルーチンと知らず知らずの内に身についていた無表情だった。

新生活の前日にも緊張せずに良く眠れた朝ゆえに眠気など都合良く襲って来るわけもないが、一人浮いた感覚がしてどうしようもない心地がしたのでいっそのこと良く分からない文字が刻まれているからさまにお古な机にでも伏せていようか。と考えたところで、声が降ってきた。

「おいマジメ！ 待ち合わせをけって行きたあどーゆう了見だよ！」

中学でフランクかつ無遠慮に言われたあだ名で呼ばれ、伏せかけた

顔をぐるり、いや、カクンと右へ向けると新品の学ランに見事なシワ加工を施し、同様に自身もヨレヨレ（に見える）なヤツの胴体が視界をほとんど塞いでいた。

「あー、同じクラスになったのか琉二。^{りゅうじ}よっ、久し振り」

机にダラリと伸ばした右手にだけ電気信号を走らせて挨拶をする。

「本題はそこじゃねえぜ！ ……ともかく何で逃げやがった？ さっさと言え」

目の前にいるのは一の住んでるアパートの隣人で（よって久しくない）、そのアパートを所有している大家の息子である白楽琉二^{はくらく}という一の幼馴染み。もう気が置けなさすぎてよく分からない仲だ。喩^{たと}えると窒素？ 正解。

こちらをまさに見下ろしているその背は高く、190を軽く越えていてうっとおしい。

体格はムキムキではないが筋肉質で、ややくせ毛、いかにもさわやか（ちよっと違うかもしれない）なスポーツ青年といった雰囲気を持っている。実際スポーツ青年なのだが。

「ドアの向こうから聞こえる音的に早く行けって言ってた気がしたんだ」

ちなみに聞こえたのは適当なRPGの『会心の一撃』とか『クリティカルヒット』の音を再現したような音。そして脳内には『OVER KILL』の表示が出た。

「お前はそうやってアイツの恐怖政治を野放しにするのかよ!？」

姉弟間の問題を持ち込まないでほしいもんだ。言っておくと義理の
なんたらゝ、とか禁じられたかんたらゝ、ではない。

「まあ……革命目指して頑張れ」

そのまま人形のようにこてりと机に伏せる。

「自分が被害を食わねえからってその態度は何だ。ああそうだ、そ
ういやオレの席お前の隣だぜ」

そう言って琉二は脱力。その勢いで一の右隣の椅子にドカツと尻を
打ち付ける。

その勢いのせいか少しだけ痛そうな顔をした。

「そういや初めてクラスが同じになったな」

「おお！ そうだった。小中の行事でマジメが敵だった記憶しか無
えぜ」

「あー、無駄に体力の消耗が激しかったな……」

その時二人の視界の外から忍び寄る影が、

「お二人さんオハヨーっ!!」

会話の途中で誰かが驚かせるには十分な音量で話しかけてきた。
一は無言で、琉二は普通に、びっくりした。

「！」

「うわっ、風璃ふうりかよ!? ……あービクツたぜ」

「うーんやっぱりハジメちゃんはリアクションに欠けるねえ」

背後から二人を驚かしたのは齋藤風璃さいとうと言い、去年中学で同じクラスだった。

一の数少ない女友達と言える存在だ。

あまり人に干渉しない一と違い、人懐っこい性格からか、交友関係は結構広い。

しかし、能力者として敵に回すとほとんどのやつが為す術も無く死屍累々。という逸話を持つ『天災』である。

もちろん普段からそんなバイオレンスな事をしているわけではない。むしろ温厚な方だ。

「自分で言うのも変だけど結構驚いたつもりなんだよな」

「あえて言えば眼はそうだけどさ。それ以外はほとんど分かんないね。未だに」

一は内心で思ったほど感情が顔や態度に表れないらしく、親しくない奴には根暗キャラで通ってる。らしい。

そして一部の有識者の間では触れてはいけない存在にされているが本人は知らない。

「……やっぱ俺の表情筋って死んでるのか？」

「マジメ……自分でそれをいうあたり終わってるぜ。むしろ性格だぜそりゃあ」

「そうか？」

「そうだよ。ハジメちゃんはあまり喜怒哀楽が激しくないからね」

自分ではたまに抑えられないくらいのある衝動（他人には無害）があるにはあるのだが、それは稀にしか起こらないので今は放っておく。

「やっぱりそこなんだよな。何て言うか、冷静な部分が主張するんだよな、『放っとけ』みたいな感じで」

「枯れてるだろ。マジメ。老けてんだろ。マジメ」

「デメエコラ琉二」

とりあえず指摘されたことに反発してキレてみた。

「おーこええな無表情のキレ」

そんないつも通りの会話をしながらも、他の数人ぐらいの同じ中学だった奴らと軽く挨拶を済ませた後、しばらくして担任らしき先生が教室に入ってきた。

ガララッという音にほとんどの緊張気味の生徒達は静まり返り、入り口を見た。

その女教師は目立つ要素を極端に取っ払った装いで、この状況でこそ先生と生徒という世代の違いで周りから浮いているが、おそらく大人達の間ではその他Cとかの役割にはまると思うくらいの普通っぽさを持っている。

そしてその担任らしき大人はすぐに全体を見渡して定型文のような口上を述べる。

「まずは皆さん入学おめでとう。私が1－Dの担任になる敷石恭子しげしき けいこです。早速ですが整列して……」

そう言いかけて、ドア（引き戸）の向こうから足音が近付いてきた。その足音が途絶える瞬間、ガラッと勢いよくドアが開いた。

「入学早々遅刻しませんーっと、……これはセーフ？」

入ってきたのは比較的、いや、多分このクラス……いや、学年で一番小さいと思われる女子で、今は肩で軽く息をしながらクラスの視線を一手に引き受けている。

「……まあ、晴れの日ですし大目に見ましょう。えー、柳瀬^{やなせ}さん。そこに空いてるのがあなたの席です」

そこは唯一空いてた一の左隣の席で、柳瀬と呼ばれた女の子は回りに愛想笑いを振り撒きながらそくさと着席した。

何故か周辺の男子の中に軽い挙動不審に陥ったやつらが何人かいた。それが何なのかは雰囲気^{きふき}に鈍い一には分からなかったが。

「それでは今から入学式なので出席番号順に並んでください」

先ほどから淡々と進める担任、敷石におとなしく従い全員そろって廊下に二列縦隊で並び、既に並んでいたA〜C組の後に続いた。

無駄な時間を省いたのか、行き帰り含めた全体の行程でも1時間もかからなかった味気無い入学式が終わり、教室で琉二と話し合う。

「いやー、あんなのが校長だったなんてこの学校変わってんだな」

珍しく琉二が悪評以外の普通な話題で先生の話を振ってきた。悪評と言っても宿題が多いだの居眠りに厳しいだのその程度のものだが。

「ん？ ああ、やっぱ聞いてなかったな俺。入学式の話全部」

わいわいがやがやとうるさい所に行くのはどうも生まれてこの方苦

手で、一はそういった状況下では今みたいなことになりやすい。電気をたくさん使うとブレーカーが落ちるみたいに、過剰量の会話が耳に入ると聞き取る気力が一気に削そがれるのだ。

「はあ!？ お前いくらなんでもアレをスルー出来んのはオカシイぜ!」

いつもなら『やっぱり聞いてねえか……』で済ます琉二が何だか今は異常だ。

こやつは琉二の偽者かもしれない。なんて思考の片隅にわざと置いてみたりする。

「そんなにその校長って変なのか？」

「……いや、もういいぜ。知らないなら見てのお楽しみにしとけ。そして驚け」

あからさまに企んでいる所にやる気を削がれ、真剣に考えるのがめんどくなる。

「……まあ良いか。別に個人的に関わるなんてこたあ無いだろうし」「もったいねえな」。あれは一見の価値アリだぜ」

一は琉二がやれやれと肩をすくめるのを横目に、プリントを詰めて帰り支度を進める。

手早く学校が終わり馴染みの3人で帰りの途中。
交差点で家の離れた風璃と別れて家に帰るまで後5分。の所で、

「……なあ、琉二」

「分かってるぜ。後ろの正面だーれだ？　って話だろ？」

下校している途中から後ろから視線を感じていたのだ。

決して自意識がオーバーワーク！　などとふざけているわけではない。

一はむしろそういうのには疎いと自負しているのだからこれは間違いない。

関わり合いになりたくないので不用意に後ろを向けず、そのおかげで姿を確認できてはいないが、どこからかずっと付かず離れずの距離を保ったままここまで来ている事はなぜかわかった。

一応警戒して耳打ちなどのあからさまな行為はせずに、向こうに聞こえないような声で普通の会話を装う。

「何なんだよ一体。あの存在感丸出し」

「風璃狙いじゃないのはある意味で良かったけどどうするよマジメ？　アレはストーカーだぜ？」

「別に俺らにはやましいことは無いんだから普通に帰る」

「それって大丈夫かよ……」

とにかくこうして巷に満ち溢れる能力者の高校生男子2人はストーカーの気配と共に家路に着く事となり、その間ずっと『本当にそっちでいいのか』と聞こえて来そうな気配は途切れることなく、妙な緊張感のままアパートの前まで来てしまった。

「……オイオイまだ付いてきてるぜ。たまたま道が同じ方なんて考えもあつたんだが違ったのか？　まさかのホモストーカーか？　それとも怪しい業者の方？　はたまた……」

なんか琉二がテンパってきて危うい思考に走っている。

ああ、うざい。もう何万回思ってきただろうか。そろそろ単位をミリオンに変えてしまおう。

「もうこれは腹をくくって話しかけられない事を祈るしか無いな」
「おう……そうだな……!」

「……お前たまに小心者だよな」
「うるせー! オレは毎日頑張ってたんだ!」

中央の階段を一段、二段と登り、205、204、203……と来て自分の部屋の202号室に鍵を差し込んだその時、

「うえええそーだったのおお……」

ストーカーらしき気配が緊張の糸をプツンと切るようなうめき声を上げるもんだからつい振り向いて見ると、

「あー、遅刻最速記録だっけ?」

「何でそういうやな言い方するかなあ!?!」

これが一と柳瀬瀬奈^{せな}との記念すべき微妙すぎる対面だった。

第1話 曇りの入学式（後書き）

一読、ありがとうございました。

週1の更新でノロノロやっていますが、お付き合いのほどよろしくお願いします。

第2話 隣と隣のお隣は自分

意味不明な遭遇の後、数分が経過し……。

「……つまり帰り道が先回りされて『あー同じ学校の制服だーでも無闇に話しかけるのもアレだし別れ道まで観察しよう』って思ってたわけだ」

「まさかこんな近いとは夢にも思わなかったけどね」

「確かになあ」

聞くところによると、ここのアパートの部屋割が、

201 白楽琉二&姉

202 真面一

203 柳瀬瀬奈

だったので今回の陳腐なストーカーまがいなことが起こったようだ。

瀬奈が二重の目でこちらを見上げている。

もちろんフハハ勝った。などと背の高さで女子相手に威張っているわけがない。単に目線の位置を確認しただけ。

「ところでいつ引っ越したんだ柳瀬？」

「昨日だよ」

「……なんだそりゃ」

あまりの無計画に思わず溜め息が出そうになる。

普通は3月の内に引っ越して身の回りを整理する時間ぐらい確保すると思うのだがこれいかに。

「どう考えても強行スケジュールだよな？」

「うん。だから部屋の中は段ボール箱だらけ」

「片付けるのが大変そうだな？」

「うん。だから高くて届かない段ボールがあるんだ」

「……背が低いからだな？」

「うん（キツパリ）。だから手伝ってよ。業者さんはみんな積むだけ積んででかい家具だけ置いて帰っちゃった。……あと次また身長のこと言ったらあれだから」

「なんだそりゃ。あと荷解きはしない方が良いよな？ 私物を扱う訳だし」

「うん……と言うところだけどそういうのだけは昨日の内にたたんじやってるから全然オッケー」

「分かった」

返事をした後、今まで聞いた情報から最善の策を捻り出す。それは、

「おい琉二。今こそお前の日本男子の規範を捨てた身長を活かすとき……」

ヤツに丸投げしようとして振り返るが誰も居ない。おかしい。確かにここにうざったいくらいのでかいボウリングのピンがこう……に
よきつと生えて……。

しかし疑問に思っている一の背中が反対の方を向いたとき、瀬奈はそこにとある物を見つけ、それを手に取る。

「ん？ ……ねえ。ちょっと背中失礼するよ」

声にこそ出ないが一は瀬奈の顔に苦笑が滲んでいたのを一は振り向いてやっとなつていた。

「何だ？ 何か付いてたか？」

一瞬何のことかと思ったが制服からテープの粘着で引っ張られる感覚がしてすぐに意味を悟る。小学生のやるかもしれないアレ、貼り紙。

さっきからいないと思ったらこれか……。

「どれどれ……うわ、これ解読モノだよ。日本語じゃなくてハングル？」

「それはハングルに失礼だ」

一の見立てでは琉二のイタズラ……もあるだろうが単純にバカ、とか楽に読めそうな文字を書かないあたり、真意は置き手紙だろう。読ませる気があるのかは全くの疑問だが。

「貸してみ……』とてつもない障気を感じたので逃げる。マジメをサシの状況にするのは気が引けるが死にたくないのですその場は任せた！』だと……あのヤロー何を怒らせたんだ……？」

読み終えて顔を上げると瀬奈が驚愕の表情でこちらを見ていた。

「そのミミズ文字読めるの！？」

「伊達^{だて}に小6の自由研究で『習字の授業を否定する小学生の文字とその解読（ひらがなから漢字の読みまで）』を出してないぞ」

もちろん琉二の文字（超走り書きバージョン）のことだ。

「なにそれ……」

手近に資料があり（隣人の部屋とか）、なおかつそれを訳すだけという頭脳プレー。

その後先生に解説書として重宝されたとかされないとか。

一が懐かしんでいると、

ポン。と肩にオーラ満点の手が乗せられた。

（！？　こ、この3文字で言うなら『世紀末』、2文字なら『絶望』、1文字で『みなごうし塵』の感覚はッ！？）

不穏な感触（十どす黒いもやもやしたものの気配＝障気）に振り返ると、そこには、良く知った、客観的に、見ても、美人の、お姉さんが、般若も、真似できない、くらいの、とてつもなく、恐い、笑顔で、こちらを、見ていた。

「ハジメクーん（ニコニコ）。りゅうの奴がどこに行ったか教えて」（ニコニコニコニコ）。お使い頼んでたのに帰ってきていないのよ」（ニコニコ×3）」

ニコニコの自乗に比例してミシミシが増大。

巧いところで関節が外れないように力加減されているのがまた恐怖をも増大させる。

この魔王（性別♀）……いや、お姉さんは琉二の姉の冬雨^{ふゆ}。このアパートにおいて大人の方達に次いで支配権を握っているであろう人物だ。いや、そもそも支配権ってなんだよ。

物心ついたときには既に悪魔に魂を売っていたと一は記憶している……。ここを王国に喩^{たと}えるなら国王は大家で領主はこの人だ。

その人物が放つどす黒い波動に当てられて心臓が絞られるような感

覚を訴えてくるこの神経は間違っていないはずだ。ああああ……呪いで寿命が吸い取られてゆく。

にもかかわらずこの仏頂面が感情とは裏腹にそれを相手に一部しか伝えないのは物凄い損をしている気がする。相手側の手心という要素がゼロになるのだ。

「いっっ（痛い！ 肩が痛くて喋れない！ 俺それでも平気じゃないです！）……ふ、冬雨さん。や、奴はさっきまでいたんですがこの場を去りましたっ！」

一見穏やかなようで万力のような絶対的な力で肩を掴んでくる握力に屈し、正直に答えてしまう。……情けない？ 抵抗して何の得があるか教えてもらおうか。

「チッ（人目もはばからず舌打ち！？）。忘れてたな、あんのバカリゆう……殺すッ。逃げられると思ってる内はなあッ！」

なんとも恐ろしい大学生だろうか。

身だしなみも程々にデニムのポッケに手をつ込みヤクザの抗争を吹っ飛ばしそうな面構え（戦を楽しむ顔）でアパートから出陣なされた。

「……………（多分物凄く下らない理由でキレてんだろうなー）」「……………（あの人と仲良く出来るならそうしとこう……敵にしたらダメな気がする）」

一も瀬奈も黙って見送る事しか出来なかった。

気を取り直して（無かったことにして）会話を軌道修正することで雰囲気的に合意した。どうも強大すぎる者の前では気持ちが一つになるらしい。物語の王道だ。

「……仕方がない、『イチ』！ 手伝い頼んだ！」

何やら聞き慣れない単語が聞こえて一瞬気後れした。

「あ、ああ。どーせ暇だから良いんだけど……イチって俺のことか？」

「イヤだった？ もしやイチーとかイチえもんが良かった？」

「それはふざけてるだろ」

ていうか誰だ。前者は黒崎みたいな気はするが後者は存在を知らない。ドラちゃんなら知っているが。

「やっぱり？ で、どーする？」

「……イチでいいから他の二つは止めてくれ」

『イチ』ならともかく下手に刺激すると曲がった針金みたいに二度と戻らなくなってしまう変なあだ名を付けられそうな予感がする。良く分からぬ比喩だと自分でも思う。

「というかその前に何で名前知ってんだよ？」

「それはアレだよ、ホラ、机」

「机？」

意図せず話題を逸らす事に成功したが、発言の意味を計りかねていと、

「教室の机に名前が張り付けてあったでしょ」

なるほどと手を打つ。確かに座席を確認させるためにそんなもの

あった。しかし、これだけは言っておきたい。

「それ読み方間違えてるから。『ハジメ』だぞ俺は」

「もちろん分かってるって。あだ名なんてそんなもんでしょ」

やっぱり確信犯だった。

「まあ、マジメよりは良いか」

今頃亡き者にされてるであろう琉二を思い出し、黙祷を捧ぐ。全く残念でならない。

「そんな事より早く片付け手伝ってよイチ」

「はあ……結局めんどいのは回ってくるもんなんだよな」

どの道近所付き合いをないがしろにするつもりも無いので断るつもりは無いが、なるだけ楽に行きたいなーと常日頃から思っている。

「めんどくさがらずに人助けだと思ってさ。やろーよ」

「どっからどうみても人助けでしかないだろ……」

やる気のないツッコミは見事に流され、早速働く事になった。
給料？ プライスレス。

――

「ダンボールハウスへようこそ」

「違うだろ」

突っ込むが当然初対面で頭ははたけない。

招待された部屋の中は、というか玄関は、不親切に積み上げられた段ボールの山で片側を埋められていた。

聞くと引越しを受け持ったのは安さだけが売りの運輸会社だったらしい。そのくらい選べばいいものを。

タンスやテーブルなんかの家具はさすがに設置済みだがいわゆる『道具』と呼べるものはほとんど手付かずだった。

「わたしは自分の部屋を整理してるからイチはそのやつをイスでも使って下ろしといて。あとは余裕があったら『手の届くところに食器や鍋とか置いてくれてると助かるかな』」

「地味に気にしてんのな。わざわざ自分で言うし」

「わたしから言う分にはいいーの。自分だって男の子にしては小柄じゃない？」

それでも一は平均以下なだけで、160は越えているから致命的に小さい訳ではない（それでも低いと言われるが）。

しかし気になるものは気になる訳で、

「……男子は女子と違って高校でも伸びる奴がかなりいるんだ」

まるで自分に言い聞かせるように言う。というか言い聞かせている以外の何物でもない。瀬奈に言ったところでどうにもならないことぐらいはわかる。

「ふーん。ま、お互い様だね。よろしく頼むよ」

会話も程々に切り上げ、作業を始める。

瀬奈はこちらではやれることはとくに無いとばかりにさっさと自分の部屋と思われる場所へと入った。

まずは足場になる椅子を……と廊下からリビングを見るといきなり、

テーブルの上に目が行った。

（なんだこれ……日記……だよな。明らかに『D i a r y（イエイ）』なんて書いてあるし。何でリビングなんか……）

……人間他人の秘密という誘惑には弱い生き物である。

たとえ出会って1日と経っていなくとも興味は出てしまうのであるからして……。

「よし、小休止」

一は持ち前の即決即断（大抵悪い結果を生む）で日記の適当なペー
ジを開いてみた。そこには、

△月○日 雨！ 止め！

『今日も昨日に続いて雨。楽しみにしてた体育が連続でつぶれた。
ってこれわたし学校行く意味無いじゃん！ 最近回りはなんかスキ
ルがめざめる人が増えてるし！ さーちゃんのうらぎりものー！
だましたな！ こっちなんかスキルが使えるようにならないと……
（これは書けない！）だし。誰か助けてよ！ このかわいそうなわ
たしを！ ……誰もいないか。言わないんだから……。もちろんこ
れも書けない！ ああもうアイツいい加減——』

中断。なんかいやな予感——

「なあーにを見いーてるのかあな〜？」

終わった。現行犯だ。バチだ。因果応報だ。震天裂空斬光旋風滅碎

神罰割殺撃……は無いが。

多分今振り返るとそこには恐ろしいモノが控えているのだろう。映画とかでこういう時に振り向くのは大概戦闘の始まり（主にガンアクション）だった気がするので、ノリで後ろ向きのまま返事をしてみたりする。

「……スマン」

「どのくらい見たかな？」

「……雨で体育が連続で休みになった日の事です。途中まで」

「……他には？」

「なんも見ません。そこだけです。それは俺もびっくりだ」

それを聞くと、瀬奈から出ている殺気というか許さないオーラはなりを潜め、次いで溜め息が聞こえた。

「……そこに置いたわたしも悪いんだけど、そんなに手が早いのもどうかと思うよ？」

止めようとしてもしない溜め息がやるせなさをそのまま表している。

「すみませんでした。以後迷惑はかけません。日記の内容はばらしません」

「うーん。ここはパターンの相手が下手に出てるのを利用して奴隷にするのがいいのかなあ？」

「パターンとか知らないがそれは断る」

ドコの知識だ。画面の向こうとか次元を落とした世界の話か。

「でもそんなのわたしのキャラじゃないし……あ、そうだ」

「何だよ」

下を向いてぶつぶつ言って考えたかと思いきや、突然一の方へ向き直り、

「わたしを助けて？」

「……はあ？」

笑顔で訳の分からない事を言ってきた。
これがいわるターニングポイントになるとは思わなかった。
めんどくさい事になりそうだなとは思ったが。

第3話 腹が減ってはいけません

「わたしを助けて？」

「……はあ？ ……ハッ、実は謎の秘密決社とか悪の犯罪組織に狙われて——」

「そんなわけないから。どこからそんな考えが出てくるの？」

「だよな……」

もしそうなら警察に任せてるところだ。

「とりあえず後で説明するから1時前までの間で片付けをちゃちゃちゃっとやってね」

結局何が『助けて』なのかは分からなかったが、瀬奈は一を差し置いて出しっぱなしの日記を手にも、自分の部屋に戻ってしまった。

「何だったんだ？ ……あー、片付けるか」

首をひねるが当然答えは分からないので考えを諦め、今度こそ本当に荷物整理を始めた。

「……よつと、しかしだいぶあるな」

その後ゆっくりと時間をかけ、豆の如き瀬奈の身長でも椅子を使えば楽に持てるであろう高さまでは段ボールを処理し終え、中身の食

器（高いところに食器の入った段ボールを置く引越し屋って……）を一通り棚に並べ終わると、突然部屋から瀬奈がゆらりと出てきた。

「おおい……」

某忍術学園の刀使いよろしく、ゆらりと再登場。

「ゆ、油断してた……」

「何がだよ？」

生気が無い点を除いて異変が見あたらない。

「時間……確認して……なか……た……」

左右にゆらり、前後にフラフラ、上下に首をうつらうつら。

……眠いのだろうか？　こんな昼間から。

「それがどうかしたのか？　今は……1時ちよい過ぎだよな」

「うお、お腹が……きゅー……」

ボタン。

妙な鳴き声を発し、それはもう見事に無抵抗に頭から倒れ（キケンだからマネはするな！）、瀬奈は床に正面からぶつかった。

「!？」

一に上記の反応ぐらいしか許さずに、すぐさまぐうぐうと瀬奈の腹から音が漏れる。いや、溢れる。

「（わ、わかりやすい奴……）おーい、大丈夫か？　それにしても

危ない倒れ方だな」

鼻が折れてないことを祈る。

「そこ……わ…笑うなあ……」

地に臥せたまま瀬奈から再び第二の腹の虫が鳴く。

ここに来て恥が上回ったのか、必至に腹を押さえた。それがまた面白いのだが一は取り繕って話しかける。

「笑ってないから。立てるか？ さっき冷蔵庫見たけど何も無かったよな？ 俺の部屋で何か作るから」

「立つのはムリ……背負うかなんかでお願いします」

「あー、分かった」

瀬奈はか細い声で付け加える。

「あと、心配してくれて、ありがとね……」

「どういたしまして」と言っで一は瀬奈を背負って隣の自分の部屋に連れて行った。

多少だが料理の出来る一はちゃぶ台の脇にある座椅子に瀬奈しにんをもたれさせ、自分はキッチンに立ち、余り物連想ゲームの結果、チャーハンを作ることにした。

腕が素人の域を出ないので味は期待されるものではない。

「あゝ生き返った♪ サンキュサンキュ」

どうやら危難は去ったらしく、瀬奈は喜色満面の復活宣言とあいな
った。

言うなれば今の瀬奈の状態は元氣百倍、おそらく空も飛べるのだろ
う（空想）。墜落しても起き上がってわははとか走るはずだ（こ
っちはありそう）。

瀬奈が食い終わってしばらく後に座布団に座った一がゆっくり、い
や、のろのろと余分のチャーハンを食べ終え、向かいの瀬奈に切り
出す。

「しかし何だったんだよ、いきなりボタンきゅー、って。朝飯食っ
て無かったのか？ やっぱ遅刻するくらいだし暇が無かったのか？」

「ないない。朝ごはん食べてなかったら遅刻も出来ないよ？」

「？」

首を傾げる一に瀬奈は続ける。

「簡単に言うとな、自分で言うのもアレだけど体内時計が異常なぐ
らい体に影響してるんだよこれが」

「は？ そんなんで倒れるもんなのか？」

瀬奈は溜め息を付き、馴れた感じに説明を始めた。

「やっぱすぐには納得できないよね。ざっと説明するけど、まず朝
は五時に目が開く、そこから1時間以内で朝ごはんを食べないとバ
ッターアウト。午後一時までに食べないとさっきみたいにボタンき
ゅー。夕食は六時まで。しまいには九時で問答無用であのにつくき
睡魔に意識がスパンッ、と刈り取られるし。だから夜の番組は全部
録画して見てるの」

「へーそう」

途中睡魔の件で大鎌を振りかぶるジェスチャーまでしてくれた瀬奈に対し、四文字で感想を済ませた一の頭の中では、うっそだ、が響き跳ね返り、やまびこが増殖している。

そのせいで頭がくらくらししてきたところでようやく正常な思考を取り戻すことができた。

「なかなか健康的だな。良い事だ」

「いくぬあーいっ！」

瀬奈は立ち上がり様にちゃぶ台に手を突き、衝撃でのどかな食卓が揺れた。その余韻も程々に、

「これっっっただけでわたしの人生どれっっっただけ損してると思う！？」

「待て待て落ち着け話ならいくらでも聞いてやるから。てかおまえ何でキレてんだ？」

「うるさあーいっ！ この際だ聞かせてやる。あれはわたしが小学4年の時……——」

「おうおう何なんだこの以下略的に持ち込みそうな雰囲気は」

「黙って聞いてろおーッ！」

「なんか復活して無駄に元気になってるし……」

かくして瀬奈のスイッチが入った。

持ち前の忍耐強さ、諦めの良さに付け込まれ、その後30分に及び一方的に謎の苦労話を聞かされた一だった。

「――という訳。分かった？」

ようやく校長クラスのお偉いさんも顔負けの息もつかせぬ長話から解放された。

その長話を要約すると、『わたしはこの体質でいかに損をしてきたか』という話だ。逆に言えばそれだけ。

「うおおおやつと相槌以外が喋れる……うん、なんとなく言いたいことは分かった。もしかして助けてってのは……」

「そう。お手伝い――」 「まさかこの歳で介護の仕事をすることになるとは……就職低年齢化の波はすぐそこまで来てるんだな……」

しみじみと遠い目をする一。

「わたしはそこまで重症じゃないよっ!？」

琉二とかに対する適当な感じの、ようは普段の調子で適当に相手しているとか火に油を注いってしまったようだ。この辺の火付き（キレるスイッチ）は琉二に似ていると思う。

「でも腹が減る前なら自炊出来るんじゃないのか？ 油断しなきゃ何とでもなるんだろ」

「それでもやっぱり今みたいなのがあるから保険がいるんだよね。」

どーしても。身近な所に知った人がいれば安心だし……あ、別に親は二人ともちゃんと生きてるよ。わたしが一人でこっちに來ただけだから」

「何で俺が世話を……ってああそうでしたねスンマセンでした日記見て悪うござんした柳瀬サン」

愚痴をこぼそうとすると即座に刺すように睨まれて（というか睨みそのもので刺されて）自らの罪を思い出させられた。

「イチ。君はわたしのプライバシーを侵害した。よってわたしの生活をサポートしてもらう。それとわたしのことは瀬奈でよろしい」

偉そうに胸を張って、効果音をつけるならフン、といった様子で瀬奈……いや、瀬奈裁判官は言った。じゃあ自分は被告か（たった今受刑者になった）。

「じゃあ、瀬奈（他人にそうする割に自分はあだ名で呼ばせないのか）……助けるって具体的に何をさせるつもりなんだ？　今みたいな飯炊きで良いのか？」

逃げられないと分かれば諦めてさっさと次のステップを考えるのが真面クオリティー。

蟻ならアリジゴクに勝てない致命的に懦弱な精神だがもちろん蟻ではないので生きていける。

「自分で言うのもなんだけど普通もう少し抵抗しない？　『めんどくせー』とか『他を当たれ（ハードボイルド風に）』とかさ」

『』のセリフの音程が妙な悪寒を生み出し一をなぞる。

「……なんだ今の。特にダンディな声マネの方」

「趣味。将来はモノマネ芸人。なわけじゃ無いよ？」

突然の瀬奈の素の声と低音の声真似との落差に心底ビビった。まさにソプラノとバス。人体の神秘か。

「まあいいか（ダメだ、ついていけねえ）……こういう時は大体逃げられないって相場は決まってるんだ。それでも諦めの良さはそんなじよそこらの奴にゃあ敗けないぜ（あれ？　ついていつてるのか？）」

「どこの相場なのそれ……」

呆れる瀬奈。

「とまあ冗談はさておき具体的に俺は何をすればいいんだよ？」

「冗談って……」と再び呆れた後、瀬奈は少し考えて話し出す。

「うーんやっぱり一番不安なのは寝る前と朝がきついことかな。シリアルならすぐに出来るけど毎日それじゃ味気無いし……朝ごはんが第一で、二番目は倒れるかもしれない寝る前かな。変なところで倒れたら食糧調達ないし寝床確保ヨロシク」

そこで一はある事……というか重要な事に思い当たった。

「ちょい待ち」

「何？」

「それをするのは構わないけど……俺はどうやって寝る前と起き抜けのお前の世話をするんだ？」

まさか鍵を開けとく訳にもいくまい。

目の前の大変な考えナシさんは時間差でその考えに行き着き、

「……どうしよう？ イチってピッキング出来る？」

「出来るかよ。出来たら大問題だろ」

さすがに期待してはいなかったのか、すぐに考えて一の予想通りの
答えを口に出す。

「やっぱり……合鍵？」

今更ながら何かとつてもマズい展開が待っている気がする。

いや、合鍵自体は元から予備として作られているから明日にでも実
行出来るのだが……。

「普通の高校生として物凄い抵抗があるんだけど……それしか無い
のか？」

「わたしだって出来るだけ自立したいけど孤独死はしたくないしそ
っちも腐敗臭とかイヤでしょ？ どうしても入られなくなったら
チェーンだってあるんだし」

自分で腐敗臭とか言える辺りが、コイツの死ぬ可能性をありありと
考えさせられてしまう。

「……じゃあ今ある鍵を交換して、お互い入れるようにすればオッ
ケーなんだな？」

自分の中の今までの15年間がこの状況に口の中を虫唾むしずやら苦虫や
らがのたうちまわるような嫌悪感を訴えてきたがなぜか堪えてしま
った。

その理由を探りかけたとき、

「ピンポンだと動けなくなってる時出らんないからそれしか無いね」
「一応聞いとくが……俺が男だって分かってその話をしてるんだよな？」

もし分かってなかったら瀬奈の人間性を正してやらねばと人知れず意気込む。

「そんなのあれだよ、どうせさっきから女の子の部屋に来てもやる気ゼロのイチにそんなことするつもりもないでしょ。ぶっ飛ばすし」
「まあ、そうだよなあ……（ん？　ぶっ飛ばす？）」

普通に何もする気が無いのを見抜かれた。

会話中にも関わらずあらゆる無気力を備えた目をしていたので当然とも言えるが。

ついでに言うておくと一は大概の場合、水揚げされて死を悟り、己の生を諦めた魚類の目をしている。あくまでオーラのレベルでの話だが。

「そんな人に身の回りを任せるのもあれなんだけど……頼んだ。なんまいだ〜なんまいだ〜」

突然合掌して拝まれた。

別に後光を発しているつもりは無いが、ノリだろう。

「つていうか普通に自炊出来ないのかよ」

「コンロを使わない料理なら結構イケるよ」

「ダメじゃねえか」

アレか、レトルトカレーも作れないのか、と。
流石にそれは無いだろうか。

「だから頼んでるんじゃない」

「結局そこか」

体質以前に多角的に見て色々問題がありすぎる気がしてきた。

まあボランティアだと思えば何もまずいことは無い、と無意味な自己正当化を図る一。

というかこの選択肢自体は正解もクソもないと思う。

「……そういえば、さっきのもう一人いた方は？」

「ん？ ああ琉二か。やつは家事はおままごと……！？」

さっきとは別物の悪寒が全身を走り抜けた。それはもう隠しようも無く震えるぐらいの。

「どうしたの？ 風邪？」

「いや……以心伝心ってやつだ。多分」

心当たりがあるのだ。

小学校の頃、同じようなことがあって、家に帰ってみれば『やつ』が交通事故に遭って入院（&一時間で退院）。中学ではある人物の制裁が何回も起こったので確信した。なんて馬鹿馬鹿しいぐらいに要らない技だと。

そんなわけで望んでもいないのに長年の付き合いでなぜか身に付けてしまったある種の縁というもの（スキルではない）が親友の不幸を告げたのだった。

「琉二のやつ捕まったな」

「誰に？」

「そりゃあ……さっきの人だよ」

「ああ、あのすごいキレーな人？」

「そう、そのキレーな人だ」

キレーが『綺麗』なのか『キレてる』の言い換え表現なのかはあえて言わない二人だった。

都内某所。またの名を、地獄の三丁目。

「こおんのバカリゆうが！！ 忘れてやがったなああっ！」

「ヒイ見付かった！？ てか忘れたって何のこと！？ 俺は尋常じやないオーラを感じとって逃げてたんですけど！？」

「ずっとぼけんじゃねえコラァ！ 炭酸（もしくは発泡酒）無くなったから帰りに買ってこいって叩き込んだだろがぁ！！」

「ああ忘れてた！？ なんとる不覚！ うおおマジメに届けこのテレパシーそして助けろ！」

「何逃避してんだそんなに現実が嫌ならテメエが電波になってろ！」
「あぎやああああ……」

ドゴメキヤグシャバグチャンツ！！

「よし……とにかく炭酸（またはお酒）買ってから帰ってこい。分かったか？」

「アイマム（了解）……」

全くもって一の予想通りの展開だった。

第4話 普通な平日の日常

携帯のアラームが柵のないシンプルな勉強机の上でム、ィィィィン、とけたたましい音を立てた。

それが聞こえたことにより目が覚めたこの部屋、202の主、真面一は寝返りをうつことなく布団にくるまったまま覚醒して半眼でうつとおしそうに天井を睨んでいた。

その頭の中ではマナーモードのまま目覚ましの設定してた……と微妙なミスを悔いているのだった。

「……………」

午前5時、起床。

カーテンを開けるとまだ角度のついていない朝日が差し込んできた。

「おおお……太陽の光バンザイ……」

律儀にも瀬奈が起きると言っていた時間帯、5時に合わせて起きたのだった。

昨日までは7時きっかりに起きていたが、体内時計に異常は見られない。

「様子を見ないとな……頼まれたし」

面倒臭いのもあって寝巻きにしている中学時代に使っていたジャージから学ランの上着以外の制服を着用し、暫定案で貰っ(てしまっ)た合鍵を手に取り自分の部屋を発ちそのまま分にも刻まれない時間で隣の部屋の前に立つ。

そして一応の礼儀でチャイムを鳴らした。

「おい生きてるかー？」

玄関で十秒ほど待ったが返事は聞こえなかった。
ふとあることに思い当たった。

「……まさかのまた倒れましたー、とかいうオチじゃないだろうな」
仕方なく無断で部屋を開けてダイニングを通り瀬奈の部屋に続く廊下の入り口にさしかかると、視界の下方に突き出た頭が一つ、気配を殺し待ち構えていた。

「わっ!!」

身長150未満のミニマムなやつが出合い頭に脅かしてくるが一にはそんなもの通じない。

そんな小学生のイタズラは計算済みだ。

「どーせそんなこったろうと思ったよ」

「うわぁー、つまらない性格してるねイチ」

思ったほど効果を得られなかったがために瀬奈が文句をつけてきたが、反論する気も起こらない。用事を済ませてさっさと帰り、ゆっくりと朝のニュース番組を見たいからだ。

「あーそうだなつまんないよな俺って。てかホントに五時起きなんだな」

起き抜けのイライラからか、ぶかぶかのパジャマ姿な瀬奈はこっちを先程の一のそれと同じ半眼で睨んでいる。

「何でそんなところで嘘つかなきゃいけないのさ」
「もしかしたら人の睡眠時間を削るつもりかと」

そんなことまで計算済みだ。

ここまでくると被害妄想の方に片足ぐらいつつこんでるかも知れない。

「あー、そんなつもりは無かったんだけど。迷惑だった？」
「いんや全然。充分寝たから」

なんともない、と肩をすくめてみせる。
実際に元気なのだから気を遣ってるわけではない。

「……イチって結構真面目？」
「俺の名字は真面^{まおも}だ」
「いやそうじゃなくて」

瀬奈のテンションが目に見えて下がっていく。
こうして場が盛り上がらない所をみると自分が冗談を言うのに向いてないことが改めてよく分かる。ギャグセンスは皆に平等に与えられるものではないのだ。

「んで、朝飯だよな」
「そう！ 昨日あれから冷蔵庫に材料を仕入れたからちゃちゃつとやっておしまい！」

不意に、おしおきだべー。とかなんとか頭に浮かんだが全てはネタ好きだった琉二なんかのせいだろうと決めてそれをスルーした。

「はいはい分かったよ」

このままだと会話が長引くので瀬奈の「ハイは一回い!」とかいうつつこみは流し、さっさと朝の飯炊き任務を遂行すべくキッチンに逃げた。

――

それから二時間ぐらい後の8時ちょい過ぎ。

一は琉二の部屋の前に立っていた。こうしていつも男二人さみしく登校するのが習慣になっているのだ。

瀬奈とは「わざわざ登校まで合わせる必要もないよね」ということで別々に過ごしている。それが普通なのだけれど。

「鳴らすか……」

ピンポ「なああちくしょー今出るところだったのにそりゃねえぜ!」

ある意味奇跡のタイミングで支度を終えた琉二が出てきた。

「ピタリ賞だろこれ。ほれ」

「……何だマジメその手は。カンフーとかのかかってこいつてポーズか?」

「百万円」

ちようだい。とばかりに手の平を上にして親指以外をクイクイ動かし。

「あるかボケェ! あってもやらんわ! ……朝から疲れるぜ」

全く、世の中世知辛いもんだ。
いや、相手が琉二だから適当におふぎけで行動しているだけで、向こうが本気にしていないのは百も承知二百も合点なのだけれど。

登校すると、朝はめっぼう強いらしい風璃がすでに着席していた。
瀬奈はまだ来ていないようだ。

「お二人さんおはよう！ ヨーグルト食べた？」

何のつながりだ。

「おっす。でもねみーのにその大声はないぜ……」

「よー。いつも早いな」

「実は泊まりだったりそうじゃなかったり」

コイツも冗談をよく言う性格だ。誰にでも言う辺りとかは一とはかなり違うが。

「それマジだったらヤバいだろ」

「いやー、本気でそんな人いたらまず皆とは懸け離れてるよねえ」

「教育至上主義者とも言う奴か学校が全てみたいな奴だよな。いるとしたらだけど」

「おおーっとここで急にマジメな話に入るかい？」

「……自分から振っというてそれかよ」

その後風璃は周りの人に話しかけ回り、一はしばらく琉二と雑談していた。

すると瀬奈が後ろの入口（兼出口）を開けて教室に入ってきた。

瀬奈が席に着くと女子特有の気安さで風璃が瀬奈に近付いた。

そう言えば二人はほとんど初対面だったなあ、と一は女子二人を眺めながら思う。

「おっはよー！　これから一年よろしくね。昨日は遅刻ギリギリだったけど大丈夫だった？」

「やっぱし入学初日に遅刻って目立つのかなー？　わたしは柳瀬瀬奈だよ」

「私は斎藤風璃って言うんだ。セナちゃんヨロシク！」

「ヨロシクふーりん！」

「おー早速あだ名ですか……うーんやっぱ私はワンパタでセナちゃんだねー」

一が机に肘をついて二人の馴れ初め（辞書的には間違いなく誤用）を眺めていると、琉二がゆっさゆっさと一の背中を揺らした。

「マジメ。結局のとこあの子と何があったんだ？　昨日オレが逃げた後に」

「まあ、簡単に言えば……」

一は揺さぶられた余韻を味わいつつ、昨日の出来事を話した。

「なんかな、腹が減ると倒れるんだと、アイツ。それで飯炊きをやることになった」

何かをはしょった気がする。ああ、寝起きと就寝が脱落してたなと思ひ出す。でも説明義務も無い上にめんどくさいし、ということでは

やめておいた。

「マジかよ。にわかには信じがたいぜ」

「昨日早速目の前で行き倒れた」

これは本当の話だ。

「マジか……まあそうでもなきゃマジメが女子と仲良くなるなんてないぜ」

一は女子どころかそもそも自分から話したがない性格なのだ。内向的ともいう。

「——だよね？ イチ」

隣の窓際席から話を振られたが、正直聞いていなかった。

我は聖徳の太子ではないからして………思考がつまらないのは仕様です。

「ん？ あーそうなんじゃないの」

「ほら言ってるじゃん」

「セナちゃん、今のはハジメちゃんは聞いてなかったよ」

流石に風璃は誤魔化せないようだ。いや、そんなに誤魔化すつもりも無いが。

「えーそうなの？ イチ」

「あーそうなんじゃないの」

コピペ世代。しかし英語の授業で先生の後続く声は小さいのだ。

恥ずかしいという感情を持っている人ならば。

「テキストなんだね……」

はじめのしゅうちゅうが5さがった！

せなのはじめへのしんらいが30パーセントへった！
……元からそんな下がるような数字があったかどうか怪しいけど。

「で、何の話なんだ？」

「すごい偶然で家が隣なんだよねって話」

「住んでる所聞いてみたんだけど本当にそうなのハジメちゃん？」

にわかには信じがたいだろうが確かに隣だった。

「ん、それは本当だな」

「おお、これはフラグか、フラグなのか？」

「知るか」

ただでさえ飯炊きをやらされているのに余計なごたごたは勘弁願いたい。

「おいオレを忘れてないか？」

「そうだな。きつと琉二とフラグが立ってるんだな瀬奈は」

「……何でわたしは誰かとくつつくのが前提なの」

そんな問いは春の陽気に流されていった。

まだ授業は始まらないので午前で学校は終わり、一年は下校するこ

とになった。

今日から瀬奈も加わり四人の仲良しメンバー（男性陣はその呼び名はヤメろ、と否定している）で下校中。

今日はホームルームで係・委員会決めとか、部活紹介なんかの補完的な行事がめじろ押しだったので特に事件とかは起こらなかつ……

「……ってそういう補欠係とか言う変なものになったじゃねえかよ俺」
「いきなり何を言い出してるのイチ？ 頭大丈夫？ おーい」

なんか一言多い。ついでに目の前で手を振るな。余計なお世話だ。
……ぐらいの感情はスルー出来るのが一だ。

「いや、今日は何も無かつたな」と思ってたら違ってたのを思い出した」

「あーあれは傑作だな。いーかげん人の話を聴いとけよ。だからそーなるんだぜ」

隣を歩いている高身長 of 琉二のかなり上から目線がストレス……だったら小学校からずっと友達なんてやっていけない。

「はいはい分かったよ」

「分かってねえな」「分かってないね」「分かってないでしょイチ」

身も蓋も芸もない三連コンボが炸裂。頭の中の小人の自分が大空襲を受けているイメージがなんとなく浮かび上がる。

なぜか同じ顔をしたやつら（一の影分身、総勢1000人）が今朝着ていたジャージと防災頭巾を身に付け、B29が縦横無尽に空を飛ぶ中を逃げ惑い、焼夷弾で焼かれた古き良き日本家屋から出るシイオウツウを嘆き、さらには炎で焼け死んだり一酸化炭素中毒で肺

をやられて文字通り息絶えたりと散々な光景が走馬灯より速く駆け抜けた。突発的な悲劇。

いやまあ、もちろん現実はこちらと見据えているが。

「おい、なんなんだお前ら人の事を決めつけて」

「当たり前じゃん」

瀬奈が当然の様に言うが、こいつには言われたくない。

「特におまえだ瀬奈。俺の何をこの一日で分かったって言うんだよ」

しかし一の予想に反し、瀬奈は困った顔一つせずですらすらと答え出した。

「じゃー言うよ。背が平均以下表情があまり動かないし真面目（？）だし回りに注意が行かないから人の話を無視するなにか無抵抗、あとは……」

「悪かった」

完全白旗だった。

そして嘆かわしいことに制空権を奪われた挙げ句本土上陸を許してしまった。という無駄に昭和前期な思考を即座に打ち切る。先程のような事になる前に。

「素直でよろしい」

俺、弱いなあ……。としみじみする一だった。
そんなことをだらだら話していると、いつもの交差点までたどり着いた。

「あ、私ここでお別れだ」

風璃は一達との曲がる方とは反対の方へ離れていく。

「おう、じゃーなー」

「じゃーなー」

「バイバーイ。また明日」

「はいさいサヨナラ」

月並みなセリフでお別れを済ませたのだが、風璃は突如として軽やかに、そして激しいステップを刻みながら信号を渡って行った（きちんと白線のみを踏みながら）。

「……何だあのイカレ具合は」

「わたしに聞かないでよ」

「オレにもあれだけは分かんねえぜ」

三人は呆然とした面持ちでスタタタタタタタタタッ！ と小さくなっていく風璃を見つめていた。

――
帰宅が完了してからのんびりしていたのがまずかった。

12..55。

例の時間が迫っていることをすっかり失念していたのがついさっき。思い出して隣の玄関を遠慮なく開けたのが今。瀬奈は時間も忘れてくつろいでいたようだ。なんという危機感の無さ。時計を確認する

と人が変わったように慌て出した。

「あ、あと五分で死ぬ〜！ 早くしてよイチ！」

「待てよ、冷凍食品は……無いのかよ。あーちくしょう。取り合えずこの持ち込みの『カロリーナイツ』でしのいどけ」

「それパサパサしてて口が乾くからやなんだけど！ あーあと四分！」

「飲み物と一緒に食べてろ。なんか作るからそれまでガマンしなさい」

「しょーがないなー」

そう言ってふてぶてしく椅子に座り某栄養食品を頼張る。

「どう考えてもおまえがな」

「ふいがろこべるしゃみけたまとらにゃー」

（……ああ、猫か）

「……口に詰め込んでるわりには器用に喋ってるな」

「腹話術」

「嘘だ……って腹話術もちゃんと口をわずかに使ってるんだが」

「そんな小さい問題は気にしちゃあいけないよ」

「小さい……」

不意に今朝の目線の高さがリアルに蘇った。

小さい、キッチンの外にいる、身長が………な存在……。

当然口に出した以上察知される可能性も推して知るべきで……。

「ご飯の後でオボエテロ……」

その後一にはハイペースな食事の合間に瀬奈をなんとか説得せよという任務が課された。

第5話 ハジメ、査定される

生徒会室。

言わずもがな、そこは生徒のトップ、そしてそれに追従する者……
があれやこれやと計画やら消しカスやらを練ったり予算の一部から
遠足のおやつの限度額を決めたりするところである（もっと他に仕
事はあるはずだ）。

「だーれーにーしーよおっかな〜♪ ……って冗談だっ〜」
「当たり前です」

まだ朝練をする生徒すら来ない、ついでに言えば職員もろくに来て
いない早朝の時間帯に、二布高校の生徒会長は生徒の模範よろしく
見事に泊まりこみ……ではなく早朝登校を決めていた。

そして一人機嫌良く（空元氣）あるリストを眺めている。そこには
とある少年やとある少女の出身校から送られた主な経歴が掲載され
ている。

生徒会長、小谷千里こたに せんりは一言で言えば、『普通』の才能を持った人物
である。

見た目は日頃の手入れの甲斐かいもあり偏差値で言えば60を越える辺
りで、成績も校内ランキングでは日頃の努力の結果一桁には入らな
いものの上位には数えられる。悪く言えばどんなに努力してもそこ
そこで決してトップにはなれない。

そんな上の下というステータスでありながら、会長選挙で対抗馬の
文武両道、容姿端麗を体現している（もちろんスキルも一級品）完
璧超人のような相手を打ち破ったのは、人当たりの良さと、その頑
張りが周りに認められた結果だと彼女の友人は語る。

実際に千里が努力する姿をあまり他人に見せることは無いが、人間

そういうものだ。

そんな学校の皆の味方、小谷千里ちゃん（17）は今、新入生のリストを一枚一枚めぐりながらある候補となりそうな人物をリストアップしていた。

「一クラスに最低一人、多くて三人だから……こうなったら「ヤケになって適当に選ぶのは駄目ですよ？」なんて思っていないこともないかな？」

「やっぱり思っていたじゃないですか」

「だって判断基準がいまいちピンと来ないんだから仕方ないでしょう」

「だから僕までこの時間に来てまで逐一アドバイスをしているんじゃないですか」

千里が面倒くさい作業に嫌気が差してテキト^う路線に変更しそうになるのを何度も踏み止まらせているこの男は紫^{したつ}蘭^{こうや}紅夜という名のナンバー2。つまり副会長。

こちらはメスならば飛ぶ鳥だろうが何だろうが落とすぐらいに見目麗しい……と言うのもおこがましいイケメンだ。

彼女を作るのには困らなさそうなものだが、本人にその気は無いらしく浮いた話は皆無。

そんなアイドルのようなポリシーを地で行く副会長の昨年度の生徒会の投票は、なんとか賛成票を過半数（≡女子の人数）で当選したというんだかある意味スゴい人物である。

「それにしたって新入生は160人近くいるんだから骨が折れるったらありゃしない」

まるで誰かに軽く説明するようなセリフに紅夜は今日9回目のため

息をつく。

「はあ……それもあと四分の一でしょう。会長が『放課後は残りたくない』なんて言うからこうして早朝に取り組んでいるのに、あなたが無駄話をするならその放課後にもつれこみますよ?」

「はいはい分かりました仕事するよー仕事してるよー………おー、1-D、やっと最後のクラスまで行った……あーこの学校クラスが少なくて助かるー」

「あと一息ですよ。まあこの後部活動の予算の二次チェックとかあります」

「そーゆー余計なことを言わなくて言いの一。全く空気の読めない副会長の紅夜くん」

千里が見ている項目は、スキルの欄と、簡単な経歴である。

探しているのは、『強い』スキルを持った能力者である。

「紅夜あー。この『ヒルト』って何?」

「多分棒みたいなものを使うスキルです」

「じゃあ『フルーエント』は?」

「そのままです。といっても英語の授業で使う意味では無いですけど」

「へえ……これは面白そうだからとつときつと」

目をつけた生徒の書類が束から外されて『風紀委員候補』のシールの貼られたファイルに収まってゆく。今ファイルの中身は7人なので、そんなに厚みは無い。

「とつときつて……まあ、強いとは思いますが」

「次は……『ハイランダー』?」

「多分カッコつけでネーミングしてますね……。ちなみにアルファ

ベットで『ser』なんかで終わるのは大概は自身を強化するのが多いですよ」

「うーんこうもパターンが沢山あると覚えるのも一苦勞ねえ。この『ハーネス』なんて何を思っけて付けたのかねえ？ 盲導犬？」

「それは僕も想像が付きませんね……何かを抑えるスキル？ だとは思いますが違う可能性も十分にありますし……」

「よし、この生徒も推してみよう」

ファイルにもう一人追加された。奇しくも今入れられたその二人の人物は学校で毎日話す知り合いだった。が千里は知るよしも無い。

「また適當ですね。他に有力なのがいるなら一人くらい大目に見ますが」

「有力候補はこの『ファイアボルト』。これはガチだね。強そう。だから『ハーネス』も入れるよ。こういう『一見よくわからない』のが以外と掘り出し物だったりすると思うんだよね」

「はあ……フリーマーケットじゃないんですからホイホイ青田買いたないで下さいよ」

「じゃあ今日この生徒を見てきて。なら良いでしょ？ ダメなら取り下げるから」

切り替えの早すぎる突然の提案に紅夜は一瞬その意図を測りかねた。たまにこの生徒会長は頭の回転が異様に速くなる。それを人は閃きと言う。

「は……？ ああ、分かりました。と言っても具体的にどうするんですか？」

「簡単。現役をぶつければはっきりするでしょ？ 口実は『無断で生徒会室に入ろうとした』で良いからけしかけてみて」

疑問に対して間髪いれずに答えが返ってくる。
どうもすでに頭の中ではプランとして確立しているらしい。

「現役をぶつけるって……『彼』ですか？」

「イエス。あのがっしりした野郎で直接攻撃」
ダイレクトアタック

ドロー、とか攻撃表示で召喚、とかもしないのか、という突っ込みは言うだけ野暮だろう。

「何でそこまで……」

「いやあ、最近治安が良すぎてヒマだ、仕事よこせてうるさいから……それに物差しは長い方がよく測れるよく？」

「長すぎる物差しは得てして小さすぎるものを測れないんですが……」

「細かいことは気にしない」

さっきはああ思ったが案外ずさんな計画なのかもしれない。

紅夜は呆れ顔で作業に戻った千里を見つめる。

「生徒会長がそれじゃ駄目でしょうが」

「はいこの話はおしまーいさあ仕事仕事ーあー忙しいなー」

「……………はあ」

7時を迎える前にため息の回数が二桁になった。

『あー生徒会から通達。1年D組の真面一、昼休み中に生徒会室に来るように。繰り返し、一年――』

なんなんだいったいぜんたい。まだ弁当のふたも開けてないのに。突然の放送に睡眠学習者を除く全校生徒が耳を傾けた。

授業終了のチャイムが鳴らなかったので皆が皆、放送の回線に問題が起きたかと首をひねっていた所に突然響いたからだ。

これは逃げても既に目撃者があちこちにいますのですぐにバレてしまうとかいう狙いなんだろうかと化学の教科書をしまいながら一は嘆息する。

「イチ、呼び出しだよ？」

「いや、さすがにここまでされたら俺でも分かるから」

話を聞いていないせいでやらされることになった補欠係の二の舞いは避けた……のか？ どうしてもそうは思えないのはどうしようもないマイナス思考のせいだけではあるまい。きっと環境が悪いんだ。そうでもなきややってられない。

「なんか問題起こしたのかよマ〜ジメ〜？ 暴力事件か？」

「この入学して二週間、いつ俺が暴力を振るった。ってか何で呼ばれたのか全然分かんねえ」

本当に最近は身に覚えが無いのだ。

中学は素行の良い生徒には本当に環境が酷かったのでそういうことはよくあったが。

生活面では日々部活にも行かずバイトもせず趣味は読書。と若干ニート予備軍な一だが、人様には迷惑をかけずに平凡に過ごしているのにわざわざ名指しで呼び出されなければならない理由があるとは思えない。

まさか『貴様みたいなニートな社会の穀潰しなどその怠惰な芽ごと生徒会長自ら摘み取ってくれるわ！』なんて理由で潰される訳でもあるまいし。

「まあ、取り合えず行ってくればあ？　こっちは心置きなく学食に行ってくるから」

「ああそうしてくれ。何か手間取る気がするから（でもこれまでの経験から言ってまず何も無かったなんて有り得ないんだろうな……）」

瀬奈のおちよくりを軽く流し、一は瀬奈達よりも早く教室を出て行った。なんだか周りの視線が嫌になったがあんな妙に凝ったタイミングで呼び出されたのだから仕方のない事なのだろうと納得しておくことにした。

階段を降り、この時間は恐ろしく人気の無い廊下に差し掛かったところで、

「おーしやつつと来やがったかあああ！」

（ホラあ嫌な予感ビシバシ当たりまくってるよ……帰りたい……）

そんな希望を無視して一の前には一人の上級生らしき態度の変にガタイの良い野郎が『風紀委員』の腕章を付けて待っていた。

一のか俺を無視してくれなんて都合の良い願いやら念やらが通じるわけもなく――

「こっつから先に行きたければ俺を倒してから行け！」

この調子だ。しかもさっきから気合い（と言う名の小さいツ）の詰まった口調だ。疲れるんじゃないか？　とは先輩相手に口に出して

は言えない。

「あの……生徒会室に呼ばれてるんで通してくれませんか？」

「ダメだ」

即答。ダメ元で逃げのセリフを言ってみたがやはりダメなものはダメらしい。

生まれてこの方甘やかされたことなど数えるほどしかないがここでもカウントされないらしい。

「じゃあ……」

「ついでに戻るという選択もお前には無い。ここで俺と闘え」

「えええ……」

これは噂の新生いじめだろうか。

そんなの聞いたこと無いが、よりによって自他共に認める小市民な一を狙うあたりあながちウソとも言え切れない。

「さあ来い！」

ばちーん。と右の拳を左の掌に打ちつけている。ファイティングポーズを取る辺りどうやら何か肉体派のスキルを使うようだ。

対する一は、既に何かを諦めた表情で、一度ため息と共に顔を伏せ、再び前を見据えて、

「とおー」

明らかに気合いの入らない棒読みな声を発し

——……………どっ……………ズサアアア。

存外、あくまで普通よりは素早い、ぐらいの速さで相手に迫り、掌底を風紀委員のみぞおちに叩き込んだ。というより当てたように見える。

それだけで風紀委員はいとも簡単にくの字で吹っ飛びその勢いのままにケツから着陸。大の字に形を変えてぶっ倒れた。

しかしそれも制服と床の起こす摩擦が止まるまでの間だけの限定で、すぐに『実は今まで寝てたんだぜ』と言わんばかりにむくり、と起き上がる。

「おー、気合いの無い声のわりにはよくやるじゃねえか。だがまだだだな」

「……………」

見たところ尻餅の痛みも無いようだ。効果があったとすれば着衣の乱れぐらいか。

つまり、まるで効いていないのだ。一の見掛け倒しにもならない4〜5メートルの吹っ飛ばし攻撃など。

「それが『ハーネス』ってスキルか？　なんかよく分からんが俺を吹っ飛ばしたのは褒めてやる」

「えーと、何でその名前知ってるんですか？」

情報社会の昨今、自分の事が知られていることに別段驚きはしないが一応聞いてみた。

「そりゃお前さん……入学生は出身中学から情報が回るからなあ……そこを調べたんじゃねえの、生徒会が」

最後に付け加えられた生徒会、と言う単語に思考が引っかかる。

（生徒会が……あれ？ 俺は何に呼び出されたっけ？ ……生徒会室に来说いと言われただけか。確か呼び出しの声は女子生徒のだった……先生じゃないよな。ということは――）

「……じゃあその生徒会室への呼び出して……」

「ん？ 俺は知らんなあ？ まあ俺が言えることは一つ」

明らかにワケ知り顔で笑っている。と相手を観察していると、

「え？」

「いっっぱつ（一発）はいっっぱつだッッ！」

いつの間にか拳が届く距離まで接近され、腹筋を目一杯殴られた。

「うっ………」

腹を押さえ、くずおれる一。

その一撃は重いと言うよりも『硬い』だった。もちろん重いのもあるが。

ぎりぎりした動きで一が殴られた風紀委員の手を見ると――

「……その色は……金属？」

まさに鈍色^{にび}、理科で言う金属光沢がわずかに光っている様に見えた。

「おお、まだ喋れんのか。その気合に伝えて教えといてやるよ。俺は『生体錬金^{ハードナー}』。要するに体中が金属になれるんだよ。便利だぜこれ。まあトランスフォーム！ は出来ないんだがな」

つまり全身鈍器か……と考えたところで一はゆっくり視界を閉じた。結局なんて呼び出されてまで風紀委員にぶちのめされなきゃいけないのかは分からなかった。

「あー、会長も見る目ねえな。久しぶりに面白い奴と戦えると思っただけだなあ」

無慈悲にも風紀委員はそれだけ言い残して一が職員に道を聞いてまで行こうとした生徒会室の方に歩いていった。

かくもダサく（見える）敗北を喫し、残された一は、そのまま動かず、

「……………あー酷い目に遭った」

足音が聞こえてこなくなった辺りで身を起こして制服についているほこりを落とした。

伝統のクマ対峙法、SHINDA FURI。成功。

ついでに言えばクマに限らず野生の生物は能力者より強いこともあるからこれをやる人は多い。

先に手を出した方こそ一だったが、『だからこそ』相手が容赦なく叩き込んでくれて、一瞬で用事は終わった。もちろん狙ってやった。ただしMではない。

「昼飯食い損ねるし……休み時間半分ぐらいになるし……新品の制服は汚れるし……まあいいや。これぐらいで済む訳無いしどうせめんどいのがまたある気がするしどうせ誰かが運んでくるんだろうし、ここで泣いたら次どうするんだよって話だし……あーあ」

マイナス思考が360度ぐるっと回って変にプラス思考になっていく。これまでの不幸な人生がうかがえるが、だからといって別にそういう体質ではない。単にいろんな人に絡まれ（因縁をつけられ）やすいのだ。この普通顔のせいだ。……ある意味これも体質か。

「家に帰ってきて……」

と言いつつそんな気はさらさら無いのが小市民で面倒くさがりな一。これから生徒会室に行ってもなんかあの人に鉢合わせしそうな気がする。それで暴力嫌いな小物らしく『戻る』を選択して階段を上り、クラスという平和なおうちにおとなしく収まった。

瀬奈と琉二の家でも教室でも隣人な二人組みに「何で呼ばれたの？」とか聞かれたが、「結局良くわからなかった」の一点張りだしのだ。

殴られたダメージは最初から『飛ばしてる』ので特にバイオレンスがあったとは怪しまれずに済んだのが唯一の救いか。いや、ばれてもこいつらは面白がるだけだ。

琉二なんか知ってるから特に心配しないだろう。良い意味でだが。

――――

家政……もとい副会長、紫蘭紅夜は見た。

どこから？ 隠しカメラ……ではなくやけにこぎれいな廊下上の天井裏から直に。

いつから？ 生まれたときから……じゃなく一と風紀委員、いなわしろ猪苗代が対峙した時から一が帰るまで。

なぜ？ 脅迫手帳で弱みを握られ……てるわけではなく単に命令されたからというのと興味本位という成分が隠し味で加わっている。

「……ちょっとこれは予想がつかなかったな」

先に手を出すから案外あの一年はキレやすいのかと思ったが、実はその逆で相手を必要以上に刺激せず、気づかれない内に最も短時間で効率のいい決着をつけるという冷静な判断力を持っていた。それが強いかどうかにつながるとは限らないが。

「……いや、それは買いかぶりすぎか？」

結局のところ一のスキルの正体は掴めなかったのだ。今回の目的から言って収穫は無いに等しいだろう。

判断の決め手になる要素が『無い』というのは予想していなかった。あっても善戦で合格ライン悪くて本気で歯が立たずにやられる、だと思っていた。

「うーん、まあ、会長の青田買いも中々捨てたもんじゃないですね。さーて、報告に行きますかね」

こぎれいとは言え天井裏、江戸もののドラマで忍者が忍び足で歩く高さもないので、紅夜は廊下からこぼれる白い光の筋を頼りに匍匐^{ほふく}前進で闇に……裏と言うにはかなりちっぽけな闇に消えた。

第6話 この日から寝違えることがなくなりました

「あー、終わったー。琉二、次何だ？」

授業が終わり、主人公、真面一は自分の席をいっぱいに使って伸び、さほど溜っているわけでもない凝りをほぐしていた。

「ん？ 次は体育の時間だぜ」

隣人、琉二は立ち上がって一を一瞥^{いちべつ}してから廊下へと歩いていった。周りを見ればおちゃらけたアイツもインテリジェントな素敵眼鏡を掛けたあいつもさっさと教室を出ようとしていた。そう、最後に出るやつが問答無用で鍵当番なのだ。

もちろん好き好んでそんな仕事をやるつもりもないので一は状況をつかむや否やすぐに立ち上がり、琉二に続く。

「今日は校庭と体育館どっちなんだ？」

「校庭。今日と次の回で体力測定するんだとよ」

大して意識しないままに教室前の個人用ロッカーから体育着の入ったサブバッグを引っ張りだし、体育館にある更衣室を目指す。

「あー最近は何にも無くて平和だ……中学とは大違いだ」

戦争の無い国のありがたさを噛み締める一。
おめでたいことについて最近お腹をぶん殴られたことなど既に忘れて
いる。いや、気にしていないという意味で。

「中学でも平和だったぜ？ 二日に一回はな」

「……もう半分はいつもどつかでドンパチやってたんだろが」

一の突っ込みも流れに折り込み済み。琉二は回顧を続ける。

「たまに巻き込まれたりしたしよ……しかも裏サイトでクラス単位でいちいち勢力図やら『某月某日 最近ちょづいてるK・Y・を昼休みにシメる』とかいう犯行予告とか更新してたらしいぜ」

『K・Y・』は適当に考えた誰かの名前だろう。

「ホントかよそれ。今に比べたらかなりブラックな世界だったんだな……」

つい数ヶ月前まで男女問わずにケンカが起こっていた日々が途方もない記憶の彼方に放り込まれていたことに気づく。よくも今まで生きてこられたもんだ。

一般にスキルが目覚めるタイミングと思春期、いや、十代というのは密接に関わりがあるらしく、大半、九割が中学生で目覚めている。そのおかげか、最近では中学、高校が力を持て余した生徒で荒れていたりするのが目立ち、たまにそれを題材にしたドキュメントが組まれているのをテレビで見かけることもある。

「まあそういう奴らは大体勉強しなかったから無理してこっちに集団で来ることも無かったし、めでたしめでたし」

この高校、二布高校は地味でどんよりした校舎とは裏腹に地元にはそれなりに評判のいい公立の進学校で、大学に進学する卒業生がほとんどらしい。

もちろんそのために入試で全く勉強が出来ないやつは容赦なく落と

しているが、塾に行かなくてもそれなりにちゃんと勉強すれば入れるようになっていく。

その証拠に、こっちに来た同級生は、比較的温和なやつらで、表立って不良をやったのは何故か軒並みキレやすさに比例して勉強に対する姿勢が雑で、『ざる』と評判の電車と徒歩で20分の所にある少し離れた高校につるんで行った。

腐ったミカンの喻えじゃないが、平和主義者の一にとって少なくとも対極の好戦的な奴らと離れられたことは確かに喜ばしい事だった。

「じゃ、のんびりやれるんだな。ゆっくり茶も飲める」

「おう、ここにピチピチの高校一年の皮をかぶったしわしわの老人がいるぜ！」

お茶は本気で言うてはいないのだが、揚げ足大好きな琉二は耳ざとく、しつこい。

「お前は語尾に『ぜ』ばかり付けすぎだ」

「ノォー！ ジジイの説教はナッシングだぜえー！」

琉二は両手でバツテンを一向かって盾のように構えている。

人前で叫ぶこれは軽くいじめではないだろうか。

一が残念そうに黙っているとそれを無言の怒りと勘違いしたのか「ヤベ、キレた？」といって、まず、後ろ向きに三步下がりを、きびすを返して重力加速よりも速く階段を駆け下りた。……その歩法教えしてくれ。

「おい、ちょっと待って……もう見えねえし」

逃げの速さだけは郡を抜いて秀逸な琉二はふざけた速度で足音すら聞こえない所まで消えてった。

「おー、じっちゃん速いねえ」

「!?!? ああ風璃か……」

にゅっ。といきなり視界の隅に独特の雰囲気を持って登場をしたのはあのデスパレートな中学時代を健やかに生き抜いたもはや戦士と呼べる一人、風璃だ。

後ろには身長のせいかわ、瀬奈がオマケのようにちょこんとくっついてるように見えた。

「ん? ああ瀬奈もいたのか」

この言い方がまずかったらしく、

「……どうああれえがああ（誰が）、」

そこで区切ってたっぷり息を吸い込んで、

「身長が小さいオーラ足りてないイコール存在感を出すための要素が決定的に無いお子様だってえ!?!? イチのくせに生意気だ!」

「うっそおお……」

一息に言っただけ。

しかもあやとりと昼寝と射的が得意なメガネ小学生を（未来の道具にもめげずに）いじめ続けるあのガキ大将のセリフでもってキレた。いきなりの脈絡もクソも無い豹変に戸惑いと呆れがごちゃまぜな……内心。

外面がさっきとは逆に今度はクール（に見える）鉄仮面として相手のレージ（激怒）を二割増しにする効果を発揮している。

「ちょっと待てワケがわからな——」

「その誠意のこもらない顔もムカつく……ええいっ！　こうしてやるっ」

そう言って何故かサブバッグを一に投げつける。

それを条件反射で受け取ってしまった時には、

「とおっ！」

「ぐげっ!？」

どういう理屈か、ひつつき虫のようにへばりついて一の背に飛び付き、頭をつかんで3Dスティックをガチャガチャ動かすみたいに前後左右の可動範囲全てを限界まで使って首の筋繊維の一本一本をぶちぎらんとばかりに一の脳みそと三半器官があまね遍く揺らされる。

本格的に平衡感覚は狂うわ首が千切れそうわで軽く生命の危機だ。ちなみに全体重が瀬奈のそのしなやかな手のひらから一の頭に引っ掛けられている。決して重いとはいえないだろうが、どうあがいてもその内に首が折れるはずだ。

一は階段の近くでやるにはあまりに道連れチックなレバガチャ攻撃を止めさせるためにも努めて冷静な対応をしたいが、

「ぬあんで、くおいつあっ、うわけぬおおうっ、うわからむっ、たいつ、みんでえっ、おこんっ、だあああああっ!？」

「だれが身長144センチだってえ!？」

ウェーブのかかった髪を揺らしながら瀬奈はさらにひねりを加える。

「ちがつ、ぐがあっ!?!」

もはや笑わせようとしてるとしか思えない舌足らずな発音しか出来

ないので事態が全く好転しそうにない。今のだけで舌を6回も噛みそうになった。

それでもなんとか聞いてみた。『なんで、こいつは、わけの、わからん、タイ、ミングで、怒るん、だ?』と。

しかし目の前にいるのは高速で視界がブレている中で聖母のような笑みを浮かべた謎人物、風璃で、こちらの質問の意図が伝わったかも怪しく、

「あ……うなつ……てます……おきや……ん」

確かにセリフに反応して喋っているのだが、なんと言っているのだろうか……正直瀬奈のせいでぐわんぐわんとドップラー効果もどきが発生しているせいでセリフはよく聞き取れなかった。

「しかし瀬奈ちゃんや。時間は無情にもあと三分だぞえ?」

「はっ、そうなの? イチ! G o f o r e v e r !」

ようやく出た風璃の助け舟で瀬奈が首伸ばしごっこを中止、そのまま整備師から操縦士に転職……それにしても永遠にどこへ行けというのだ。あの世か。……全然洒落にならない。

「まず下りろ」

「まず行くんだ」

「なぜそうなる」

「……人肌とは思えない適温」

何やら危ない発言が悪寒となって一の背中を撫でる。

さっきまでの怒りはどこへやら、野生児からまたしても豹変しておとなしくなった瀬奈に一は恐ろしささえ感じていた。

さっきまでの強引さはどこへ消えた。ここで何か言ったらまた爆発

するんじゃないだろうか。そんな不安ばかりが一を固めていた。

「……とりあえず、頭が痛いから。早く下りる。ホラ」

「あ、そうだった。ごめんね」

ようやく我に返ったようで、進行形で頭髪にダメージを与え続ける手を離してくれた。

もちろんこれ以上喋る暇も無いのですぐにダッシュに転じた。

瀬奈達と別れ、一人残された更衣室で神速の着替えをやったのけた一はなんとか時間に間に合い、今は校庭に整列してものの見事に『その他の生徒』の名を拝していた。

体育座りをしている生徒の視線を集めているのは、凶眼ぎらつくスキンヘッド（よく見ると黒い点がぼつぼつあるので定期的に剃っているようだ）の体育教師で、一部からはそのスジから足を洗っているかないかの議論が展開されている。つまり手を汚したことが前提とされている悲しい先生だ。

体育教師は点呼のために開いていた名簿を閉じてその銃刀法違反スレスレな面を上げた。

「おし、全員出席してるな。係から連絡を受けていると思うが今日は体力測定だ。スキルを使ったりして数字をあり得ないほど水増ししても良いがそんな時はちゃんと数字の横に『S』って書けよ」

「っはーい！」と調子のいい男子生徒の声がむなしくも高々と響きわたり「バカだなあ」とか「オレの出番取んじゃねえよ」というレスをもらっている。

「マジメ。まずはハンドボール投げ行こーぜ。近いし」
「あーそうだな。なんでもいいけど」

場所を占領される前に滑り込んだのでなんとかして列に並ばずに済んだ。

一は元から用意されていたボールをカゴから取り出し、円の中からひどくのろのろとした緩慢なステップを刻んで遠心力だけでボールを飛ばした。

そのボールは方向だけはやたら正確に放射状のラインの中心線をたどり、勢いの死んだ放物線を描いて地面を跳ねた。
相方の琉二が遠くで着弾点を見て声を上げる。

「17メートル！ やる気あんのかマジメこらー！」

「ねえよ！ そういうお前はなんだ？ スキルでも使うのか？」
「ふ。まあ見ている。俺の武勇伝を」

入れ替わりで琉二が投げる。

琉二は体育会系よろしく躍動感溢れるフォームと長身から放たれたそれはぐんぐん伸びていき、

「50メートル……学校にいるかいけないかのレベルだな」

そんな距離から一の独り言など聞こえるはずもなく琉二は、

「どうよ！？ これ凄くね！？」

おーパチパチ。と周りの拍手を欲しいままにして上腕二等筋……ちからこぶをカッチカチしていた。

「10メートルって書いてやるか……いや、バレるよな。普通に」

大して面白くもなさそうなのであきらめた。こんな風にコソコソしてるから小市民なのだろう。

「はいはいじっちゃんどいたどいた！ 次が控えてるのさ！」

「おう！？ 風璃か！ いつもいつもビックリさせられるぜ」

いつも通りの奇襲じみた登場に素早く琉二が退いた。

驚いた事に一達の次のペアは風璃と瀬奈だった。

今の今まで気付けなかった……とか言うときみたい瀬奈から『小さいを連想させるなあ！』とか言ってアナログパッドぐりぐり攻撃をされるんだろうな。と遠くで思う。小市民は不発弾に自ら近付くようなヘマはしないのだ。

「私は腕力無いからスキル使うよ」

その発言にじっちゃん……琉二が抗議を上げる。

「ルール違反だ！ お前のスキルはやればやるだけ虚しさを他人にばらまいてるぜ！」

「失礼な。私の辞書にはジェントルウーマンという単語が2ページにわたって載っているんデスヨ？」

見開きか。

「言ったな！？ じゃあやってみろよ。どうせ嘘だろうぜ！」

「じゃあ行くよー」と戻ってきたハンドボールを手を持ち、それを掌の上に乗せた。すると、ふわっとドライヤーの出す風に浮かぶピンポン玉のように風を受けハンドボールがその場で細かく上下して

安定した。風璃のそのロングヘアが風でなびく。

「えいやっ」

それを腰の入っていないサイドスローで投げると、弾道は真っ直ぐ中心線をなぞり『ちょうど』49メートル地点でいきなりぽてっと落ちた。

本人にそのつもりがあるのか知らないが、見事に『私はまだまだ余力あるけどバッチリじっちゃんの手前で落としてあげたよ』アピールに成功した。

「ほらね」

「嘘つけえええ!! かけらもジェントルじゃねえ!! おもいきしコントロールしてんだろ!!」

「やだなあちゃんと負けたじゃない」

両手を後頭部で組んであからさまに余裕たっぷりの態度でニコニコしている。その表情から読み取れるものは一つ、『こんなこと気にしてもしょうがないじゃん。テキトーにやっちゃえばオールオッケーあっはは』だ。おそらく。

「わざとに決まってるぜお前の喋るテンションといいその態度といい!!」

「じゃあ本気出してハンドボール一個『減らす』?」

暗に何を意味しているかは琉二には正しく伝わったようで、

「……もういいぜ。俺は井の中の蛙かわずで良いんだ……単純な身体能力じゃまだ」「でやああああああっ」

そのとき一の視線は惨めな琉二を既に見ておらず、次の人……瀬奈が投げるのを見ていた。

その弾道は放物線を描いているようでいて遠心力で飛んでいるような………というか第一宇宙速度を持っているような錯覚すら起こさせて……

「あれ？ ライン越えたけどこういう時はどう測るの？」

記録、測定不能。使用スキル、無し。

1-Dの中で『琉二<瀬奈』というシンプルな公式が一瞬で証明された。

あまりの三日天下ぶりに「白楽……かわいそ」「ドンマイ」「こういうこともあるさ」などと月並みな慰めを周囲の全員から頂く琉二はまさしく『orz』の姿勢でうなだれているが、器用にもその姿勢で右手は三角形、左手は四角形を同じタイミングで一画ずつなぞるという脳トレを披露している。

「いーち、にー、さーん、し、……ミスったぜ。なんで三角形が台形になるんだよ。いーち、にー、さーん、……今度は直角三角形……」

さすが琉二。転んでもタダでは起きることすらしないようだ。

第7話 アレでレベルを測ったらぶっ壊れる気がする(前書き)

アレはアレです(意味が

あらずじ(……か?)

瀬奈(隣人)の食事を見ることになっている一。何とかして手間を避けようと考え付くが……?。

第7話 アレでレベルを測ったらぶっ壊れる気がする

「おーい、そろそろ夕飯の時間だろー？」

一はドアホンを鳴らして瀬奈の部屋を訪ねた。今は五時過ぎ。やつの飯の時間だ。

「じゃあ頼んだ〜」

テレビを見ながら頼まれたが今日の一は一味違う。

「その話なんだけどな」

「なに？」

その一味違う高校生は学校が終わって下校、いつものように部屋で本を読み漁っている時にやっときさ思いついたのだった。

「なあ、夕飯と休日の昼飯は別の人に作ってもらわないか？ その人朝はめっちゃダメだから朝飯は無理なんだけど」

その人——琉二の母親——に頼めば毎日毎日そんなに得意でもなく好きでもない料理の時間が無条件で省けるのだ。

何故こんなにもすばらしい方法を今まで脳内のごみ箱に乱暴に入れていたのだろうか。

知らず知らずのうちに気分は高揚していく。

「へえー。で、別の人って？」

可もなく不可もなくといった感じの返事が来た。瀬奈はテレビの夕

方から始まるニュースに目がくぎ付けで、一のセリフに対する興味も程々にといった感じ。

その態度はまるで中年のオヤジのそれを彷彿させる。

あのオヤジとは大違いだな、と思いながら一は瀬奈のそっけない態度に辟易することなく返事をする。

「大家。琉二の母さんだ」

後から思えばアホな失敗だったなあと後悔することなど露知らず、一は乗り気でない瀬奈をせかすように早々と部屋を出て階段を降りて1階を目指す。

「あら、ハジメ君がこの時間に来るなんて何時ぶりかしらねえ。しばらく見ない内に背も伸びちゃってあらまあ……」

一と瀬奈は階下にある二部屋をぶち抜いて無理矢理4L（元ダイニング）DKにした琉二の両親、白染伸二、夏希夫妻の部屋にお邪魔している。

見事にぶち壊された壁の部分には耐震のために取り付けられた剥き出しの鉄骨が組まれていて、この部屋の雰囲気重く支配している。

話し方からして今日の前にいるのは夏希さんの方で、見た目はそのまま典型的なおばちゃん体型、高校生と大学生を子どもに持つ相應の年齢にふさわしい肉体年齢だ。笑顔がすんごく似合う。

これである娘さんを御することが出来るからこれまたすごい。

そもそも大家の夫妻で、言わば一の保護者なのでそんな悪印象（？）は些細だが。

「あら、そっちは柳瀬さん？ 二人揃って何の用かしら？」
「あーちよっとコイツの食事情について相談があつて……」

一は瀬奈の体質についてかいつまんで説明をした。
なぜか終始一だけがしゃべられて瀬奈は偉そうに（？）だんまりを貫いてたが。

（代理人かよ俺は……）

「へえーそうなの。それでウチに来たのね。いいわよ。食材費のことは後で考えるところで、取り合えず今日はウチで食べていきなさい」

そう言って二人をテーブルまで案内する。どうやら一もご馳走になれるようだ。

おっしゃ、と一は内心でガッツポーズを取る。さっきから同じ事を言うがご馳走に対して、ではない。

これで負担が減るのだ。めんどくさいことは出来るだけ回避しようとする生き物、一が喜ばないでいられようか。

「あとは味付けだけだからすぐに出来上がるわよ」

夏希さんには悪いがここは経験値の差で多目にみてもらおう。
こちらと普通の高校生なのだからそこまで面倒を見なくてもバチは当たるまい。

まあなにか忘れている気も、

「さあ〜て、仕上げのタバスコ〜♪」

……忘れていた。一番重要なファクターを。

味覚。なんという不覚。

そもそも何で自分がこの一家の部屋にお世話になっていながら食糧だけは自分で加工してまで処理していたんだ。ということを考えれば全部まるっとお見通しだっただろうに。本当になんという不覚だ。

「今日は豆板醤とハバネロも入れまっしょう♪」

身内以外が食べるからか、一が小学生まで耐えていた当時の『並』よりきつめのものを混ぜている。

一応二年間その手の味付けを召し上がってその後一瞬だけ天にキャッチアンドリリースされ続けてきた一だが、年月を経た今、白楽オリジナルブレンドを耐えられるかは未知数だ。

（あああ……生きるか死ぬか絶えるか果てるか）

もちろんヤバイ可能性がかなり高い。

一は恐る恐る瀬奈を見やる。おい、おまえは辛いのがイケるか？と。

「ん？ どしたの？」

「いや、『ん？』じゃなくてだな……」

一の心配をよそに無謀にも瀬奈はテレビを（チャンネルはそのまま）見ていた。

この先に天国ないし地獄を見るかもしれないとは知らずにのんきなものだ。とは言わない。

ヘタに刺激しないように、が一のポリシーだ。

出来るだけ相手を刺激しないように言葉を選んでいく。敬語は逆効果だったりするので抜きで。

「……呑気にテレビを見てる暇があるならこの空間に漂う異臭に気付いてくれ」

「異臭？ ……！！！？ 火事！？」

もっと別の本格的な方向で焦りだした。

しかしこれを火事だと思うその感覚が共感出来るのがこれまた恐ろしい。

「それは違う。変な煙までは出てないからな」

「じゃあ何！？」

「いいか、落ち着いてキッチンに耳を傾けるんだ……」

かあゝらしいゝさあゝんしょうしつちみいゝ♪ ……どんどんレパートリーが追加されていく。

この歌のテンションから言って量は少ないって事はないだろう。

「だ、大丈夫だよこれでも辛いものは大好きだから。……オールまぜまぜは未体験ゾーンだけど」

そう言う瀬奈の顔は、汗が滝のようにダラダラ垂れて空笑^{から}い、そう言え^ばいいのか、アハハハ……ハア、と虚しさが後を引いている表情だった。

ちなみにここで断るという選択肢は貴重な食糧、しかも人様の手料理を無駄にすることになるので、選べない。

「連れてきて悪いが、覚悟してくれ……」

「ちよつと待って、イチこれを知ってて誘ったでしょ！？」

「いや、それが忘れてた。ごめん。というか忘れていたかったんだよなホント……うわあああ」

忌まわしきは脳みそのシワに刻み込まれていたはずの730日の記憶。どれもこれも『辛い』に始まり『辛い』に終わったあの暗黒時代。一はまさに生ける屍、リビングデッド、リビングの死体……だった。いや、ホントに。

食後一時間は麻痺していたといってもいいくらいのキツさだったのだ。

当時はこんなの忘れられるかボケエ！　とも思ったがまさかすっかり頭から抜けた上に最悪のタイミングで思い出すとは予想だにできなかった。記憶にフタをかけすぎていたらしい。

「ま、当然イチも巻きぞえだよね？」

ここに来て挑戦的な眼差しを向けてくる余裕があることは評価すべきかもしれない（上から目線）。まだ未体験がゆえの余裕ということもあるが。

「だよな……食いたくないけどこれは俺に責任あるしな。甘んじて食べてやるよ。辛いだけに」

「うわあ……テンション上げなきゃいけない時につまんない事言うね。あーサムいサムい」

とつくに冬を通り越しているのに瀬奈は身を縮こまらせて震えて見せた。

「ハイ出来上がり」

目の前には、十三階段。もしくは、チェーンソーを持った奇抜な仮面野郎。指を差して「ドーン！」と言う喪黒でも良いかもしれない。いや、良くない。

メニューは四月にしてはあまり見られないシチュー……のような赤黒い何か。

「い、イタだきます」

「どうぞめしあがれ」

強烈なスコビル感あふれるフレーバーが鼻孔をチクチク痛めつける感覚がすれば誰だってきつと「い、痛だきます」になるだろうと思う。

「イチ、アームストロング船長の座は君に譲ろうじゃないか。わたしはオルドリンとして君を見守るのが役目だろう」

そして突然のプチ演劇を始める瀬奈。今はナサの誰か……しかも明らかに男の声……を勝手なイメージで演技しているようだ。確かに昨日のテレビでやってた。

その変幻自在の声帯は何だ。無意識か——ということは微塵^{みじん}も顔には出さずに会話を続ける。

「確かに未踏域かもしれないけどそこまで大事じゃないだろ」

「物事は常に大きく！ それこそJFKにならうぐらいに」

「はいはい勝利の方程式な。話こじれるからいい加減食うぞ」

そろり、と春にふさわしくないシチュー（仮）を少し口に運ぶ。一だけ。

すっかり夏希さんの存在を忘れて別の意味で二人（と二皿）の世界。

「……………」

「ど、どう……？」

「おお……なんとか食える。数年ぶりでどうなるかと思ったが」

当時子供舌だったことも少なからず影響しているのだろう。辛味に
対するものが変わったようだ。

子供の頃のように無理矢理耐えて一時間も泣くのをこらえてうずく
まるという精神的な面ではなく。

二口三口と続けて少しずつ入れてみるが、どうやら後から攻めてく
る辛さも耐えられないほどではない。このまま余裕で完食出来そう
だ。

「うん、後から多少来るけど大丈夫だな」

「そ……そーなの？」

「そーなんす」

「……寒っ」

またしても縮こまる仕草。

「うるせえ」

「やつら」

「……同レベルじゃねえか」

つい言ってしまった言葉に火がついたのか、カチンと音が聞こえた
気がした。

「あーもう！ 食べれば良いんでしょ食べれば！」

「あつ待て！ そんないっぺんに口に入れるな！」

えーい儘ままよ！ と一でさえ少しずつ食べているのに瀬奈はスプーン
いっぱいいっぱいに赤黒いスコビル臭が漂う何かを口に入れた。そして一
気に飲み込んだ。

「……つくん。なに、意外と大丈夫じゃ……にゃああああい!?!
辛い! 痛い! ヒリヒリするゝっ! 水、みず!」

既にコップの水は置いてあるのだが、それも瀬奈の感じる辛さの前では雀の涙、焼け石に水で、一瞬にして底をつく。

「……はあ……ってうそ!? もう無い! ……うわああゝん!」

様々な過程を経てついに泣きながらさらなるうるおいを求めてキツチンへとダッシュ。

「そ、そこまで辛かったか……?」

もしかしたらこの味付けは一般とは一線どころか二線も三線も画しているのかもしれないと今更ながら気付く。

「ね、ねえハジメ君。もしかしてあの子って辛いのが駄目だったかしら?」

「……全部で何種類調味料使いました?」

「オリジナルも入れたからざっと素材から数えて三十種類ぐらいよ。いつもの感じ」

「それ初心者に食わせますか……」

まあ辛いのが大丈夫と聞いて油断していたこちらも悪い気はしないでもないのだが。

「だってうちの家族は皆美味しい美味しいって食べるしハジメ君もランドセル背負ってた頃は残さず食べてたじゃない」

「……今だから言いますけどあの辛さはおばさんの血筋限定です。多分日常的に食ってなきゃ今みたいな反応は無理ないですって」

実は過去にこの人のつれあいの方に相談してその時『時間が解決してくれる……そうさこればかりは遺伝か時間しか対抗策が無いのさあははははは——』と教えてもらったことがある。

つまりその方は最初の頃相当な無理をしていたのだ。

しかしさすがにそこまでは言えない。言ったところですでに手遅れ。本人達が平和なら口出しすることはない。

「そんなこと無いわよう。たまに近所の方に紹介するけどユニークとか真似できないなんて言われるくらい評判良いんだから」

「……………」

ご近所、何故止めてくれない。今日も犠牲者が一人増えたじゃないか。

連れてきたことで間接的に原因になった自分の事はすっかり棚に上げて、ただの食材を劇薬レベルにまで昇華してしまう目の前の人物を嘆く。

「……や、やっぱり、普通のご飯にして……」

唇の赤さよりもなぜか目の方が赤くなっている瀬奈は息も絶え絶え、壁に寄りかかってなんとか立っている。

「い、ごめん。それにしても……い、痛々しい……」

730日の差はここまでの違いを生み出すものなのか。

と、瀬奈のまとう空気がただならぬ妖気をはなっていることに気づく。

「……………あとで……………オボエテロ」

しかし声は小さく、飯は作らせておいて後から殺戮宣言は一には届かなかった。

確かに元はといえば、一が悪いのでうらみをぶつける矛先になって
も不思議は無い。

このあと部屋に戻り、エビフライをメインに外堀を埋めたようなメ
ニューで瀬奈にエネルギーをチャージしたら、うらみの数だけ首を
引き伸ばされた。

二つの意味でのびた一は確実にペチュニアおばさんに近づいていく
ような気がする己の首に対して最終的にはバギーになるんじゃない
かと不安を抱かずにはいらなかった。

第8話 避難、探険、招待

今日も教室はいつも通り落ち着いた雰囲気……というわけにはいかなかった。

ちゃんと5時に起きたし目玉焼きもふりかけご飯だつてきちんとしてやった。天気は見事に春の陽気をそのまま伝えるかのように雲ひとつ無いくらいの晴天。ニュースキャスターだつてさすがだった。ハプニングが起こっても終始笑顔を貫いていたのだ。おかしいことはこの時点までは何も無かったはずだった。

「……………え？」

そんないつもの平和な朝だったのに、教室に着いた途端のみんなのこの目線はどうだ。言ったら悪いがみんなの一を見る視線はまさに賞金首を見る目ではないだろうか。

今この教室にいる中では小学校からの付き合いの琉二と、いつも先に来ていて中学で一緒だった中でもよく会話をしていた風璃が挨拶をしてきた以外ほとんどの人が一を見、しばし品定め、そして目をそらすの三連単で一をスルー。オッズは驚異の1・0倍。

これはもしや排他的集団防衛による異端者の締め出し、つまりMUSHI、果てはI J I M E……？ さすがにそれはないな。とか割と冷静に頭の中でボケていると、何かを察した風璃が耳打ちしてくれた。

微かに風璃の爽やかな香りが風に乗って流れてくる……のは置いていて。

「ハジメちゃんよ……君は今やクラスのターゲットにされているのだ」

「は？ ターゲット？」

思わず聞き返す。どう考えても良い意味の言葉ではないのは確か。

「そう、ターゲットさ。昨日『緊急だけどそうでもないよ連絡網』が回ってきてね、『1-Dで風紀委員になりたい人は真面一にどんな手を使ってでもとにかく勝利してから来い』みたいなことをハジメちゃんを除いた全員に伝えられたみたいなのさ」

「いよう人気者！」と背中を軽く叩かれる。

周囲の視線を賞金首を見るようなもの、と感じたのは意外にも間違っていないかったようだ。本当に狙われていたとは思ってもよらなかった。

「なんでそこで俺なんだよ……待てよ、風紀委員……？」

心当たりがあるとすれば、いつぞや呼び出しを食らったときの風紀委員の腕章を付けた金属野郎（ピアスがじゃらじゃらとかそういう意味ではなく）。あの時はものの見事にねじふせられて見向きもされなかったと思うのだが。

「ちなみに私はハジメちゃんをぶっ壊すとかそういうつもりは無いから今こうして教えてるんだけど……どうかした？ ハジメちゃん」「あー、いや何でも。ありがとな。つーか琉二も瀬奈も何で今朝のうちに教えてくれなかったんだ？ ……いやまあ、忘れてたとかそんなトコか」

聞いたところでそれ以上に深い答えも出ないだろう。

「で、この視線か……やりづらいな、今日一日ずっとこれか？」

「そうなるねえ。二中のみんなはハジメちゃんのこと知ってるからむやみに室内で襲ってくることは無いと思うけど……」

そこで一の脳裏に根本的な問いが浮上する。

「てかそんなに風紀委員ってなりたいもんなのか？」

イメージ的には真面目なやつが小うるさくもボタンがどうのシャツが出てるのスカートが短いのとあれこれ言ってる映像しか浮かばない。しかも他の生徒より上じゃないといけないからか、明らかに荒っぽいし、やりたくない方が多いと思う。

そういうのに進んでなろうとする気持ちが一には分からない。

「それがねえ……なんと学食フリーとか成績に箔はくがつくみたいな色々な特典が付いてくるらしいのさ。噂だけどねー」

「なるほど……人材を釣るためのエサ、ってわけね、ある意味俺も今エサなんだけど」

自虐的なセリフを吐いて一はゆっくり席につく。器用にも周囲の一挙一動を探るような視線からは全て目をそらしている。

しかしなんとも拍子抜けな（と同時にありがたい）ことに午前中は誰も襲撃して来なかった。

……詰まるところ午後はその逆だったわけで。

「ま、参った！ いだだだだだでえ！」

「……これで六人目、ねえ」

昼休みに突入して自作の質素な弁当箱を匏から出そうとして一人目。かわしてそのまま机に激突させる。

これは教室にいられない、と席を立った瞬間にまさかの女子の襲撃にも紳士な対応。勢い余って飛び出たところをベランダ閉め出しの刑に処する。

昼飯は一緒できそうに無いと瀬奈達に断りを入れて引き戸を開けて出るところでまたしてもクラスメートの顔が見えた！ と思ったらそいつは囧で、注意を引き付けている内に左右と背後に一人ずついるという罠も→→←←↑↑↓↓B Aで華麗に各個撃破。どうやら目の前にいたやつはタイミシング合わせ担当だったので、手出しをせず、人数に含まれなかった。

一気に五人も殲滅せんめつしたことで気力を削そがれたのか、後続は途絶え、一は屋上……は転落防止のために鍵がかかっているので出られず、手前の踊り場でさもしいオーラをドライアイスの如く噴出しながら、その名も『誰も寄せ付けないぜ昼食』……を済ましその後は今後のために今の内にトイレトイレ、と用を足してきちんと手を洗おうとする前に油断も隙もモラルもなく六人目。である。

一は近接限定のスキルなので突然の攻撃への対処に手を使わないわけにはいかず、思わずべったりと汚染攻撃をやってしまった。

もちろんその後は石けんを使って手の殺菌消毒を徹底、二次災害を防ぐことに全力を注いだ。ばっちい六人目には冥福を祈るだけで、同情なんかしない。

トイレにてようやくひと段落し、残りの時間を安全に過ごすため、1年のいる4階を避けて3階に下りる。

「んー、さすがに授業中は先生がいるしなんとかあるとして、あと30分どう過ごす？ ……つつたって空き教室にこもるしかないよな……追いかけてこマラソンはやりたくないし」

そんなのはモテる奴に譲っとけ。

いまだ学校の構造を分かっていないが、それは相手も同じだろう。仕方なしに階段を降り、いつかの風紀委員に待ち伏せ……待ち構えられた人気のない廊下に立つ。

予想通り人っ子一人いなかったことにひとまず安堵のため息。どうやらこの辺一帯はいつも使われない物置っぽい空間らしく、『〓室』とかの目印すらもない、ただ部屋の番号が等間隔に連なっているだけの質素な廊下だった。

しかし一つだけちゃんと名前が書いてある部屋があった。

「ん？ あの部屋だけ『連絡室』って書いてあるな……行ってみるか」

どうせ人気も無いのだし開いてたら入ってみようと決め、ノックして誰かがいないことを確認し、鍵がかかっていることも覚悟してドアを引いてみると、なんと軽い手応えと共に平凡な引き戸の音がした。

「おいおい大丈夫かよ部屋の管理」

入れば儲けモン。だったがそれはそれ、上手くいってしまったことには危機管理のない高校だなどと思わざるを得ない。

「誰もいないのに開けとくなよ……ってかなんだこのあからさまに怪しい部屋」

どうやらこの高校は雑多なものと天井に空いている人が通れそうな穴から伸びた縄梯子なわばしごのある部屋の事を連絡室きっかいと言うらしい。奇怪な。

「いや／＼しかしこれは……こりゃあ……！ ……いや、落ち着けよ俺……だがしかし」

他人の目もないこの状況で、一はふつふつと湧き上がっていく、とある衝動にかられる。

「これは……登るよな。そこにハシゴがあるんだから仕方ないよな。だってハシゴだからな」

『他にやることもない』という名目で即決即断。探険を始める。

「うおおおお……古いなあ。大丈夫なのかこれ？」

思いの外その縄梯子は使い込まれていて、近付いてみると所々にほつれなんかも見えるが、ぽっちゃりしているわけも無く、標準の重さであると自負している一は言葉とは裏腹にためらいもなく登っていく。綱独特のきしむ音がする。

「お、意外と明かりが適度に射し込んで手元が見える……、……つてどこまで続いてんだ？ 廊下の方まで出られるぞ……」

休み時間の事などすっかり忘れ去り、冒険の誘惑に心奪われた一はいつもの外面に口角がわずかにつり上がっている。

その内心はこれ以上無いくらいウキウキ感が後退の二文字を消し去ってしまったまさに不退転。目についた方へと匍匐前進あるのみ。

――――

5分ほど休まずに右へ左へそして前へ前へと這い続けただろうか。現在地は隙間から見える景色から判断するにおそらくまだまだ廊下

の上。

所々から脇にそれる道があるが、どれもが使われている風ではなくホコリが積もり、実は今まで通ってきた所が綺麗に掃除されていることに遅まきながら気付かされる。

「そーいや午後は担任の数学だっけ。間に合うか？ ……ん、あつちは床が綺麗だな、網戸みたいなのがあって明るいし」

のこのこと網に向かって新鮮な風景を拝もうと進むと、

「ハイ連絡室からご苦勞様。ここがゴール♪」

「うわっ」

いきなりその網がガタン！ と動き出し、（客観的に）かわいい女の子の顔が上がってきて、下手をすれば顔と顔がぶつかりそうな距離まで迫る格好になった。

「まあまあ折角来たんだからゆっくりお茶でも飲みなさいな」

「え？ じゃあお言葉に甘えて……おじゃまします」

変な位置関係のまますっかり上がり込む許可まで得てしまった。

こっちの部屋は部屋の隅にしっかりと金属製の梯子が固定されていて、普段から使うことが前提とされているのが文字通り目に見える。

降りてみて部屋を見回してみると、壁一面に収まっている棚には書類がぎっしり詰められていて、さっきの……多分態度から言って先輩だろう、その先輩がこちらに背を向けてカチャカチャしている棚だけが余裕を持って食器とかお茶の葉の缶のスペースを確保している。

先輩は丸っこい湯沸かし機のスイッチを入れ、二人分の湯飲みを並

べて急須に葉を入れる。

「いやー最近はお湯を沸かすのも便利だね。電気ケトルとかよくCMでやってるよね」

「あの、すいません」

手を挙げて質問の意を示す。

「はいどーぞー」

「明らかに普通じゃない方法で侵入しといてこう言うのもなんなんですが、ここはどこであなただ誰ですか？」

「簡潔に答えてあげよう。ここは生徒会室で、私はここの首領^{ドン}、小谷千里^{せんり}。『ちり』じゃないからそこんところはよろしく」

「どうやら意外とこの先輩……生徒会のドン、生徒会長はノリが良いようだ。」

「誰に言ってるんですか」

「絶望したっ。この通じなさに絶望したっ」

「………木津か？」

「とまあそれはともかく、君のここに来るまでの行動は一部始終観察させてもらったからね。1年D組34番の真面一くん」

ちなみに情報は全て合っている。

「……もしかして今日の変なイベントは、」

言いかけて生徒会長、小谷先輩は湯飲みにお茶を注ぎながら左手で

銃を作って『的を射た!』と言わんばかりにこちらを指差す。

「察しが良いね。ついでにこの間の『用務員は見た! 人気のない廊下でのバイオレンス!』も私の差し金だからそのところヨロシク」

「何ですかそれ……っていうかなんで俺みたいな墮落主義にそんな手の込んだことを……」

帰宅部、趣味は読書と近所徘徊。たまに探険もしたくなる冒険者だが基本的にはゴロゴロすることを愛する人間だ。

「いやあ、最初は『ハーネス』ってなんなんだろうな。と思ってたんだよ。不思議でね。それであの風紀委員……猪苗代って言うんだけど、ぶつけてみた訳よ。そしたらいろんな意味で肩透かし。これは再調査だあ。ってね」

一息つくためにお茶をすすったのでそれに倣って差し出されていたお茶に口をつける……なかなかのお手前で。

「……それで今日、ですか」

『迷惑な話だな。こちらら一般人なんだぜ!』って言えるキャラだったらどんなに楽か。

「というわけで『ハーネス』が何なのか分かるまで続けるかもしれないけど、どうするかな?」

「どうって……正直止めてほしいです。それに隠すことも無いですし今ここで喋りますよ。……そういえば風紀委員はもう決まってるんですか?」

お茶の効果か、落ち着いたムードでの会話が続く。

「なになに？ まさか今日軽く6人をのしたその腕を風紀委員で発揮してくれるの？」

のしたと言うか、かわしたと言うか……。微妙なところだ。

「いや、そうじゃなくて……。それはちゃんと他にアテがあるんですよ？」

「一人は快諾してくれたし残りの一人もこれから話しかけてみるつもりだからその辺は大丈夫かな」

「……そういえばこの学校には監視カメラでもそこらじゅうについてるんですか？　なんかで見てた感じですけど」

こっちが喋っていない情報まで向こうは知っていた。とすると何かモニターのものがあってもおかしくないだろう。

「欧米かつ」

「いや、イギリスのロンドンじゃなくてですね……」

「おお、やっぱそんなくらいは分かってくれるかあ。それで質問の答だけどぶっちゃけ見てたのは監視カメラじゃなくて私のスキルね」

「んー、なんて言うか……。理不尽ですね」

こちらからは全く気付けないあたりが。

「『見える』範囲は日によってまちまちで半径10メートルからこの町一帯くらいまでムラはあるんだけどね。それにしてもためらいも無くあんな所いけるってのはすごいね」

よくよく考えれば連絡室に入ってから少々暴走気味だったかもし

れない。恥ずかしさの熱が血液に乗ってじんわりと体をめぐる。

「……どうもああいうのには釣られちゃうタチなんで」

「へえ、面白いねえ」

「よく言われます。ギャップがどうこうとか」

不本意だけれど知り合いにはそう言われるのだから仕方が無い。あくまで客観視だ。

「それじゃあそろそろこっちの疑問に答えてくれるかな？」

どうやらどうしても自分のスキルを聞きだすつもりらしい。

「あんまり面白くないですけどね……いちいちこんなことされるのもこっちが持たないんで」

「じゃあハイどうぞー」

リポーターよろしくマイク（目で見るのではなく心でみる）をこちらに向けてくる。

それを丁寧に戻して一は一言。

「まあ、簡単に言えば俺は『神経』を使ってるだけです。他にはなんにも出来ません」

第8話 避難、探険、招待（後書き）

変なところで区切りました。すいません。

これから……あ、略称考えてない。とりあえず、お願いします。

第9話 説明、帰還、盗難

「神経？ あの人体をびびつと駆け巡るやつ？」

「その神経だと思います。感覚って言っても良いかもしれないですけど」

相手が生徒会長ということもあり一は行儀のいいしゃべり方を崩さないように心がけて説明する。

昼休みの一の相棒、弁当箱がホコリをかぶったことで少したくましくなった包みにくるまれて湯飲みの脇に置いてあり、いい味を出している。

「まあ、自分の神経とか触れた相手の感覚とかを操るぐらいですけどね」

「うーん、分かるけどよく分からないねえ。それで六人もかわしたってこと？」

かわしたと言うかおとなしくしてもらったと言うか……。

「見てたんなら簡単に言いますけどあれは全部相手に直接ふれて痛覚を無理矢理呼び起こして動けなくしただけですよ」

神経律。^{ハーネス}自分勝手につけたスキル名。

五感などの感覚を、『自分及び触れているもの』限定で自在に操る。先程の六人に与えたのは具体的に言えば、『下痢でお腹が痛い時に不幸にも両足同時に攣^くってしまった』な感覚。効果時間などの度合いは人によるが。

先日^{きんぞくヤロウ}の風紀委員はそれとは別に『意図的に』自分の火事場の馬鹿力を引き出して攻撃、そして殴られた感覚は痛みの信号を無理矢理に

飛ばしていた。

意外と無茶なことをやっているかもしれない。

「へえ……サッカーが流行ってるのかと思った」

「はあ……」

タックルされた時にファウルを稼ごうと選手が無駄に痛がることを言っているのだろうか。

そんな事を思っつてふと時計を見ると、予鈴5分前の位置に長針が来ていた。

元々休み時間だけ逃げれ切れば良かったので、一は急いで残りのお茶を飲み干し立ち上がる。

「それじゃ俺はこの辺で」

「あ、もうそんな時間だった？ うん、じゃあ約束通りこれ以上の手出しは止めておくようにするよ」

「ありがとうございます？」

どうも礼を言うのは腑に落ちない気がするが一はドアの前で振り返って一礼して生徒会室を出ていく。

――

千里はそれを見て一息ついた。

「……あーびっくりした。いきなり秘密ルート使ってこっちに来る――」 「すいませーん」

ノックに反応してはね上がりそうになるが、瞬時に落ち着きを取り戻して声のした方――入り口を見やる。

「――っと、まだなにか用があったかな？」

「ここからどうやって戻れば早いでしょうか？」

肩幅半分ぐらいに開かれたドアから一の顔が覗く。

「ええと、部屋を出て右の方の階段が一番近くていいと思うよ」

「そうですか。分かりました」

今度こそ本当に出ていき足音が遠ざかってゆく。

「会長……いきなり隠れろってどういうことですか。別に僕がいてもいいんじゃないですか？」

「いやあ悪いねえ紫蘭君」

実は生徒会室は仕切り板がその部屋を入り口を含めた片方ともう片方にパソコンなんかを置いた区画に分けていて、応接と事務で使い分けが出来るようになっていて、千里がいた応接側とは別に、事務側にいきなり避難させられた副会長の紅夜は『やれやれこの会長には困ったものだないっそ僕が会長でもやってやろうか』といった感じで出てきた。

「でもびっくりしたんだからしょうがないでしょー」

「それである対応はそれなりの強心臓だと思えますが」

「はっはっはー誉めて誉めて♪」

先程一に向けていたスマイルとは別の笑顔を浮かべる生徒会長。

「はいはい会長はえらいですね。それでどうするんですか？ 彼」
「ん、これ以上はしないよ。したらしたで面白そうだけどね」

ここまでこだわったわりにはあっさりと手放す千里。いつも心の奥底では何を考えているのか、読心できるスキルでも持っていないとまるで分からない。千日先が見えているのか、はたまたその場のノリで行動しているのか。

「結局何がしたかったんですか……」

「興味があつたから見てみたかっただけ……って言ったら怒る？」

「怒りましょうか？」

勝手にあーしろこーしろと振り回された分、にっこり笑顔が予断を許さない。

「ゴメンゴメン冗談。……よく分かんないけどなんか他人じゃない気がしたのねこれがまた」

「一目惚れってやつですか？」

「あーそれは無い。だってすーどあぁーっ！」

らしくない叫び声を上げて椅子ごと綺麗に引っくり返し、そのまま石化。

「……大丈夫ですか？」

「あーゆーおっけえい？ いえー」

どうやら千里の頭上にはヒヨコとか星マークとか雑多なものが飛んでいるようだ。

「はぁ……あと半年、か」

ここ折り返し地点にきて任期がかなり遠く感じられた。

「あー戻って来た。イチどこまで行ってきたの？　なんか『真面のやつどこに隠れた！？』とか聞かれたけど」

相変わらずハイスpekな声真似を披露してくれる瀬奈。今のは出席番号22番の男子だろう。その顔にピンときたら回れ右、だ。倒れていない辺りどうやら購買には間に合ったらしい。安心安心。

「ちょっとダイ冒険を……」

「なにそれ？　分かんない」

「いや、俺も分かんないから安心しろ」

教室を出てから肌身離さず後生大事に持ち歩いてた弁当箱をいかにも名残惜しそうにしまいこむ。空気の含有率は廊下（と天井裏）が5、踊り場が2、生徒会室2にトイレ1……。

「トイレ長すぎだぜマジメ」

大冒険を別の方向に解釈した琉二がニヤリこちらを見つめる。残念ながらそっちは違う。

「そーいやお前ら風紀委員になりたいとかないのか？　そういう連絡網回ったらしいけど」

「それこそなにそれだよ？　たしか留守電のランプはあったけどそれかな？」

瀬奈は夜は確実に寝てるから時間帯によっては伝わらないだろう。

「そーいやあったぜ。迷惑にも夜中11時にな。つつたってオレがマジメに勝てるわけねえぜ」

「でも分からないぞ。お前が本気出したら俺なんかどうなることか」

謙遜けんそんと言う名の日本人の美德……ではない。本気で琉二は何をやら
かすか分からないのだ。強さうんぬんの話ではなくもっと別の意味
で。

「わたしはスキルがまだ無いからなれないだろうな」

「オレも普段は無いも同然だからやめとくしかねえぜ」

「なにしろえぐいからな……」

普段なら言わないところを一は思わず本音を漏らしてしまう。

これも長年の付き合いのなせる業か。ワザなのか。

「マジメテメエ、言って良いこと悪いこと分かってんのか？ これ
以上言うならな……」

「……言うなら？」と瀬奈が聞き返してタメを作ること数秒。

「言うならな——電話を留守電になるまでかけて呪いのメッセージ
を吹き込みその後ピンポンダッシュその後ベランダのあの白いのぶ
っ壊してさらに窓に湿った半紙をべったべたにはっ付けてやんぜ！」

言うのに5秒（舌を噛むからマネしちゃいけない）。

「うわあ……」

「うぜえ……」

ホラ見たことか。（一部の分野に限り）全然勝てない。

しかも全部過去に実際にやられたことがあるからハツタリなんかでもないからタチが悪い。

白い壁（火災などの緊急時以外は壊さないで下さいとかなんとか書いてある）を蹴破った時にはさすがに親父さんにぶん殴られていたが。

「そーいやえぐいつて何？」

「半紙をべったべたに張り付けられるのが嫌だから俺は答えない」

「オレもえぐいとか言う言い方するやつには答えないぜ」

こういうところばかり二人は息が合う。

「あつそ。……ところでみんなさっきからおとなしいね。その、色々オイシイ風紀委員になれるのに」

「そりゃあ……オレらみたいなのが近くににいるからじゃね？」

琉二は確認するように回りを見渡す。

確かに一の席の回りにはやる気なさそうに寝てるやつら以外は一定の距離を置いてこちらの様子をうかがっている。

そして明らかに邪魔そうに瀬奈（と琉二）を見ている……ように見えなくもない。

思えば近くに人がいないときばかり狙われている気がしてきた。

「あー、巻き添えはダメなんだ？ みんな親切だね」

これは勝手な推測だが、女子はよほどの自信がない限りやってこないし、男子はすでに裏の評判ではカワイイで通っている瀬奈を巻き添えにすると後で何を言われるかわかったもんじゃないから少なくとも

とも瀬奈がいけない時しか狙えないのだろう。

というかすでに一には殺^やる価値も無いのだがどうだろう。みんなに無駄な努力をさせているのではないか？

そもそも『室内』だから一部の被害の少ないスキル限定という条件でのみ助かってきたのに『外』に出たらそれこそどんな目に会うか。

——死ぬ。絶対に集中砲火で死ぬ。

……ここは一つ終息したよ宣言をしておかないといけないようだ。決意すれば後の行動は早く、教卓までの通路を人を寄せ付けない神妙な空気をまとして歩きそのままみんなの方へ向き直る。

「あゝ、昨日連絡網が回ったらしいですが、直談判の結果、無効になったみたいです。どうしてもという人は生徒会に行ってください。俺は知りません」

自分でもよくもまあと思うほどつらつらとセリフが出てくる。

「まじかよ」「直談判って何？」「直接交渉だろ？」「てか元からあやしくなかった？」「アレ本気にしたやつ……え？　マジでいたの！？　てか本人が言うからマジだったっぽいし！」——まあ、こんなもんだろう。

丁度その時チャイムが鳴り、ジャストで担任が現れ「自主的に授業をするなんてこのクラスはすばらしい生徒がいるんですね。なら私は要らないですよねそうですねだってまだ数と式ですし自主性に任せても——」などといやみをねちっこく言われた。

放課後になって部活のない琉二を除いて瀬奈と風璃の二人と帰ろうとして鍵付きの（めんどくさいので鍵は開けっぱ）ロッカーを開けると、

靴がない。

おうジーザス。

頭の中の小人が頭を抱えてのた打ち回る。リアルでは上の人のロッカーにガン、とそれなりの勢いで頭をぶつける。

「厄日かよ……」

代わりにメモ書き一枚が寂しくも読まれるのを待っていた。

曰く、『靴を返して欲しくば体育館へ来たれし』……窃盗罪。強要罪(?)。

「ハジメちゃん？」

とっても頼りになる風璃の手……を借りたい誘惑はあるが、巻き込むのは良くないということぐらいわかっている。

「悪い、用事ができ——」

しかし後ろから「どれどれ？」と伏兵、瀬奈が覗き込む。

「おいちよっ、見るなって……あー……」

気付いたときには遅かった。さて、どう出るか。

まずメモを見、下駄箱を確認。最後に一の顔を真顔で見上げ、噴き出す。

なんて奴だ。

「うっわくッ盗られてるくッ♪ あっははくドンマイドンマイ。そっかあクッ取っちゃえば呼び出しは簡単だね」

「……容赦ねえなおまえ」

慰めを期待していたわけでもないが、もう少し優しくしてくれてもバチは当たらないと思う。

「ハジメちゃんどうするの？ やっぱり取り返しに行くのかいや？」

（かいや？ ……何だっけ。人？）

「どうしようか……なんかめんどくさいしこのまま帰ってもいいや、って思ってたけど」

売られた喧嘩は即返品。差し引きゼロ。

「あっしは取り返しに行くのをオススメしやすけど。協力しやすぜ」

（ダメだ。今日の風璃は……いや、いつもこうか）

「でもなあ……」

「ふん、全く最近の若いもんは。ならワシが一人で行ってくるぞい」

（……………）

折れた。色々と。こう、世界記録の人がその競技で一般人をぶつちぎりで破る感じの虚無感が残った。

「はあ……あー分かったよ行くよ行けば良いんだろ？」

「よっし、それでこそハジメちゃんさ」

「わたしも行く」

そこで一は固まる。精神的に。

「あー、ちよーっと待てよ……」

ふと、とある思考に行き着く。

ケース1 相手が女子。

体育館へ↓相手現れる↓こちらはなぜかオプション『両手に花（欺瞞）』を装備↓悪印象↓告白（まさかないだろう）にしろ今日の続き（確実に先手を取られて後手に回る戦い）にしろ、ロクな目に会わない。

ケース2 相手が男子

女子を連れている↓見付かった瞬間に即死。相手は憤死。

――やべえ。

何がやばいってその思考パターンが。とは誰かの考え。

「……一人で行ってくる。まだ死にたくない」

「？ 遠慮すんなよーハジメちゃん」

「そうだよこんなに面白いこと無いんだから」

「人の不幸で遊ぶな」

本音はそうほいほい言うものではない。実際に言ってるやつがいたとしたらそいつはよっぽど幸せなのだろう。

「……はいはいじゃー待ってますよー」

「待つのかいセナちゃん？」

「だってほら、もうこんなにも可哀想じゃん？　ねえ？」

「うーん、そう？」

意味ありげに風璃に目配せをして、らしくないことを言う。さっきまでからかってきた事を考えると普通に怪しい。なんかある。

「じゃ、行ってくる」

「行ってる」

（うん、怪しい）

と思いつつもどうしようもないので放っておくしかなかった。どうせ後になってすぐ後悔することになるんだろう？　思考は警鐘をガンガン鳴らしていたのだが。

第10話 飛来、捕獲、早寝

一はロッカーに南京錠をかけて上履きのまま体育館へと緩行、明らかに気乗りしない足取りがそのままペースに表れている。

「一体誰なんだ？ 高校生にもなってわざわざ革靴を隠すようなやつは……」

この高校の体育館は校舎のすぐ脇にあり、二階部分には二つの建物を繋ぐ渡り廊下がある。一は今その渡り廊下をだらだらのそのそとゆるゆると。

体育館は二階建てになっていて、バスケットやバレーをする広さの部屋は二階にある。

が、それは今は関係なかったようだ。どう見ても――

「只今絶賛かくれんぼタイム……なわけないよな」

――だっ広い放課後ワールドには人っ子一人おらず、室内にも関わらずウエスタンな風が寂しさとわびしさを演出していて、

ヒュッ。

「……!!」

その時どこからともなく弓矢よりも上の速度で風車が頬をかすめ入口のすぐ隣に気持ち良いぐらいに突き刺さる！

耳元で弾けるように痛い音が弾け、刺さった音はまるで聞こえない。

(うわわわああっ、ぶっ、ねえええ!! ヤシチか!? いや、違
うのわかってるけど!)

頬を片手で押さえながら心の中で叫ぶ。

本当に危ない。よける間も無いくらい突然な一撃は回転する風車の
羽が起こす摩擦で一の左頬に爪跡を残し、衝撃で羽の留め具が空中
分解。しかし棒の部分はそのまま一直線に通り過ぎて……壁に埋ま
っていた。

「し、死ぬ……こええよ……なんなんだよ……俺が何した……まさか
遅刻したか?」

十中八九、これから会う人の仕業だろう。これだけで既にトラウマ
ものになる、がその無表情顔にはそこまでの本気の怯えは表れない。
残念ながら未だ表情から一の心中が他人に悟られたことはない。

「頬切ったし……何だよこれ……」

頬を押さえると、ピリピリした痛みはあるが、濡れた感触は無いの
で辛い血は出ていないようだ。

足下に落ちた、留め具が外れて少しクセのついている羽を拾い上げ
ると、矢文の代わりなのか、妙に丁寧な文章が書かれていた。

『序でに人質も取った。詳細な場所を記しそびれたが、一階の柔道
場にて待つ』

「ん……『ついでに』って読むのか? ……ってか人質誰だよ。……
いや心当たりはあるって言えばめっちゃめっちゃあるんだけどね、そ
れだとな、あんまりにもあんまりなんだよなあ……」

そうなっていないことを0割0分1厘だけ期待して階段を降りた。
うん、ポジティブ。

——ああもう予想通りかよこいつらは。

「……何やってるそこの二人」

なんとかため息をするのはこらえた。

柔道場に入るなり開口一番、部屋の真ん中で互いの背中を合わせた形で一絡げにされて胴体^{ひとから}をぐるぐる巻きにされていた瀬奈と風璃を見て言う。

そしてもう一人、瀬奈と風璃をはさんで向かいで腕組みをしている女子の先輩らしき人物に目を向ける。

その人は上級生のカラーのジャージを着ていて、ファスナーはきちんと閉じられている。髪はボーイッシュなくらいにショート。完全ジョギング装備だ。

体格は瀬奈よりは身長はあるものの高いとは言いがたい。

ジャージで多少ラインが隠れているが、スタイルはなかなか良いようだ。と一が思ったところで別に何も変わりはないのだが。

「それがね、あの後こっちに来ようとしたんだけどこの人が……」

「セナちゃんどこへ行くんだい？」

「もちろん体育館。観察観察♪」

今日の一の様子からしてただならぬ気配がムンムンだったので、面

白そうなニオイをかぎ取った瀬奈は身勝手にも興味本意で覗き見しようとしていた。

体育館の普段は使われない、バスケットゴールが取り付けであるフロアに上がり、柵のスキマから普段体育で使っている下の階を覗き込む。

「ん？ 誰もいないね……」

「ハジメちゃんのはのんびり屋さんだからねえ」

「ほう……知り合いきゃ」

背後に突然影が現れた。舌を噛みながら。

「『きゃ』？」

「ま、またしてももつれた！ ええいきやくご（覚悟）！」

「もつれたって何——うきゃあああ！」

そのまま、まるでまったく現代には必要のないスバラシイ捕縛術でもってぐるぐる巻きに……。

「って訳なのさ」

「風璃テメエきちんと抵抗しろ。ってか逃げれるだろ」

こう……スパッと、カマイタチ的な何かで縄を切って……とか。

「ハジメちゃん来ちゃだめだーこれはワナだーわーきゃーだめえ」

誰が見ても分かるように鳥の雛のようにやかましく上を向いて口を開け大声を発してそれでもなお捕われのヒロインぶってる。

風璃のスキルを知ってる一にしてみればバカバカしいことこの上ない。

「その通り。下手に動けばタデヤ……っ！ ……タデでは済まないっ」

二人の向こうにいる先輩が、囁んだ。

一はそれを聞いて、少し思いついた。

「Who are you？」

ふとした思い付きで一は簡単な英語で『あなたは誰だ』と尋ねてみた。

すると『My name is Hokaru Minamo』と極めて流暢な返答がきた。

「ってそうじゃなきてっ！」

『……何で日本語だけ囁むんですか』とは言わない。日本語だけ囁むなら原因はわからなくてもそうなのだろう。

「とにかく……！ うちの暗密部あんみつに入りな……さいっ！ それがこのかわぐちゆ、……革靴と人質の交換条件！」

なんかもうかわいそうになってきたので素直に「アンミツ部ってなんですか」と聞いておくに留めておいた。

それを聞いてホカルと名乗ったジャージ少女は一旦口を開きかけ、しかしまた囁むだろうという恥ずかしさが勝るのか、ジャージのポケットから一枚の紙と筆記用具を取り出して下敷も無しにそのままスラスラと何かを書くと、それは一瞬消えて、こちらの手元に現れ

た。

「『空間転移』のスキルか……？」
テレポート

もう喋らないと決めたのか、ただ機械的な動作で首を縦に振るだけだった。

改めて届いた紙を見てみると、『暗密部…活動内容』とプリントされた文字で書かれた紙だった。

「（あんみつって甘味か何かだと思ってた）……えーと、その一、学校内の諜報活動。その二、軽く治安維持。その三、まあ後はそれなりに。……これって生徒会の許可とかあるんですか？」

一の質問に未だ囁んだことで顔を赤くしたまま、紙を指し示す。どうやら続きに答えがあるらしい。
おとなしく続きを読み進める。

『昨年度までは部員が五人いたのですねとか存続していたが今年は部長と副部長の二人しかいないので期日（4月24日）までに申請しなければ同好会になってしまい部費もカットされてしまう。求む同士！ 部長…3-A 水面 鞆連』

驚いたことに活動自体は認められていたらしい。

渡された紙にはまだ続きがあり、先程筆記用具で書いたと思われる内容だった。

『今日（4/22）君を呼び出したのは他でもない、暗密部に入っ
てほしいのだ。さりげなく見させてもらったが今日の戦いぶりは充
分に部活動で通じるだろう。それに厚かましい事は百も承知で言う
が、君の中学生時代を調べさせてもらった。もし入らないのなら革

靴は返って来ない上に人質はどうなるか保証出来ない。こちらとしては穏便に済ませたいのだがどうする?』

こう言われると(書かれると) いともたやすく折れるのが一。抵抗することに微塵も執着は無い。

「……もういいですよやりますよ。やれば全てまるっと収まるんですよね?」

諦めのよさとプライドの無さは一人前の一があっさりと承諾し、確認の意味で問いかけるが、首は縦に振られなかった。

さらに口パクで「つぢゅき(続き)！」と言っている。

口パクでなぜ囁んでいるように見えるのかは分からない。

『前述の通り部員は『五人』必要なのだが現在君を入れたとしても後二人必要なのだ。故に今日明日中になんとかして集めなければならないのだ』

「……ああ、それならその二人の名前を使えば大丈夫ですよ」

ふんじばられた二人(瀬奈と風璃)を交互に指差し、何度も往復させる。

会話の内容を把握していない瀬奈は「ふえ?」と間抜けな声を出し、風璃はマイペースにも鼻唄サンチョウのヤハズギリ。話を聞け。という突っ込みは無しだ。

そしてジャージ先輩……ほかる鞆連は「ナイシュ!」とばかりに指を軽快に鳴らし、何やらまたポケットからごそごそと三枚紙を取り出して三人に渡した。

その際にぐるぐる巻きを解くことも忘れない。

「えーと、入部届け……えー!? どーゆーことイチ!?」

「そういうことか」

「ふーりん分かるの?」

「これって部員の勧誘だったみたい。でハジメちゃん誘って、何か問題というか人数が足りない……? から私達も使いたい」

「ほえー。よく分かるね」

一が逐一説明せずとも分かってくれたようだ。鼻歌を歌ってたにも関わらず。

「と言うわけで二人とも部活やっていないからこれ以上の面倒が起る前に入るだけ入ってくれ。じゃないと俺の靴が戻らない」

全ては靴のため。人質は勝手に付いてきただけだ。

「何でわたし達がやんなきゃいけないの?」

「そうだそうだー(笑)」

——瀬奈を囁^{はや}すな風璃。あと(笑) ってなんだ。聞いただけで分かったぞ。

「人質^{おまえら}のせいで余計に引けなくなっただけどそのところどうなんだ?」

殺人風車の魔の手から二人の身はおろか自身すら守れないのに人質など取られては手の打ちようが無い。

「うっ……そこを突かれるところ……罪悪感? も無いことも無いかもしれない……」

「最悪名前だけでもいいから」

「む……あー！ ソンしたあー！ さっさと帰ればよかった」

そういうと、渋々といった表情で入部届けをポケットにしまいこむ。どの道完成させるには判子が必要なので、この場では無理だ。

「風璃も良いよな？」

「バイト優先だけどそれでいいならオッケーさ」

やはりと言うか、快諾を得た。

高一の4月にして早くもバイトの単語が口に出てくるのはあまり見られない光景な気もするが。

「じゃあ、明日担任の先生に持って行けば良いですか？」

鞆連は頷くが、「ただし」と囁まずに発音することに成功。

「わしゅれた（忘れた）ばわい（場合）には……っ！ ……こう」

舌足らずの羞恥心がついに極まり、極・精神統一のなされた表情で親指を立てて自分の首をかつ切るジェスチャーを試みる。その分の本気もかいまみえて恐怖倍増。

一同、からくり人形のようにコクリと頷くしかなかった。

「……あれ？ そういや体育館って部活の無い日ってあったっけ？」

「それは無いだろ……」

「じゃあ今日は？」

「たまたまじゃないのか？ ……まあ予想し得る最悪のパターンは誰かが……」

一斉に呼び出しの主を振り返る。

そこにはニコー、と微笑む鞆連が風車をくるくるくるくる……。――

どうやらとんでもない部活に入ることになったようだ。

無事靴も返され帰宅完了。帰ってきてばーっとしていると、既に時計は5時を回っていたことにひとまず驚く。

そろそろ瀬奈の夕飯の時間だ。

気だるさの溢れるような自分の体に活を入れ、ゆっくり立ち上がる。

「何だ……？ ……だるい？ ってか何だ？」

今日に限って色々あったし、スキルを使いまくったからだろうか。いつもはない疲労と言うかなんか上手く体が動かない感覚がじわじわと一にのしかかってゆく。

それは瀬奈の部屋に行っても同じで、

「今日は何か揚げ物の気分……ってどうしたのイチ？」

「いや、大丈夫……」 「じゃないことぐらいは分かるって。疲れたの？ まあ今日はなんか大変そうだったけど」

「今日は揚げ物か、じゃあ――」 「無視すんなコルアッ」

キッチンに上がる前に頭蓋ずがいをつかまれて首が傾く。いくら軽いとは言え人の体重。理由はともかく上手く動かない一の体では支えるには頼りなかった。

狭い廊下の壁に頭をぶつけ、ずり落ちる。もちろんズボンではない。

「……いてえ」

「ホラ、無茶するからそうなる。今日は簡単にカップメンにするか

ら。さすがに集中すればわたしでも成功するから」

「……何で毎日出来ないんだよ」

答えは既に知ってるので、単なる嘆きで言っている。

「さあ今日は失血大サービス！　なんと二つも作ってしんぜよう。
イチはそこに座った座ったのこったのこった」

まさに土俵上の押し出し。ソファーまでどんどん転がされる。くるぶしが何か家具に当たり軽く悲鳴を上げたがいかんせんだるい。反応するのも億劫^{おっくう}だった。

「失血って……まあいいか。どうせ二つとも自分で食うんだろ」

とか適当なことを言ってみる。

「……普段どう見られているのかがよく分かったよ。まあわたしに手負いを痛めつけるシユミはないから。じゃあ用意してくるね」

瀬奈はキッチンでただ湯を沸かすためにガスを付け、一はそれを見て昼休みの生徒会室でのお茶を思い出し、文明の差を感じていた。と言っても電気とガスの差だが。

毎日は発揮できないらしい集中力で見事熱湯を完成させ瀬奈はこちらの監視下で、まごうことなきカップ麺を調理することに成功した。

「……これは？」

「鶏三位一体ラーメン^{とりにてい}」

「ふざけたネーミングだ……」

ラベルによると、なんと鶏肉（こま切れ）、鶏ガラ、卵^{なんかのふわふわしたの}が揃ったま

さに鶏の三位一体！　とのこと。

味は…まあ普通だった。

その日もゆっくりと食って、ようやく体が動くようになり、瀬奈に戸締まりの注意をした後はすぐに戻ってそのまま寝た。

なんかもう今日は色々ありすぎて疲れたし、何か最後には瀬奈に飯作ってもらうダメっぷりとかどうにもならないんじゃないかコレ？
とか間拔けな事を思いながら。

第10話 飛来、捕獲、早寝（後書き）

やたら登場人物が増えるような気がするんですが（まだ増える予定）、登場人物紹介でもやった方が良いでしょうか？

第11話 将来は誰かの召使い……いや、無いから

一の携帯のアラームが起動するまであと3……時間。

「何このアホな起床時間……」

真面一、堂々の起床。半眼で壁のどこかを睨みながら頭頂部をがしがしする。

体が重かったので横になればさっさと寝てしまうのは無理ないのだが。

深夜の2時。俗にワラ人形を五寸釘で……とかよからぬことをするのにピッタリとか言われる丑三つ時。誰かに恨まれる覚えが無いので恐れることはない。はず。

「あー、シャワー浴びて着替えてメシは腹減ってないからスルーで……今日の準備……そうだよ、ハンコ押さない」と

忘れない内に暗密部（これ正式に名乗ってんのか？）入部届けにサイン、判を押す段階へ。これでもう書類は完成してしまう。

『良いのか？ 本当に良いのか？』——そんな心の声がしないでもない。

「……ま、いっか」

投げやりにシャチハタをポン、という音が本当に出そうなくらいに軽く押す。

ついでにシャワーと着替えもささっと済まし、ついに本当に暇にな

る。

まだ瀬奈が起きるまで2時間以上。いや、瀬奈基準でどうする。

「夜に歩くもまたをかし……いや、俺なんかが言ってもかっこつかねえな」

一応この辺は地元の不良がたまる公園を除けば住宅がほとんどなので、明るいところを選べば普通の男子はまず安全だ。

特殊な趣味の人がいないことを祈って散歩に出かけようと玄関を開くと、

「ういゝら、ひゃつく。すぴー、ズコー」

ユーはショオオック！ 落ちているくゆめのなかく♪ ……じゃなくて。

「何で……？」

魔人、もとい琉二の姉、冬雨^{ふやめ}がなぜかこちらのドアの向かいの壁に頭をつけて寝ていた。

「さ、酒のニオイが……！！」

ハタチにしてすでに飲んべえ極まり、着衣が乱れ、あるものが見えそうで見えない（見える方が一的には困るが）。

しかしそれとは別に、道端で人が倒れているのはまたスルー出来ず、ひとまず危険を承知で起こしにかかる。

「冬雨さん、ふやめさん！ 起きて下さい。廊下で寝ると体に良くないから」

「んーにいゝ？ あれえハジメく……すぴゃあゝ、ぬゑえーい」

話しかけるだけではどうやら無駄で、仕方なくゆっさゆっさしてみる。

「寝るならとなりの自分ん家で寝てください……ってうわ！」
「がっちゃー」

問答無用、酔っ払い独特の突拍子のなさで飛び付きタックル。そのまま床にタッチダウン。

「痛った……何するんですか！ 暴力反対！」

素晴らしい日本語だ。一の名言リストのベスト10に入るだろう。なんてバカなことを考えていると、

「ねえねえりゅうがひどいんだよ」

「何だって？ 酷いのはどっちだ……じゃなくて、えと、琉二がどうしたんですか」

なんとか押しのけて上半身を起こすと冬雨は面倒なことに愚痴りだした。少し酔いが覚めているのか、呂律ろれつだけはなんとかなっている。

「だってかぎがねえゝ、つけかえられてんのよゝこれが。だからりゅうがでてきたらはんごろしにしてやるのゝ」

「付け換え？」

半殺しについてはスルーさせてもらう。

いつも四捨五入したらゼロになるぐらいの殺しがほとんどで、これでもマシな方だ。

「そうにきまつてるよ。だってかぎがささってもがっきんがっきんってまわらないんだよ。どーいうこと？」

「(そういうオチか)……あー」

まさか琉二が予告なしに鍵を付け換えるなんてことは普通に考えても非常識に考えても無い。

そんでもってこの人がうちの前で寝ていた事を考えると、真実はいたってシンプルに、

「いいですか？ こっちは俺の部屋です。あなた達の部屋は隣」

まさか隣同士鍵が同じわけでも無いので、隣の鍵でこちらの鍵が開くことは無いだろう。

回転の悪い頭でも分かるように指差し確認させる。

「あれえ？ ひっこしたっけえ？ だからかぎがちがうの？」

「……………」

あまりの回転の悪さにさしもの一も呆れ、酔っ払いには付き合うだけ無駄だと齡^{よわい}15にして学習し、適当に話を切り上げる。

そのまま「？」のつく言葉しか喋らない冬雨を隣まで引きずり、鍵を出させて押し込んだ。意外と雑な扱いで。

「我ながら全然をかしくねえ、あはれでもねえ、なんだコレは……バツカスは俺に何をさせたいんだ」

一連の出来事をすべてを昔に本で読んだお酒の神様のせいにながら一は嘆息する。目覚めのすっきり気分も台無しだ。

もうこうなったら部屋でおとなしくするが吉。という脳内占いに従

い、素直に部屋に戻っておとなしくしていることにした。

「しかし俺ってなんか最近誰かの面倒ばかり見てねえか……？」

瀬奈とか、今は冬雨さんとか、瀬奈とか、瀬奈とか……。

いや、瀬奈は仕方ないだろう。だって倒れるのだから命に関わる。

「今から職業適性検査受けたら間違いなく『家政関係』とかだよな……」

執事とかメイドとか言わない辺りが逆にリアルな響きを持っていた。

――

結局読書することで意外と時間がつぶれ、今は瀬奈の部屋で朝食を作り、片づけ中。

「今日のはまあまあだったね」

ついに味に対して評価するようになってきたお隣さんの瀬奈。

「単にハムチーズトーストにただけなんだけどな」

「あれは飽きない味だよね……そうだ、今度はピザトースト作ってよ。あれもなかなかイケると思うんだけど」

「あーなんかそういう素^{もと}みたいなの売ってるよな」

人はそれをピザソースと言う。

「ハイけってー」

「……赤いのはちょっと頂けないけど、まあどうせ持ち出ししない

だろうし、大丈夫だろ」

理由は辛いもの大好きな大家とその血族にあり。同色配列は混ぜると危険なのだ。

「そーいやさ」

「ん？」

『必要のない』食器洗いまでやらされているところに瀬奈が話しかけてくる。どうやら最近の家政夫にはややこしいことにトークの技量まで求められるらしい。

「いや……やっぱいいや」

「?? 何だよ」

「まいつか、イチだし。……イチって家族どうしてるの?」

「あー、そういうことね」

確かに話したことは無かったと思う。あんまりべらべら喋る内容でもないのだが。

「まあ、一言で言えば……孤児って事に」

「ストオオopp!」

突然大声で一の話を持ち切ろうとする瀬奈。

「どうした？」

「なにそのシリアスな展開!? 予想外だよ! もっと明るく行こーよ!」

どうやらこの手の話は好かないらしく、両手を振って拒絶している。

一としては煮え切らないのでぶっちゃけることにする。

「いいやこの際だ言ってやる。母親は物心ついたときにはどっかへ消えていた。父親に聞くと『二度と会うことも無いだろう』とか。

その父親はいつしか自身を病んでしまい既に他界。もちろん祖父祖母はサーズとか鳥インフル並の流行り病で……」

「やめてえええっ！ 泣くよ！？ なんか知らないけどできすぎたぐらいに悲しい物語が見えるんだけど！」

耳を手で隠して『イヤだ』を目一杯に表現している。

「泣くのかよ」

「それは冗談だけど」

「オイ」

瀬奈は耳を必死にふさいだジェスチャーから急変、あっけらかんとした態度に変わり、声のトーンもいくらか落ちた。

「にしてもなかなかハードな人生だね。大丈夫？」

「余計なお世話だ」

部屋に戻っても暇なので、リビングに置かれたこぢんまりとした地デジ対応テレビ（一のはブラウン管）に映っているニュースを眺めて暇をつぶす。

ここ最近で身についた習慣の一つだ。

「ねえねえ。そういえばさ、『アマタツ』って何？」

「それ説明すると遅刻するからやめとけ」

「なんで？」

確か9時は回る。普通科に通う高校生としては無理な時間帯だ。なんて事を考えていると、いつもより長居していたことに気づく。

「そんなことより、入部届け書いたか？」

「あ、そうだった。ヤバイヤバイ忘れてたよ」

「じゃあそろそろ時間だし、俺帰るからな」

「わかった」と言っただけで部屋に舞い戻って行くのを見送り、一は一息つく。

どうも最近になって自分の中で何かが変わった気がする。今だってそうだ、わざわざ言わなくていいと言ったのに無理して聞かせたりすることは無かった。

「――何なんだろうな。っと俺も行かないと……いてっ」

すこし焦り気味に玄関へと歩き出すと床の出っ張りにつまづいた。真面一、15歳。まだ自立の出来ない高校一年生のようだ。

「あら、あなたなの？ この部活に入るの」

朝礼を終えた担任、敷石先生を捕まえ、入部届けを提出すると、興味深そうににじげしげと顔を見られた。

「瀬奈と風璃も出すと思いますんでよろしく願います」

軽く頭だけ下げるが、担任は「いえいえ」とさらに礼儀正しい仕草で応える。

「こちらこそ。あなた達が入れば廃部しなくて済むから」

その言い方にごく普通の、あたりまえの違和感を感じた。

「……この部活の顧問ってまさか先生？」

「そういうことになってますね」

「……………」

そういうことならこの人も変人、と安直に決めつける一。あの部活は普通じゃない。絶対。

「はいはいセンセイ！ 入部届け」

一の思考をブツ切りにしながら瀬奈が飛び跳ねるようにこちらに接近し、タッチ&ゴーの速さで提出。

すぐ後ろに風璃が続いてばしーん、と叩きつけてそのまま瀬奈の肩を抱き寄せる。

「連れ入部からのおおートイレ！ 行こうぜセナちゃん」

でかい声でそんな事を恥じらいも無く言っただけ。

「オツケ」

まばたきをするのを忘れるほどの展開の速さで用事を済ませて廊下に消えた。

「……まあ、これで廃部しなくて済むから良しとしますか」

「その言い方だと最初から計画していたみたいに聞こえるんですが」

……」

「まさか。授業の終了時間や空き時間を教えたりすることはあっても計画を立てるまではしませんよ。はい、先生は授業があるからもう出ますね」

『あなたは靴を隠された事件の共犯だったんですね!?!』なんて言った所でどうしようもないので、なんか一杯食わされた気分のまま黙って自分の机に戻ると、

「なんだマジメ? 部活やるのか?」

耳聴く会話を拾ったか目聴く入部届けを見たかして事を知ったらしい琉二が隣で背もたれをこちらに向けてがに股座りをしていた。

「成り行きでだけどな……あ、そういやもう今朝の怪我とか跡も残らないな」

「おう、俺だからな。このくらい当たり前だぜ」

「酔っても半殺しを実行するってある意味記憶力すげえよな……」

まさに有言実行。酔ったときの（都合のいい）セリフは覚えているらしい。

「俺じゃなかったら死んでるぜ……」

琉二のスキルはまあ、ベタなことに自分の肉体なんかを回復させるもので、それ以上の芸は無い。

『グロい』というのはそのスキルを^{やゆ}揶揄している、中学の同級生一同の共通認識だ。

「なあ、琉二ってバスケ部だったよな?」

「おー、そうだぜ」

「昨日ってお前部活の日だったか？」

昨日のことが少し気になり聞いてみた。

「いんや、いつもは活動日だったんだけどな。急に休みになったんだぜこれが」

「そうか……わかったわ。サンキュー」

「かまわんぜ」

「ん？　なんか違うな……？」

「そうか？　てかなんだよ？」

何かが違う。一が「忍びねえな」と言わなかった所か、琉二の語尾がずれてる所か。

まあそれは置いていて。

「それで、何部に入んだ？」

「入るといふか入らされたというか……。暗密部だ」

「は？　そんなあったか？　俺は知らんぜ」

……ここに来て急に非公式臭がプンプンしてきた。

「まあ、いいや……どうせこんなもんだ」

「出たよマジメの諦めグセ」

他人と意見で衝突するくらいなら自分から折れて見せるのが一の流儀。

「うーん、直した方が良いのかねえ？」

「俺が知るかよ。つーかあいつらトイレ長くねえ？　まさか大か？」

「さあな。それこそ知るかよ」

心底どうでもいいと思う一だった。

――

一方女子トイレの出入り口から教室に戻る廊下では、瀬奈と風璃が話し込んでいた。

「いやゝしかしセナちゃん最近どうよ？」

「どうよ、って？」

風璃の質問の意図が掴めず、聞き返す瀬奈。

名字と名前が同じ漢字で繋がっているのがやっぱり少し変だな、と最近では考えていたりする。

「ハジメちゃんだより。やっぱり隣同士アレな展開とかラブコメしたりするのかい？」

「しないしない。案外思ってるより普通だって。……あれ？ ルーニーはいいの？」

「あー、じっちゃんのことね。セナちゃん別に気にしてないでしょ」
「あ、そうだね」

何やら今後の琉二の扱いが目に見えかぶような会話だが、二人とも本人がいなければどうでもいいらしい。

「……そういえばふーりんはあの二人とどのぐらいの付き合いなの？」
「？」

「ざっと二年ぐらいだねっと。学校には三年間ずっといたけどっと」
「あれなの？ ふーりんはイチのことどう思ってるの？」

何でこんなことを聞いたのかは自分でも分からない。

ただ、それに風璃が答える前に、

「わっ……危ないなー！」

「あっはっはーごめんねえー。ちよつと足が滑ったわー」

同じクラスの……なんで分かるのかと言えば、いつも女子の大所帯グループの中にこの人がいるから……名前は九段要^{くだんかなめ}……がすれちがいざまに足を引っ掛けてきた。

現代を華やかに生きる女子高生の体捌きとは思えないなかなかの鋭さだったが、こちらも規格外に運動神経だけは一人前。軽やかに体勢を整えて着地。

「セナちゃん大丈夫？」

「全然何ともないけど……なにあれ！？ なかなかの足払いのキレ

……じゃなくて態度！」

すでに数人のメンバーと一緒に行ってしまいこちらの声など聞こえていないが、そっちに向かって「覚えてろよお！」と小物っぽく叫んだ。

第12話 なぜ俺の周囲は物騒に

入部届けを出したその日の放課後。

普通の高校生、真面一はドアを開けた途端、硬直した。
と言うのも、突然訳のわからん命の危機にさらされたからだ。

「……えーと、これはどういうことでしょうか？」

ちゃき——擬音で言えばそんな雰囲気だ。

命令されているわけではないが、両手を挙げて降参もしくは敵対しないの意思を示す。

目の前には先輩らしき男の人がいて、一はなぜか刀でも槍でもなく、何かの食いさしっぽいフォークを喉元に突き付けられている。

自称『顔筋死にかけ』の一でなかったら顔が引きつってるくらいの事件だ。

この状態がしばらく続くのかと思われたが、フォーク魔が口を開いて、ようやく事態が動いた。

「ノックも無しに何故この部屋に侵入する？」

一はその鋭い目から想像したものと全く食い違わない声に動物的なところで身がすくむ。

が、努めて冷静に気を保つ。保つたら保つ。

「いや、まさか明かりのない部屋に誰かいるとは思わなかったんですけど……」

「ならばもし誰かが情事に及んでいた時には見てしまった責任をと

れるのか？」

「はい？ ジョージ？」

思わず素で聞き返してしまう。缶コーヒーが何だってえ？ なんてことを考える雑念を振り払う。

「分からないならいい」

一が答えを導く前に先輩らしき人物は自己完結をして得物^{フオーク}を収めた。

「あー、ここは、暗密部……の部室で良いんですね？」

いまだ妙なネーミングに慣れない。というか慣れたくない。

一の質問に納得したのか、フオークの人は雰囲気^{いどうおさふね}を9割やわらげた。

「そうか、新入部員だったのか。そうだな……確かにここは部室で、自分が三年の副部長の伊東長舟^{いとうおさふね}だ。見ての通りショートケーキを食べている所だ。まあゆっくりしてくれ」

さっきまでは余裕が無く見ることも出来なかった部室を改めて見回してみると、テーブルが一個とイスが数脚。さらに今時っぽくない、つまりエコじゃなさそうな冷蔵庫が一つ、重低音でうなりながら己の存在を主張している。

そして、何より『禁』の文字が書かれた紙を上面に張り付けられた棺桶のような箱――

（……いやいやそこはスルーしよう！ 手に負えないだろアレ）

――があるだけの質素な……ぶっちゃけ北にしか窓の開いていない

せいで陰気な部屋の中、長舟と名乗った先輩はイスに座り直し、おやつを再び食べ始めた。

「えーと、座ってもいいでしょうか？」

「ああ、多分大丈夫だ」

物騒なことに、座ると大丈夫じゃない場合があるらしいぞこの部屋のイスって。

「……ん……やっぱり美味しいな自家製は」

「よいしょっと……」

ショートケーキ（なんと自家製らしい）を食べる男子と、年の割りにジジ臭い掛け声が板についた男子。

手近なイスに座ったはいいいものの、初対面同士で話すネタが見当たらない。しかもこちらは自覚できるほど、あまり話さない性格。向こうはクールというか端整というか、な顔立ちに反して甘いケーキを食っているからこれまた微妙。

といった野となれ山となれ並に適当な雰囲気の中、

「こんにちはっす」

タイミング良くというか、日直だった風璃と勝手な付き添いでくっついてた瀬奈が入ってきた。

「ここが部室かぁ。なんか趣きがヨロシイのね。おっ、ハジメちゃん息災かい？」

部屋に置かれているものから言って、趣きとは何かが決定的に違う

気がする。

夏草やなんたらかんたら夢の跡、といった感じのものは腐るほどあるが。

「もう日直終わったのか。だったら待っても変わらなかったな」

「まあいいじゃん。どうせここに集まるんだし」

「あー、そんなもんか……あれ？ どうしたんですか先輩？」

長舟がなにやら懐疑的なとまではいかないが、怪しむ視線をこちらに投げかけている。

しかしショートケーキを食べながらそのままこちらの疑問はスルー。

パクパクもぐもぐパクパクもぐもぐパクもが……ゴクン。

三人が神妙に見つめる中、非常にマイペースにおやつを食べ終わるとようやくその口が開かれた。

「一応聞いておきたいんだが、お前らこの部活で大丈夫なのか？」

「……え？」

一瞬何を言われたか分からなかった。

「だから、この部活は基本的にある程度こう……な、他を圧倒しないとやっていけないんだが、その所は分かってるか？」

「と言うか……単なる数合わせで入った感じなんですけど」

最低限の5名で部活が存続できるので、部長、副部長、後三人。といった話だったと思う。

部長の犯罪行為についてはそこまで重要ではないと思ったので伏せておく。

「はあ？ おい本当かそれ？ あいつ適當過ぎやしないか？」

「そんなに問題あるんですか？」

「大有り、だな。弱かったら話にならん」

長舟はむすつとした鼻息が出そうなくらいの不満顔で腕を組んでいる。どうやらそこまでの問題らしい。

「つかぬこと聞くが、お前ら喧嘩は大概勝てるか？」

何故そういうことを聞くかは分からないが、三人揃って即答する。

「自分からケンカしません」

「ガチのゲリラ戦なら」

「マップ兵器ですよっと」

……普通な答えがどうしようもなく自分一人だった気がする一。
実は自分も大して答えになっていないのだが。

「ふざけているのか？」

「「「いいえ」」」

ゲリラとかマップとかを真剣に答えたとするなら。

「……仕方ない、一人ずつ詳しく聞くか。まずゲリラ戦とか言った奴。スキルは？」

ゲリラ戦とか言った奴……瀬奈が申し訳程度に手を挙げる。

「えーと、わたし。スキルは無いけど、あんまり負けたことも無い

から多分大丈夫だと思う」

『ホントかよ』とか自分が言ったら多分やられるので思うだけにとどめる。

「本当か？ ……まあ嘘を吐いてもしょうがないな。次、マップ兵器って言った奴」

「はいはい私のターン！ マップ兵器は冗談だけ——」

嘘だッ！！ と一（小心者）は心の中で叫んでみる。

ふざけて答えた風璃に向けられている長舟の目がずっと細くなった。あの目はきつと万能包丁、と思わせるぐらいにキツイオーラが出ている。

「——とりあえず負けたことは無いさ。ほいさ」

「……まあいいでしょう。最後」

「あ、俺か。俺は——」

「ハジメちゃんは自己評価がヘタクソだから私が言うけど、間違い無く近接は強いんだヌーン！」

「はあ？ それは違うだろ——」

色々な意味で遠近のおかしな風璃が根も葉も無い誇張表現を言ってくる。

すぐさま一が否定しようとする、

「まあ、嘘と言うわけでは無さそうだな。なら全員一応大丈夫だな」
納得なさってしまった。

「えっ？ ちょっと待って下さい俺は——」

「まあ普段は適当に過ごしているから各自くつろいでくれ」

ああなるほど。それで自家製ショートケーキ食べてくつろいでい……ではなく、

「俺の発言はなにゆえスルーされるんですか」

律儀にも挙手して質問する。これならば無視以外答えるしかあるまい。

「昨日の今日で副部長が部長と話していないと思ったか？」

ということは……とその時部室の角の方からガコンと何かが外れる音がして全員で振り返る。

見れば天井裏になんか見たことある四角い穴と縄梯子がするすると降りて来た。

「お、部長、お疲れ」

奇遇だな。なんか昨日見たことある光景と似ている。

顔を覗かせたのは、一の予想通りここの部長の鞆連^{ほかる}だった。今日は普通に制服での登場。

降りてくる状況は世に言う眼福なのだが、紳士たる一はスカートの下を見ない。見ないっただけ見ない。

その部長は、

「全員そろつち——ッ、……揃って、いるか」

今日もいきなり囁んでいる。

生活に重大な支障をきたしているんじゃないだろうかと心配になる

一。

「で、どうだったんだ？」

「風紀委員が、いるから、問題、ない」

なんと、鞆連は文節で区切ることで嘸まずに喋られるようだ。

なぜ今までやらなかったのか。しかし齒切れの悪いことこの上ない。

「じゃあ今日はもう自由か。よし、解散だな」

進行がスムーズになるからか、おさふね副部長の方が仕切っている。

部長が全く文句がなさそうな様子からいってもこれで問題ないらしい。何故か穴に戻って行く。紳士たる一は――以下略――

「だから逃げねえってのになんなんだよおまえは」

「万が一にも荷物持ちはキャッチしとかないといけないんだってば」

ぐだぐだな解散の後、なぜか一は「食材が無いから」と言う理由で瀬奈に引きずられ、スーパーにまで引きづられてきた。

ついでに言えば風璃はどっかに行ってしまったようだ（バイトとか言ってた）。

どうやら大量に買い込むから荷物持ちが必要らしい。

「自分で持てよ」

「うわあ、ひどい非道があるよー。か弱い女の子にキロ単位を持たせようとしてるよー」

「ああそうか俺は非道かー。じゃあ非道は非道らしく先に帰っとく

か」

か弱いという誤った表現につっこむことはせず、言葉巧みに逃げを打つ一。

別につっこまないから優しいわけではなく、ただの自己防衛本能の塊だ。

「それとこれとは話がべーつつうっ！」

「何がべーうえっ、たっ、ぶわあああっ!？」

振り返った隙を突かれ、瀬奈の正確なつかみかかりをモロに受けた一はバランスを崩してカート置き場にけたたましい音を立てて激突。主婦の方達に迷惑そうな視線を向けられる。やめてよしてこっち見るなうんたらかんたら。

「何すんだよお前は……めっちゃ恥ずかしい事させんなよ」

海よりも浅く山よりも低い……一の怒りゲージの起伏。ここで怒れないのは人として何か欠けているのだろうか。

「うん、今のは流石に謝る！でも逃げるな！」

妙に潔い。きっぱりと。

「つーか俺じゃなかったらキレるぞ今ので……はぁ」

幸いカートの群れはノーダメージだった。壊したので弁償。とか言われたらと思うとぞっとしない。ぜんぜん面白くねえよははは……（声に出てる）。

そんな危機感を振り切るようにして一はカートを引っ張り出し、食

材の調達に入る。

「さーてっと、まずは野菜と果物だな……ありがちなところでバナナ、リンゴだろ。ニンジン、キャベツにピーマン、玉ねぎとじゃがいも、あとはブロッコリーとか長ネギ……」

「ブロッコリーはやなんだけど!」

「ううっ!？」

瞬間、首、絞めて。

嫌いな野菜を入れてるからという理由で後ろから制服のカラーを引っ張りぶら下がる瀬奈。自然、一人の体重が一の首に引っかかってくる。

なんて事を考えている間にも命のデッドエンドがすぐそこまで接近していた。

徐々に血の少なくなる頭で一は必死に考えをめぐらせ、ついに座り込んで瀬奈をむりやり降ろすことにした。……ああ、行き止まりが一瞬見えた……!

「……っはあー! はあー……殺す気かよオイ」

「ご、ごめん! ついイラッと……」

なんか今日は瀬奈の様子がおかしい。ということぐらいはここまですぐれば分かった。

「なんなんだよ……」

今日二回目の命の危機に瀕した一は努めて冷静に対応。買い物をする。

「とにかく、我慢しろ。簡単なんだよ」

「……は〜い」

その後もいくつか「む〜」とうなることはあったが、手荒なマネをすることは無かった。

そうしてスーパーを周回し、結果的に瀬奈の不満が要所に散りばめられた食材がカゴの中に徐々に詰められていった。

――

朝夕合わせて5日分の食糧えさを補充、その帰り道、

「ねえそのコ、ヒマ？ いまからあそびにいかない？」

「ニモツもちくんはカエッテイーぞ？ てかかえれ」

なぜ突発的にこうなる。なぜセリフが聞き取りづらい。そんなつっこみは脳内だけで収めるが吉。

（あー、中学にこんなやついたーって俺の海馬が告げてる）

目の前に立ちはだかる二人組みは、中学で有名だった……誰だったか、はて？ 忘れた……というか覚えていない。まあ向こうも忘れていたようなのでお互い様だろう。見事に着崩した制服からして、かの悪名高い高校なのは間違いない。

で、一と瀬奈は運悪く、そいつらが熱心に地元を徘徊していた所に鉢合わせたという事になっているのだが、一は今や肩にバッグ、両手にビニール袋をぶら下げて、目の前の状況を見て、

（捨てちゃダメだ捨てちゃダメだ荷物を捨てるのだけはダメだ……なんてな。あーどうしょ）

本気で帰ってしまおうとか考えている。

瀬奈にいいところ見せたいわけじゃないし。いや、瀬奈も避難させるけど。

というか、玉子が！ トマトが！ という心情の方が大きい。情けないことに。

「ア？ なんだそのツラ、ビビってんのか？」

ありきたりな挑発に、元からシケてた闘争心の燃えかすが、じめじめとした臆病風に吹かれて鎮火。

（うん、俺に出来ることはこっから逃げるだけだな）

くるり、右向けえー右っ。ぜんたーい、進めっ。エイ、オー。気持ち的にはそんな感じで、

「おし、逃げるぞ」

瀬奈に合図をする。

名前がばれないように瀬奈、とは言わない。

「テメっ、ナメてんのかコルア！」

すると何やら二人のうち一人の掌によく分らない光が集まりだし、タメを作って一に叩き付けようとしているのが見えた。

しかし辛うじて避けられるぎりぎりまで一はそれを見ていなかった。

というか目が離せなかった。

瀬奈から。正確にはその小さな体軀から繰り出される蹴りから。

「とりゃあっ！」

「あウ——うう……」

天を裂く股間への容赦無い一撃に一人が沈む。もう一人は、

「おお、なかなかヒドイことやってくれんじゃねえの。そんなことされちゃあこつちもだまってらんないなあ。さてどうしようかなあ？」

どうやらこれを先制攻撃されたと認識したらしく、理不尽にも正当防衛を試みようとしているらしい。

しかし、さらに理不尽な存在が今の瀬奈で、そいつが何かを仕掛ける前にズカズカと堂々と正面に立ち、みぞおちに正拳突きを一発。

「うっさい！」

「ばふうっ!？」

あまりにもあっけなく終わってしまった。

文句無しにキケンな行為に一は震え上がる。

「あー多少すっきりした。じゃあ帰ろうよ、イチ」

ゆっくり振り返ったその顔は、よくわからんがさっぱりした笑顔だった。

「……おまえストレス溜まってたのかよ」

「まあね」

「じゃあさっきの首絞めは……」

「ゴメン、ちょっとね……」

まあ、普段やらかしてくれなければ一としては何でもいいのだが。
というかおとなしかったらもったいい印象を持てると思うのに、

「それにしても……強いなーおまえ」

「そーいや、これぐらいならあの部活に入っても大丈夫だと思う？」

中身はこんなんだ。やってられない。

これで無理ならあの先輩方はどれだけ強いのかと思う。

「いや……そんなこと言われると俺の方が自信無くすんだけど」

「そう？」

「それにおまえ……」

「？」

言いかけて、やっぱりやめる。

「いや、それでよくもあのパワーが出せるな、と」

その瞬間、瀬奈がさらに『笑顔』になったのを一は見た。なぜここ
で。と思った瞬間、

「ふふふははーだれが小さい小さい小さいって！？　どうやら小
さすぎて日の光にも焼けないらしいけど何か文句があるー！？」

「ああそれで肌が白……ってちょっと待て！　俺は……荷物持ちだ。だ
からな、せめて帰るまで待て……そうだ、落ち着け……いいぞ」

ああ、失策。

「うううううううううー」とうなる瀬奈をなだめ、なんとか家に帰ることに成功した。

案の定、命綱の食料を置いた瞬間に殺されかけたが。

第13話 器物損壊な二人組

なぜか知らないがどうも最近の瀬奈の様子がおかしい。
ずっとしかめっ面。

たまに八つ当たり（もちろん一に対して）。

質問には答えるが会話がなくなれば右手で机に16ビートのリズムを刻み込んでいる。

休み時間こそ風璃とトークしているがそうでもなければカタカタカタカタカタ……。

「なんなんだ……？」

あえてわかりもしない逆鱗に触れるほど自分は愚かではない（と思っている）ので、一はそれをただ静観するだけだった。

――
昼休みになり飯を食うか。とお昼の相棒、弁当を取り出すとついに事件が起きた。

「あつ。ごめえ〜ん。わざとじゃないんだ〜」

「わざとじゃないい！？ どうみても狙ってたでしょ！！」

隣の席だったので状況はすぐに知ることが出来た。

確か右側の方の座席（一は左から2番目）にいつも昼間たむろしている女子の一人だ。名前までは思い出せなかった。

その女子があらうことかカロリーオン（オフの反対だ！）の炭酸ジュースを引っ掛けたのだ。

誰が見ても分かるように瀬奈に向けて。

しかし瀬奈も然る者。最初からそいつを警戒していたのか、鞆を持って瞬時に自らの身を躍らせてかわしたのだった。

そのお陰で炭酸は机の上と椅子と床にだけかかり、私物の被害はゼ口に収まった。

が、瀬奈は何かプツツンの限界だったのか、狂暴さをあらわにその女子に食ってかかる。

「狙ってないって。渡辺さんの机でご飯しようと思ってたまま通りかかっただけなんだもん。ね」

「う、うん……」

瀬奈の後ろ、渡辺さんとやらがこちらを遠慮がちにうかがいながら控え目な返事をする。

「その返事とかぜったいあやしいって！ そんなにあんたに嫌なことしたわたし！？ こないだも足ひっかけてきたし！」

「……あんまり疑ってるそこちだって怒るよ？ わざとじゃないって言ってるし謝ってるんだからもうおしまい。でしょ？」

「さっきのアレでホントに謝ってんの！？ 誠意が足りないでしょどう考えても！ もう一回謝れ！」

「はあ…、仕方ないな～ハイハイこれでいいでしょ？」

そいつは「スイマセンデシタ～」と明らかに真剣さの欠片もない言葉と、顔が見えなくなるくらいに角度をつけたお辞儀。

しかし上げた顔は舌をベロンと出していた。まさに舐めてる。のか？

「……ッ！ アンタあ！」

瀬奈は安くもその挑発に乗ってしまい、持ち物を安全な場所に放り出して「くおんのおおおおお！！」と跳びかかる。

しかし、

「あ、ごめんねえー」

クラスメートは ひらりとみをかわした！

せなは いきおいあまって つくえに ぶつかった！ 38のダメージ！

（ああ……俺の机がダメージを……）

ちなみに一自身はスキルによる反射神経で相棒^{べんどう}を引っ込めながら離脱済み。

瀬奈をかばう？ まさか。しがない飯炊きにそこまで要求されても。

「よけるなこのお！」

「あ、元気そうだねえ。よかったよかった——ってちよっと」

「うらあああ！」

今度こそとらえた——と思った刹那、何やら合気道とか太極拳みたいな、受け流すような手捌き足捌きであつと言う間に瀬奈は組伏せられていた。

「おーすげえ。なんかのアクションもの並みなんじゃねえの？」

ハイレベルな闘いに思わずコメントする一。

一方、馬乗りにされている瀬奈はじたばたするが上に乗った女子はびくともしない。が、

「えーと……野生児？」

「だ、れ、が、野生児だつてえええッ！」

「え？ うわわっ！！」

度重なるいやがらせ&悪口の果てにリミッターを振り切った瀬奈の本領。

完全に伏せられた姿勢から力技で挽・回！ して女子をはねのけた。ちなみにその女子は身長がかなり高く、パツと見で180弱は確実だ。さらに染めたと思しき茶髪からアンテナ（アホ毛とも言う）が伸びて弧を描きピシツと上を向いている。

瀬奈との身長差約40センチ。

「フーツ、フーツ！」

「えっ…と、ゴメンネ？」

全身の毛というかオーラというか、あるいは湯気かもしれない、それらしき何かが逆立って一人の女の子どころかクラス全体を威嚇^{いかく}、ビビらせている。

そしてさっきまでの有利不利をも吹き飛ばし、形勢逆転。

「シャー！！」

「え？ 聞こえてない！？」

瀬奈はもはや人語を解する耳を持たないただの獣。そのまま襲いかかる――直前に、

「いい加減にしてくれ。なんかもう……いいや」

一は瀬奈の後ろにこっそり回りこんでその首に手をかざした。すると瀬奈の目が閉じられ、ふにやりとくずおれる。

（もう少しおとなしくしてくれれば周りに人が寄ってくると思うんだけど……こんな凶暴じゃ誰も寄ってこねえぞ）

とか心配するあたり後で保護者とか言われそうでいやだなあ、と思うー。

「……っはあゝ、食われるかと思ったあゝ」

こっちもくずおれる。

それを合図に、『なんだもう終わったのか』と回りの視線が薄情にも次々と外されていく。

「そーいやなんて名前だっけ？」

床に座っててもでかいと感じさせられる身長に向かって問いかける。

「あーありがとねーイチくん。私はねー、九段要^{くだんかなめ}って言うの」

「イチくんって……」

どうにも自分に正式名称の『ハジメ』で呼びかけてくれる人が少ない気がする。

「あれ？ そこのちっこいのにそう呼ばれてなかった？」

ちっこいのとはまた大胆な物言いだ。

「いや、まあそうだけど。それよりなんで嫌がらせみたいなことしてんだよ？ ここまで大事^{おおいで}にするほどなのか？」

「いや、えーと、それがー、あのね、ただほら、あれよ……」

実際に吸ったことはないが、タバコの禁断症状のようなイラつきを覚えさせるほどの無駄な単語がしばらく並んだ後、

「……なんつーかね、ちょっかい出したくなった？」

「はあ？」

意味が分からない。意味不明。意味不、イミフ。

……どうでもいいか。

「ほら、分からない？　なんかさー何となく。って答える子供の気持ち」

「『どうしてコイツをいじめる？』という教師に対してそういうこと言うよな」

……言うよね。

「……ぐっさりと暗にウチがいじめてると言いますか」

「違うのか？」

「だーかーらー、ちょっと……なんか誰も話したことが無いから話しかけようと思って、ねえ？」

「いや、何が『ねえ？』なのか分からないから」

そこからどうして足引っかけたりジュースこぼすに発展するのか全くもって分からない。

「……よし、ま、とにかく話しかけたかっただけだから！」

「オイ」

そんなんでいいのか九段要。

「で、どうしよう？」

「何で俺に聞くのか分からんけど……まずどの道こぼしたのは九段なんだから拭いてやれ。俺は瀬奈を起こす。そのあとでゆっくり話すなりなんなり」

あとは知らない、と一は言葉には出さずに伝える。

「うゝん気が乗らないなゝ」

「何なんだよお前……」

やることが決まり、各々の行動を開始する。

早速一は瀬奈の近くにしゃがんで手を当てる。

「ほい、起きろ瀬奈」

普通なら自力ですでに起きているところを瀬奈はぼっちり寝ていた。どうやら一のスキルが効きやすい体質らしい。よくわからんが。

「んあ、あれ……？ わたし何でこんなところで寝てたの？」

「九段にキレてるところを落ちてもらった」

「あ！ そうだあのかけ算九九のやつ！」

一に意識を落とされた事は考えていないらしい。僥倖僥倖。とってもラッキー

「そうそうその掛け算だけだな、ちょうどいいから友達にでもしてやれ」

「は？　なんでそんなことしなきゃいけないの。しかもよりによって一番きらいっぱいやつに」

『おまえが友達居なさ過ぎるんじゃないやボケェ!』と言うわけなど微塵ぐらいにはある。かなりの差し引きの結果だが。

「俺が室内のケンカの仲裁をさせられるんだよ」

それも嘘ではない。

どうにも最近瀬奈が怒り出すと回りから『一がどうにかしろ』的な念波を感じたりするのだ。

「とにかく、話し合いで解決してくれ」

「お節介じゃないのそれって」

「じゃあ何かを壊すのをやめれ」

入学してから一ヶ月が経とうと言うこの頃。いつしか一は補欠係にかこつけられて色々なことをやらされていた。

欠席の生徒の係を代わりにやるのもそうだが、身長がどうのこうのとかな、また『柳瀬さんってちいさくてかわいいよね』と頑張ってアプローチを試みたりする男子に対して異様に沸点の低い瀬奈をどうにかしてなだめてくれる。という治安維持部隊的なことをやっているのが原因としては大きい。

まあ厄介払いなわけだ。不本意ながら。

今回もそうだ。『あの』一がいるんならどうにかするんだろうとクラスメート様達は勝手に決めつけてあとは知らんぷり。その中には友人もきちんとしているが、みんな空気が読めちゃうナイスガイ達。右へならえを貫いている。

「そんなことより、昼ごはん食べなきゃ。なんだかんだで時間が」

「あー、購買もう売り切れてるだろ。前に琉二が『5分の遅れくらい余裕だぜ!』って行ったときはパンの耳だけもらって帰ってきた

し」

ちなみに今は昼休みが始まって10分。購買はもう祭りのあとだろう。国敗れて山河あり、だ。

「うっそ……どーしよ。さすがにそれじゃあ起きてらんないよ」

「回りの弁当組に少しずつ分けてもらえ。一人分ぐらいにはなるだろう」

そういつて一は自分の弁当箱の蓋を裏返して皿がわりにしろと瀬奈に渡す。

「え〜〜こじきじゃんそれって」

それでも背に腹は替えられないのには違いなく、一に「こじきでも生きる方がマシだろ」と言われ、渋々みんなにおねだりをして回った。

瀬奈に頼み込むように話しかけられた女子は意外そうな顔をしたが快く応じ、ついでに「瀬奈ちゃんカワイ〜」とかなんとか頭をなでられたりしていた。

瀬奈的には小さいと言われなければ後はなんでも良いらしく、本人はまんざらでもなさそうにいいようにされていた。

「成程、瀬奈は（小）動物キャラで行けば受け入れてもらえるのか……しかし凶暴なときは誰も近づかないしな……」

そこに掃除を終えた要もいつの間にか合流、「お詫びに一緒しよ？」と瀬奈を誘って自分はコンビニ弁当を取り出す。

瀬奈もすっかり毒気を抜かれていたのでOKを出したようだ。要の席に寄って一緒に食べ始めた。ついでに誰かから割り箸をもらえた

らしく、驚くほど何の問題も無く食事と会話を楽しんでいた。
女子ってそういうものなのだろうかと一般ピーポー代表、真面一は
それを見ていた。
すると突然横から声が降ってきた。

「おうマジメ。見よ！ 刮目せよ！ 俺はゲットしたぜ！ 何かっ
て？ もちろんクアドラプルバーガーだぜ！」

購買に一足先に行っていた琉二が帰ってきた。4重に肉が重ねられ
た戦利品ハンバーガーを携えて。

「よく崩れないよなそれ……。まあ、食べるか」

ダブルでも真ん中のパンがはみ出たりするのによくもまあ。

「あれ？ 風璃は？」

「俺は知らんぜ？ 途中までは見掛けたんだがなあ」

「はーん……ま、風璃だし大丈夫だよなあ……つと、おお……」

「本人の前でそれ言ってみるといいぜ。きっと笑顔であの世まで飛
ばしてくれるぜ」

激しく同意はする。だが今は無理だ。

その時、琉二の後ろの正面から噂の人物の声がした。

「いつでも私が笑顔でいるのはねえ〜」

赤ずきんを諭すような口調でしゃべり出した声はもちろん、風璃。
一の中では目下最強のスキルを使う天災。

「それはそれは楽しいことがいっぱいあるからねえ〜♪」

「校則には食べ物を持って飛び降りてはいけないとは無いよなあ無いですね！　ハイサヨウナラ~~~~~」

それはもう、一が驚きのあまり目で追うのがやっとの速度で琉二は後ろを振り向きもせず、窓を開け、ためらいも無く4階の高さから飛び降りた。

ドシンという音の後、「あああ俺の四重の極みがああああああ~~~~~」……とにかくおじゃんになったようだ。

あと、琉二の身については、バカだからとかいう理由ではなく心配していない。だってそういうスキルだし。それより、

「『瀬奈』。おまえってなんつーか、イタズラするために生まれたようなことするな」

後ろにいたのは風璃ではなく瀬奈で、風璃の声を使って琉二にささやいていたのだった。

正直、一も見ていなければ分からなかった。

「アレくらいのことは昼飯前だね」

「セナっち凄い特技持ってんだね」

「どーよ」

誇らしげに腕を組む瀬奈。だがしかし、

「でもウチの方がきつと凄いもんね」

「……どーゆーことかな」

……あれ？　と一が首をかしげているうちに、

「さっきだって油断しなけりや多分ウチの勝ちだったかもよ？」

「いや、わたしだね。もう圧倒的に」

「ウチだって」

「わたし」

「ウチ」

「わたし」

「ウチ」

わたしウチわたしうちわたしわうわう……

「「勝負だっ！」」

「うそお……」

何がどうしてこうなったか知らないが、妙なライバル関係になってしまったようだ。ディレクターがいるならさっさと止めてくれ。

もちろんその後、一はケンカを止めるために奔走することになったし、戻ってきた琉二は風璃におびえていたし、その風璃はいつの間にか戻ってきて「おお私のいない間にかような灼熱ファイトが！」などどアツくなっていたし、瀬奈と要はさらに渦を拡大しているし。心なしか、二人とも楽しそうには見えるのだが、

「せめて人様の机に当たらないようにやってくれよ……」

余波をこっちに向けるのはやめてほしい。

第14話 話を聞いてないといらん事やらされる

四月の最後の日、というのは少しおかしいが、まあ学校に来るのは四月では今日が最後。

真面一は陽当たりのいい自分の席――後ろから二番、窓から二番で居眠り……もとい日光浴を頑張っていた。何を頑張っているのかといえど現実逃避に努めていることを、だが。

「みなさんに残念なお知らせがあります……」

ざわざわ……。

（森のがんこ……まだやってたっけ？）

一人だけ馬鹿な事を考える一。

「6月に入る前に中間テストがあります」

ざわついていたクラス中のテンションがたちまちマイナスのそれに^{へんぼう}変貌した。当然そのことに不満を飛ばすクラスメイトもいるが、担任である敷石はそのような事では動じない。

ただ一はそんな状況まで把握するつもりはなく、マンガのワンシーンのように窓の外を眺めている。あー、今日の雲は……全然ないな。

「そして、その直後には体育祭が行われます」

おお。

誰が、というものでもない声が上がる。一応男子の声だとわかる。女子は女子で「うっわー日焼けしちゃうよ」「しかも土日連続だし。

かったるー」「振替休日があるでしょうが……」なんて言っていたりする。

「例年準備期間が足りなくなるのでいつも一ヶ月は前に告知することになっているので今言っておきます。それでこの時間はそれに就いて色々決定してもらうことになっています」

ちなみに今の時間はロングホームルーム。

「それでは実行委員に出てもらいましょう」

(あー、紫外線が降り注いでる……ビタミンD……)

頑張らずとも現実逃避は見事に完璧な一だった。

――

ぼんやりと一が解脱している中で話し合いが進んでいく。

「はいはい！ その種目は柳瀬さんが適任だと思いますーす」

なんだとう、と立ち上がったのはもちろん瀬奈。

一体誰がそんな迷惑なセリフを、と見ればやはり言ったのは要だった。

今は個人戦――どうやらサシで戦う異種格闘技戦みたいなものらしい――をやるのは誰か、という物騒な話題になっていて誰も志願の拳手をできない状況だった。

「何で私がそんなに出ないといけないのか分かんないんだけど！」
「えーだって柳瀬さんあんな馬鹿力持ってるんでしょ？ だったら

きつと勝てるよー。ねえ？」

要が回りに同意を求めると、仲間の女子が「大丈夫だって」「やっちゃいなよー」などと次々に賛成の発言をかます。自分が出なければ意外とみんな誰でも良いのだ。薄情にも。

ちなみに男女別々に枠があって、この場合男子がふがないとかいうことではない。

瀬奈的にはなんとしてもやりたくない。というかむしろこの身長格差の化身（180オーバー）にものを言ってやりたかった。

「私なんかより『なめちゃん』の方が強いと思うなあ。なんか合気道っぽいことやってるっぽいし」

「そんなことない……ってなめちゃん？ まさかウチ？」

「そーそー。『かなめ』の『なめ』を取ってそんな感じ」

ネーミングセンス、零。を突破してマイナス。いやそれどころか虚数。

「何かそこはかとなく侮辱を感じるんですけど……！？」

「たけ、こ、まわす、くじ。さあこれらの前には何が入る？」

「なんだか人生で最高の理不尽なマジギレを感じるなく！？」

瀬奈が柄にもなく舌戦でリードしているからか、要はこめかみだか額だかをひくつかせて、右手を何か得物を掴むような仕草でわきわきさせる。

陰悪な雰囲気は二人と間の席を包み込んでいくかと思われたところで、

「しゃああないなー。あっしがなんとか出てやんぜー。感謝しんさいよお二人さんバイベ！」

風璃が立ち上がり、出場宣言なさった。

「え？ ふーりんいいの？」

「もーまんたい。このくらいどってこと無いさ！」

おおお、と風璃は回りから勇者を見る目で見られた。

この場合の勇者はなんだか普通の意味に取られることはあまりない。

「あーあ、立候補じゃ仕方ないか。じゃあペア戦は？ 似たようなもんだよね？」

「だから私は出ないって。なめちゃんこそ出なっ」

「もうなめちゃん決定！」

「文句ある？」

「めっちゃあるんですけど！？」

風璃の頑張りも虚しく再びKYくだわなせ闘争勃発か！？ と誰もがそう思った所で（もはや実行委員など役に立っておらずただ傍に立つのみという所で）、

「あまり揉めると先生が勝手に決めますよ？」

ぐっ……と押し黙る二人。そりゃあ二人ともやりたくはないのは同じだ。

「まだ男子の個人戦も決まっていないますから……ああ、やっぱりここは男女別々に話し合った方がいいみたいです。でもペア戦は男女混合もアリだからその辺はよく話し合って下さいねー」

「ドいことをよお」

「まあそういうわずに……」

「ご褒美の1つは冷蔵庫だからさ。クラスの衛生と快適さの為だと思ってる」

「あーもう……！ わーったよ」

「さっすが。じゃあ次はペア戦だな。これは向こうが柳瀬さんか九段さんになる可能性が濃厚だな……あ、もちろん男女混合狙いでな」
「オレあの二人見た目は文句ないんだけど、さっきみたいに性格がな」

「ばーか。オマエじゃカンブリアと地球滅亡ぐらいの時間差だ」

「それは言い過ぎだろ。時間差とかよく分かんねえし」

「ていうかよく考えるとあの二人と張り合える男子って……」

「……………」

「いねえ」

「いや、一人だけ……」

「……真面だな」

「ん？ 俺がどうかしたか？」

「「「「いんや、なんでも」」」」

女子サイド、ただし激論中の二人を除いて他は勝手な話で盛り上がっている。

「ほーらふたーりとも落ち着いてマターリマターリ。ひとやすみひとやすみ」

「……人のチャクラ（眉間）をつつかないでよふーりん」

「やっぱりここはせなっちで良いと思うんだけど？ ウチは」

「だれかなー『せなっち』って？」

「さあ？ オヤジっちの進化前じゃん？」

「はあ？ 　いつの話それ？ 　つーかまあ要するになめちゃんがやっちゃえばいいんだよね？」

「ちよいちよいチョコキチョコキとお、話割ってゴメンチェフ。二人と一緒にゴイングアウワアウェイすんのはどうよ？」

「ゴメン、しゃべり方と話の内容が全然わかんない。それにありえないからウチとせなっちの組み合わせは」

「そーだよそれは絶対にないってふーりん……ん？ 　なんか男子の方は決まったみたい」

「おお……見ただけでハジメちゃんが選ばれし者だと分かってしまふこの目が恐ろしいわ……！ 　男子よそれがファイナルアンサーかい！？」

「へえ……ならウチはやってあげてもいいかなあ？ 　せなっちはどうするう？」

「……私は――」

――

不意に一は名前を呼ばれたような気がして黒板の方を向いた。

「えーと、真面君、それで良いですね？」

「りょーかい、父さん」

……意識が半分しかない状態で応えた上での発言だ。

「……えーと」

――今コイツなんつった？ 　父さん？

クラスの雰囲気という雰囲気が固まった。
最初に声を上げたのは瀬奈。

「……イチ、頭大丈夫？」

「あー瀬奈かー、なんか今までに無いくらいぼけーっとしてたわで、何？」

どうやら一の頭は頭の回転が本格的に落ち目のようだ。

「マジメ……お前今担任に向かって父さんとか言ったぞ」

「マジで？ あーなんか恥ずかしいな」

実際神経をコントロールしていなかったら顔から火が出ているかもしれないくらいに恥ずかしい。

高校生にもなってファザコン疑惑など造りたくない。

「えーと、なんかすいません、あと聞いてなかったので最初から教えていただけないでしょうか？」

無意識とはいえ軽く性別詐称疑惑を向けてしまった相手に謝りつつ、状況を把握することにする。

「いいえ、教師として色々傷つけられたことには目をつむりましょう」

『目をつむっても口には出すのですね！』とは言わない。だって言ったところでいみ「あなたには体育祭でペア戦に出てもらおう事になりましたから」……は？ はあ？ はあああ？

一は顔には出さず驚く。

しかし何でもいいか、とすぐに興味を無くした。

「……まさか最初から聞いていなかったからそこから説明しろと言

うんですか？」

半ばキレルんじゃないかという雰囲気醸し出す担任の心境にビビった一はふざけるのも大概にしろと己の精神に鞭を打つ。

「いや、いいです。それよりペア戦って事は相方がいるんですよ？」

「ああ、相方は柳瀬さんね」

「そうなんですか？」

「まあ、そうですね」

「はあ……」

一が特に何も言わない所を見てそれを肯定と受け取ったらしく、担任は早々と切り上げた。

そして一は左隣の席の主を見やる。

「……おまえそういうの参加する主義なのか？」

「……じゃんけん」

「……ああ、なるほど」

ぼそりと言われた。

なぜかにらみつけられている。なぜだ。

おそらく負けてしまったのだろうと想像する一。

現実的にそれくらいしかないだろうと思って、ほとんど確定視しているのだが。

「まあ……頑張ろうな」

「……あんたバカあ？」

「……………」

なぜだ。

「ハジメちゃんよ。今のお主ではセナちゃんには勝てんぞよ」

「なんだそれは」

「つまり全面的な修行が必要——」 「ねえから」

まったく、いつもながらコイツの言動は意味が分からない。

「折角ハジメちゃんにフォースを身に付けてもらおうと思ったのに」
「そんなのいらないから」

なんで光の剣をブォオンと振り回すような存在にならねばならんの
だろうか。どうせならオビワンがいい、とはまた別の話。

「つーか体育祭で何で戦うんだよ」

「そうしなきゃあつまないんじゃない？」

「それより生徒の安全はどうなんだよ……」

「さあ？ 保健の先生が優秀なんじゃない？」

「優秀って……」

なんかのスキルでも持っているのだろうか。その辺は想像の域を出
ない。

というか最近分らないことが多すぎる。

「それはともかく私もぶっちるからヨロシクう！」

「ぶっちる？」

「ゴメンそれテキトーに言った。とにかくあっしは個人戦に出るか
ら」

「あー、そういうこと。……おまえが出るってなんか鬼だな」

瀬奈も強いが風璃は規格外だ。規格外。
一如きには未だに勝てる手段が見つからない。

「鬼だ鬼畜だ言われても今更あたしゃあ一向に構わんけどよさ、それよりもハジメちゃんは自分のことを考えちゃあどうだい？」

「うーん、なんとかなるだろ」

「おー、楽天家だねえ」

むしろ諦めているのだが。

「おいお前ら」

「おお琉二。そんなに縮こまってどうした？」

琉二がそのでかい体躯を伏せて机にぴったり張り付けていた。

琉二の席は一と風璃の間にある机だったので特に首を動かす必要は無かった。

「お前らに気をつかって低姿勢を貫く俺様に対してそれか？ その態度か？」

「それが？」

「おうっ……なんかグサツとくる毒を吐かれた気分だぜ……マジメ、なんたるサドだ……じゃねえ！ 貴様ら許さんぜ！」

『それが？』の一言でよくここまで傷付くものだと思心せずにはいられない。

「私なんも言っていないけどさ？」

「うっ、そうだったぜ……」

「それで琉二は何に出るんだ？」

「俺はお前らみたいな人外コンテストには出ねえからな。普通の競

技だけだぜ」

「あっそう」

めんどくさそうに一は息を吐いた。

第14話 話を聞いてないいらん事やらされる(後書き)

……内容薄っ！(一人つつこみ

第15話 コイツにだけは勝てない

ゴールデンウィーク初日。自分の部屋のお古のベッドに寝転がりながら、真面一は近くの本屋で買った本（あえて言っておけばマジメな本）を上にかざしながら読んでいるが、意識では別の事を考えていた。

大学生、俺は違う、俺は高校生、高校生はバイトができる、休日、今は五月最初の休みでしかも大型連休……確か四月前に電話がかかってきて――

『ハイ中卒おめでとうー。晴れてバイト出来るようになったから来ること。べ、別に一緒に居たいんじゃないからね！ どう今のツンデレ？ 萌える？ それともお兄ちゃ――』

指で受話器の置き場所にあるボタンをポチっとな。相変わらずの調子に思わず切ってしまったのは中卒の解放感溢れる春休み――

「うああああああ……思い出したくねえ、もう聞きたくねえ……」

あまりの苦悩にゴロゴロ転がる一。

この電話の相手の趣味が実は相当ヤバいことに気付いたのは忘れもしない、小学校を卒業してからしばらく経ったあの日。

何より琉二にまでこちらの人格を疑われないと気付けなかった自分

に腹が立つ。

「……あー、何でも直前になって思い出すんだっ、とっ」

軽くベッドからジャンプ。

先程朝の給仕をしたところなのであいつは起きているのだろう、ならばと一は隣の部屋に向かった。

――
瀬奈の部屋のリビングで一はバイトのことを話した。

「休日バイト？ 何それオイシイの？」

「おいしくは……ないかもな。一応の時給なんて最低賃金ストレスだし」

ほとんど小遣いの稼ぎだ。そこは一にとって本題ではないのでどうでもいいのだが。

「それで？」

「ああ、それで昼は俺居ないんだけどおまえ昼飯はどうするんだ？」

一応、金の全く要らない上に味もそれなりなプランが一つあるのだが、それはなんとなく嫌だ。

「……どうしよう？ 毎回インスタントはやなんだけど」

「別に俺はどうしろとは言わないからな。大家の激辛――」

「それはずえええ――ったいダメ！！ もうやだ！ ありえないから！」

ペケマークを全面的に押し出されてしまった。あわやフライングクロスチョップの勢いで。

どうやら一は瀬奈に要らんトラウマを植え付ける事に成功してしまったようだ。

まあそれはそれでこちらには瀬奈（のリベンジという名の制裁）に対する警戒心が芽生えたが。

そろそろ首のレントゲンを取ってもいいかもしれない。何かしら奇怪なものが写っているはずだ。

「じゃあファミレス行ってこい」

「そんなぜーたくは出来ない。一食1000円ができるぐらいの仕送りはあるけどそれじゃ他の物に回せないし」

それは家計簿スキルを修めた一からすれば意外と余裕だと思える。

「じゃあマックはどうだ？」

こっちは東京だからマクドなるものは存在しない。

「そもそも外食なんてみんなで行くのが楽しいのにいつも一人でさみしい食事なんて行けない」

その言い訳は微妙だと思ったが時間の無駄なので追及はしない。てか自分で言ってるんだが言い訳ってどういう事だよ。

「じゃあどうすんだ？ この際だ、調理実習でもするのか？」

思い切って瀬奈の下手さを^{やめ}耶喻したのを分かってないのかあえて無視したのか、瀬奈がそこに触れることはなかった。

「私だっけどうにかするくらいは出来るけど……ん？ ……そういやイチはどこで食べるの？」

「（あー、まずったな……）どこって……そりゃあ」

思わず精神的に懐への侵入を許してしまい不覚ったと心中で舌打ち百叩き。

「そうだよ……私には適当なところで済ませようとして自分はどこで食べるの？ まさか一人だけうまい汁をすすりつつ陰でいたいけな少女を笑っているとか……そこんどこーなの。ねえ？」

「……別にそんなつもりは無いんだけどな」

『いたいけって何だ？ お前みたいなやつを言うのか？ ハッハア！ こいつぁ滅多にねえお笑いだぜ！』という無茶苦茶な突っ込みがふつと浮かんだが人格の破綻などの角度から判断して無しにした。さすがに。

「じゃあ何でさ。説明してよ」

「そりゃあ……お前休日ぐらい一人で過ごしたくないのか？」

毎日こんな何の変哲もない顔を見てもしょうがないだろう。……自分で思っただけ虚しい事この上ない。

「全然。むしろ誰かといった方が अच्छ 楽しいし」

「ああそうかい」

まあ、独りで何かするタイプではないと思ってはいたが。

「ん？ 待ってよ……ははーん」

「……何だよ」

(雰囲気) 気持ち悪い、とか身も蓋もない事を思うが言葉には表さない。表情にも出ない。

「へへへっそっかそっか。アレか、一緒に女の子と出歩くのは照れるんだ？」

「……はあ」

おぼちゃんの戦場と名高い(?) タイムセールに参加できるほどに高校男子として恥を捨てている自分に照れで外を歩けなくなる羞恥心は既にある。だって安いんだもの。

「あれ？ 外れ？ いい線いってると思ったんだけどな」

一の呆れたような反応を否定と受け取ったのか、瀬奈は再び考え出した。

「おまえがわざわざ俺みたいなのと毎日つるむことは無いと思うんだが」

「だってふーりんバイトでいそがしいって言うし他の子とはまだそこまで親しくないし」

『九段は?』と聞いたら多分地雷が炸裂、この身は火に包まれるのだろう、ぐらいのことはわかる。

しかしここまで当てが無いと分かった以上、放っておくわけにも行かない状況になってしまった。

「……まあいいか。来たいなら来れば良いし。ある意味向こうにとっても新鮮だろうし」

「あれりゃ? てことはオッケー?」

これ以上話をこじらせたくない一心で進んで譲歩する一。基本的にぶつかるより折れる主義なのだ。

「一応な。あんまり構ってやれないからそこんところはよろしく」

「で、どんなバイト？」

「……ガキのお守りだな」

嘘ではない。ハズ。いや、ホントか。

「なんか……イチって普通に見えて普通じゃないね。今度は保夫かって感じで」

「はいはいよく言われるよ」

瀬奈に対して『じゃあお前は異常、いや異端体質か』なんて言っても時間の無駄なのは目に見えてるのでやはり止めておき、実際とは異なるフィクションで適当に濁した。

――――
結局、オプションと名高い瀬奈がついて来てしまうことになった。

「えっ、何ここ……」

「あーなんかますます古くなって……風化したか？」

瀬奈は哑然、一は淡々。

一と瀬奈の一行は廃園になった幼稚園か保育園を無理矢理改築したような（実際お下がりの設備だが）、なんというか見た目は普通なのに廃れた雰囲気ばかり漂う施設の開けた運動場にいた。

砂利が風で飛んだのか、ハゲた所が目立ち、後ろの瀬奈はなんだか

戦々恐々としている。

もちろん今から『私めに義務教育は早すぎましたので基礎からきっちりかつちりやりに来ましたあ!』と年少組をやり直すわけではない。

場所は真実それのお下がりだが、ここはそれとは別物だ。

「な、何この子どもっばさと現実の厳しさをブレンドしたミステリックな場所は」

改めて瀬奈を見ると、やはりここをお化け屋敷か何かと勘違いしたようにで辺りをきよろきよろ、おどおどしている。

「それ言うならミステリアスな。あゝ、やっぱり小さく感じるな」

数年振りに訪れた景色に時間の流れを感じる。ランドセルを背負うような年頃にここにお世話になっていたなーと懐かしんでいると、そこに魔女と因果関係が深いとされる象徴、黒猫が二人の前に現れた。

「え? なにこの不吉の王道は……」

「いや、違うけどコイツはまさか……」

そいつは不幸の使者でも何でもなく、

「まさか、お前はヤマトか……?」

ヤマトと呼ばれた黒猫は「にゃー」とベタな声で鳴き、一にすり寄ってきた。

決して不幸をなすり付けられているわけではない。そんなのは独断とプライドと偏見だと一は信じている。……独断もプライドもこの

場合おかしいだろう。合っているのは偏見だけか。

一も（柄にも無く）黒猫に応えるように喉をくすぐったり頭の毛を揃えるように撫でたりしていると、黒猫は何を思ったか頭に飛び乗ってきた。

幸か不幸か、最近首が鍛えられてきた一にとってその程度の重石おもしは何でもなかった。

ただ、頭に乗った黒い毛玉のせいで絶賛アフロ増大中なものには考えが及んでいない。

うーん、なごむ。しかしそれが顔に出ないのが悔やまれる。

ふと、頭にくる重みが、昔感じたものより軽いことに気づく。

「あれ？ ヤマトじゃないのか？ 小さくなりすぎた気がする……」
「イチが猫になつかれてる……なんか違う。なんか違うよみなさん」

瀬奈は何か信じられないものでも見たのだろう。目の前の一が存在を他所に、しばらく「なんか違う」を連呼し続けた。さらに連呼するたびに一歩ずつじりじりとこちらから距離を置いてくという丁寧さ。

「失礼な。そんなに言うならおまえも撫でてみるか？」
「いいの？ じゃあちよつと……」

ビクッと反応したのは、アフロ。

「フシャアアアア！」
「いだだだだっ！ ……あービククリした」

油断していたせいで規格外の声飛び出したのは、一。
明らかに原因は瀬奈なのに、ヤマト（偽？）のやつが爪を立てたせ

いで一がダメージを受けた。男の命、頭皮に……頭皮に！
そのままヤマトっぽい猫は一の頭を飛び降り、園を囲っている草むらからどこかへ消えてしまった。

「……やっぱり私はネコに嫌われてるんだ……」

なんだかがっかりなさる瀬奈がちょっと面白かった。

「何だったんだ、……で、あの電話をくれやがったオタツキーな奴はどこだ？ ……って」

噂をすればというか、言ったそばから背後にただならぬ気配がした。しかしその気配は嫌々々々々な懐かしさを内包していた。

「お帰りなさいませご主人様。……なんちゃってー♪」

この人にはここで世話になったがその性癖はもう通用しない。

この言動は小学生には毒な電波が強すぎたと気付いてから一は中学時代を密かに負の感情を募らせ過ぎ、ついに呪いを完成……させたわけではない。

単にいつか機会があればこれ以上の被害を減らしていかなければ、と思ったただけだ。

「その小学校のPTAに喧嘩売ってるセリフ回しは止……め……ろ」

言いながら瀬奈と同時に入り口を振り返り、絶句。二の句が次げない。絶句。二の句が次げない……そして時は止まる。もちろん嘘。

「あは☆ どうコレ？ 完全自主製作よ。あ、口調が戻ったわ。気を取り直して……、ご主人様。今日はどのようなご用件でこちらに

「？」

これが『何も言えなくなる』というものと身をもって体感した。いつかの金メダルもこんな感じなのか。

一の記憶ではこの人物がおかしかったのはあくまで『言動（☆を含めて）』どまりで、服装までは一応問題は無かった。

（ここまで……ここまでかよっ！）

まさか『形に入っている』とは思わなかった。

何を隠そう、目の前にいるのは一が中学で小市民レベルをコツコツと上げていた数年の間にコスプレイヤーまで進化を遂げたメイドさん（泣）……ああもう、冗談ではない。

（無理だ……さっき性根を叩き直してやろうって思った自分にアホだと言ってやりたい。まず勝てない。あらゆることごとく一切合財あまねく意味で！）

一は自分の出来るあらゆる事から鑑みた結果、三十六計の最上級、逃げを打った。

「……稲穂愛美いなほ まなみという方に呼ばれて参りましたが本人がいないようなので慎んで帰らせて頂きます」

「え？ イチ帰るの？」

もちろんそんなことを打ち合わせていない瀬奈がきょとんとしているが関係無い。

離脱だ離脱。生き残るのが先、死ぬのは後だ。さあダッシュ――

「ちょっと待って、本人いるからね？ 数年振りで分からなかった

「？」

只今の心境、うおお付いてくるなあああああああっ！
思いつきり服をつかまれているが必死に退路目指して1ヤードずつ
着実に稼いでいく。タッチダウンはまだか。

「いいえ私めにそのような格好をなさる知り合いは居なかったと存
じますのでやはりここにはいないのでしょうか。申し訳ありませんが
グハッ!？」

まさしく人が変わった一のセリフは打ち切られ、目の前のコスプレ
趣味の誰かさんの笑顔……と肉体的に繋がっている右腕から神速の
突きが一閃、ノドを活殺。……病院に予約入れとこう。

それにしても瀬奈の首グリグリと言いつい今のこと今年に首に縁があ
るらしい。首厄かもしれない。くびやく。

今度神社か寺院に相談しようかと本気で思った。……という余裕ぐ
らいはあるようだ。

「ウチ今人手不足なんだー（キラッ）。実はコストもぎりぎり、雀
の涙がちよぎれて……。うるっ）。手段と時間を選んだり惜し
んだり出来ないんだよねっ（メラッ）」

なにやら不快な効果音が聞こえるが無視だ。

「かはっ、ゲホッ！ ……断ったらどうすんですか」

「お前はもう、月に代わって昇天よ☆」

絶対に噛み合わない二つを無理矢理にブレンドさせる謎の人が今こ
こに。センスを疑う。

正直なところ、もう空気が若手芸人殺しそのものだ。

「いや、秘孔とか無いですから」

「じゃあ、鳴いちゃうぞ☆」

「はいはいどうせここは広いですから泣いても大丈夫だと思いますよ」

今度こそ全力で帰ろうとする。が、

「うわ~~~~ん!! いじめられた~~~~! 助けてサイトーフアイヤ
ー!」

「へ? 斎藤……?」

聞き覚えのある名字にマンをつけただけの呼び名をメイドもどきが高らかに叫ぶと、どこからともなく……いや、建物の上から「はっはっはー!」……まさしく声変わり前のボーイソプラノの声が施設中に響きわたる。

「ここの平和はオレが守るーっ!」

スターマン（俺は2で見た）のポーズで堂々と屋上に立っていたのは、想像していた戦隊とかライダーの格好ではなく、何の工夫も無い普通の子供らしい半袖半パン。

身長は遠目で判別しづらかったが、顔のベース、声などはそうそう変わるもんじゃない。

「……っか中身そのまんまじゃねーか! ……っといかんツツコミは自重だ。何してんだ緋^ひ炉^ろ!」

緋炉と呼ばれた少年は「あれーっ!？」と声を上げた。

「ハジメ!? 先生いじめたのって……えええ!?」

「そんなのデマに決まってるから。降りて来い」

「いえっ……じゃあああ!」

緋炉は一の呼びかけに応じて確かに降りた。ただ、飛び降りて来いとは言っていない。

「あ、あぶなーい!」

メイドごっこ(愛美)がわざとらしく叫ぶのを一はうつとうしそうに……実際にうつとうしく見つめていた。

「ちゃあああくちいいいいいいいつ! ……うう、いったああああ……」

見事、1階分の高さからの、それほどでもないジャンプでそいつは落ちてきた。

ただ、勢いをつけ過ぎたことで、足下を中心に情けないことになっているが。具体的にはふるふるかくかくぶるぶるがくがく。

「何かお前バカになってないか……?」

「ハジメが頭でっかちになったただけだー!」

なんだかよく分からない反論をされた。

第16話 どうやら俺は偉かったらしい(前書き)

あらすじ

一と瀬奈はGWにも関わらずどこにも行くあてが無かったのでコスプレイヤーの上司の下で(一だけ)働くことにしたそうです。

第16話 どうやら俺は偉かったらしい

立ち話もなんですから、と今更のように取り繕ったメイドもどき（メイドの定義は知らない）に案内され、廃園同然の建物のある部屋に入った。

中は最低限オフィスとして機能するものがなんとか揃っている感じで、あとは壁といい天井といい、もう本当に廃園としか言いようが無い。

それでも床だけはリフォームしたての新品らしく、どこか足が落ち着かない……のは一と瀬奈だけらしい。あの二人は多分慣れているだろう。

「そういやお前ってあの時で2年だったから今年で6年か」

それぞれ席についたところで一は話の続きを再開する。

「そうだなっ！ ハジメはもう高校生でオッサンだな〜！」

「知るか」

どうやら緋^{ひろ}炉^ろのこのうっとおしいテンションは全く直っていないらしいことが分かった。

しかし『サイトー』といい改めて見る顔のつくりといいふざけた口調といい、見れば見るほどアイツにそっくり……いや、さすがに性別の違いは分かるが。

「……ヒロって姉とかいるか？」

「いるよいるよーものすごいきょーばーな姉ちゃんがいるよーって言わなかったっけ〜？」

狂暴かどうかは知らないが、その答えに確信を得た一はおそろおそろ聞いてみる。

「名前確認していいか？」

「ふーり」

「はあ……」

やっぱり風璃かよ。と言いきりになるのをこらえ、世の中狭すぎるぞコラ。と誰にともなく頭の中で凄む。

……どうも最近脳みそを無駄遣いしている気がしてならない。こんな所でMOTTAI IN AIについて考えるのももったいないぐらいに。

「あ、でも逆らったら殺されるぐらいヤバイからさ、会ってもオレのこと知らないふりして。きょーぼーって言ったのバレたら死んじやうから」

どうやら一と面識がある可能性を全く考えていないらしい。平和な頭だ。こんなことでは生き残れないだろう。何かで。

「すまん。俺の友達だそいつ」

「うそおおっ！？ 知り合いなのかよハジメ！？」

小学生らしい元気なアクションをしてくれる緋炉。そして一のこととは呼び捨てという軽い態度。いや、小学生にそれ以上のものを求めてもしょうがないのだが。

「そうだな…中学校と同じだな、今のところ。……あー、何気に結構長い付き合いだな」

一は血氣盛んだったあの頃をほんのり思い出す。

今は昔、一という一人の中坊が――

と回想に入りそうになったのを温度の高い緋炉の言葉によって阻まれた。

「あーちゃっちゃー、姉ちゃんがきょーぼーになったのってまさかハジメのせい？ オレもしかしてハジメにいじめられてんの？」

「俺のせいにすんな。……さっきから狂暴って言ってるけど、アイツって家ではどうしてるんだ？」

なんとなく気になるので聞いてみた。

自分のせいとはどういうことだと疑問に思うことも当然忘れていない。

「姉ちゃんは中学校に入ったあたりはふつーだったんだけどな、しばらくしたらいきなり強くなったんだよ。何回もなかしてくるし」

「あー……」

実は小学校のとき緋炉を何回も泣かしたことのある一には耳の痛い話だった。だって生意気なんだよこいつが。

「それは姉弟喧嘩の話だよな？」

「だって見たいテレビ見さしてくんないんだぜ。見たいのにさ」

どうやら一般に背いたDV（家庭内暴力）を働いている訳ではなさそうだ。

「それもこれもハジメのせいだろう！ ドーン！」

その指差しとドーンが果てしなく某せえるすまんに見えるのだが、

この際スルーしとく。

「だから何で俺のせいだ？」

「え？ ハジメが姉ちゃんにスキルの使いかた教えたんだろ？」

「あー、それがどう…した…」

マヌケな口を閉じて因果関係を考えること1、2、3……。チーン。
無知の知の出来上がりー。

「……もしかして風璃がスキルを身に付けた辺りのところか？」

「それだっ！ そのせいでオレがいじめられまくってんだよ！ ハ
イいしゃりょー！」

すつと差し出された手の平を一手の平で弾き返す。「Boooo
！」と言っているが無視無視。

「まあ……ドンマイ。お前にも似たようなことしたからおあいこだ」

「じゃあ何であっちの方が強いんだよ？」

「お前よりスキルの使い方が上手いと言えない」

勝率のことまではさすがの一も面倒を見きれない。

「……って、うん？」

「どうした瀬奈」

横で黙って聞いていただけだった瀬奈が腕を組んで首をひねり、全身全霊全力全開で『？』を表現している。そのうち『はてなって何で？』って形をしているの？』とか聞きそうだ。

「イチ今スキル教えるとかなんとかの話してたよね」

その発言にピンと来たら119番！ 至急消火に取りかかれ。

「却下。終了。とにかく終わり」

「なっ……なにそれ！？ まだなんも言っていないのにその返事なんかひどくない！？」

一のそっけない拒絶の言葉に狼狽ろうばいしながらも、当然の抗議をする瀬奈。

「あー、すまん。スキルの使い方教えてとか言い出すのかと思ったんだ。違う話なら良いかもしれない。うん、違ったらごめん」

一はここであえてその話を表に出し『まさかこんなこと言わないよなあ？ なあなあなあ？』とアピールする。

ぐぐぐ……、と瀬奈は一瞬引き下がったように見えたが、フェイント。すぐに再び噛みついてきた。

「てかなんでダメなの？」

「なんでって……」

「そっちこそ教えたくないとか言うなら理由ぐらいはっきりしてよ。私は結局高校生にもなってなんにもスキルがないからとりあえずするしかなかったの。はいそれで？」

「それで？」

言葉の繋がりが見えず、オウム返しで応える一。

「だ・か・ら、なんで教えてくんないの」

「それは……」「センサー！」

突然、廊下のドアがバアアアアアンと開け放たれた。気持ち、やまびこが木霊する。^{こだま}のぞみやひかりは知らない。つばさもこまちも以下略。これは戯言だったか。

「なーにー？」

「ナオノリとヒジキがケンカしてるー」

「またあの二人は……よし！ ハジメ君。君に決めた！」

俺は夢の科学技術が詰まった紅白の捕獲専用ボールに捕えられていない。なんてKYなツツコミはしない。

「呼ばれたんだからセンセイも来るんですよ？」

しかし正直なところいきなりケンカの仲裁なんてしたくない。

「バイト風情^{ふぜい}が甘えたこと言うと、オ・シ・オ——」

「シューマツハで行ってきます！」

「ハミルトンでオレもついてくー」

まるでF1の最高速で一は走り出した。もとい、逃げ出した。なんか後ろに緋炉もついてきたが。キーンって。

「あっ来た。せんせ……あれ？ 先生じゃないや」

廊下からでも分かるくらいに騒がしい部屋に入ると、近くにいた瀬奈よりもちっこい女子（もちろん小学生）がこちらに振り向いた。

その向こうでは、殴り合っていたのか、息の上がった二人がいて、

一人は丁度殴られたのか、腰を上げるところだった。

「センセイはサボりだ。俺が代わりで来たから、どうしてケンカしてるのかは俺に説明してくれ」

「ふーん、そうなんだ」

早速ナメられた。気がする。

「じゃあ言うよ。あのね、まずナオノリ君がヒジキ君にむかって『かいめいしろお』って言ってね、それを『オレだっしてしてえよ』って怒っちゃってなんかケンカしてるの」

かいめい……説明か？

「あいつらまたそのネタかよー。もう百万回いつてんじゃねーの？」

後ろの緋炉が呆れた。

コイツが呆れる程のネタか……。一は意外とハードかもしれない、と気を引き締めない。というより面倒くさそうだ、とげんなりした。

「ヒロ、こいつらのケンカはよくあるのか？」

「春夏秋冬、雨がふってもヤリがふってもビックバンやブラックホールが出てもやってるよ」

たぶんギガスラッシュやインディグネーションが来てもやるのだから。凄いもんだ。

「……なんかめんどくさそうだな」

聞くだけでやる気がなくなってくる。

「だからテキストにせつとくー、とかじゃなくて無理矢理だまらせればいいよ」

「そんなんで良いのかよ……」

「あつ、外に出ようとしてる！ あいつらスキル使う気だ」

何故緋炉がそういうことを言うのかと言えば、基本的に回りに被害を出しやすいスキルは、建築物保護の観点から室内ではご法度になっていて、そういったスキルを使う奴は外に出る事で遺憾無く喧嘩するからだ。

「まあ、黙って見てるわけにもいかないか」

そう言うとはつかつかと騒ぎに割り込んでいく。

「おい、ケンカはやめろ。おい」

まさに外に出る境界線で、二人の手を捕まえた。

「うるせー！」

「はなせー！」

喋る単語のレベルとイントネーションは似ていたが、見た目は全くの別人だ。

「今のうちにケンカをやめるなら手を離してやる」

「だまれ！ 今から男と男の決闘デュエルをやるんだ！」

「そうだ！ じゃま者はだまって手をはなせ！」

散々に自己中な発言だが脱中心化とかは待てないので華麗にスルー

させてもらう。

「あーそう。で、とにかく。ケンカやめるのか、しないのか？ 選
択肢はほとんどないぞ」

『やめる』と『しない』だ。

「えーいはなせー！」

「そおりゃあああ！」

こちらのセリフはまるで無視。年少者にのみ許された元気で無理矢理に振り切ろうとする二人。
しかしこちら現役高校生。小学生とは地力が違うからして、抵抗は楽勝。

「仕方ないな……まあ、お手本だ」

一は二人をおとなくさせるべく、スキルを使った。
傍目には何をしているのか分からなかったがしかし、ナオノリとヒジキ……なにやらオモシロな呼ばれかたをしている二人は「ふあっ」「あうう」という言葉を最後に、意識を離れた。

「おおお……さすがハジメ。かけえ終わり方だ……」

緋炉がなぜか感心している。

「こんなんがかっこいいわけねえだろ」

一としては風璃とか緋炉の下派手な技が出来る方がかっこいいと思っ
ている。自分のスキルなど地味地味の部類に入るだろう。しかも

最近やりすぎると急に体が動かなくなるおまけ付きだ。

と自己を卑下^{ひげ}していると、いつの間にか回りには小学生の群れが。

「すごいねー」

「その前に自己紹介はー？」

「そうだよあんただれだよー？」

「初めてあう人には名前を言わなきゃ」

まあ、正論である。というかこんなに部屋に入っていたのか。

「はいはい分かったよ。真面^{まて}一。15歳で、身長164センチ体重58キロ。血液型はB型と、あとこのOBだな」

オールドボーイ。そう言ったが最後、

「OBって血液型はないんだよ」 「バカやろー最初に血液型はBって言っただろ。OBってのは……なんだっけ？」 「(O)オレ様(B)バカだよ」 「あっ、それいいね」 ……すっかり一のことなど眼中にないらしい。

「さて、用事は済んだし戻るか……どうした緋炉？」

ドアを開けようとして後ろを見ると、緋炉が突然に叫んだ。

「おいお前ら！」

その声で、気絶した二人以外の全員が緋炉に注目した。

「この人がオレがいつも言ってる『師匠』なんだけど、ほうっておいていいのかい？」

その瞬間、みんなの目の色が変わった。ような気がした。

ピカーン（目からビーム！？）。

……………じり、じりじり。

すさささささささささささささささ！

なにやら皆さん柔道かなにかの試合をするかのような足捌きでこちらににじり寄って来て…………。

「「「「「弟子にして下さいっ！」「」「」「」

土下座した。

なんだ？ なんなんだいったいこれわあ？

「……………どういふ事だよ緋炉。こいつらに何吹き込んだ」

不^{ぶしつけ}躑だと分かりながらも土下座軍団を指差して訪ねる。育ちが悪いということ^{ぶしつけ}で許してほしい。

「いやあそれほどでも。えっへへー」

緋炉はいかにも照れ臭そうな演技でごまかし笑いを浮かべていた。

「マジメに答えろ」

どうも自分で真面目と言うのには違和感がある。琉二のせいかな。

「わああ頭つかむのやめてやめてちゃんと言うから！ ……えーとね、オレがマジメにスキルのおさえかたを教えてもらったって言ったの。それだけ」

「あー。それでか」

確かにここに来るのは『小学生以下でスキルが使えるようになった者』だから、制御を覚えたいのは皆一緒なのだろう。まあ、その制御の『手助け』が一には出来るのだが。

「じゃあやってくれるの？」

「何か急ぐ理由があればな」

しかし、小学生達はそれを聞くと、しーんと水を打ったように黙った。はごろもふうーず。

「……」

「……………、……………えー？ ……」

小学生……後輩達は最初萎縮していたものの、段々と恨みがましい目で一を徐々に死にたい気持ちにさせる視線で見てきた。すげえ。

「……まあ、大概は自分で身に付けるもんだからそう言ってるだけで、ヒントくらいはやるから。ほら、並ぶ」

どうもいたたまれなくなってしまうたので、結局診てやることになった。もちろん免許はない。あるのは、勇気だけだ！ ……いや、技術だ。

「おかえりなさいませご主人様☆ どうでした？」

「☆」は定形文らしい。ようやく戻ってきた一を心配することも

せず、メイド愛美は一を迎えた。

「特に問題は起きなかったです。二人を寝かしただけで終わったんで被害とかは特に……」

「あゝやっぱりハジメ君だと良い仕事するっ！ 偉いっ！ 頭をわしわししちゃう！」

当時からの職員、愛美が右腕を伸ばしてくる。当然ながらその頭なでなで攻撃はかわす。

「ていうかあいつら見てなくていいんですか？」

「そんな幼稚園じゃないんだから（元は幼稚園の建物だけど）☆なんなら一緒に遊んでいれば手間が省けるんだけど？」

「それはそれでなんか……はっ！？ 今何時だ？」

「1時……4分ね」

「と……いうことは」

戻ってから気配がしないと思ったら……案の定。

「ええい……化けて、ぞんびいになってやる……」

飢えで存在を希薄にした末に人外宣言なさっていた。

瀬奈……前から思っていたがおまえは何故腕時計をしていない。と今言っても仕方ないのでとりあえず対処にあたる。

「すまん！ おまえのこと説明するのが先だった！ 先生昼メシはもうありますか？」

「一応用意はあるけれど？」

「至急お願いします。そもそもここに連れてきたのはそういうつもりだったのに……あー」

ちなみに昼飯は揚げパンがメインといういかにもな給食メニューだった。

第16話 どうやら俺は偉かったらしい（後書き）

業務連絡（8月2日現在）

今週末パソコンから物理的に離れないといけないので、次回は更新がずれます（お休みではありません）。

期待している方いましたらご迷惑おかけいたします。

第17話 なぜか前半出番無し

「あゝ食べたあ」

（あらら、上から読んでも下から読んでもかろうじて同じ）

先程まで死に体ぞんびいだった瀬奈はほとんど無意識のうちに回文で満腹を伝えた。

「へゝえ、そんな体質あるのねえ。世の中まだまだ広いわねゝ」

「これが朝昼夕つてあるし寝るときも時間キツカリだし、もうイヤになるし……誰か代わってほしいよ」

ちなみに一は飯を食い終わった時点で小学生に召喚されていてここにはいない。

今は瀬奈と稲穂いなほ愛美まなみという名の（ベースは美人なのに）コスプレメイドが二人で全員分の食器洗いに取り掛かっている。

一は子供の相手でここを離れているので、働いていると言っているだろう。

そして昼飯の件もあり、今は瀬奈の体質についての話題で会話がなされている。

「でもその割には楽しそうじゃない？」

「それはほらあれでしょ、『人生楽しまないと』って思ってるし」

瀬奈は食器をかちゃかちゃ言わせながら次々と洗っていく。

「そう言えば瀬奈ちゃん……だよな？　瀬奈ちゃんは一人で上京したの？」

「うん、そうだけど？」

「ご両親は反対しなかった？」

瀬奈の手が一瞬止まった、がすぐに動き出した。

「私の親って案外放任、うーん違うな……自由にさせてくれるから」「ふーん。自由に、かあ」

自由という言葉を腹に収めようとするみたいにつぶやく。愛美は質問を続けていく。

「ここに来たってことはもしかしてハジメ君と付き合ってる？」

多少なり好意を抱いていれば動揺の一つでもしそうな質問だったが瀬奈はまるで動じなかった。

まあ今時『ぶばばばばば、バックじゃないの！？　アイツとは単に幼馴染ってだけで――』とか言う方がありえない気はするのだが。

「まっさかー。ご飯作ってもらってるだけだって。今日はなんかこっちに来ることになってたらしいからついてきただけ」

食器洗いも終わり、瀬奈はテーブルの脇にあった四本足の椅子に座ってぐらぐらと傾けだした。

「へおーん」

同じく愛美は珍妙な声を発しながら瀬奈に同調して職員用のイスに

乗って回りだした。

いい加減着替えろと言っていた一の言葉を無視してまで着ているメイド服のスカートがひらひらとはためく。

そしてここに片や四本足のイスでバランスを取り、片や回転イスでフィギュアスケートまがいなことをやる二人の図が完成。

「あー、お金使っちゃうけどバイトさせると楽ねー。私なんかよりマシな仕事するし。書類関係は流石にさせられないけど」

「……あいみんセンサーはどんなスキルなんですか？」

いきなりあだ名で呼ばれた愛美は不思議そうな目を瀬奈に向ける。回転しながら……つまり1秒の内0・5秒だけ瀬奈を見ている。

「ん？ また急に聞くわね。何かあった？」

「えーと、こういう所で働く人ってどんな人なのかなって」

単純な興味で聞いてみたのだった。

「んーそうね……大体は小学校の先生とか、専門の人とか、あとは私みたいな学校の保健の先生とかね。スキルはあまり関係無いわね」
「へえー」

机の上で何かをパシパシ叩く仕草を上限の20回以上繰り返す瀬奈。

「瀬奈ちゃんは……スキルは無いんだっけ？」

「いちおー『まだ』です」

まだを強調する辺りに苦笑を漏らす愛美。その辺の動作には大人の余裕が出ている。

「なるほどねー。でもあせらずにゆつくりすれば良いと思うかな？ 私なんか高3でスキルが分かったから。ほら、よくいるじゃない。ハタチ過ぎても身長伸びる人」

これまた随分な遅咲きもいたものだと思ふ。瀬奈は感心する。

「へえーそうなんですか」

瀬奈はそのままなんとなく愛美の話聞いていた。意外と面白かった。話半分ということはなかったが。

――

「あー久し振りにスキル乱用した気がするわ。なんか神経疲れ起こそうだよ……ってこのままでは末梢神経にキズがどうのこうので――なんてことはないよな………ないよな？」

一が小学生の群れから解放されたのは3時のおやつの時間になった時だった。

いつの間にか、黒猫ヤマト（と言っているのか？）が一の両手の中で丸まっているが落としたり驚かせたりするつもりは全く無い。作戦名、動物愛護。いのちをだいじに

「ちゃおーとおつげきい！」

先回りした緋炉が開けたドアが閉まる前に足を滑り込ませて最初に案内された部屋へ入った。

「やっと戻ってきた……」

「お疲れー☆ 何も問題なかった？」

「直紀なおのりと日直ひしきは何で漢字がかぶってるだけでケンカするのか教えて欲しい……」

両方とも海産物みたいな変な読み方をさせるというアホな共通点がある癖に。

一は机にヤマトをそっと置いて、寝てるヤマトと一緒にになって自分もぐでーっとなり、ぶつぶつと不満を述べた。

対して愛美は両手をグーにしてあごに近づけた、俗に言うぶりっこポーズ。何がしたいのか、と一が問う前に、

「あの二人はもうどうしようもないのでございますうー。だからいつも喧嘩両成敗するしかありませんー。はわわー」

何だか知らないが急に拳を握り締めたくなった。というか握り締める。

沸点降下、血圧上昇。燃える心はマグマのよう。そして表情は冷めて冷える。

「……その前に上司アタマを入れ替えた方が良さそうか？」

「あううーハジメ君がいみんなに冷たくなったですうー」

イカン。とても遺憾だ。いい歳（二十代後半）こいてなぜにコスプレイヤー（♀）なのか理解に苦しむ。理解したら負けだが。

「やっぱ無理だな……」

しかし諦めやすい方の現代っ子である一は人様の人格に手出しするなんておこがましいのは一回やってダメならハイサヨウナラ、だ。

「しかしコイツもこんなところからよく逃げ出さないよな……」

そうして逃げの一手、ヤマトをなでなでする。するとあら不思議、メンタルヒーリング成分が瞬く間に一を包みこんで俗世のしがらみから切り離す。少しだけ。

「あららーナデシコもハジメ君に懐くのねえ」

「……ナデシコ？」

あれ？ まさか猫違い？ そんな疑問が湧き出る。

「ヤマトじゃないんですか？」

「まさかあ！ ハジメ君が出て行って1年もしない内に天寿を全うしたわよ。このコは二代目のナデシコちゃん♪ ヤマトおじいちゃんの親戚ってことで譲ってもらったのよ☆」

そう言われて見れば、ヤマト…いや、ナデシコはヤマトとはどこか似ているようで、でもやはり違っていた。というか性別まで違うらしい。なんだか懐かしすぎていちいちそこまで判断していられなかった。

やはりネーミングセンスは果てしなく謎だが。

「ヤマトのやつ結構歳いったんだな」

「そういえばよく遊んでいたわねーハジメ君とヤマト」

「もうアイツいないんだな……」

しみじみと時の流れを感じる一。

「うわーイチがセンチメンタルだよ。もうこれはアレだね、ハッチポッチからジャーニーに出るしかないねー」

コイツは人の思い出によくもまあドバツと水をぶっかけられるものだ。しかも意味不明だ。

しかもどちらかと言えば感傷じゃなくてノスタルジック（郷愁）な気持ちだったのだが。……いや、似たようなものか。

「あーそうかい。おまえの中で俺はどれだけ心無いのかよく分かった」

「あーらら、すねちゃったよ」

「俺は金魚のフンじゃない」

思わず脳裏にスネオがよぎって、一は反射で口を開いてしまった。

「……どゆこと？」

「いや、何でもない……失言だったかもしれない」

思い付きでものを言うのも大変だ。

そんな二人をよそに、いきなり愛美が声を上げた。

「あら。もうこんな時間ですわ、オホホホホホホホホホー
ーおっほおっほ……あらいけませんこと。むせてしまいましたわ」

「（あーもーなんかついてけねーなーこの変なテンション）……あー、もう終わりか」

お嬢様っぽいセリフに釣られて壁掛け時計を見ると、確かに皆を帰らせる時間になっていた事が分かったので、三人揃ってさっきの部屋に出向いて小学生達を門の外まで送った。

「いやー手伝ってくれて本当にありがとうございます。お陰で大分楽だったのです。愛美は大感動です」

全員無事に門から出たのを見送って仕事終了。

「あーそいつあーどーもーこちらもお役に立てたようだなによりー」

果てのないキャラ変化について行けずに虚ろな返事で済ませる一。

「というわけでまた近いうちに頑張って来て頂戴ねー」

「あーそうか……ゴールデンウィークだったか」

学校に行く子ども達の事を考えて、また他の仕事と掛け持ちの職員の都合と合わせて第二、第四日曜と祝日だけ、ここを開くことになっている。多少の例外はあるが。

お陰で今が昭和の日なのであと三回連続でここに来る予定だ。

挨拶を交わして、一と瀬奈は愛美と別れた。

「あ……お給料渡してなかった。ま、いいか。あしたもあさつてもあるし、まとめた方が安上がりかもしれないし」

まとめたからってそんなことにはならないはずだ。どんな魔法だ。税率でも操作するのか。

「あー、そーいや給料ってどうやってもらうんだっけ……まさか振

り込みとかするほどの正式な雇用じゃあるまいし、やっぱ現ナマか？」

現在地、キッチン。ただし瀬奈の部屋の。

今夜のおかずは何にしようかしらといかにも主夫な悩みを抱えたときに、悩みついでに思い出していた。

一がそんなことで悩んでいると、薄型テレビでニュースを見ていたと思われる（まさかこの時間帯で教育テレビを見るなんてことはないだろう）瀬奈がキッチンに現れた。

「そーいやさ」

「うん？」

「何で私にはスキル教えてくんないのかちゃんと聞いてなかったね」
「あー、そうだったか……」

瀬奈の記憶力、侮り難し。がた

「そこんとはつきりしなよ。ホラ……ってまだ何も作って無いの！？」
もう5時半だよ！」

「炊飯器はもう稼働してるし惣菜も買い置きがあるから時間は大丈夫だ。あとはサラダと汁物をどうするかと考えていただけでそんなに時間はかけないから」

「……やるじゃん」

「どうも」

このくらい晩飯前だ。あたりまえ

「じゃあ心おきなく質問出来るかな」
「……………」

やはり話題はそらせなかったかと心中でしくじりの舌打ち。ちっ。
チツチツチツ……これは指を振る音だぜ。もちろん何の関係もない
うわごと。

「……シンプルな話、スキルが使えないやつには俺のそれは使っても意味がないんだよな。背中に翼のないやつにはばたく方法を教える
ても意味はないだろ？」

なんかメルヘンな喩えを出してしまったなと少し後悔。

「うん、まあ……そうだね」

「それにあんまり無理して教える……言い方が違うな。なんだ……
啓蒙？ 違うっぽいな……あー、そうだ、補助だな。で、その補助
をやりすぎると伸びる方向が自然でなくなつて妙な事になったりす
るからな」

「???? どゆこと？」

「例えばな」

特に意味はなく、人差し指を立てる。

それに呼応して瀬奈がふんふんとうなずく。なに考えてるんだ。

「あるやつのスキルを観察したとき、おおコイツは色んな事が出来
るな。と思ったりしたんだよ」

「なるほど」

とりあえず話をしながらスープのもとを取り出してお湯の準備をし
ておく。

「そこで何を思う？」

「それは……その色んなことをやらせるんじゃないの？」

「そう。そうだよな」

冷蔵庫から3つほど適当な野菜を取り出してそれぞれに包丁を通したりちぎったりする。

「で、そいつはどうなったと思う？」

「……色んなことができるようになったんじゃないの？」

「まあそれも一つだよな。ただな、どのタイミングかは知らないけど……どうしようもない弱点まで作っちゃったんだよな」

ヤカンのお湯が沸騰して水蒸気——白く見えているのは実は液体の水で体積が1600倍の気体ではないらしい——がヤカンの口から立ち昇っている。

「弱点？」

「まあこの辺は個人情報だから伏せるけど……少なくとも俺が手を出した後でそうなったから間違いはないと思う」

「……要^{よう}はないものは教えらんないし、弱点を作りたくないからむやみに教えるのも良くないやってこと？」

「あー別に今日みたいにどんなスキルか探ってヒントを与えるくらいならいくらやっても大丈夫なんだけどな」

「ふーん」

お湯を注いで粉末からスープを作り、溶け残りをかき混ぜる。

「というわけで、俺はおまえにスキルを使えるようにさせることは出来ない。ハイおしまい」

パン、と手を打って終わりを告げる。

テーブルに二人分の食事（だってこのあと帰って自分のを作ったら

二度手間だろう）を並べる。。

「……………」

「ん？ どうした？」

「……それってあの場で説明してくれても良くなかった？」

「あー、そうかも……ってどうしたそのサツイー（殺意）な目線は？
何か気に障ったか？」

と言いながら食卓から離れ、モノの少ない方へと移動する一。

「ちよっとは、断られる私の気持ちも、わかれっ！」

「ってちよっと待て何でリミット直前でおまえはそんなに元気なん、
だあっ！」

頭を掴まれた最後の声が奇跡的にイノキっぽく聞こえた。

第17話 なぜか前半出番無し（後書き）

はい、というわけで前にずらしました。

しかし段々とストックが減ってきています……が、停止することは無いのでこれからもよろしくお願いします。

追伸

この小説のPV（表示回数）が1万を（ギリギリ）越えました。ユニークアクセス（端末ごとのカウント）は2千です。一応記録的な意味で書いときました。

第18話 アイテムなど使ってんじゃ……ねえ？ (前書き)

すみません、タイトルふざけてます。
しかもあんま関係ないという。

第18話 アイテムなぞ使ってんじゃ……ねえ？

「あん？　なんでだよ」

「いや、だからタバコ吸うの止めて下さい」

「だから何で止めなきゃいけないだって聞いてんだよ！」

放課後の男子トイレで、一は面倒臭そうに――実際面倒なのだが――『部活動』をしていた。

あんみつ
暗密部。

どこの誰が商標登録だかなんだかしたのか知らないが、もう少しマシなものにして欲しかったと常々思う。

その活動内容の一つ、というかメインは『校内の治安維持』で、ぶっちゃけ風紀委員とまるかぶりだ。そのお陰で風紀委員が頑張っていればそれだけ休めるのだが、今日はお休みらしく、暗密部の初めての本格的な活動となった。

「タバコは未成年が吸っていいものじゃないし、それに健康に悪いし……とかじゃあダメですか？」

「……あつそ。言いたいことはそんだけかあ？　じゃーなー。ほら帰った帰った」

ステレオタイプな説得にがっかりした不良さんは洋式便座に（もちろんズボン装備で）腰かけて後生大事そうに煙草をくわえ（リアルで吸ったらいけません！）、片手でしゅしゅと振り払う仕草をした。ただ、回りから見れば――見ていればだが――おかしな事にそいつは自分の額に一の手が『触れている』のに気付いていない。

「じゃあ没収だけしておきます」

「あーもうさっさと行け……ってなあ？」

没収と言いながら、まっすぐトイレから出ていく一。

結局何もされなかったような気がしたのでその後わざわざ一を追うということとはしなかった。

実際は目の前で堂々とタバコとライターとを奪われていたのにも関わらず、だ。

廊下に出て、一は一息つく。

「あー、さっさと逃げとこ。……怖いってアレ心臓固まるって絶対ガチでやったら壊されるって何アレ天パーにワックスって燃費おかしいから髪の毛クルクルも直ってないしあー手にすんげえべったりついてらあしかもヌメヌメしてるって嫌悪コンボだよホントやめてほしいし……」

途中から全く関係ない話にすり変わっている。

そしていそいそと部室に帰る一のポケットには不良さんの持っていた箱と100円ライターがあった。

「……それだけか？」

「はあ。一応」

「……………」

言葉も無いらしい。もちろんマイナスの意味であろうことは重々承

知だ。

早々に部室に舞い戻ると副部長の長舟先輩に目をつけられ、自分のした活動について報告させられた。

「じゃあ先輩はなにをやってるんですか？」

一の目が確かだったなら、部室に入った時に（今度はフォークを突き付けられないようにノックして）小さなお菓子の包み紙やら袋があった気がするのだが。

「勿論飴玉大研究会をするんだが……なんだ？ その目は」

「いえ、別に」

多分言及するだけ無駄なのだろうと思い『自分はどうして活動をやらないんだ』と言うのは止めておいた。

そんな超絶甘党の副部長に辟易へきえきしていると、

「てゆーか、イチやることがショボいね。そんなの意味あるの？」

既に部室にいた瀬奈に酷評を食らった。

無論、横槍を入れられて何も感じない一ではない。

「じゃあおまえは何やって来たんだ」

「ふーりんと一緒にグラウンドの使用権を争ってたソフト部とラクロス部の仲裁。ねー」

「いえーあーいいい。なかなかのスペクタクルでしたよー」

先輩と一緒にアメをおいしく頂戴している風璃。案外『あんみつ』部という名前は的を射ているらしい。

「それはまあ……」

スケールの大きい事で。と心の中で付け足した。

ちなみに後から聞いた話によれば部長は校外にまで足を伸ばしていたらしい。なんというふざけたフットワークだろうと感心せざるを得ない。

――
次の日。

不覚にも先日トイレの近くの廊下を歩いていると、

「あつ、居やがった！ テメエ俺のアレ返せ！」

二十四時間振りの不良ヴォイス。震えるくらいに痺れるぜ。
いちにち

もちろん三十六計の内の最上級、逃げるにしかず――

「おい！ そいつ止めろ！」

「ん？ よっしゃ来いや。相手してやるぜ」

（うわあああマドハンド！？）

――その逃げるが出来ない場合どうしよう。

廊下で挟み撃ちされてしまった。不良さんは二年生だったらしく、不覚にも……本当に不覚にもそこを渡っていたのが運の尽き。

「お前一年だな……新学期早々先輩様に手え出すとは命知らずだなあ？」

やはりパクったのはバレてしまったらしい。

こういう『神様仏様はノリが軽くて色々見過ごしているようでいて
実は悪事を全て見逃さずに罰を下しますよ』的な事を『天網恢恢疎かいかい
にして漏らさず』と言うらしい。

あくまでこちらが悪いことをしていればの話だが。

「いや、もっとデカイ犯罪とらえろよ天網さん」

「なーにワケわかめな事言ってるんだよ！ さっさと盗った物返せ！」
「訳ワカメって……」

不良さんは凄むがしかし困ったことに一はいつまでも手持ちにそんな法律違反を持つわけないし（副部長に回収された）、このままではリンチルートが確率を上げて確立してしまうのは容易に想像がつく。

「あとは天に祈るのみ……いや、やけくそだよな……あーもう、うわ
ー」

わざとらしい雄叫びを上げる一。

ほとんど博打で不良さんの方に突っ込んで行く。今回はいつかの風紀委員さんみたいにやられるだけでは済まなそうなので、なるだけ頑張ってみる。

「はっ、舐めんなよ。こっちはじゅうどーうおおおっ!？」

二段、とか三段と言おうとしたのだろうか、とりあえず一には分かってなかった。

都合良く手と手が触れたので、そこからは神経律ハーネスの出番だ。

一は相手を触れた時の体勢そのままに『倒れさせて』その背中を容

赦なく強打させておく。これが以外と衝撃が響いて痛いっぽい。

「痛ってえなコノヤロウ！」

その隙に逃走——できた。

「あ、ラッキー……」

どうやらスキルは使わない主義らしくあっさり簡単に逃げられた。
しかも助っ人の方は結局何もしてこなかったという^{ラッキー}僥幸。

「デメェ次会ったらぶっ殺す！」

しかしお前（の出番）はもう、死んでいる。

――
逃亡先の部室。

そこで長舟に「最近思うんですが二年の先輩って何故にスキルを全然使わないのか？」といったことを聞くと、

「ああ、それはな…二年は軒並自分の体力よりスキルが弱いからな。しかし何でそう逃げばかり……」

「そんな、俺なんかがやたらめったに先輩達みたいなことやってたら調子こいた真似って思われてぶっ殺されますよ」

「……一辺俺と闘^やるか？」

「手も足も出なかったらぶっちぎりで敗けますよ。こっちが」

「はいウソー！」

卑屈過ぎる一に業を煮やしたのか風璃が指し某やんのかゴルァ！（ただし名称は一の独断と偏見の中でのみ有効）……を鼻先2・67cmまで近付けた。

ただし有効数字1桁。つまり1〜3cm。

「ってどこからそんなもの（指し棒）が……」

「今はそんな話はいらんのぜよよ」

「ぜよよ？」

なんだか土佐藩のあの人に言わせてみてえ。『日本の未来は明るいぜよよ！』……だめだな。

「ほよよみたいなの？」

畑違いもいいところだ。

「……って話をそらすんじゃないやねえぜよよ。ワシの『ハジメちゃんテラ強ス説』をいい加減認めんしやいなあ」

やべえ。こいつキャラ乱立してる。

「そっちこそまだ言うか、その『俺の意識が切り替わって千年パズル的な人格が表れて火事場の馬鹿力を発揮する』とかいう無茶苦茶うさん臭いことを」

「でもアレが私のイタイタしい夢だとはとても思えなかったりしたりするんですよ」

どうも風璃の言うことには最初に一と会った時にそんなことがあったらしい。もちろん時系列は中学の時だそうだ。

それによると一は触れる相手全てをことごとく病院送りにしたらし

い。

まさか神経をいじくるだけでそんな芸当が出来るわけもない。しかもその証言者が風璃だけというのがまた信じられない。ていうかぶっちゃけ嘘臭い。というのが一の感想だ。

「仮にそれが本当でも、普段そんなスキルの片鱗も見ないしそれじや俺が二重人格とかいう古紙回収された紙にも書かれてる存在みたいじゃねえかよ」

「何そのテキトーな比喻は。イチ頭大丈夫？」

「大丈夫だ……っか何だよオイ、撫でるな。髪わしゃわしゃするな」

『あれだ、人並みにフケとかあるからな』とか言ったら止めてくれるのだろうが、次の一手二手でもっとシリアスな肉体的ダメージが来るのが予想できるために言えないでいた。

「ちょっと動かないでよイチ。今から頭のネジ探すんだから」

「……あっそう」

コイツ最低だ。露骨にいじめてくるぞ。

しかしメンタルな所を除いたら一にとって今のところ実害はゼロに近いのでとりあえずクールに対応しておいた。

「ほお……」

「へえーん……ぼえーん」

副部長おさふねと風璃が何やら感心したような声を上げた。

もちろん土星さんボイスを付け加えたのが風璃。あの文字が伝わらないのが悔やまれる。

「……何すか？」

「いや、なあ？」

「だってグロビュール歪曲があればクレームルケイジがこうでフィブリルがそれでドカターク効果が……どれ？　グランドフォール？　オルバース爆動？」

「分かんねえよ」

せめて『キールが木をきーる』レベルまで単語を落として欲しい。いや、そもそも話が通じないのだが。

「とにかくさ、そのままの君らでいてっていうなんちゃらかんちゃら」

「最後までハッキリ、と頼みたいな」

既に聞いても聞かなくてもどうでも良くなってきているが。

「おっ、若白髪ゲット」

「痛っ！　てか何してんだよおまえ……」

振り向いて見れば瀬奈の右手に白い髪の毛大の細長いものが一本。ぶっちゃけ一の白髪。

「一本十円……いや三十円だね」

「高えよ。そもそも金取るな、ってか抜くな」

中学校のクラスメートが一本五円で親の白髪を抜いてるとか言っていたがその6倍というのはどうも個人的に解せない。とか馬鹿なことを考えたりする。

「ま、いいやタダで。そのかわり白髪入りわら人形で――」

「おまえ深夜に起きれないから無理だろ」

うしみつどき。これ大事。

……そういえば白髪でも効果があるのだろうか？ 人によって様々な見解が出そうだ。

「ちえっ。じゃあやっぱイチが三十円払って」

「俺はむしろおまえが払うべきだと思う」

苦痛を受けたことによる慰謝料とかの方面で。

「む、これがああ言えばこう言うってやつ？」

「俺の心情は今まさにそんな感じだ……それより俺って白髪あったのかよ……」

まさか最近出来たやつじゃないだろうな。だとしたらコイツのせいになるぞ。

「いやあ実はイチっておじいちゃんなんだね。あっはっはーゆかいゆかい♪」

……コイツこんなに嫌なやつだったか？

「おまえは全国の若白髪に謝った方がいい」

そう言うとき瀬奈は部室の窓の方を向いて、お辞儀をした。

「じゃあ約イチ名を除いて、全ての若白髪の方々に対しておじいさん発言をしたことをここに謝罪しまーす」

「……………」

イントネーション丸わかりなのがものすごく遺憾だ。

「これはこれは……」

「あいやーそーれいっ」

またかよあんたら。

「ふーりんどうしたの？」

「いや君たちがね、仲いいなと思ったわけですよ」

「なんだそれは……」

「そりゃないでしょ」

たかが白髪で口論しただけでそこまで思われなければならんのか。いや、確かに白髪でやりとりする高校生ってのもおかしいか。じゃあどうすればいいのだろうか。

「ま、あっしからすれば無理に押し通すこたあいたしやせんですがすげすよ？」

「ホントになんなんだよ……」

「そうだよわかんないよふーりん」

「……駄目だこいつら。斎藤、これ以上言ってもしょうがない」
「ういーっす」

結局何が言いたいのかは分からず仕舞いだった。

第19話 ラーフルなんて初めて聞いた（前書き）

九段要、敷石恭子、水面鞆連、伊東長舟。

上の4名が思い出せたら読んでも差し支え無いです（一応思い出せなくても大丈夫なようにしたつもりですが）。

第19話 ラーフルなんて初めて聞いた

「あのさー毎回思うんだけど」

「何だ？」

二時間目の現代文が終わって休み時間になってすぐ、瀬奈が質問を投げてきた。

「何でウチのクラスの『アレ』は壊れてるの？」

そう言っている瀬奈の視線は黒板の近くにある黒板消しクリーナーに向いていた。

「は？ あれ壊れてんのか？」

すると呆れた表情でこちらを見る瀬奈。

「えええ……気付いてなかったの？」

そういえば初日の入学式の前に逆噴射してたような気がする。が、それと同時に違うことも思い出す。

「……いや待てよ、確か誰か普通に使ってたぞ」

「ああそれ知ってるぜ」

ここで隣の席からおそらく話が聞こえていたであろう琉二が割り込んできた。

「本当か？」

「ホントホントマジマジ。担任が何気無くアレ使ってるのを見た」
「ああ！ そうだよしっきーだけバッチリ使ってた！」

しっきーと言われても誰も担任の敷石恭子その人だと分らないのでは、という疑問はさておき。

「あまりにも普通に使うから気付かなかったな……」

その行為自体は学生にとってはごく日常的なものだったために一などの細かいことを気にしない人種はスルーしていたようだ。

「おおー、お前ら鈍感過ぎだぜ……。そんなんでやっていけないのかよ」

「あーもうルーニーうつさいなあ」

「だからマイネームはRyūjiでそんなサッカーな名前じゃ無いぜ。……てかルーニーって、ルーニーってさあ、実際どうなのよ……」

力なく肩を落とす琉二。

ナイーブな面をさらすその長身はどうしようもない哀愁を漂わせた。

「おーっす、せなっち今日もささやかだねえ」

ここでニューフェイス、九段要の登場。

「ん？ 誰さんかと思えばかさばる『かなかな』じゃん。なんか用？」

「……あんたこの前なめちゃんとか言ってたかった？」

「ああ、語呂が悪いから捨てた」

捨てたという表現は合っているのだろうか。

「ま、いいか。で、友達の少ないせなっちはウチらと話しもせず両手に……花でもないか、そんな状態でどうしたのかなり、と思って……ねえ？」

自分以外の三人を敵に回しかねないセリフだ。
すかさず琉二が口を挟んだ。

「おいおいそいつあ聞き捨てならねえなあ？ マジメ？」
「知らねえよ」

正直どうにでもなれと思っている一。自分を巻き込みさえしなければ。

「相変わらず血圧低いぜ。鉄分あんのか？」

「量ったこと無いから知らねえ」

「そうきたか、やるなマジメ……」

何がどうやるんだ。

「……何このバカは？」

歯に衣着せない要のシンプルな口撃。しかし琉二はさっきのようにめげたりはせず、要の方に向き直る。

「おーっとそうだテメェだぜ何ださっきの両手に花ではない発言は！ マジメはともかく俺はイケメンじゃねえのかよ！」

自信をもって宣言した琉二は暫くの後、ついにナルシイ疑惑と戦う

運命を背負う事となる！ ……もちろん語られることは無いが。

「うーん、悪いとは言わないけど別にそこまでカッコいいとも思わないねえ。70点じゃん？」

「的確だ……！」

要の評価に思わず感嘆する一。

「イチくんは限りなく50点だねえ」

「まーそうだろうな」

その辺は激しく同意しておく。
と、ここでチャイムが鳴った。

「お、噂をすれば次は数学か。あの担任の技が見れるぜ」

「黒板消しの掃除に技なんてあんのか？」

その辺は激しく疑問だ。

チャイムが鳴り終わる前に担任の敷石女史がいつも通りの風体で教室に入ってきた。

そして義務教育で仕込まれた『起立気を付け礼着席』の後、

「あーあ、またこんなに黒板消しがチョークまみれで……どうして他の先生方は壊れてるとか言うのかしら？ まだ使えるのにもったいない……」

それはもう見事なまでに普通、機械のスイッチを入れ、ゴシゴシこする。

特に変わった点は見当たらない。本当に普通だ。あれが他の先生や

日直が使うとクリナーがいわゆる咳せきをするのだから不思議だ。
と、琉二が耳打ちをするために近づいてきた。

「ほら見ろマジメ」

——琉二……。

「普通に使ってたんだろ」

——嗚呼ああ琉二。お前って奴は……。

「……何か言ったらどうだ？」

——その手……。

「白樂君。あなたニューハーフだったの？」

——オカマみてえ。

「うっそおちよつとどっからそんな説が……うおおこの手か！
この『ホホホ』な手がいけなかったんだな！」

ようやく右頬に付けていた左手の親指を離した。そして回りから嘲笑を貰い、「やっちゃまったぜ……」じっと手を見る。

自称クールガイ（つまり客観的にはそうではない）の琉二にとってこれは精神的な痛手だろう。オイシイ思いをするのは四角い枠の向こうとかノリの良い人だけだ。

「じゃあ早速授業を……と、その前に試験範囲の説明だけしておきますね。最初の所から今日やる所までということだ」

「えー!? センセー多すぎないですか？」

ここで厳しい先生は『黙れ（我らに比べて）ゆとり世代が!!』とか言って沈黙させるのだろうか、などと一は考えたりしていた。右（琉二）はまだじつと手を見るし左（瀬奈）は明らかにテストに動揺している。右の右（風璃）はスキルを使ってノートをパラパラと、いや、ズバババババ! と右から左、左から右へとめくって遊んでいた。様に見えた。

「そうしないと試験が簡単になって満点続出して先生が困るのでここまで進める事になりました。ということでしたと始めましょう。ああ、もちろん一君^{はじめ}の事じゃありませんよ?」
「いや分かってますから」

しかしなぜそこで振ってくるのかは分からなかった。

「確かに普通に使ってたな」

「でっしょー! 私の言ったとおり! さすが私よく気付く!」

「堂々と最初に言った俺を切り捨ててくれるのな瀬奈さんよお」

「はいはいルーニーは偉いねえ」

「だからルーニーは嫌だったのに……仕舞いにゃあ俺泣くぜ」

「うざっ。その無駄にデカイ身長で泣かれるほどうざいことはないね」

「……泣いていいか? 泣いていいのか俺?」

もはや琉二には哀れみしか無い。

「おー、せなっち何だかツンツンしてんねー。その内デレんの?」

そいつらはセットなのか。おまけなのか。

「また仮名仮名なの？ 何か疲れるな」

「今なんとなく変な当て字をされた気がするけど……ま、いいわ。
で、何かやってんの？」

「黒板消しについて話してんの」

「違う違うそっちじゃなくて……ほら、体育祭」

「そういえばそんなのあったね」

明らかに淡泊な反応を見せる瀬奈。が、そんなことでひるむ要では無いようだ。

「そうそうあるの。そんでー、お二人さんは何かペア戦の対策練ってんの？」

「……………」（瀬奈）

「あー、適当じゃあ駄目なのか？」

その一の一言に呆れる要。

「あんたら……細木じゃないけどその内死ぬわ。その危機管理のなさで」

「何でだよ？」

『死ぬ』と言われて聞く姿勢を改める一。

「部活の先輩に聞いたんだけどさー、去年は一年生以外のその試合はひどかったらしくて怪我こそ保健の先生に治してもらったけどしばらく廃人に近い状態だったらしいよ」

「べらぼうだな」

普段使わなそうな言葉で感想を済ませた一。

「だからウチが言いたいののは気を付けなさいよーって感じ」

「それはどーも」

「……マジで大丈夫？」

「やだなあかななそこまで心配されるとちょっと引くよ？」

いきなりの瀬奈乱入。折角の要の気遣いをぶち壊しやがった。

「へえそーゆー事言う？　ウチが親切にも親切心を込めて助言してるのに」

「寒気がするね」

「なっ……」

その言い方は予想しなかった。

「もっとシンプルに『お前ら出る種目を間違えたなあウチが見送ってやるからさっさと死んでこいやーあーっはっはっはー！』と言えば良いのに」

それは穿^{うが}ち過ぎた見方だろうと一は心で突っ込む。

さすがに酷い決めつけをされ、要は口角の片方を吊り上げた。

「……よく分かったよ。ならウチらしく勝負しようじゃん」
「いーよー？」

何やら挑発的な笑みを互いに浮かべている。まさに龍虎の図。もちろん目線の高さに要が龍で瀬奈が虎。

「ウチは個人種目で走り高跳びに出ることになってんだけど、その順位とそっちの試合の順位で高い方が勝ち。それでオツケー？」
「牧場」

それは了解の合図で良いのだろうか。

「その顔的にはオツケーだね。じゃあ罰ゲームは……」

中間試験もまだだというのにそこまで決めていられるのか。

「コンビニに出てる激辛スナックを一種類自腹で買い占めてその日の内に全て完食。スナックは勝った方が選ぶ」

「地味に金銭面と精神面と肉体面全てに絡んでるね……まあ最初だしそれでいいか。はい、指切り」

そのまま文字通りではない指切りを済ませた瀬奈と要はただならぬオーラを発し、その他大勢を寄せ付けなかった。

―――
その放課後。

「ん、お前らも試合に出るのか」

「そういうことになってますね」

すると副部長の長舟は僅かに笑みを浮かべて、

「これは……今年はいけるかもしれないな」

「何がですか？」

瀬奈と風璃は部長（大原ではない）と何かぎゃるとおくと言うもの
をしているようだ。
正直な所、一には主婦がブランド物のバッグについて語るのと区別
がつかない。

「なんとこの部活の部員は学年はズレても全員D組でな、さらに試
合に全員出場する」

「すると？」

「そう慌てるな」

慌てることなど何一つ無い、と言ってみたい一。

「俺が一年の頃からこの種目だけは得点が異様に高くてな、優勝し
たチームの得点の8……いや、7割はこれの得点だ」

「マジすか……」

体育祭の運営はやたらとバランスが狂っているらしい。

「あー、それで……」

さつき長舟がいけるかもしれないと言ったのはこの部活とD組が優
勝できる可能性が結構あることで、要がさつき順位で賭けを持ちか
けてきたのは得点だと話にならないからなのか、と二つ納得する。

「というわけだ、頑張れよ一」

檄の強さで肩を叩かれた。『激』ではない。

「ところでそっちは何話してるんだ？」

「ホカル先輩の知られざる私生活に、ズームイン」

「……なんとなく分かった」

おそらく『普段何してるの』とか『趣味は何ですか』などと聞いていたのだろう。

風璃がグーの手を部長に向けた。やはりその手にはエアマイクが握られているのだろう。

「じゃあ最後の質問でっす！ズバリ部長と副部長は付き合ってますかっ！」

すんげー核心。

「それは、無い」

「俺基本インドア。あいつアウトドア。二次元の空間にねじれを実現させるくらい無理なことだな」

見事に意見が一致した。果たして我々はこの状況をどう分析すべきか。

「それだけでっすか？」

「それだけじゃないが色々合わない点多すぎるからな、やっぱり無理だろうな」

つまり部活が共通しているだけの対極の存在と言いたいのだろうか、と勝手に想像する一。

「実は一回付き合ってみたとか。大丈夫でっすよこれオフレコっすから」

「どこにそんな記録する機材があるんだか……いや、一回も付き合っただけじゃないな」

オフレコ…記録に残さず報道しないこと。

「というか……」

風璃が何かに気づいた風で、独り言のように言葉を漏らす。

「何だ？」

「ホカル先輩に質問してたのにいつの間にか回答者伊東先輩になってますね」

「こいつあんまり喋りは得意じゃないからな」

確かに。

初対面の時はかなりまごついていた。あのテンパリ具合は中々見れたものではない。多分面接試験が鬼門なのだろう。

「なるほどなるほどなるほどなるほど……。……出ましたっ！　あなた達の運勢は――」

風璃がいきなり占いを始めた。多分いままでにそんなことやったことは……、

「ハッターは止めとけよ？」

「ういーっす」

おそろしく素直だ。

「しかし何でこう恋愛に繋がたがるんだお前らは」

「先輩、質問してんのは風璃一人です」

自分らは違う、と言っておく。

「そこのお前の彼女は興味津々みたいだが？」

文脈的に瀬奈が目をキラキラさせて死のノートに他人の名前を……
違う、目を光らせて長舟のセリフを待っていたと言いたい、のは、
分かるが、

「あいつは彼女とかじゃありませんよ」

「そうだよ先輩自分に矛先向いたからってそうゆうの良くないって」

む、意見の一致。……いや、この場合ズレた方が問題か。

「おーつとあっしはまさかの仲間外れか！？ 大変だ！ ハジメち

やんセナちゃんトライアングルと三角関係作らないと！」

「やめい」

「やっぱし？」

その後説得に1分かかった。

第19話 ラーフルなんて初めて聞いた（後書き）

業務連絡。

第5話で、前から少し気になっていた描写を勝手ながら修正させていただきました。まあ別段気にしなくてもいいのですが（汗
結構本筋以外はいきあたりばったりで書いてますんでたまにこういうことがあると思います。

第20話 瀬奈は小粒でもビリリと痛かった（前書き）

中間試験前。登場人物2人。なのにいつもより文字数が多めという謎。

第20話 瀬奈は小粒でもビリリと痛かった

「うあー」

「……」

「いやだー」

「……」

「あーもー!」

「……」

「なんかしゃべれえ!」

「っとお、痛えっ!」

7時ジャスト。

どういう原理か、真面一は瀬奈の家のダイニングにある椅子ごとこけさせられた。

ぼーっとテレビを見ていたらなんか小さい影が足下に近づいてた、ような気がする。小さいと言ったらぶっ殺されるが。

「なんなんだよ……メシは食っただろ」

邪魔にならないように黙っていたのにも関わらない暴力に不機嫌な声でふてくされた一に対し瀬奈はこちらを見下したまままるで肺機能の全てを使ったように息を吐き出した。さすがに食って寝て、寝て食っての生き物ではないらしい。

「つつつつはあ……。そんなに単純じゃないから。で、何でイチは人が中間試験の勉強を頑張ってるのにそれをあざ笑うかのようここにいてしかもテレビ見てんのかって聞いてんだけど?」

訊いていたのか。

しかしどこにそんな文脈があったのか一には理解できなかった。

「あー、それはな……」

「はいはいもうわかったよー言いたくないならけっこうかっこうあーもうこれだから賢い人は困っちゃうよねー」

なんか嫌な決めつけられ方をされた。少し言い淀んだだけでこれかよ、とても言いたくなる。

「いや、俺が賢いんじゃないくてな、スキル使ったらの話とか色々ややこしくてな」

「……え？ スキル使ったらってなにそれどうゆうこと？」

瀬奈の興味（というか妬み？）のベクトルが一点に集中した。なんかまた厄介そうな予感がバシバシとしてきた。

「いやまあ個人の努力の範囲って言えばそうだしアウトではないはずなんだが――あいでっ!？」

「回りくどい遠回しはいいからさっさと教えろうい! ……ってどうしたの？」

明らかに痺しびれてないのに痺れを切らした瀬奈が例によって例のごとく一の頭をひっ掴み揺らしてくる暴挙に出た。

資源活用のためにドナーカードの所持を一瞬だけ考えた。が、その瞬間に殺人犯やなせせなに証拠隠滅されるのが容易に想像でき、結局諦めた。そしてそのひっ掴みだが、いつも一がそれに耐えられるという法則などどこにも無い。

「誰かさんのせいで舌を噛んだんだよこれが不思議なことになあ……!」

神経を操って痛覚の信号は遮断できるが、それでも最初に來た痛みまでは掻き消せず、不快感が残る。しかも勢いの舌を飲んで死ぬレベルの痛さだった気がする。死んでいないから大丈夫なのだろうけど。

「あらーそれはかわいそうにー。で、スキル使ったらってのは何？」

「……おまえ最低だな」

いつか絶対に訴えてやる。果たしていくら取れるだろうか……。とまさか本気で考えているわけではない。頭を切り替えて話を始める。

「あー……まず俺のスキルは神経を使う。それは良いか？」

「オッケー」

滑り出しは順調――

「次に、神経は中枢神経と末梢神経に――」

「ちよっと待ってそれ分かんないって」

――かと思いきや少し踏み込もうとした所で瀬奈に遮られ、一はがっくりする。

中学校の頃の一の理科の先生は教科書に（全く）縛られない授業をしてくれたから――かどうかは分からないが――知っていたのだがどうやら瀬奈は知らないらしい。

「えっとな……普通に脳みそと背骨の途中までにあるのが中枢神経で、他の手足なんかにあるのが末梢神経……でいいのか？」

「いや私知んないから」

「あー、そうだった……それで俺のスキルではどっちも操れるから、まあ神経系全体を自由にあーだこーだ出来て、脳みそも神経の区分なのはさっき言ったよな……その脳みその記憶を司るところ……この時は海馬らしいんだけど、そこを刺激すれば簡単に覚える感じだな」

側頭葉ならもっと強い長期記憶とかなんたらになるらしいが聞きかじりの知識でこれ以上面倒臭いことを話すといくら相手が瀬奈でもボロが出そうだ。

「えーと、つまり記憶力が強い？」

「……………」

まあ、そうなんだが……実際そうなんだけど。

こんな返しが来るならもっとテキストに説明してもよかったのではないだろうか。脳も神経の一部なんだぞ、とか。

「あー、まあそうだよな。それで少しでも『覚えよう』と思えば『定着』するわけなんだよな」

ここは我ながらあっさりした説明だと嘆息する。

「便利じゃん」

「言っとくけどずっとその状態だと限りなく10万3000冊に近づくぞ。頭飽和するぞ」

「なんか知らないけどすごいね」

いや、もちろん誇張表現だが。^{ビッグマウス}

「とにかく、そんなわけだから授業で一回完璧に覚えられれば後は

コピー以下の劣化にしかないから休んでるだけだ」

「……ちよっと考えさせて」

珍しいわけではないが瀬奈が首を傾^{かし}げて考え出した。

まさか『こいつが考え事だ?!? まさか槍（という名のゲイボルグ&グングニル!）が降るか!? 神罰か!?』とか失礼なこと考えるわけがない……いや、少しよぎったけれど。

「記憶力良いつまり頭良いつまりテスト余裕つまり私馬鹿にされたよし殺——」

「待てコラ」

『殺』が『さつ』だったか『ころ（す）』だったかはどうでもいい。生きるか死ぬか、それが一番の問題だ。もちろん死ぬのはゴメンだが。

「何? 今から敵将討ち取ってみようかと思ったのに」

「おまえは俺に何を要求している」

最近になってコイツを人かどうか確かめてみたいと何回思ったか。少なくとも2、3回ではない。

「そんなの決まってるじゃん。死にたくなければ私に勉強を教えろ」

「……あー、そう来たか」

時刻は午後の7時前。

瀬奈の就寝^{リミット}時間はあと2時間。

テスト、翌日から三教科ずつ。

「……って意外とヤバくね？」

というわけでテーブルには明日分のテスト科目の教科書とノートが雑多に置かれて、瀬奈がそいつらとにらめっこしているのを一は心底つまらなさそうに眺めている（ように見える）。

ついににらめっこに負け、テーブルに突っ伏す瀬奈。

「指数法則と、因数分解と有理数無理数……ああ、解の公式は大丈夫か」

意外とあの担任の数学は容赦なく進むのでついてこれないと夏休みに響く。ので優先的に一（記憶担当）が瀬奈の忘れているところをアドバイスする。

「バカにしてんの」

「教える立場ってのは多少の上から目線があるのは当たり前だと思っただ俺は一体何なんだ？」

これはモンスターペアレントなどが台頭した今の時勢、偏見と言えるかもしれない。

「バカ」

「おい」

そんな偏見を瀬奈は二文字で切り伏せた。PTAより強そうだ。

「って今はそんなことやってる場合じゃないだろ。一旦数学1は終

わりにして次は現代社会でもやるか」

「えゝまだやんのゝ？」

「赤点回避だけなら時間かかんないから。ささっとやらねえと時間がなくなるぞ」

「ううううゝこうして私は貴重な女子高生ライフをよう………」
「は？」

頭をもたげたのでこちらに恨み言でもぶつけるのかと思いきや、いきなり奇妙な（かわいいこともないこともない）声を上げ、俯いた。いわゆる寝落ち。

そして落ちる直前に向けていた目線だが、どうやら一の方ではなく後ろにある時計に向かっていたようで、見ればそれはもう見事に9時をオーバーしていた。

「めでたくタイムアップかい……こいつどうやってきたんだよ高校受験」

うつ伏せなので顔は見えないが、規則正しい寝息が背中の上下で分かる。

一はそれを見てため息をつく。この息が不幸だったらどれだけ自分は幸運に近づいているのだろうか。

「しかし何だこの体質……異常だろ」

どう考えても何の訓練もない人間が時間に正確な生活を一次欲求レベルでこなせるわけがないのは高校一年の一でも分かる。いや、訓練とかマンガでしか知らないが。

――もしかして。

と一の脳裏にある仮説……とは言い難いが予想が生まれた。

「……………」

一はテーブルを回りこみ、そこに乗せられている瀬奈の手にそっと触れた。

「（……これって琉二あたりに見られたら絶対なんか言われそうだよなあ）さて……コイツの一次欲求に何が潜んでいるかね——！？」

バシイイイイッ！

「あ……うっ……！」

そしてスキルを使った瞬間、手から何か一のものでない電気信号が神経を上り、脳がショートしたかのような強烈な刺激となって伝わった。

そしてそれが痛みとなって容赦なく全身に広がる。

目が、耳が、鼻が、口が腕が指が脚が足が内蔵が痛い。とにかく痛い。火傷のような気もするし切り傷の痛みかもしれない、骨が折れてるかどうかわからないがそんな痛さもある。あまりに痛くて声もはつきりと出ない。

「か、あ……っ！」

その全身くまない痛みの影響で一時的に上と下の区別もつかなくなる程に平衡感覚^{バランス}を失った一はフラフラと前に倒れていき――

「すう……すう……」

——無理矢理に解釈すれば瀬奈に抱きつこうとしているようにも見えて。

（いやいやマズいだろここでそっちに行くとか狂気の沙汰だろ踏ん張れよ俺責めて後ろに倒れとけよってそうだよ頭クラクラしてんだから上手く動けないんだよねって何で思考回路がショートしてる割には良く働いてん——）

何もできずに（不本意ながら）ただ倒れるだけかと思いきや。

「……ごっ!？」

瀬奈の上体が起き上がり、起き抜けの伸びから放たれた腕がカウンター気味に一の胸を的確にクリンヒット。全身が死ぬほど痛い上に一瞬息が止まった（ついでに後ろに倒れた）。

……なるほど先程の思考速度の増大は走馬灯だったわけか。

「がっ……ごぼっ」

「ふああああ……ねむ……って何してんのイチ？」

「……ん？ 治ったか？」

「治った？」

都合のいいことにさっきまで神経がイカレていたのは一過性のものだったらしく、瀬奈に喝を入れてもらったせいか、はたまた一周してハイになったのかきれいさっぱり無くなった。おかげでいつも通り喋ることができた。

「あーいや……なにしてたんだろうなー自分でもよく分からないことが最近多いんだよね困ったことにハハハ」

「えーと、お大事に？」

病人確定（？）。

「結構残酷だなそのセリフ……」

『あなたに触ってクラツとききましたところあなた様の拳に打たれその衝撃に心酔しておりました』などと言えはあらゆる意味で破滅しかねない。

「そういえばイチは何でここにいるの？」

「何でって……試験勉強の手伝いしろっておまえが言うから見てやつたんだが急に……」

……あれ？　と思ったのは一の方だけのようだ。

一は瀬奈を注意深く見る。

「ん？　人の顔見て何だまってるの」

いえ、決してやましい気持ちではないので。

「おまえ……今何時か分かってるか？」

「えーと、9時32分だね……って……あれ？」

誘導されて初めて気づいた瀬奈。

「私……起きてる？」

「ぼっちりと」

「……夢とかじゃないよね？　いつもの願望とか妄想じゃない？」

自分で妄想とか言うほど浮ついているらしい。

「俺が痛えから夢じゃないんだろ。なんなら自分の頬でも引っ張ってみればいいだろ」

「じゃあ——」

「俺のじゃねえ、おまえのだ」

瀬奈の手が自分ではなくこちらにのびてきていた。油断も隙もあったもんじゃない。

「ちっ」

「何でだよ」

「さあね」

瀬奈なら『たてたてよこよこまるかいてちょん♪』くらいマジでやりかねない。

「ああそう……で、軌道修正するとこの時間でこの状況なんだが……何か思い当たることはあるか？」

「まったく無いね」

ずばり即答。果たして考えているのか。しかし瀬奈に触った事がバレてないのが分かりある意味良かったと思う。

「そうか……じゃあやっぱりさっきのやつか……？」

「さっき？」

すかさず反応した瀬奈からすかさず顔を反らす一。口元が最近緩んでいるのか、油断しきっているのか。

「ねえ何でそっぽ向いてんの。さっきとかまさか私が寝てる間

に……」

一人で身を寄せて見せる瀬奈を見て一はすかさず弁解をする。

「いやいやそれは無いからな。……いいか？ 正直に言うぞ、もしかしたら俺のスキルでおまえのその体質どうにかなったかもしれない」

「……え？ 治った？」

自信ありげに言ったがそうつぶらで純心な瞳を向けられるとその砂上の楼閣並の自信は地震雷火事親父と水害と白アリ以外の原因で壊れそうになる。
きつとその時原因は鬼嫁になるだろう。いやどんな状況だそれ。

「あー、まだ確定じゃないから。まだ様子見だからな、俺医者と違うし——」

「やったー！！ 治ったよーわーい！！」

ううむ、諸手を挙げて喜んでらっしゃる。ここは一緒になって喜ぶべき——

「——じゃねえ！ 近所からクレーム来るから止めろ」

「大丈夫だってー今まで近所迷惑かけたことないから」

「嘘だろおい……」

どう見たって今の瀬奈は狂喜乱舞^{フィーバータイム}。上にも下にも隣にも響く……、いや隣は一だけだった。204は空き家。

しかし上と下は居るんだから止めないといけない事に変わりはない。

「よーし瀬奈！ いえーい」

片手を挙げて柄にもないセリフを発し、ハイタッチを決めようぜと心意気で伝える。

いつもの一のテンションからすればちゃんちゃらおかしいあからさまな演技にも関わらず瀬奈はテンションのメーターが振り切れていくらしく、疑いをまったく見せずに応じた。

「いえー……すう」

い、と言いかけたところでぐでんとあお向けに倒れた。

「……ホントおまえ効きやすいのな」

秘技・プラシーボ睡眠。人体に優しいぜ。

「——とかカッコつけてもしょうがないよな……こちとらただの親がいないだけの今時どこかにはいるような普通な高校生だって。そんなやつに裏社会参入とか異世界参上とかさせんなよ天の神様……ってそういう昇天した人は神様と同じ土俵に立ってるのか……？ いや、どうでもいいか」

誰に言っているのか自分でもわからない。

とここで目の前の状況を再確認する。テーブルの上には教科書とノートが雑に開かれている。これは問題ない。少し（認めたくないものから）離れてキッチンに目を向ける。……他人様のものということもあり、丁寧に片づけられていてこれも問題なし。次に（認めたくない存在のいる）テーブル脇を通過し、テレビとソファのある空間に目を向けた。リモコンの所在がちよっと分からなくなっている以外はオールグリーン。そして、

（くそっ、もつと他に見るところはないのか！ ……食器棚とかおやつ棚とか、冷蔵庫もあるじゃねえかよ。……間抜けか俺は）

なんかバカらしくなったのでセルフチェックを諦め、いい加減に一番の問題に目を向けることにした。さっきは見えなかった寝顔が見える。

「さてコイツを運んで寝かすか起こすかそれとも放置か……」

考える仕草をして何もない壁の模様を眺めた。

放置、後が怖い、却下。となると部屋まで運ぶか起こしてサヨナラかのどちらかになる。

もう一度瀬奈の寝顔を見てみる。

——黒々とした一のそれと違い、心落ち着くような不思議な色合いを持った茶色の髪はしなやかな波を描いて床に広がり、目を閉じた顔は普段の子供っぽさと乱暴さからは想像もつかないほど穏やかで、いつの間にかその顔をもう少しよく見ていたいとかそんな事を考え始めて、

「……いや、『4番目』は無いだろオイちょっとおかしいんじゃないのか？」

まさか、いやいやまさかまさかいいいやいや。どうしてそこに行き着くのでございましたの？ わけが分からない。

——どうして『もう少しこのまま』とか。

気づけば頭と胴体がサヨナラってなるかもしれないような奴に対して何をバカなこと考えたんだ。おのれは。

餅ついて落ち着き、尻について餅つき、やっこのことでひっくり返りかけて元に戻り冷静と情熱を見失いその間もあやふやに……それくらいのことを考えてようやく思考が復活してきた。そして一つの事実に気づき、驚愕する。

（……寝顔か！？ 寝顔なのか俺の趣味というかフェチは！ 畜生そんなもの無いと信じていたのに！）

どうやらまだバグが残っているようだ。
と一人苦悩していると、

「うう……、んー？ やっぱり寝てたの私……？」

いろいろとびあがりました。しんぞうとか、きもとか、それよりころのなかでぼくがいちばんとびあがりました。とつてもびっくりしました。りゅうじくんのかおにいたずらしていたことがわかったらどうしようかとおもいました。

「でも今起きてるし……あれ？ イチ、どうしたの？」

その言葉でようやく小学生の頃に書いた林間学校の事を書いた作文の一節を思い出すほどのショックから回復し、瀬奈を見つめ直す。多分いつも通りになっていると思う。

「あー、俺ちよっともう眠いしおまえも今まで9時寝でいきなり徹夜とかはハードル高いだろうし、今日はもう寝ところか」

「？ まだまだ全然いけそうなんだけど？」

さっきまでブレーカーのような体質だったくせにどの口が言うか。

「試験は12時過ぎまであるから……あと14時間以上ずっと起きてられるんなら俺も頑張らないこともないけど」

強制はしない、ということを一応アピールしながら具体的に示す。単に責任を丸投げしただけなのだが。

「うっ……そうリアルな数字を出されるとキツいかもって思えてきた」

「そうそう、だから今は寝とけ」

ここで徹夜を選択するほどせっぱ詰まってるわけでもないのに瀨奈も意外と簡単に折れてくれた。

……正直、肉体的にも精神的にも疲れたのでとりあえず休憩を挟んでおきたかっただけなのだが。手に触れると衝撃が走るし（ずぎゅーん、ずぎゅーんなんかではなく）何だか自分の中で寝顔フェチ疑惑が出現するし。

「まあそれも一理あるよね、じゃ、おやすみー」

「ああ」

おやすみ、といって一は瀨奈の部屋から出ていく。

夜風は梅雨時のせいかな、ジメジメしていて心地いいとまではいかなかったが、一に何かを運んできたようだった。

第21話 外来種って怖ろしいと思う(前書き)

ついにオカルト突入？ いや、だからといって科学モノでもござい
ませんが。

第21話 外来種って怖ろしいと思う

夢を見た。いや、この時は『見た』という表現は少し違うのかもしれない。とりあえず寝ていたのだから夢を……感じた、とでも言え
ばいいのだろうか。

もっと正確に言えば五感のどれも無い、純粋な『会話』とかそういう
ったものなのかもしれない。

その内容をは大体こんな感じだった。

「おっす。オラごくー」

「黙れ何だお前」

いきなりツツコンでしまった。

しかしツツコンだ感覚は異様なもので、なんというか……自分で自
分につつこんで……まさかの一人ツツコミか。

「うはっ！　ぐっさあああつと来たかもねー」

「どっちだよ」

「どっちでもおっけ。んでおれはね……何だっけ？」

現実だったらここできくつとコケないこともない。

「誰（Who）と言う前に何（What）かよ。面倒だな……まあ
いいや、じゃあお前の名前は……日足^{ひあし}で」

「……なんだよその一年生でも書ける名前はさー」

明らかに適当に付けた名前。だが思ったほど拒絶されなかったので
これで通すことにした。

「どうせ俺の脳内だけだろうが」

「輸入品ですけどねー。じゃあおれの名前はヒアシって事でよろしくベイベ」

「古いな……」

「さて本題行くぜっ」

なんだかよく分からんが切り替えと切り返しが早いことは分かった。

「つつてもお前の正体がまず分からん」

「そしておれもよう知らん」

「ふざけんな」

そう答えるだろうなーという気はしていたのだが。

「おれは闇イチだ！」

「何だその戦争名物（闇市）」

これは予想していなかった。

「千年なんちゃらを手にしたものはもれなくCoolかつCrazy
VそしてMadな人格をプレゼント！」

「ああ、そっちか……ってかなり問題じゃねえかよ！ 罰☆ゲーム
とかお断りだからな」

「いやまあそれはジョーダンというわけで、————に干渉した誰
かさんのせいで事故ったわけですよアレ、まさかおれまで探られる
とは思わなかったりびっくりしたり」

途中で遠回しに責められた。ような気がする。

「事故でお前ここにいるのかよ」

「おーっと質問は随時受付、しかし2つまで」

「普通3じゃねえのかよ……あー、お前は今まで瀬奈の中にいたのか？」

さっきの『イチ』といい、そう考えるのが妥当な気がしていた。

「はい1つ目の質問受け付けました♪ その答えはベリィイエス。さっきも言ったように難民なんでどーぞよろしく！ じゃあその調子でどしどしおーぼしてヨロシク！」

「あと1つだろうが……何で瀬奈にあんな体質を加えた」

『なんとなく』 答えは分かっているがあえて聞いてみる。

「おおっと怒らないでくれよ。おれなりに考えた策よ？ こうしておけば危ないことにゃあなりにくいはずだぜいと考えたりした策だってばよ？」

「結果突然倒れたりする危険なことがあってもかよ」

寝てれば安全ってガキの発想じゃないのか。っていうのはガキに失礼なのだろうか。

「そうすりゃあ誰かさんが面倒見てくれるじゃん。いちおーマジでやばいときはふんばって回避するし」

「なんか賭けみたいな事すんのな」

「結果成功。ぶい」

といっても視覚も無いのでVサイン自体は見えない。

「あっそう。そりゃあ良かったな」

「つーことで質問終了。こっからはお願いタイムっす」

「お願い……ね」

「多分おれがいなくなったから——は——————と思うんだ。だから頼むわー」

一応、真剣な思いは伝わってくる。

「どうしろって言うんだよ……ってまさか」

「そうそうホントはアレなのよこれがよ。今のうちに言っとくけど

——は——使いなわけよ」

「お前とはずいぶん違うんだな」

「そりゃあだからこそあんちゃんの方が居心地いいんだけどな」

「そんなもんなのか……？」

脳内が居心地良いって何だ。からっぽでスペースがあるということでないことを祈る。

「とにかく俺もきょーりよくするから頼んだぜっ！　じゃあな！

おれはあんたが起きてる間は出れないからこれでお開きかなっ」

「あっそう」

「ええ……なあ……もうちょいなんか名残惜しんでくれよ」

「死に際ならな」

「条件シビアっ！　くっそお命までは張れねえ……！　ん？　おっ

と嫌な予感が」

「は？」

その瞬間、体がぐるんと回転する感覚がして視覚が冴えた。

急転直下。いや、夢ではなく現実で。

目の前には、みるみる近づいてくる床。背中には毎晩お世話になっ

てる布団の感触。

「うらああああ！」

「うわああああ!？」

目覚めた瞬間うつ伏せに落下する恐怖。重力の素晴らしさを感じた。そして、ついさっきまで重力に逆らっていたが当然一の後を追うことになったベッドの追撃。

「ぶばあっ！」

「くおおうらあああ7時過ぎたぞこのイチがああああ!！」

「……………」

なぜここにコイツがいるんだ。って今コイツ布団……ベッド返し決めやがったのか？

「5時に起きちゃった上にイチは来ないし腹減ったし試験勉強もしないといけなくて勉強ついでに気をまぎらわしたけどついに限界突破してこっちに来たところによくも気持よさそうに寝ていやがったなこのやろーイチてめー！」

「…………あああああもう……………」

起き抜けの人に聞かせるセリフの量とは思えない。

セリフの解析の面倒臭さにも後押しされ、瀬奈の相手よりも現状把握を優先させてもらうことにした。

現在地、自室――の床に這はいつくばっていて、背中には布団と固いベッド（アルミ合金の超軽量!）の感触。横から見える風景にあったのは、別に普段見ているわけではないが見慣れた足が2本。

時間、一緒に引っくり返った携帯によれば確かに7時をやや過ぎて

いた。

体の状態、怪我の1つもない。果たして良いのか悪いのか。ある程度確認も終わったので這い出るとそこには『理不尽』と書いて『やなせせな』と読むがいた。

「訴えるぞおまえちよつと……」

「その前に私が餓死するから訴えられてもどうしようもないかな」
自滅的な自虐だ。

「……そういやもう飢えて倒れなくなったな」

ここに来てようやく瀬奈の異常体質が治ったのが一に馴染んできた。

「だからって、言っただってねえっ、おなか減ってるのに、変わりないのっ！」

しかしそんな呑気な事を言っただけで瀬奈に寝巻きの襟を掴まれ（油断した！）、読点ごとに揺さぶられた。

「分かった分かった作るから十分待て。しかも材料そっちにしか無い」

思えば、すっかり偏った生活をしてしまっていたことに今更気づく。さすがに衣食住の衣と住は分けているが、食に限れば作るのは完全に一だし、食材の置き場所は瀬奈の部屋だ。

これはもしかして変なのだろうかと自問するが、それ以上のことを考える余裕がなくなった。

「じゃあ今すぐこっちに来てさっさと作ってよ」

「……残念ながら俺の寝相が悪いせいか寝床が酷くてな。それはもう今すぐに直してやりたいくらいなんだが手伝ってくれたりするか？」

「……エンリョしとく」

一の遠回しな要求はスルー。薄情にもスツと出て行く瀬奈。

202号室からも完全に出たのを見計らい、一は溜め息を……つけなかった。その額からは嫌な汗がジワジワと溢れてくる。

「う……え、吐くかもしれない……！」

とりあえず残りカスぐらいには掃きだめてあるプライドにかけて水回りにたどり着くまで吐いてやる気はさらさらないが、さっきの瀬奈の揺すりがきいたのか、酷く頭がぐらぐらする。

「くそっ、無理にこういうのスキルで抑えても体に悪いしな……やばいな」

と言ったその時、何も入っていない胃袋が無理に逆流を起こした。もしかしたら腸から戻ってきているのかもしれない。

「……！？ やっぱ一気に来た……！」

急いでダッシュ。この際トイレより近い洗面所でも構わない。

「うおおおお……！！」

——この先描写に意味とモラルが無いので自粛——

「うっ、まだ軽く吐き気が……なんなんだアイツの揺さぶりは……？」

刹那の差で無事にリバーズ完了。

そして瀬奈の堪忍袋という新たな制限時間^{リミット}まで残り6分。新たなる刹那的戦いの幕開け。

「トースト×2とヨーグルトに目玉焼きと千切ったレタスに後は……試験あるし、バナナかねえ……」

そんなことをつぶやきながらとなりの部屋にふらふら歩いていった。

――

「おえいーっす……ってテンション低いねえ。なんかあったのさ？」

風璃が話しかけてくるが、あまり耳に入ってこない。

それもそのはず、実は朝食もあまり食えず、瀬奈を先に行かせてベツドを片付けたりなんかしている内に時間が差し迫っていることに気付いて死にも狂いのマッハで参上した次第の一。朝からスタミナが絶不調だ。

「くそ……視界がふざけてアホみてえだ」

「おーっとまさかの体調不良のため保健室で試験とかかい？ 環境はよろしいと存じまするが？」

一は薬が嫌いなのでその臭いがある保健室も嫌いだ。どのくらい嫌いかと言えば……まあ、絆創膏ばんそうこうをもらいに行くのをためらうぐらいなのだが。

「悪い……あんま喋れないから……」

「まさかのお酒？　二日酔いとかいうエキセントリック？」

意味は知っているが通じている気がしない。と考えるのも一苦労だった。

「いや、アルコールとかじゃないからな……」

「まさか……お薬か!？」

俺にそんなものを手に入れるルートは無い。

「……家からは小麦粉と片栗粉（……ってそれは瀬奈の部屋に移したんだった）と風邪薬と半分の優しさしか出ねえ」

もういくつかあるだろうが法に触れるようなものは無いはずの市販の薬ばかりだ。

「じゃあなんばしよつと？」

「ちょっと俺でも信じられない事だからまだコメントは控えさせてもらう……」

「具合悪そうな割にはハジメちゃん余裕だね。若さ爆発？」

そのセリフに『若さの爆発の後に残るのは老いか。それもいい』とかいうフレーズを考えた自分にムカついた。

「お前に話しかけられたから休むのあきらめてスキルでちよつとド
ーピング……じゃない、麻酔かけた」

具体的には平衡感覚をほぼ閉じ、アセチルサリチル酸的な作用で鎮
痛とかしている状態。

「ハァー、便利だねえ」

「明らか体に良くないけどな……」

おかげで体の感覚が鈍くなっている上に頭もボーッとなりかかつて
いる。こんな状態で試験なんてきちんと受けられるとはどうしても
思えない。

そう考えた一のおよそ確実な不安はやはり、不安のままでは終わら
なかった。

――――

試験1日目終了。

「ねえねえどうだったあ？」 「サイアクだよー、最初からミスるし
なんかヤマ外れるし」

――俺は俺でなく試験にまともに考えることができなかったすつか
らかんです（意識がもーろーとしてます）。

「やっべーよしょっぱなから赤点かもしれねえよ」 「大丈夫かお前。
この先が思いやられるな……」

――キミ達先があるんだろいいよね俺もしかしたら今現在すら思い

やられるひゃっほう刹那主義的なもう終わりやん（意識が裏返って逆転しています）。

「うっそーふーりんあったまいーなー。ちょっと分けてよその才能」
「能ある鷹は爪を隠す……フォッフォッフォォー……ってバルタン見せつけてるし！ しかも爪じゃなくてハサミじゃーん！」

「ふーりんなに言ってるのかわかんないよ……あれ、イチどうしたの？」

「結局主人公が行かなきゃ賢者の石とか出なかったんだからわざわざあんな危ない橋渡んなくてもいいと思うんだけどそこどうなんだよ。一巻しか読んでないから全然わかんねえよ。以下続刊読めばわかんのか？ じゃあ買うのか？ 生活死ぬのか？」

「うわぁ……大丈夫じゃなさそう」

「そうかい？ ふーりんは言ってることは分かるじえ」

「ふははもうだめだ終わりだー心の扉シャッターガラガラポン」

「……えっ？ ちょっとイチ？ イチ！？ ……！！ ……」

……………。

「うーん、元々熱があつたみたいな感じだね。でもただの風邪にしては症状が重すぎるねー。いきなりひっくり返したり揺さぶったりなんかの乱暴なことされてたらそれで弱ったのかもしれないけどねーっ☆」

うん？ なんかひっくり返るとか揺さぶられるとか色々デジャヴな感じ。

「あははまっさかー……あーほっとした」

「ま、治ったから一応だいじょうぶい☆」

「いやーいきなり気絶したハジメちゃんなんて初めて見た気分」

「気分って何だ」

なんとなくぬつとした登場をしてみた一。

「わっ」（予想通りの反応ありがとう瀬奈）

「本当はどっかで見たかもしれないじゃーん」（成程俺の質問に答えたわけだな風璃）

「おっはー久しぶりっ☆」（えっと……毎週日曜か土曜に嫌々会ってるから3〜4日振りか、今日は厄々々々日なんだろうなきつと）

一通り3人のリアクションに分析を付け加えて頭の体操をしてみた。それだけ。

ぱっと目を覚まして起きあがると、まず自分の上に乗っかっている白い布団が目に入り、瀬奈、風璃、そして……何故かゴールデンウィークに数年振りに再会したコスプレ好きの稲穂愛美。格好はナースっぽい。というかナースなのだろう。普通に保健医姿でもコスプレの範疇に含まれるのだろうか、そこはこだわり以外の何者でもなさそうだ。

「……とりあえずおっはーと言っておけばいいのか？　この場合」

部屋の中にあるものからして、どうやらここは保健室のようだ。ついでに壁に掛かっている時計を確認すると2時に差し掛かろうというところだった。

そこまでは普通に分かるのだが、困ったことに試験を終える直前辺りからの記憶がないのでどう言った経緯でここに運ばれて（多分）来たのかさっぱりだった。

「どっちでもいいーじゃん。で、イチさあ、何でここに来たか覚えてる？」

「ない」「試験の後倒れたのさー」

簡潔な即答で返すとさらに速い返しが風璃の口から聞こえた。

「はあ……貧血かねえ」

そんなこと今まで一回もなかったのにいきなり起こるわけないのだが。

「なんか意味わかんないことしゃべってたけど」

「マジかよ……」

是非その記憶は墓に前もって埋めて置いて欲しい。持っていくだけじゃ安心できない。

「でもそんな時から意識はつきりしてなかったんだねー。意外とハジメちゃんって頑張るタイプだったけ？」

「手は抜かないってのはあるかもな」

「はいはいお話はそこまでー後は先生に任せてもう帰りなさい」

愛美がそう言うのと二人はさっさと出ていった。ここまで付き添ってくれていたことを考えると薄情な、と思うのも失礼だろうか。

「……さて、」

「何でここにいるんですか」

まず存在理由の証明を求めておく。納得できない。

「ああもう、つれないなあ。別に保健の先生やってることは小学生の時から言ってるでしょう？」

ここだとは聞いてない。そのことを問うと「あ、そうだった？ しっぱいしっぱい♪」……言葉も無い。

「本題？ に戻るわね。……一くん最近何かあった？」

普段のおちゃらけとは真逆の真剣さで訪ねられて面食らう一。表情には出さないのだが。

「どういうことですか」

「あのね、だから神経律ハーネスともあろう一くんが倒れるなんてのはよっぽどだと思ふのよ。今ここで解決しないと試験も後はずっとここで受けることになるし来週の試合に……出場するのよね？」

「はい」

「それもナースストップかけることになるかもね」

「ドクターじゃないのかよ」

「ふざけないの」

「すいません」

この人が真剣になるとは。うん、これはただ事ではない。という判断基準が悲しくなってくる。

「というわけで、何か心当たりある？」

――
鞆がここにないに気付いて教室に戻ろうと保健室を出ると瀬奈

が待っていた。のに気づけなかった。

「……………」

「ってこら気付けこんのイチがあああああああ！」

だって小さい……。

「……はっ！？ 危ねえ！」

ハジメは ひらりと みをかわした！

ハジメは にげだした！

しかしまわりこまれてしまった！

セナの こうげ——

「——ってちょっと待ってマジで病み上がり^にに手を上げないで！
特におまえのは致命的だから！」

今朝のそれとか。

「ちっ……」

舌打ちとは行儀の悪い。いったい誰が^{しつけ}躾てるんだ……まさか自分の
せいとは思いたくない。

「あー、ひとついいか？」

「なに？」

「……しばらくその暴力やめてくんないか？ ちょっと俺最近調子
悪いっぽいからシャレにならないことになる」

「ふーん、ま、じゃあそれなりに人を怒らせないように気をつけて
ね」

「は？」

意味がわからない。いつもしょうもないことで勝手に怒られてるような気がする。

「今だって（背の低い）私を無視したじゃない。今朝もなんか知らないけど寝坊して朝ご飯危うく作りそなたたりさあ、最低限のこととはやってから言ってよ。それなら私も気をつけたりできるけど」

「半分病気の奴に言うことかそれ……」

半分は既に死んでいる。気持ちの上で。

「そもそも今のイチのどこが病気なのかわかんないんだけど？」

「……それもそうか」

まさか夢の話など普通信じたりはしないだろう。今のところあのコスプレイヤーだけだ。

「んじゃ、さっそくうちに帰って昼ご飯の準備頼んだ」

差し出されたその手には鞆が握られていた。下がったままの片方の手にはもう一つ鞆がある。

「あー、サンキューな」

どうやら教室まで戻って鞆を取ってきてくれたようだ。何とも親切的な、と少し感動したのもつかの間。

「ああそれとこっちも」

「……………」

もう一つも差し出された。

「ん？ 何しらたき食べたような顔してんの」

「……なんで？」

「親切の料金」

この後ぜひポケットにある五円玉で支払わせてくださいとやけくそ
気味に言ったが無視され、しまいには遁走されてしまい、二倍の苦
労しながら下校する羽目になった。
体調不良なのに。

第21話 外来種って怖ろしいと思う（後書き）

バトルとか期待されてる方いましたら（そもそもこの小説が期待されてるのか分からないのですが）もう少しお待ち下さい。中間試験終わったらもうすぐです。

第22話 ダメな大人にはならないように（前書き）

あらすじ

中間試験期間中。

第22話 ダメな大人にはならないように

「あれ、今日は起きるの早いんだね……おはよ……ふわああああ」

いつもより早めに朝のキッチンに立ったその時、寝間着姿の瀬奈が部屋から出てきた。いつもこんな平和だったら良いのと思わないこともない。

「……おまえが寝ぼけてんのがすごく新鮮に感じるな」

今までスイッチを切り替えるような生活だったから瀬奈に『間』というものを感じたことがなかった。いや、もちろん以前の方がおかしかったのであって、これはこれで人間らしくて良いことなのだが。

「あさごはんはあ？」

寝ぼけついでに後ろの方の『は』の発音がh aになっていた。と理解するのに1秒の10分の1かかった。

「今から作るんだよ。はあ……体質が治っても結局飯炊きかよ俺は——って」

と言ってる気付けばキッチンに立っていた。

「嫌な生活習慣だ……」

すっかりお世話係が身についてしまい、ため息と愚痴しか出ない一。そろそろ瀬奈に料理を教えてしまった方が後々楽なのは、と考え

る。

「あー、昨日は散々だったよなあ……最後のリーディングとかまるつきり記憶にございません、だし」

脳外科って診察券とか要るんだっけ、などと考えたがすぐに無駄なことだと思いを切り捨てた。

「結局のところ体調不良の原因は『日足』でしたー、とかどんなオチだよ」

日足は昨日の『夢』にも出てきて『ゴメンほんつつつとゴメン！もう無いから！立ち上げて時間かかるパソコンみたいなもんだから許してちょ！』とか必死な雰囲気伝えてきた。お前はウイルスソフトか。

「どっかでアンインストールしてくんねえかな……」

今現在でさえ頭の中に別の意識があるかと思うと……一種の妄想癖に陥ったのかと疑いかねないという悲しさ。

しかしそんな悩みとは無関係に時間は刻々と迫り……。

キンコンカンコンコン。

「試験開始」

一斉に紙を裏返す音が起こる。

回答科目は化学。今日最後の科目。

これ以上無いほどの基本問題ばかり。1年最初の間試験とはそんなものである。

一はほとんどの答えを適当に解答用紙に埋めた。

（あー、こんなもんか……でもやっぱダメだ。暗記科目おっそろしくつまんねえ）

50分の内20分ですべて埋め終え、暇になった一がそのまま寝ていようかと机に伏せかけたその時、

「すうー……すうー……」

（嘘だろ……）

瀬奈、撃沈。

今日は眠たそうだったからコーヒー牛乳でカフェイン取らせたというのに効果ゼロ。

なんという世話のしがいが無さだろうか。と視点を変えて右を見ると、

「うわ……」

琉二の奴も眠っていた。奇跡的にシャーペンをつつかえ棒にして額を支えている辺りただ者じゃない。そして同じく風璃までも寝ていた。

——やけに早すぎないか!?

すぐさま一は警戒して辺りを見回した。さすがに後ろはカンニングと疑われかねないので見なかったが、全員思い思いの姿勢で眠りに落ちていた。

(さすがにこれは誰かのイタズラを疑った方が——ッ!?)

突然、文字通りビビッとした感覚が一を伝いかけ、しかし一はそれを外へ弾き出した。

周囲の状況と合わせて一は当たりをつけた。

(さて、こんなふざけたことをしているのは——)

「担当教科は英文法で誕生日は終戦記念日、歳は27歳血液型はO型で身長177センチ体重76キロ、趣味はお金儲けの1—A担任の留居守先生、何のつもりでこんなことしてんですか?」

「んんー? 今は試験中だよ真面君。質問は受け付けないよ? それにオレの自己紹介良く覚えてたね!。あ、紙に印刷して渡してたんだっけかな」

頭の位置が極端に下がっているわけではないのに教卓まで垂れ下がった髪、隈の染み着いた細い目とその目に合った横長の縁なし眼鏡はどこか引きこも……いや、近寄りがたい陰鬱な雰囲気をかもし出している。

そして口調も暗いのだがセリフは明るい人のそれだから不自然でない。今にも懐から何かを持ち出しそうな性格の、しかも何を取り出すか悪い意味で見当のつかない人だ。

多分この人ほど本当に教師かどうかを疑った人物を一は知らない。

「うーん？ 普通は学年にいるかいなかレベルなんだけどねー。高校生なら」

「……（うちの中学には学年で軽く10名以上いたとは……言わない方が良いな）」

もちろん校庭にミステリーサークルは無いし、地脈のツボみたいなものもない。ただ――

――それら全てに一が手解きてほいをしていたりするのだが。

「それに俺は高校生なら確実に眠らせられると思ってただけどさ、この結果はちよつとその認識を改めないといけないかもしれないね」

いや、心底どうでもいい。この状況をどうにかしてほしい。

「さーて、作戦も失敗したし……さっさと帰りましょうかねえ」

けだるそうに立ち上がり、守は鈍い動作で教室から出ていった。というか逃げやがった。

しかしそれを追うつもりもなく、後に残された一はすっかり困り果て、

「……さーて、油断せず行こう……って俺が言ったってしょうがないよな」

とりあえず瀬奈に近づき触れてみる。いや、変な意味は無しで。

……伏せているから寝顔が見れなくて残念……と思わない、思ったら負けだ。多分。きつと。

探っていく内に、一は『つかんだ』。

「……！ あのセンコーふざけてやがる！ あああもうめんどくさい事になった……」

どうやらスキルを使おうとするとかしゃみが出るようにしたらしい。瀬奈がスキルを使えるかどうかとは全く別の話だが。

（……そこまでしてボーナス欲しいのかよあのウイルス野郎）

呆れながら一は次々とクラスメート達の首に触れていく。そして守の仕掛けた脳内トラップをことごとく打ち破る。

――

そしてトラップの内容は……まばたき、しゃっくり、右足が滑る、琉二に至っては涙と鼻血のコラボレーション。

「つてうわコイツもう鼻血出てるし……」

なんでだ。

とその時、窓際の瀬奈がむくりと起きあがった。

「……あれ、先生いないの？ ……おはよ……ってなんか今朝も言ったような気がするんだけど……」

「あー、起きたか瀬奈」

瀬奈が起きたのを皮切りに周りのクラスメートも次々と起きる。「あれ？ いつの間に寝てたのウチらって」「つーか先生どこ行った

の?」「わかんない」「じゃあこのテスト」「さあ? そんなわかるわけないじゃん」「とりあえず答え合わせでもしとく?」「もう全部終わってんの?」「ぜーんぜん」「無理じゃん」「そんなこと言わずにさー。ほれほれえコレが目に入らぬかあ」「だーもう解答用紙見せるなバカっ! ってうつそ……」「やったーこれでもうお互いに見せあいっこするしかないねー」「真っ白だった……ありえない」――聞こえた会話から抜粋。

「……ってテストは!?!」

ハッとする瀬奈に対して一はびっくりしそうになる。

「瀬奈ってやつはそういうの気にしないとおれは思ってるんだけど」

「うん、私もそう思う」

「じゃあなんで?」

「知らない。なんとなく言ってみただけじゃないの?」

自分のことだろうに、断定ぐらいはして欲しい。

「で、テストは?」

「再試験とかになるんじゃないのか」

「ええ?」

「気にするな。おれもだから」

「そんなのどうだっていい」

「だよなー……」

口にする前からそんな返しがくるのは分かっていたが、一応間を持たせるために聞いてみた。

「ま、しっきに任せればいいかー」

「どうせ再試験とかでしょうが」

そんな一を見て瀬奈は首をかしげそうになる。

（あれ、『目の前の人』の話し方って微妙に誰か……いや、分からないや）

本当に、ほんのかすかな違和感程度だが、ズレを感じていた。

だが、きつと寝ぼけているんだ。とその考えを振り払った。

――
「今日の化学の試験ですが」

帰りのHRの時間。

「再試験？」

「いいえ」

「よっしゃー！　じゃあ……」

「いつもやってる小テストで成績を出すらしいです」

「うっそお！？　今までの苦勞（試験期間限定）は何だったんだよ……っすか！？」

「ちゃーんと今までの苦勞（入学してからずっと）が報われてるじゃないですか。正直なところ大事なのは期末試験の方ですよ」

というわけで試験はものの見事にあっけなく終了。したのだが……。

「真面くーん、ちょっと先生と職員室でお話しようか」

トランプ

罌カード、ティーチャーコール（ドン☆）。この効果により指定された生徒カードは相手フィールド（つまり職員室）に召喚される！

「おお、マジメ何やらかしたんだ？ 火事のベル鳴らしたのか？」

「確かに今日『テストが嫌になってやりました』とか言って警報機鳴らすとかやらかした先輩がいたらしいけど関係ないからな」

なかなか愉快的な奴らがこの学校にはいるもんだ。

「おいおい、鳴らすなよー」

「だからやってねえよ！」

琉二のふざけも程々に切り上げ、せっかく午前で授業が終わるのだからと急いで職員室に向かった。

職員室は校舎の二階の階段のすぐ脇にあり、ほとんどの先生のデスクがそこにある。

担任の敷石恭子もその例に漏れず、一年生を受け持っている教師の一角に座っていた。

「あ、もう来たの。ちょっと待っててね」

なにやらパソコンの画面と戦っていた担任は少しだけキーを打つと、キリがついたのかパソコンをスリープ状態にして席を立ち上がった。

「んー、じゃあここだとアレだからあっちの部屋に行きましょうか」

特に反対することもないので一は言われるがままについて行く。いや、もちろん何故呼ばれたのかは分からないままなのだが。

連れてこられたのは職員室の中からしか入れない部屋で、いかにも

話し合いや面談をするためのような長めの机とパイプ椅子がいくつか。それととにかく雑多な物が周りを埋めるように置かれていた。多分この部屋は物置としての役割もあるのだろう。さらに理由は分からないがドアは開けっ放しだった。

「ごめんねー呼び出しちゃって」

「いや、そんなことはないですよ」

社交辞令。

「それで、話なんだけど……今日の試験」

「……………」

「あの先生相手に良くやりましたね」

「……見てたんですか」

「いいえ、鎌をかけただけです」

「……………」

プライドが傷ついたとかそういうことは全く無いのだが、その平然とした言い様にしばし無言になる。

「うんまあ、あの先生なら何かやるとは他の先生もみんな思っているから対策は協力して打ってあったんだけど」

（なら放つとけば良かった、とか思ってもいいかもな……）

「それにしてもよく一人で留居先生を切り抜けましたね」。優秀な生徒は先生好きだな」

それ教師の発言か。というか下手をすれば問題発言だ。どこが問題かはあえて語るところではない。

「そんなに問題なんですかあの先生って」

自己中なのは分かったが。

「いや、いい先生なんだけどねー、アレが絡むと……ね」

そういつて片手で親指と人差し指の先をくっつけてお金のマークを形作った。

「守銭奴しせんどですか……」

「どちらかって言うと攻銭奴こうせんどっていうのかしら……ケチとかじゃなくて宝くじとか競馬にパチンコ、最終的に株にもつぎ込むらしいから」

お金はいくらあっても足りない、ということか。

「どうか何で生徒の競技に教師のボーナス賭けてるんですか」

「そこはほら……アレですよ」

「あー、アレですね」

アレが何かは分からないが適当に返しておく。

「あら、もうこんな時間……じゃあ最後に、先生はそんなに勝ちにこだわってないからみんながケガしないようにすればそれでいいからあまり気負わなくていいですよ」

「それは気が楽でうれしいですね」

普段実感はないが、実質この学校でこの人がクラスでも部活でも（顔出しはあまりないが）一の直接の管理をしているので意外と上司みたいなものを感じさせるところがある。

その上司に帰る許可を得て一はバッグを担いで部屋を後にした。

「さて気負わなくていいとは言われたものの……手を抜くといけないよなあ。……………どうすっかなーおれ」

そして、これからどうすればいいのかという心ここにあらずな悩みを呟きながら帰っていった。

第22話 ダメな大人にはならないように（後書き）

というわけで（体育祭の）敵の親玉登場の回。

あと、今この小説について考えていることが二つ。

一つはこれまでの部分の加筆修正です。これは次回の更新までにやろうかと。といってもポケモンで言えばレベル2が4になったぐらゐの文章ですが。

もう一つはちよつと今の段階ではなんとも……なので次回の前書きか後書きにします。

というわけで次回から（多分）体育祭編！ これからもよろしくお願ひします！

第23話 体育祭と落下系（前書き）

というわけでいつもより短めにしてみました。
その代わり体育祭編（？）は更新頻度上げていきます。

第23話 体育祭と落下系

中間試験も終わり日付も6月にさしかかった頃、二布高校の体育祭は始まる。

その当日、真面一は人気のあまりない通学路を歩きながらジャージで登校していた。後ろにも似たような生徒が2、3人いる。

「あー、完っ全に不手際だ。米の炊き忘れなどという失態はもうやめておこう。今度からはスイッチ入れたか確認しとこう……うん、これぐらいで反省はいいか」

校門の前で怖いおじさん風の男性教諭が一を睨^{にら}んだが、声をかけてくることは無かった。いや、「遅刻は反省しろよ……」とか独り言は言っていたが。

「もうとつくに遅刻、だよなあ……最初の方に出場種目が無いから全然いいんだけど」

すでに開会式ぐらいは終了しているであろう時刻。一もまた独りごちた。

「おっせえ！ そんなんじゃマジメの名がすたるぜ！」

来て早々、琉二の罵倒にみまわれた。

「お前こそサッカー部じゃないんならルーニーの名が聞いて呆れるなあ」

一がいるのは普段使っている1-Dの教室。中は少し人が少ないが、いつも通りの賑わいを見せている。

校庭に全員出るのは開会式とかだけらしく、後は実行委員とか競技の参加者だけしか校庭には出ないらしい。

予想通り開会式はとっくに終わり、最初の競技の途中だった。

「あー、今は何だ……100m走か？」

手前側の直線のレーンで全力疾走する競技といったらそれくらいだろう。

「1年女子1年男子2年女子……って順番だぜ。マジメは最初の方に出番ないから良かったなあー！ あー良かった良かった！」

1時間とはいえ実質クラスに影響しなかったのだからなれないイヤミまでして蒸し返す必要のある遅刻とは思えないのだがこれいかに。

「今は1年の女子か？」

「ブッブー。2年の女子だぜ。つーかそんなくらい分かれよマジメー。使えねえなあ」

——これは遠慮なくムカついていいのか？ いや、めんどいし、改めて考えると怒る価値も無いか……ん？ これだと今の俺って上から目線の嫌な奴じゃないか？ むむむ、じゃあどうすればいいのか……。

この間1ナノ秒。気持ち的に。

「……そうか、久々に活を入れればいいのか」

「!? バカやめろマジメ近寄んじゃねえ!!」

一の発言に過剰なまでの反応を示す琉二。

その様はまるで会心の一撃を半分の確率で出せる斧使いと槍使いのむれに出会った、直訳金属軟泥もしくは白金王のようだった。

すでに逃げ出していた琉二は一から後ろ向きに退き離れ、勢い余って開いていた窓枠から落ちた。

「なんつかデジャヴ——!?」

地上4階から馬鹿げた転落をする琉二を見届けようと、一が窓から身乗り出すと（琉二のケガは全く心配しない）、なんとというタイミングか、下に誰かがいた。驚き一は声を上げる。

「上ー！ 避けるー！ 絶対ぶつかるなよ！」

その第三者は顔を上げると一の意志を完璧に汲み取ったかの如くスツと琉二の落下地点から間合いを取り、そのまま琉二が石材で出来た床に最上級尻餅をつくのを眺めた。

「……なにやってんの？ えーと、白楽くん。つーか今までどこにいたんですかこのKY」

「誰だ！ ……この人が尋常じゃないダイブ決めちまったときに……ってお前かあ！」

痛がる動作もせず琉二が立ち上がり、そしてびっくり。

第三者は九段要だった。琉二とタメを張る高身長、さらにアンテナ効果により伸びる全長。そしてその髪は今日も茶髪だ。当たり前のことだが言っておけば、今日はそういう日なので服装は要に限らず、

体育着だ。

「うるっさいなあ……走り高跳びの選手は召集かかってんのに何してんのアンタはさあ」

「え？　もうそんな時間か？」

上で大声の会話を聞いていた一は手元に持っていたプログラムを見る、と確かに100m走の次に走り高跳びとあった。どうやら二人はこれに出るらしい。

「じゃあウチはもう行くから。どうでもいいけど早くしたらー？」

「言われなくても行くに決まってるぜ！」

すっかり回復し、走り出す琉二とは対照的に要はなんかこっちに向かって手を振ったりしてゆったりしてる。

まだ時間は結構あるらしい。

「って走る必要ないのかよ……おい琉二、だまされてるぞ」

なんだか琉二が哀れになってきた一だった。

第23話 体育祭と落下系（後書き）

一応、隔日で更新するつもりで。

追伸

9月19日修正内容

- ・瀬奈、琉二の一人称変更。
- ・矛盾点その他色々。

……こんなんでよろしいでしょうか。

第24話 体育祭とお弁当

一は4階の窓枠で伸びをした。一日目に一が、いや一に限らず大体の生徒が出る種目は二つだけなので意外と自由時間は多い。

「さて、と……——いだだだだだだっ！」

その自由時間を折角だから有意義に過ごしてみましようかねえ的な事を喋ろうとしたら頭を万力の力で挟まれた。もちろん後ろから。

一の頭にこんな事をする奴を一は一人しか知らない。

そいつは一の視界の外から小声でささやき……いや、『脅すような』が抜けている。

「声を出すな……違う、下げる」

……おまえそういうキャラだったか？ と疑問に思いながらも脅しのセリフに固まる一。

固まっている内に競技の実況らしきものが聞こえてくるがそんなものに耳を傾けている場合ではない。

気を取り直し一は後ろのやつを汲^くんで近くにだけ聞こえる程度の声で答える。

「何なんだよこんな暴力ふるっておいて……」

「黙って教室を出ろ……あと鞆も持て」

まるで銃でもつきつけたかのような（実際頭蓋骨は固められている）気迫を持ったうしろの正面に従って一はすすすいーっと歩みを進めた。

他の生徒の奇異の視線を感じながら廊下を進んで階段の辺りまで来るとようやく一は頭痛から解放された。

後ろを振り向くと（そして視線を下に向けると）やはり、そこにはジャージを羽織った瀬奈がいた。

「で、何がしたかったんだおまえは」

「はあ……わかんないの？」

上目遣いは上目遣いでも敵意むき出しで睨まれるとなんの萌えも感じられないみたいだぞ琉二。と報告してみる。

「あ、いや……思い出した」

「……つまんない」

「ハイハイだから俺にギャグセンスとか面白味を追求すんなって……ほい、これだろ？」

一は持つように言われたバッグの中から弁当箱を取り出した。

包みの模様は赤を基調としたチェック柄で、少なくとも一の趣味ではない。

「……こんなのイチの部屋にあったの？」

下手をすると軽蔑のように感じられる視線を瀬奈は向けてきた。

「おまえがその辺にあるの使えって言うから戸棚にあったのを使わしてもらったんだよ」

「あれ？ そうだったけ？」

すっとぼける瀬奈。どうやら都合のいいことだけ覚えていたようだ。

「今朝のことぐらい覚えておいてくれよ……」

「弁当作りそこねた人に言われてもなー」

そもそも瀬奈がこんな突拍子のない行動に出たのは一のせい……といえはそうなのだから、作らせてもらってる分際で何を。とは言わない。

朝を済ませた時に一は昼用のご飯の炊き忘れに気づき、仕方なくそのまま瀬奈を先に行かせ、一はその後から来たので

当然瀬奈の弁当は一が持っていた。

とりあえず持って行ったは良いものの、ちょっとした問題が浮上してくる。

表向き仲のいいだけのクラスメート同士が手作り弁当の受け渡しなどおっぴらにしているのか。

まあ、自分で考えても客観的に他人がそんなことをしている奴らを見たときを思い浮かべると……ただならぬ仲なのだろうな、とは思ってしまう。

という事を考えて瀬奈は人目を避けようとここまで連れてきたのだろうと言う点は納得はできるが、やり方に関しては『?』を禁じえない。

「おまえってホントいい性格してるよな……」

「私から見たらイチの方がふざけた性格してると思うんだけど。なんだかんだで知り合って2ヶ月もたってるけど1回もマジ笑いとかしないよね」

「今はお笑いブームだからな。笑いには厳しくしないといけないよな」

「……あつそ」

ついに愛想を尽かされた。そもそも瀬奈にそんなものがあつたかどうか疑問だが。

と、階段の下の方から足音が聞こえてきた。

「なんだなんだなんだあ？ 不純異性交遊とか言わねえがテメエ等そんな仲だったのかあ？」

見知らぬ男子生徒が下へ行く階段を塞いでいた。

「……誰？」

「『1-A 左門』^{さもん} って書いてあるだろ。体育着に」

「おいおいおい……オレの話が無視してんじゃねえよ。テメエ等あれか？ シカッティングとかそんなノリか？」

そう、それで正解。って言ったら無視したことにならないのでそのまま無視続行。

「……俺は帰るぞ」

「私だってこんな所いつまでもいるつもりは無いって」

それはもう面倒な空気を感じ取ったので退散しようとして左門というやつをいち早く抜けようとするややはりというかなんというか、

「ッ！ ……そうは問屋がオロさねえ！ つーかキレんぞオラァ！」

ふるふると震え、爆発した。

宣言通りキレた左門は数段下にいた一めがけて飛び蹴りを放った。

一は振り返り、一瞬その姿を確認するとあからさまに嫌そうな表情をしながらもしゃがんで避けた。そして標的のいなくなった跳び蹴りは勢いそのままに一のいた所を通過し、その姿勢のままで着地を決めた。おそらく、いや確実に尾てい骨なんかを痛めているだろう。

「ええええええ……あれ？」

数秒遅れてその特攻に感想を漏らした一はふと、瀬奈がいないことに気づいた。

「まさかもう逃げたか……」

「まだまだあ！」

「あーもうだから俺鞆持つてるってのになんでこんな事に……」

「オレが知るかあ！」

「聞いてねえ！」

さっきのことは無かったかのように飛びかかってくる左門を一は鞆とダンスをするように体を動かして左門に対し直角に避け、後ろを振り返らずに階段を降りた。

「覚えてろよお！」

「お前は人の脳みそにそんなことさせられる権利があるんだな……」

呟きながら階段から逸れて廊下をダッシュ。そこで一の鞆からなにより葉っぱのにおいがした。

「あー、いやな予感」

開けてみると案の定というか……いやはや。

「あー、うそだろ……。無茶苦茶だ……。もう嫌だ、水筒の中身が漏れてる……。本当に無茶苦茶だ」

走りながら落ち込む。

襲撃された事の方が重大なのに麦茶化した鞆ごときで厭世観えんせいかんにとらわれ、マイナス思考に陥りそうになった一だった。

第25話 体育祭と行方不明(?)

「やーほっぴーハジメちゃーん。ってあれさセナちゃんはどこさヘキサン? しかもなんだかお茶っちいにほひが」

先ほどの事件でバッグがカテキンだらけになって愁嘆場にくれている一に話しかけてきたのは斎藤風璃その人だ。

「おちゃっちい言うな。瀬奈は……俺が謎の人物に襲われてる間にどっか行った」

「な、なんだってえ!？」

そんなに驚かれるとこっちも喋った甲斐^{かい}があるってもんだ。

「この後セナちゃんは走り幅跳び(スキル無し)にでるのに! なーんてこったい! あと20分で始まっちゃうじえい!」

……それは知らなかった。

「ってか20分て微妙に間に合うような感じもする時間だな……」
「そうと決まれば搜索戦隊サガスンジャー!」

そう来るか。

風璃は人目もはばからず叫んだ。
と一の頭に疑問が浮かぶ。

「風璃は出場する種目はないのか?」

「ふーりちゃんは100メートルに出たんだー。後はアレさー、個人戦」

「……なるほど。で、どこを捜すんだ？」

おそらく校舎か校庭のどこかだろうとは思うのだが。

「まずはそうさねー。生徒会長のトコに行くのが確實さねー」

「あー、頭いいな」

確かあの人……小谷千里はそういうのに向いたスキルを持っている
と言っていた。

「まったまたハジメちゃんのカマトトをーほらもー」

「なんでそういう考えに行くんだよ……」

「だって記憶力いーんじゃないのさ？」

「あー、お前にも言ったっけ……」

だからと言って問題があるわけではないのだが、なんとなく、言い
ふらしたくないのだ。

「言ったよー聞いたよー。ってことで事態は一刻を争い刻々迫って
るゆえに我等は行かねばん！」

「なんだそりゃ……」

——
というわけで生徒会長を探しに風璃と教室から出かけ、廊下を歩い
ているのだが……。

「そーいや風璃は会長の事知ってるのか？」

「いえあ。風紀委員やれーそれーって言われたからね。でも私に治
安維持の意識があんまり無いから自主的に今回はご縁がなかったと

させて頂きましたがぁーお」

確かに風璃は中学時代、自分と友達に降りかかる火の粉しか払って
いなかった。友達の数結構いたが。

「ふーん（やっぱり断つといて大正解じゃねえか……！ コイツと
肩を並べたら全身砕け散るぞ）……って会長今どこにいるんだ？
まさか生徒会室にいるとかいうオチでもなさそうなんだが……」

一は風璃にさとられないように冷や汗をかきながらも話を進める。

「よーし行ってみよぉーう」

「まさかこんな時にいないだろ……」

「それでは君には他にアテがあるのかい？ ワトソン君」

「いくら推理っぽいことやってるからって何にでも語尾にワトソン
つければいいと思うなよ」

「あ、怒っちった？」

「怒るレベルの話じゃないだろ。別にベスパをラッタッタって言っ
てるわけじゃないんだし」

「それで怒るのはちよつと私でもわっからんぜよ」

もちろん一もそんな事で怒ることは無いが。

「んー、来たねーいらっしやい」

「こんな時でもいるのか……」

生徒会室に入るといつかの親切なもてなしをしてくれた（と同時に
厄介な事してくれた）会長の小谷千里せんりがお茶を用意して待ってい

た。

「いつでもいるよ。だからここが私の家ね」

「……別に不法占拠には興味ないんで」

適当に言葉を交わす千里と一。

「ハイハイかいちよーちゃん」

ワンパターンにもほどがあるちゃん付けの風璃が本題に入ろうとする。この狂った言葉遣いの女子高生は大事なことは脱線させないのだ。

「んーとね、ここから南に行って四つの山の対角線の交点に世界樹の葉が――」

「それは今は知らないんで」

あっても使う機会に困る。

「意外とせっかちだねー、一くん」

「意外とのほほんとしてますね、千里さん」

自分でやって何だがこのコントは一体何なんだ。

「あーあ、折角おしゃべりでも楽しもうかと思ったのに残念だなー。場所は音楽室、でどうだ」

「ありがとうございます」

お礼を言うのは当たり前。何しろ手間がほとんど省ける。

「選手宣誓でフェアプレーって誰か生徒が言ってたんだからこのくらいは誰にでもやってあげるよ」

フェアプレー。いい言葉だ。

一と風璃は一礼して生徒会室を出ていった。

第26話 体育祭と場外戦闘

一と風璃は階段を26段降りて「こんな下の方だっけ」と13段登り「いやさつき『音』って字を見た気がするぞ」と7段下がって「ああそれ防音室だったじゃない。意味深だけどうえい」と20段上がって音楽室にたどり着き、扉を開けた。

いかにも待つてました的な奴らがいた。

「……さーて、フェアとはよく言ったもんだ」

ずらずらずら。づらづらづら。

ここでカツラを連想してもトノマを思い出してもあまり意味はない。

「あいやー、2対6じゃーん」

中途半端に多い。

その6人の向こうに手を後ろに回され、椅子に座らせられた瀬奈がいた。うつむいて顔は見えない。

「瀬奈は……寝てるか……いや、」

眠らされてるか。とは言わずに別の言葉を続ける。

言ったらちよっと自分の中の余計なものを呼び起こしそうでよくない。

「起きて幅跳びに出場してもらわないとクラスが困るから解放さしてもらおうか……」

「っておい！」

向こう方の一人がいきなり語気を荒げて一を呼んだ。

「俺らのことは無視か!？」

「自分がしてほしいことをやってるだけだって言ったら俺相当イヤミな奴だよな……」

まあ、今この時相手が無視してくれればかなりうれしい。

「ふざけてんじゃねえぞ?　こら」

「う……そういう無意味な口上は得意じゃあないんだよなあ……」

さんざん中学でそういう奴らと退治してきたが未だに一はそういったビビらし合いに慣れることが出来ない。慣れるつもりもないのだが。

「じゃあさっさとやられに来いよ!」

言われてもそんなことやらない。と天邪鬼な思考に拍車をかける一。

「つーか、ヌルいよなあ」

「はあ?　なに言ってる――」

そいつが言いかけて止めたのは、後ろの方で……いや、上の方で何かが天井にぶつかる音がしたのと、前の方で風璃が「ぶあしるーらー」とか叫んだから（唱えたから?）。

「しかし天井に頭をぶつけたあ!」

「は……なんだよおいそれ……」

味方があっけなくやられ、呆然としている（かもしれない）敵のリーダー格。

「スキありい！」

「どうは!？」

さっきは喋っていて舌を噛むのをおそれていきなりは止めておいたようだが容赦なく風璃は追撃をかました。同じ手。

風璃は今、空気を操っていた。詰まるところ、風。

そして風璃の凄い所は周りに紙切れ一枚の被害も出さない点だ。それだけ丁寧かつ強力なスキル。直前まで相手に気取られずになおかつ迅速。さらに……。

と、これだけ誉めるのはおそらく一が今までで一番手塩にかけたスキルだからだろう。

「ん？ どうしたハジメちゃん。惚れてもタダですぜい」

「そこでいきなり金取る可能性のある考えが間違ってたんだろ……」

とまあ、事態は何のことはなく解決。一は後ろ手に縄を括りつけられていた瀬奈の腕を解きながら風璃と話す。

「しかし……俺いらなかっただろ。1対6でもフェアかどうか怪しかったし」

「なーに言ってるのさ。相手に精神的打撃を加えられる人がいたら負けちゃうとこだったじゃん」

「別にそんな暇与えなきゃどうとでもなるだろ……それにしても……こいつら1－Aだけじゃねえかもな」

「どうして？」

「いや、予想。そもそもこれ自体lessnessとした拉致で連れ去りで誘

拐だからな……目的は出場停止で棄権させて得点を強制的に減らした上であわよくば交渉の材料にでも使ったりするんだろーな、ということを実際にやりかねない人物に心当たりあるし……しかもそいつ二つの意味で人心掌握上手そうだし……っと、ほどけたな」

ちよつと風璃に瀬奈を任せて6人のサムライを観察。全員男子。学ランは適度にボタンをはめていてあかよろし。風紀的には知らないが。

さらにつつこんでちよつと生徒手帳を拝見させてもらうと、6人は一のクラス、D組以外の1年と2年であることが判明した。Aが3人、Bが1人、Cが2人。

「よっぽど冗談が好きと見た……あの居留守野郎」

しかし今はそれ以上のことをやっている場合ではないと一旦分析を打ち切る。

そして後ろから瀬奈の首筋に手を当てた。いや、ここが一番スキルが通りやすいんだ。他意はない。

「ん……？　ここどこ？」

「やほーい」

「ああふーりん、おはよ……」

ここがどこかもわかっていない風で寝ぼけ眼をこすっている。

「早速で悪いんだけど、あと5分でおまえの走り幅跳びの時間になるから行くぞ」

「おわぁ！　イチ！？」

「なんだ」

およそ女子らしからぬ声を上げて瀬奈が振り向いた。

「あーびっくりした」

「目が覚めたんならさっさと自分の種目に行ってこい」

「えーと、うん、そうだね。そうする」

なんだか気味の悪いくらいのおとなしさで椅子から立ち上がる瀬奈。椅子の足下には弁当が当時の姿そのままに置かれていて、それに気づいた一がそれを持った。

「……おまえ何か飲まされたか？ 睡眠薬とかクロロホ……」

言いかけて止めた。あれは確か人体に有害とか言われているんだっ
た。

「なに言いかけたの」

「いや……」

「そういう話はあとにお回しになってさ、今は競技やろーぜやろー
ぜ」

風璃にそう説得されると瀬奈は簡単にうなずいて音楽室から出た。

「いいのかそんなん……」

頭を掻きながら、一は部屋を出ていく二人に続いた。

第27話 体育祭と暇人

その後体育祭の一日目の前半は調子よく進んでいった。

琉二は高跳びで2メートルを越える驚異的なジャンプをするも、身体強化系統のスキルを使う他の参加者（そいつらは脚力が高いとか）に押し退けられる形で入賞圏内から外れ、デシメートル単位——つまり2メートルなら20点、2メートル50センチなら25点——でもらえる得点のみとなった。

同じく女子の高跳びで出場した九段は57点。どうしてそんな高さまで届く。

そして瀬奈の走り幅跳びといえば「寝起きで調子が出なかった」らしいのだが3位入賞でまずまずの成績、記録の点に上位ランクインの追加点の30点がプラスされた。2位は50点で1位は100点。バトル種目はまた別。

「今のところ得点ってどうなってんだ？ ……おお」

一は携帯の画面を開く。新着メールの中に『中間報告…10時現在』とあった。

これは異常なほどに愛校心にあふれるパソコン部（どうも所有者如何に関わらずネットにつながっている機械をいじくるのが主な活動らしい）の仕業で、なんとこちらが登録・依頼せずともみんなの役に立つ情報を流してくれるのだ。なんとすばらしい。うん、すばらしい。アドレスを教えたのは身近にいる人達だけでどこからパソコン部にそれが漏れたのかというのがちよつと気がかりだが。

そんなパソコン部の発信している中間報告には事細かに各組の得点と各部活の得点、そして横には『×3・7』などの数字が記されており、誰かがアレしているのがよくわかる。どっか知らない国の外

貨でやるとさぞかし気分が良いだろう。

それはさておき配布されるメールに添付されたファイルには次の更新までの種目などの予定表、種目ごとの注目選手&解説なんてものでついでいて恐ろしく便利だ。

それを眺めていると突然、風璃が携帯の画面をさえぎって眼前に顔をさらした。

「そ〜れ〜どえ〜い、セナちゃんはどうやってさらわれたのさん？」
「びっくりするじゃねえかオイ」

どうせ一の文句など聞いていないので聞かれたことにだけ答えることにした。

ちなみに瀬奈は要といつかの賭けの話で盛り上が……ヒートアップしている。言っておくと瀬奈が一方的にテンションをあげているだけで要にあしらわれているのだが。

「……多分だけど俺が目を離れた隙に空間転移テレポートを使う奴がかつさらったな。じゃないと左門って奴がタダの間抜けってことになる」

あの時瀬奈がいなくなったのに奴は一だけを狙ってきていた。

ということは最初からそういう段取りだったと考えるか、単に気づいていなかったと考えるかのどちらかだ。

どの道さらわれたのは確かだったので、ありそうなのは前者。となる。

「まあ、sonだけで済んだならチョロいというかヌルいんだよね……」

「ハジメちゃん、私らの中学と比べたらどこもポカポカだよ？」

「ポカポカ……ねえ」

じゃあ一年前はボコボコだな。と無駄な思考に頭を費やす一。

「まあ、まったり――」

『レディースアード野郎どもー。召集の時間だー、えーとなになに……三年の騎馬戦に出る男子とー、障害物競走に出る生徒はー、うん、いつもの場所で。それじゃ』

公共の放送で言うには不適切な表現が聞こえた。

「――できねえ……。っていうか何だよさっきからこの放送。ふざけてるのか？」

とにかく、一のもう一つの出場種目の出番が回ってきた。

「ヘーイ、がんばって行ってこうさー」

「……そういや風璃は個人戦以外は出ないのか？」

「100メートルに出たから今はヒマジンなのさ」

道理でこの目下最強のスキル使いはクラスを動かないはずだ。

一は急ぎもせずのんびりでもないペースで教室から出た。

第27話 体育祭と暇人（後書き）

……最近風璃の出番が多くなってて作者として喜ぶべきなのかどうか（悩）

第28話 体育祭とレース開始

「うわ……」

校舎から出て、今日初めて校庭に立った一はその雰囲気^{えいせいへい}に飲まれ：
：たらどんなに楽か、と思った。

右、今行われている競技を見てなんかサッと何かが引いたような顔をしている。有り体に言えばムンクとかゲルニカとか。見ていると精神汚染されそうだ。

半ば避けるようにして左を見ると、こちらも狂っていて両膝で頭を挟み込んで指10本をフルに使い128ビートをトラックに刻んでいる。こっちはこっちで病的だ。

今校庭の中央では三年生の先輩方が激しい――それはもう激しい――騎馬戦を展開している。

お互いに6組ぐらいが対立して並び立ち、開始早々から上に乗った人がスキルをぶっ放して相手陣営に叩き込み、まだ土煙が収まらない中にも関わらず異様に足の速い騎馬（下の方で三人が組むやつ）の奇襲があったり、あり得ないような轟音で激突する騎馬がいるなど、激しさはまさに戦のそれだった。もちろんついていけずに脱落する騎馬もいた。

ちなみにこの種目は参加人数が多いのと消耗が激しすぎるとのこと
で2クラスで1チームの共同戦線だ。

つまり学校最強の騎馬が一発で決まる戦いで、それに比例するかの
ように近所の診療所から派遣されてきた医者^{えいせいへい}始めすぐさま白衣の人
たちが何人もやってくる。なんだこのカラムיתי（災害）は。

とまあこんな雰囲気^{えいせいへい}に前述の人たちは当てられて動揺しているのだ
……と思う。

いい加減自慢になるのだが一はこの程度のことは数年前に経験済みなのでむしろこれくらいでオトオトするなと言いたい。一自身が生き残れるかどうかはまた別問題として、だが、
というか障害物競走と騎馬戦は別物のはずだ。

「再来年は俺もあんなのやんのかよ……って、問題はそこか」

一がそんなことを考えてる内に騎馬戦は以外と短い時間で終わった。勝ったのはA組とD組のチーム。最後に残った唯一の騎馬に乗っていたのは一の所属する暗密部副部長、伊東長舟。

「あー、えーと……」

さも当然だと言わんばかりに泰然としているあの様子が格の違いと言うやつなのだろうか。

「……うん、逆らったら殺されるな。きつと」

ノックをしないだけで初対面から刺されかかったのだ。武士社会なら逆らった瞬間に『無礼者！』の一言と共に命は桜の如く散るだろう。

「おーし、ここに居るのは障害物走の選手ってことでいいんだな？」

一のクラスでの体育を受け持っている顔面凶器の先生が確認し、それに対して皆は黙って肯定する。

一は、みんなに合わせるように立ち上がった。
どうか何も起こりませんように、と願いながら。

障害物競走、第1レース。

3コース、真面一。

左側に2人、右に1人。全員地面に手を突いてクラウチング。

前方には案外普通の障害物——平均台、ネット、あんパンなどの極普通のトラップがある——だけで特に不安要素はない。

ちらっ。

「え………?」

見た、深淵は今確かに深淵をのぞき込んだ誰かを感じた。

そう、俺は今まさに深淵^{アビス}と化している………わけない。

そんなことを考えている間に「位置について……」慌てて体勢を整える一。

「用意………ドン！」

ドン!

と両脇からさっきの騎馬戦で震えたり縮こまっていた奴ら二人がタツクルをかまして来る。

「何だよ!」

「今一番得点取ってるのがDだからだよ!」

片方の奴が律儀に答えてくれた。

「あーどうも！」

ここで一はあえて一歩下がった。

その反応が予想外だったのか、それだけで両脇の2人は立ち上がりかけの脚をもつれさせてよろけた。その隙に2人に片手ずつ触れて意識を断つ。もちろんスキルで。マンガみたいな首チョップでハイ気絶。みたいな高等技術は持っていない。

完全に2人が倒れる前に一は走り出す。まずは出遅れた分を取り戻

――

「そうはいくかよ！」

一番校庭の内側、1コースから声がした。

その瞬間、ひび割れた白い光が迸り、火花を散らすような音と共に一を打ち抜いた。

「……っ」

一は、倒れ――

第28話 体育祭とレース開始（後書き）

えーと、障害物競走ってこんなでしたっけ？
自信が無いのですが……。

第29話 体育祭と高みの見物（前書き）

この話はガールズトークです（嘘）

第29話 体育祭と高みの見物

「あら、ハジメちゃん……これはこれは」

一を差し置いて弁当を食べていたが、校舎の4階から眺めている風が校庭の方を見てそんなことを言うもんだから瀬奈は思わずそっちの方を見た。

今まさに障害物競走が始まったところで、1コースの知らない誰かが先頭、3コースのスタートラインの辺りにこれまた知らないのが2人倒れている。その3コースの少し先に一が倒れていた。

「えー、イチがどうすんの？ ……ってやられた!？」

今まで何をやられても平気そうな顔をするもんだからなんだか意外な感じがする。

「むーん、あの時もこんな感じだった気がするんだーよねー。かーちゃんはと思う?」

『かーちゃん』と呼ばれた瀬奈のライバルこと九段要は渋面を作りながら箸を弁当の上に置いた。

「たまにアンタってネーミングやらかすよね……ていうかウチは別にイチくんのことよく知らないから分かんないんだけど」
「使えないなあ」

瀬奈が肩をすくめた。

「何でアンタに言われなきゃなんないのかねえ!？」

そうこうしている内に唯一の走者となった電氣の能力者は平均台を渡りきり、少し前を行っていた、が。

「うおおハジメちゃん追い上げからの追撃かい？」

突如として一が起き上がり猛追を始めた。

その速さはすでに普通のそれではなく、先ほどの騎馬戦の騎馬にも劣らない。

そして何よりもの特徴は、非常に真っ直ぐであることだった。

その直線のような走りで一はあっと言う間に平均台を渡り終えた。

「は、はや……」

遠近感もあいまってまるでゴキブリのような速さに見える一に瀬奈は感心する。

「うーん？ あーれーよ？」

風璃が不思議な不思議そうな声を上げた。

「どうしたの？」

「私が見たときはもうちょいリミッターを振り切った感じだったんだーよ」

「……？ 振り切った？」

「だーよって何なの」という要のコメントはスルーして頭を傾げる瀬奈。

「ってうわ、また攻撃してきた」

速さを活かしづらいネットに苦心している様子の一を再び先ほどの電撃が貫く。

まるで規模の小さい雷のような発破音が学校中に響いた。

ネットの外にいる電撃を放った彼は肩で息をしていた。おそらくさっきの復活を見ての本気の一撃だろう。

その上今まで全力で走っていたのだから疲れるのも無理はない。

それにしてもさっきの騎馬戦と言い、こうも使える人と使えない人の差が出てくることに関して瀬奈は不満を抱かずにはいられない。

「……スキルってなんかズルくない？」

これはおそらく瀬奈だけではなく、スキルが使えない一部の人も感じていることだ。

デタラメに使える奴はそうそういるわけではないが、例えば攻撃系のスキルなら大部分が自販機をぶっ壊して中のお金を奪うくらい海の向こうのお話を道具も無しでやってのけるほどの力は持っている。ただその後にくる国家権力の方がデタラメに強いのだがそれはまた別。

「ハジメちゃんもスキル使ったよ？」

「それはそうだけど……」

実力とはちよつと違うような気が……なんかずるい。

スキルを使わなかった瀬奈には分からない感覚だ。

そんなことを考えている間に一は何事も無かったかのようにネットを抜け出していた。ここで相手と並んだ。

「おー、やっぱハジメちゃんキター」

「え？ 効いてなかったの……？」

残るエリアはパン食いエリアだけ。意外と華がないレースのはずなのだ。他に比べると。

「昔に一回だけ見たことあるけどそん時は本当に無敵状態だったのねん。っとお、向こうさんの方が早く着いた」

対して一は遅れてたどり着いた。

「あれ？ ……わたしの目がおかしいのかな？ なんかアンパンのつるしてあるひもが……」

一の方だけ異様に短いような……。

「んん？ おお、軽く3メートル越えだあ」

「って不公平じゃん！ こんな事したのは誰！？ 見つけたら……」

なんとなく、瀬奈は口を閉ざした。

そこから先は言うのをやめておいた。

なにか聞かれてはまずい気がしたのだ。特に自分より数十センチ高い奴には。

そして誰かという問いに関しては、今走っている一には一人心当たりがあるのだが、それは瀬奈の知るところではない。

「うーん、イチがうらまれるようなことする人じゃないのは分かってるんだけど……」

そうこう考えている内にレースが終了した。

「……………はっ!? 終わり!? これが相対性理論!？」

およそ女子高生に似つかわしくない知識でとぼける瀬奈。
限りなく無意味な時間旅行の原理の使い道。

「うげー、ふーりんそういうむつかしいのはわからんのよー」
「右に同じ。つーかボーっとしてんなよあんたさあ」

そして通じない悲しさ。

「うっそお……昨日見たのに。テレビで」

どうやらズレているらしい。チャンネルとか色々。

「まー気にしなさんなーこういうこともあるさー」

「うん……で? どっちが勝ったの?」

「ハジメちゃん」

「……勝てたの?」

「勝ったの」

そう風璃が答えたのにもかかわらず、瀬奈はにわかどころではなく
信じられなかった。

第29話 体育祭と高みの見物（後書き）

後何話でというメドがいまだに見えてこない今日この頃。
もう週刊連載が懐かしい……。

第30話 体育祭と落下系ver. 2 (前書き)

またしても新キャラ。

第30話 体育祭と落下系ver. 2

真面一はごく普通のいつも通りの様子でクラスに戻ってきた。

「おう、やっと戻ってきたなマジメ。こっち来て食おうぜー」

呼び声のした方を向くと琉二がなんと一を待っている……る訳もなく昼飯を先取りしていた。

その隣に小さい影が一つ……これは瀬奈ではない。では誰かという
と、

「あー、そうだな……ってその隣にいるのって角田つのだか？」

「よう。あんま話したこと無いよな、オレら」

さすがの必要最小限だけしかものを聞かない一もクラスメートの名前ぐらいは覚える。現在ようやく二桁に達した所だ。

いや、それを抜きにしてもこの角田は特徴的だったのでよく覚えて
いる。

つのだ かちと
角田徒人。

何より目立つのはその容姿。

まず基本的な形容詞は『子供っぽい』。

これは中学から上がったばかりの15歳という年齢に比べて見た目が……という意味でだ。

瀬奈に負けず劣らずの身長、ともすれば小学生にも見えそうな童顔、
どれを取っても高校生とは思えないほど幼い。

そしてこいつを特徴づけているもう一つはスキルの強さ。

このクラス1-Dの風紀委員。

要するに風紀委員を務めるということ自体強いということで、同時

にこのクラスの空間を支配していることを意味する、らしいのだがさっき言ったような容姿のせいで半ば可愛がられている節がある。いいんだか悪いんだか。

だが風紀委員の目的を果たすときは独断で室内でもスキルをぶっ放す許可を得ているらしく、度を過ぎた奴は木端微塵になるらしい。その点ではこいつがまるで独裁政権下のおまわりのような存在だと言っているようなものだが、これくらいしないと校内の風紀が改善しないらしい。

で、その愛玩動物兼風紀委員様が今日の前にいてあたかも一緒に飯を食おうと弁当を広げているのだが……つまりこれは、

「それがよーこいつ飯食う友達いないんだとよ。だからオレ達でなぐさめてやろーぜ」

そういうことらしい。琉二が言うには。

「はあ？ 馬鹿言ってるじゃねーよ。飯食う奴ぐらいいるっての。入学して3ヶ月経とうってのに友達無しかイジメと不登校と根暗と引きこもりにその他1割しかいねーし。アホかてめえ頭沸いてんのか？」

「……………」

そして、ぱっと分かる特徴の最後は、口の悪さ。

その童顔と声変わりの気配すらない声がまるで小学生の悪口を連想させて、イラッとする奴が後を絶たない。というのは後日聞いた話。

「ぐはあつ、マ……マジメええええ、お、オレをおおおおおううううう、なぐぐさめぐでぐれ」

随分と奇特的な、精神的に危篤なゾンビの真似を披露してくれる琉二。

言葉も出ねえ。

「人間傷ついて成長する……といいな」

「それはなぐさめなのか……いや、違うと断言できるぜ、なぜならマジメだからだ」

ウケないと見るやすぐに立ち直った。慰める必要ないのかよ。

「……てめえら愉快だな」

こんなくだらないやり取りによくぞ口を挟んでくれましたと声をミユートにして言いたい。つまり口パクすら遠慮させてもらってるわけ。

「で、何でこっちに來たんだよ」

「いや、まあ……その」

「……?」

「お前ら……あいつとよく話すだろ」

「誰?」

一と琉二がよく話す相手……あっちのなんだか騒いでいる3人（前話参照）か?

「いや、やっぱいいわ。それより飲もうぜ!」

まるで酒飲みのようなセリフ。

実際はスポドリとかお茶なので健康上も法律上も今のところ問題はないのだが。

「おお、まさかまさか——」

「うるっせえ黙れ！」

琉二が好奇に目を輝かせ徒人をロックオンしようとするのを察知した徒人が叫んだ。

それだけならまだ平和だったのだが、それだけでは終わらなかった。嫌な予感のした一はすぐさま琉二から離れた。そして、その判断はやっぱり正解だった。

「うおっ」

「うっぎゃああああああああっ！ あちいぜ！ あちい！」

一瞬焦げたような臭いがして琉二の髪の毛が発火した。あらまあ。琉二は「あちい！ あちいぜ！」を連呼してみんなの昼飯の場を駆け回ってクラス中の顰蹙ひんしゅくを買っている。

「ぬあああプロミネンス！ コロナ！ スピキュール！ ギ・ガ・フ・レ・アーツ！」

クラスを一周して一の所に戻って来た。来るな。

「あー近寄るな火が移る！」

「オレの、心配、はあああああああ！？」

尚も一の方に近づいてくる琉二に一がどうしようかと考えあぐねていると、

「ぬふえーいハジメちゃんのピンチ！」

来た、みんなのヒーロー風璃。ただし登場の仕方を見る限り琉二のヒーローではないらしい。

正確にはヒーローという名詞は男の人物をさすのでそっちも間違いだが。

「ちちんぷいぷいちょよいのちょいっとなー」

風璃は胡散臭い呪文を唱えると自分のスキルの力で琉二を宙に浮かべ、そのまま開いていた窓から放り出した。

「風璃あちいてめえあちいいきなりあちいふざけんなあちいぜ!」

風璃に吹っ飛ばされながらの落下中にも関わらず異常なまでの口の回転を誇った琉二は放物線とは微妙に逸れた動きをして、都合よく亀が飼育されている池にホールインワン。
確かに火が消えた。

「つてもうちよいなんかやりようが無いのかお前は」

「そこをあえての池ポチャですよ……ってあらやだ。じっちゃんのジャージが臭くさタイプに……」

遙か下方から叫び声が聞こえた。

「つ……ぶあっ、ぬああミドリいいいいっ！ オレのカラーが藻の色に染まっていつちまうぜ!？」

カメさんに混ざって池の住人（仮）になった琉二が全校に響きわたる大声で叫んだ。

一を含めて1－Dの面々はそれを窓からじーっと見ていた。何をしているのかと言えば、空気を読んでいるのだと十中十が答えるだろう。

「……何やってんだ琉二——いでっ」

とみんなに混ざり傍観者を気取っているといきなり耳たぶを掴まれた。

スキルを使わなければやっぱ痛い。そして一にこんなことをするのは瀬奈^{アイツ}しかいない。

「なにすん——」

「ねえ、何隠してるの」

その瀬奈がこちらをまっすぐ見据えていた。

第31話 体育祭と不明点

「ねえ、何隠してるの」

瀬奈はこちらから視線を全くと言っていいほど逸らさない。

別に一がイケメンで眼福とかいう天地逆転現象がおこったわけでもあるまいに。いや、こんなことを考えている場合ではない。

「……弁当食ってからで良いか？」

「食べながらでも良いじゃん」

ちくしょう、自分は食べ終わってるからってその投げやりなセリフはどうなんだ。

不満を抱きつつも一はまぜこみおにぎりを食べながらも瀬奈との対話を試みる。

「で……俺が何を隠してるって？」

「さっき、何で障害物競走で勝てたの？」

「頑張ったからじゃねえの」

そんなことを言いながら『努力の無い奴に勝利は訪れない』とか格好付けたセリフを考えたりする一。

「イチは頑張らない」

「断定かよ……」

確かに『八分目でいけたらいいなあ』というポリシーはあるが、誰にも語ったことは無いのでこういう形で言われると何だか複雑である。

「いいから答えろ」

なんだか強引な瀬奈に疲れて一が曇った声を出しかけると、『レディ~~~~~スアンドその他ー。お楽しみのクラス対抗戦の時間だー。出場者も観客になりたいさんもちゃっちゃか集まんないとシケるから早くな〜。それじゃー』とお達しが。

何故PTAはこいつを止めないんだろうかと一は無意味にもスピーカーを睨む。

「あー、午後はコレしかないんだっけか。じゃあ瀬奈、とりあえず話は中断で」

「はあ？ なんにもわかんなかったよ!？」

呆れ怒った瀬奈がこちらに詰め寄ろうとすると、それを遮るように影が現れた。

「ふえーいハジメちゃんセナちゃんパーティーの時間の始まりだぁーい!」

やっぱり風璃。

「元気だなお前はいつも……」

気合いよく拳を掲げる風璃に一は感心せざるを得ない。

瀬奈は気圧されているのかそれ以上詰め寄ってはこなかった。

「そしてハジメちゃん」

「……近いぞおい」

風璃はそのまま真顔でこちらに向き直ってみせた。
なんかどっかの新天地みたいな感じがする。……自分で考えてて訳が分からない。

「なにやらもめてた？」

「……気づいてたんなら助けてくれよ。訳が分からん」

すると風璃は思案顔になり、また突然顔を上げた。

「じゃあ覚えてる？ 障害物競走で自分が具体的に何をしたか」

「……」

ゆっくりと記憶をさかのぼってみる。

——確かスタートするときには両隣がおそってきてそこから誰かが……
——ブツンっ。

「……？」

奇妙な揺れのような感覚と共に、記憶がぐらつき、いつの間にか思い浮かべていた映像が映らなくなるみたい揺らいで真っ暗になった。もっと具体的には、そこから先の事が全く思い出せない。

内心驚愕しながら再び思い出そうとするが、やっぱりブラウン管が故障する。

次第に何を思い出そうとしていたのかまで忘れてきた。

えーと、俺の本気だったか？ でもあれは単独じゃあ意味ないしな……。

「……ハジメちゃん？」

「ん？」

会話の流れを忘れた一の返事に風璃は普段見せることのない、心配そうな表情を向けた。

「……大丈夫？」

「別にいつも通りどうって事は無いけど……どうかしたか？」

「今からどこに行くか分かってる？」

「そりゃあ……何で俺が選手をやらされんのか知らないけど、校庭で戦うんだろ？」

その答えを聞いてどう思ったのか、それ以上追求してくることはなかった。

「……ど忘れ、なのかね？　ワトソン君」

その探偵に『分からない』という意味での疑問系は無いはずなのだが。

第32話 体育祭と1回戦

「さーてっと……」

一は校庭に出て太陽の光を浴びながら伸びをし、つぶやいた。

「ちくしょう何で俺がこんな出なきやいけねーんだよ。イライラ
させんじゃねーよ。そこら一帯の喫煙者の煙草に火花散らすぞオラ」
「……角田^{つのだ}か」

みんなが体育着なのに対してジャージのままという暑苦しい格好の
角田でも角田でも角田でもない角田は一の方を向き、ベイビィフェ
イスでこちらをやぶ睨み。

「んーそういう君は真面一クンかー、さっきは見事にスルーしてく
れやがったなこの野郎、燃やすぞコラ」

その変声期前(?)の幼い声でPG15の過激な表現は止めてほし
い。

「そーいや何であの時俺達と飯食おうとか奇特なこと考えたんだ？」
「あ、いや、それは……」

いきなり徒人はつかえた。そんなに予想外の質問だったとは思え
ないのだが。

「『それは……恋だね♪』とかたまに言うよねえん」

風璃がいつものようにによきつと登場した。

一はその無表情な体質もあるし、もう慣れっこなので別段驚きはしない。

が、隣の奴は大いに違った。

「さ、ささ斎藤さんっ!」

「こんちゃーっす。えーと、どれだっけ。かく? すみ?」

「……っのだ角田です」

いきなり緊張したかと思いきや意気消沈。いきなりキャラが崩れた。

「あーそうそう! 名前の方は……とと? だっけ」

「スポーツくじかよ」

一がつっこむが二人両方に無視された。反応されても困るが。

「徒人……」
かちと

もう意気滅落と言っていていくらいに気が落ち込みながらも自分の名前だけはなんとか言えた。

よほど風璃が覚えてなかったことがショックらしい。

「おーそうだよかつちゃん。……なんかかーちゃんと似てるけどまあいいや。お互い頑張ろーねえい」

「お……おう」

そう言うとき風璃は今にも台風が来そうなくらいの明るさで試合会場に向かっていった。

「……あー、そうか」

「い、今のは誰にも言うなよ! 特にあの白楽とか言う奴にはな!」

「ん？ 何でだ？」

「そんなに分かれよ！」

またしても殺気立つ徒人に一は内心慌てた。例によって天然ポーカ
ーフェイスが人と分かり合うことを阻害しているのだが。

「分かったとりあえず分かったから。何のことだか知らないけど言
わないから」

「……ああ、テメエはもしかしてそっち系か」

「……何だって？」

そもそも『あー、そうか、風璃は最初の方の試合に出るんだな』と
思っただけなのに何で口止めやらそっち系やら言われなきゃいけな
いのか。

と思っているのはかなりの外れだということに一はまるで気づいて
いない。

一が分からないでいると徒人は一転して余裕綽々（よゆうしゃくし
やく）に見える表情でなにやら頷いている。

「いや何でもない。うん、何でもない」

「……………」

分からん、俺はコイツとは分かりあえないのか、と思ってしまった
一だった。

――
ようやく試合が始まった。

一年女子一回戦第二試合。と言ってもこの学校は規模が小さくクラ
スは4つしかない上に各クラス1人もしくは1組しか出場できない

ので、一回戦と銘打ったところでどれもこれも最初からベスト4が出揃った準決勝。

「よくこれで午後いっぱい使うつもりになるよなこの高校は……」

そう独りごちたのは一。

一は戦いの場となるトラックの中……から少し離れたスペースでんびりゆったりしたりゆっくりだらしとしている。

「まあ……二日目もあるから早めに切り上げとくに越したことはねーんだろ。休まねーといけねーし」

わざわざその独り言に答える徒人。こっちはご機嫌ななめなお子さまとしかとらえようのない態度で一横に横にいる。その雰囲気は少し離れたところでこっち来るなオーラを出しているどっかの誰かを連想させる。

「つと、出てきたぞ……。……あー」

それきり一は口を閉じた。

言葉を失った一の視界に入っているのは、もちろん同じクラスの風璃。

折角だからここは一肌脱いで応援の一つでもしてやろうかと一にしては殊勝な心がけを実行しようと思っていたのだが、どうにもやはり、そんな気にはなれそうもなかった。

「いえーおーいえーいみんなしてなんか盛り上がってるねいサンキューベリーバツジョー！」

バツジョって何だっけ？ という疑問はひとまず取っ払って説明す

ると、風璃は格好こそ普通に体育着とクラスを区別する為のハチマキの組み合わせなのだが、どうも纏っている空気が別物な上にトクも一部常軌を逸しているのでD組の応援団でさえも苦々しく応援するしかないぐらいのエキセントリックさが際立ち……あーもうとにかくなにか言いたいのかと言えば、身内クラスメートとして恥ずかしい。もっと慎ましく。

「って今更だよなあ……」

「ああ……」

ん？ と横を向くと先ほどと変わらない位置に徒人がいたのだが、その表情は一の理解というか認識というか、領域を超えたものだった。

脳内の辞書から引き出すと、どうやら徒人のこの表情はぼんやりとかうつとり、恍惚というものらしいのだが、果たして一にはその辺の機微が無意味に欠けているのでそれが何なのか理解できなかった。

「どうした？」

「いんやあ、何でもあーりーませーんよー」

うーん、バカにされてるなこれは。

それは分かるのだが、達観……ではなく諦め癖が成分の大部分を占めている一はそれを左へ受け流した。どうやって左に流すのかは知らない。

徒人はあまり反応を期待してなかったのか、視線をこちらに向けることなく試合の方に集中していた。

「……お、始まった」

一もそれにならって校庭の中心を見ると、どうにも風璃は絶望とは

決して言えないが、『あっちゃー』と言いたげな表情をしているようだった。

「ど、どうしたんだ斎藤さん？ 何かハジメは知らねえのかよ？」

徒人が心配そうな声で聞いてくる。どうもその目には風璃がか弱い女の子として映ってるようだとなんとなく一は思った。その願望をへし折るようで悪いなあと感じながら一は言った。

「もしかして『当たっちゃった』か……」

第33話 体育祭と風対風

ハジメちゃんの心友（自称）、斎藤風璃はクレマーに会った深夜のベテランコンビニ店員のような表情をしていた。

「あー、……っこれはハジメちゃんの常套句だったーい。いかな私。遺憾如何^{いかんいかん}」

「……で？ 何が言いたいのですか？」

「うああきつつーい！ キツイよ私がとは言わずこの人がとも言わないけど何というか相性がキツイよ。相剋、双方に酷略して相酷よコレぞ」

風璃は試合中にも関わらずマイペースだった。

相手は眼鏡をかけている上にその頭髮はあまり守る人がいないようなもので（全く肩に掛からない）、本当に真面目そうな、いかにも委員長みたいな人だ。

風璃のふざけが意味をなさない人種の一つである。

「さっきから言っていることの意味が分からないので不勉強な私の頭にも理解できるぐらいの言葉で説明してもらえないですか？ 最初に一回攻撃しただけで何故こんな事になっているんです？」

あううああと頭を抱えたい願望を試合だからと押し殺しながら風璃は言葉を絞り出す。

「さーん、にー、いーちー」

「……」

カウントダウンを始めた風璃を警戒して（なにしろ試合中）いつで

も自分の『風斬風』シアウインドを出せるように準備しておく。

「——って言ったらスタートだかな。分かったかい？」

「……分かってます」

風璃のよくあるパターンのじらしにも相手は淡々とした答えだけを返した。

ただしその声が「次やったら遠慮はしない」と言外に語っていた。

「よっしゃつぎいこ。さーん、にー、いーち——」

「ハイもう言いましたねっ！」

「速っ！ 関西の平均つつこみより速っ！」

驚いている風璃を無視して相手さんが右手を自然体から袈裟に振り上げると実体の見えない風の刃が風璃に向かって飛んでいった。下の方をよく見ると地面に黒い線がこちらの方に伸びてきている。

「切れ味白!？」

「いいえ、ガード不可の方です」

風璃は慌てて躲かわした。ただ、慌てすぎて『こっから外に出ちゃ負けですよ』的なラインをはみ出しそうになるくらいにぶっ飛びながらのきわめて危なっかしい回避だった。

「うおーっととおーうい! ……ふう、セーフ」

「まだです！」

「うわあああああぁあつとお！」

再度風が飛んでくる。しかし風璃にはギリギリで当たらなかった。当たったら……救護班が死んでも治すらしいが洒落にならない。痛

いのは誰だって嫌だ。

26分の1の確率で痛みを快感に変えてしまう無意味に恐ろしい人種がいるらしいが関係ない。

なおも風璃はぶっ飛びながら避け続ける。

「いい加減っ、当たって!」

「殺生だあ! 生殺しだあ!」

「切れてもくっつけばそのまま治りますから安心してください」

「大根で実演販売して! そしたらその包丁買うからさあ!」

「誰が『青空の作品、ただし穴あき包丁』って言いましたか!?!」

なんだか二人して膠着状態の上に暴走気味である。

そうこうしている内に2分以上が経過した。相手の方は上がっていて肩で息をしている。

「はあ、はあっ。……さっきから何なんです? 避けてばっかりで

「ああこれ? 進みたい方向とは逆の場所から風を送って飛んでるの」

「いや、そうではなくて、一体あなたは勝つ気があるのかと聞いているんです。もし本当にふざけているのなら――」

「私は油断も隙も無いぜよ? あるのはきつと気分と――」

「……何のこと?」

「ちょっとした忠誠と――」

「……」

さっきまでふざけていた風璃が妙に神妙になったのでちょっと聞いてみても良いかなと思ってみた相手。

だが、それは間違いだった。

「――あとは勇気だけサ！ 加速装置！」

風璃が相手の足下を人差し指で示したのにつられ、見るとなんだかよく分からないが、『ゆがんだもの』が見えた。

「……っ！」

『そのスキル』に詳しい人ならば一瞬で分かり、またその数瞬の後には今すぐ何をすべきなのかが分かったはず。だがその数瞬が足りなかった。

『ぎゅいいいい』――――――――――』

バアアアアン、と月並みだが、何が言いたいのか意味不明な風璃のセリフなど打ち消す勢いの破裂音が校庭と校舎に轟いた。

その後はあまりにもあっけなく、吹っ飛んだ相手が気絶したまま場外に出たことで、女子の第一試合は風璃の勝ちで幕を閉じた。

第33話 体育祭と風対風（後書き）

10月10日現在。

スイマセン。締切とかの時間にルーズなのは生来のものなので最低限日付を守るのが精一杯です。

以下逃避日記。不定期。

何故か知らないけれども自分の気に入った（少年誌の）マンガが次々と「続きはWebで」状態になってとても悲しいのですがどういうわけでしょうか。

ああ、立ち読みにそんな事を言う資格はないですね。

第34話 体育祭と間（前書き）

タイトルを付ける意味も無いぐらいの薄い内容。

第34話 体育祭と間

試合場から10メートルほど離れた場所。

「つ、強いな……斎藤さん」

「……………あー」

徒人、一の順。

風璃の試合が終わり自然と二人の口からそんな言葉が漏れた。

「なんだよハジメ。嬉しそうにしろとは言わねえけどそのブルーな態度は何なんだよ？ 喧嘩売ってんのか？」

『何でお前に喧嘩売った事になるんだよ』と聞く気はない。
理由はともかく今の一の態度が良いとは言い切れなかったのは事実だ。

「あーいや、風璃に申し訳ないな、と思っぐあっ!？」

「何だった!？」

まさか胸ぐらをいきなり掴まれるとは。

この導火線の短さ、やっぱり誰かさんに重なる部分が……身長のせいか。

とそれはともかく今の状況的にはバイオレンスが発生していて、特に一の首が誰かさんのせいで徐々に絞まってきていて……。

「あのな、ちょっと冷静に言わしてもらおうとだな離して貰わないと息が続かないてか離していくら俺でも限界があるしそもそもそも独り言以外で考える速度並に喋っているのがもう走馬燈に通ずる部分があ

るんじゃないかと思っているしとにかくそので——」

「思う存分話してんじゃねえか。お前がな」

『離す』と『話す』の誤解という初歩的かつ意図的なミス。

『違うううううう！』とは、さっきとは別の意味で言えなかった。たとえ言えてもこんな感じには喋らないだろうが。

と、何を思ったかは知らないが首を絞める手を緩めてくれた。

「はん、まあいいか。さあて言い訳を聞かせて貰おうかなあハジメくうん？」

これで童顔と声変わりをスルーしたのだから字面はともかく締まらないことこの上ない。本当にバイト先の問題児である緋炉とかの小学生を相手にしている気分だ。

「俺説明得意じゃないんだけど仕方ないよな……」

一拍置いて一は話し始めた。

「あいつにスキルをおこがましくも教えた奴が一人いるんだけど、まあ当時は一刻を争うような身の回りだったもんで、ホント促成栽培もいいとこってな感じでな、汎用性とか威力や速度に範囲……と詰め込んでいったらもう見間違いも軌道修正の余地も無いぐらいの決定的な弱点が……と言う訳だな」

「……要するに、お前のせいかな？」

『うん、そう』とうなずけたらどんなに楽に死ねるだろうか。

視線で刺す。うん、まさに刺線とはこのことだ。死線とも言うか。いや、違うだろう。

と頭の中で言葉遊びを繰り返しているとなにやらリアル火花が飛び

散り始めた。バーチャルな火花は瀬奈と要の間でしか見たことが無い。

「ええと、誰のせいかって事になるとちよつと話し合いが必要になるんだが、この場合直接は俺なんだけだからといって俺をそのめんどくさい発火で焼こうとしないで下さい風紀委員サマ！」

「ちっ……」

徒人が舌打ちをしてそっぽを向いた。

「やつほーわーい勝ったよハジメちゃんかつちゃんのお二人サンビイーム！」

後ろを振り向くと風璃が晴れやかで晴れやかで晴れやかで晴れやかなスマイルでこっちに歩いてきていた。

早速一は自衛のために徒人の意識を逸らそうと風璃に質問をする。

「なあ風璃」

「おうなんだいハジメちゃん？」

「なんか角田がお前のスキルの話に興味持ってるみたいなんだけど

……」

「は？」

徒人はそっぽを向いていた顔を慌てて戻した。当然ながら一の完全なアドリブなのでぼかんとした表情だった。

「ええー？ かつちゃん聞きたいのー？」

「はい、あー、えとっ、いやっ。……あ、そういう意味じゃなくて、そ、そうですねっ。聞いとくだけ聞きたいです……」

風璃のセリフに異様な反応を示した徒人はなんとかして肯定の返事を出すことができた。採点するとしたら『おおむねできている』『もうすこしがんばりましょう』といったところだろう。何を基準にしているのかは知らないが。

「でもやっぱりダメー！ 聞かなかったことにしてちよん！」

「えっ……」

「でも言っちゃおっかなー」

一瞬下がりがけた顔を徒人は上げたが、

「いややっぱしここは『良いオンナには秘密があるある』法則のベースの下で基づいてノーコメントで」

「えええ……」

表情には落胆がにじみ出ている。風璃に振り回されると大体こんなもんだ。

しかし風璃のそれは『突然空から地球で作ったロケットのようなものでやってきた宇宙人が驚くことに日本語にとってもよく似た発音をしていたので早速コミュニケーションを図ってみたのだが話してみると意味が全く通じ合ってなかった事が判明したがもしやと思い英語で出身を聞いてみると違う惑星から来たと言う答えがネイティブなエスペラント語で返ってくる』くらいの荒唐無稽なノリだからだから仕方ないと言えば仕方ない。そもそもエスペラント語ってネイティブとか居ないはずなのだが。

「甘ったれるなベンキョー小僧！」

「え！？」

なんだか風璃がご立腹……いや、ご乱心。

「そんなに知りたければ私を倒して屍を踏み越えて知るがよいわ！」
免疫のない徒人がびっくりしているのに構わず風璃は乱心し続ける。
あまりの面倒くささにゴミに出すとしたら俺は生で徒人は燃える、
そして風璃は産業廃棄物だな、と考えるぐらいに一は思考を墮落さ
せていた。

「おい風璃。その辺にしといてくれよ……角田慣れてないんだぞ、
お前のそれ」

「あらやだ。私が猫被ったらそれはそれでハジメちゃん変に思うで
しょ。そうなんですよ」

いきなり井戸端会議のおばちゃんじみたように上から下へ手をはた
くように振った。
なにがコイツをそこまで珍妙な役者にさせるのか皆目見当がつか
ない。

「あ……お、オレもう少ししたら試合だから控えの方に行ってくる」

「あー、いつてらっしゃい」

「……ちっ」

徒人の舌打ちが炸裂。そういえばこういう奴だった。

一と風璃の二人が取り残された。あるいは徒人が独りで離れていっ
た。

第34話 体育祭と間（後書き）

今回の内容。

「会話↓喧嘩（?）↓会話↓一人去る」

……だらだらとスイマセン。もう少し速い展開になるよう頑張ってみます。

第35話 体育祭と不安要素

徒人が周りにイライラを振りまきながら去っていくのを見ながら風璃は首を傾げる。

「うーん、ご機嫌斜め？ 直角ぐらいの」

「その斜めかよ。そもそも直角っていいのかわかんねえ……。いや、そんなことより瀬奈の所に行ってこなくていいのか？ 待ってるんじゃないのか？」

「え？ 私はてっきりハジメちゃんの……ところにいるか、思っていたワケなのですが……」

互いに顔を見合わせ、一緒に横向いて、反対向いて、互いの向こうを見て振り向いて自分の後ろ側を見てまた前に戻って上見て下見て――

「まさか……も金太郎も無いよな」

「ハジメちゃん……そいつあ私以外絶対コケるシヤレですよ」

自分のセンスの無さにシヤポー。まさかまさかから鉞まさかりを連想するとは思わなかった。

「二番煎じってどうなんだよ留居守サンよお。今度会ったら……何もしないか。俺だし」

口とは全く別に一は珍しくも殊勝なことにこれからの対策を事細かに計算し始めていた。が、

「……………」

一カ所見ていないことに思い当たった。

「およ？ どうしたハジメちゃんよー。いかにも『しくじったー！』な顔してさあ」

風璃が一にその一カ所から怨念のような気配を感じ取ったと同時に一は人生を三回悔いていた。

——だってさあ、ふつう真後ろに気配もなく居るとか思わないだろ。忍者や盗人じゃあるまいし。

そう思ったのもつかの間、一が振り向く前に後ろから拳打が情け無用にたたき込まれた。

あ、終わった。と0.02秒で悟った。

「無視すんなこのイチがああああああっ！」

無論こんな風に叫ぶ上に人の名前を曲解して呼ぶ奴の拳が、である。

「かはッ!？」

一、むち打ち。意識ははつきりとしている。

アップー気味に振り上げられた拳は見事に衝撃となって肺を貫いて図らずも自分は呼吸困難で死ぬのでは？ と一は本当に思ったのだが、どうも奇跡的に、マジでアンビリーバブルにサヴァイヴしちゃったらしい。それはもうカタカナをユーズするくらいに信じられなかった。ちよっとデンジャーなインフォメーションがあったもんで。

「まったくもうすぐ試合なのになんなのその緊張感の無さは。そん

なんじゃ死んじやうよ？」

それどころではない。いや、ジョークではない。カタカナを多用している場合でもない。

一は本当に死ぬかと思ったのだ。この間の『夢』のせいだ。

一の見立てでは瀬奈は――

「何で返事しないでこっちばっか見てるの……？」

「……悪い、ポーっとしてた」

瀬奈の声で一の意識は目の前の光景に強制送還された。

目の前にはやはりその瀬奈がこちらを見上げていた。一はいつの間にか見ていたらしいその顔をもう一度見る。

二重の瞳は一を見据え……いや、睨んでビビらせ、いつもシミそばかす一つ無い健康的な白い肌は今日も今日とて直射日光にも負けずにやっぱり白いままでそれはそれで逆に病氣な気がして、また紅色の唇は真一文字で油断の欠片も無い。

もっとも、普段一番よく見えるのは頭頂部のつむじで、最近気づいた事と言えば、こいつにはつむじが二つあった。それなりにいるらしいが。

（……笑った顔はいいんだけどなあ。って瀬奈の顔見て何考えてんだ俺は。何が良いんだ？）

そう思ったが、今はどうにもその本人が惜しげもなく怒っていらっしやるようなので自分の中の疑問を追求できるほど現実逃避を続けられはしなかった。

そうだ、今はこっちの問題が先だ。

「瀬奈」

「なに」

「次の試合な」

「うん」

「危ないから」

「うん？」

「……棄権するか」

「うん……ってええ！？」

ああ、いつも通りの瀬奈だ。

一は少し、安心した。

結局の所、試合の棄権は出来なかったが。

第35話 体育祭と不安要素（後書き）

実は……まだ今の時点で次が書き上がっていなかったり（汗）
ちよつと1日目と2日目で区切ろうかなと考えていたりします。

第36話 体育祭と試合開始

そろそろ自分達の試合順が近づいてこようかという時、一と瀬奈は緊張感の欠片もなく喋っていた。かといって他が緊張している風にも見えないのでこれで正常であるとも言える。

「おまえな……なにもジャージの襟つかんで揺さぶってまで抗議することは無いだろ……」

「わたしは罰ゲームかかってんの。棄権とかやってその話こじらせたくないしみんなから白い目で見られるのもイヤなの。イチと違って」

瀬奈はそう言うが一だって人間だ。白い目で見られるのは嫌だ。なら何で棄権しようかなどと言ったのか。

「風璃まで止めてくるし何だったんだよ本当に……」

「そんだけイチがバカなことを言ったんだからしょうがないでしょ」

「……つらいな、ガリレオ」

「はあ？」

他人に理解されない苦しみを感じ偉人に思いを馳せる一。

その一を当時の宗教家を真似たような目で見ていた瀬奈だが、一に飽きたのか周りを見渡した。

「あ。あれってチョウシュウ先輩じゃない？」

「はい？ 長州？ ってああ」

言いながらも持ち前の快速思考回路で納得した一。どうやら瀬奈は我々が暗密部の副部長、伊東長舟の事を言っているようだ。

畏れ多くもそんな読み方のプロレスラーがいたような気がするだけ言っておく。漢字は違う。舟だ。

「試合……始まったよね」

「あー、そうなのか？」

「だって審判の人あんなガニマタになってるし」

少なくとも試合前のポーズでないことは分かるが、せめて少々足の開いた中腰と言ってほしいと一は思わないこともない。

「……………」

「……………動かないな」

時は平成、二人は風邪じゃあるまいし。

と無意味に頭を回転させているその間に相手がいきなり倒れた。

「はいい!？」

「あー、なんつーデタラメな……」

一瞬反応を遅らせた審判の合図を聞き終わらない内に長舟はさっさと下がっていった。

その時何かを伝えようとしたのか、軽妙な表情でこちらを一瞥していたのだが、それがなんだかめっちゃくちゃキマっていて肝心のメッセーじが伝わってこなかった。

「えーと、何がしたかったの？ 今のあれは」

「さあな。まあ、それを含めて」

底知れない先輩だ。と付け加えた。

「やーっとわたしの出番だよ」

「あー、俺の出番来ちまったのか……」

同じ事を言いながらそこに籠もった感情は正反対の二人。一と瀬奈。相手は同じ一年のB組代表で、やはり男女ペアだった。一応組み合わせは自由とのことだが、男同士で組むと女子相手に壮絶なアウェー感を味わうらしい。

それはともかく、基本的に男女平等を守る風潮が今の時代なので1人ずつ出すのが慣例になっている。って韃連部長が言っていた。ほかる審判の先生があらかじめ確認する意味で注意を四人にする。

「それでは、試合を始める前にルール確認だけしておこう。決着の条件は片方のペアにフィールドの中にずっと残っている人がいない、二人とも戦える状態になっていない、両者が降参する。それ以外の形では勝負はつかない。いいな？」

頷く四人。その後互いに距離を置くために後ろを向いて歩き、目印のある場所で振り返る。

始まる合図が秒読み、という段階で瀬奈がこちらを向かずに話しかけてきた。

「……で？」

「『……で？』」

いくらなんでもそれだけで人の思考が分かるほど優れた人間はやっていないので聞き返してみる。

「だから、なんか考えあるんでしょ？ 作戦とか」

「……あー」

「どんな作戦？」

「……ない」

ぼそりと告げる。

「え？ 聞こえなかった」

「無い」

今度はハッキリと言う。

「え？ 聞こえなかった。もう一回」

「何がしたいんだ。今のは聞こえただろう——がっ」

殴られた。どうも瀬奈は作戦を考えているものと高をくくっていたようだ。鳩並に平和的な頭と言えば聞こえは……良くならないだろう。

口答えしただけなのに暴力とは。ああなんという理不尽な事だろうか。まったくもって自分の白々しさに腹が立つ。平和的なのは己の方だ。

「何で考えてないの。こっちはスキルが無いのと神経だか感覚だか知らないけどその二人だけでしょ？」

「いやもうなんか瀬奈サンに任せて俺は草場の陰で見守ってようかと……」

「はあ！？ わたしを殺す気？」

「むしろ相手を殺す気だと……いてえいてえつねるなよ頬を」

「だったら今すぐ考えてよ役立たず！」

別に役立たずでもいいから舞台から下ろしてくれ、そもそもキャスティングの段階から外してほしい。役者不足だ。

ただ言ってもどうにもならないのでそんなことは考えているだけなのだが。

「つつたつてもう試合がはじま……」

と審判を見やると、

「それでは試合、開始」

「うそお……って危ねえ!!」

炎に包まれたダイナマイトが一達の頭上に飛んできていた。

第37話 体育祭とLevel up

「それでは試合、開始」

「うそお……って危ねえ!!」

こっちの状況を見無視して試合が始まったことに落胆しかけていた一は上を一瞬だけ見て、まだ何事か言わんとしている瀬奈を引っ張り自分の体ごとそのまま横へと移動させ突然飛んできたものから回避させる。

直後にダイナマイトのような細長い形をした橙^{だいだい}色の炎がさっきまでいたところに墜落し、抑えたように控えめに爆^はぜた。

後ろを向いた一の背中をドライヤー熱風のような風が撫でる。

瀬奈はそのままたたらを踏んだが、そこら辺は運動神経がいいせいかすぐに立て直し、相手から見えて一の後ろに回りこんだ。

「なにすんの!」

「おまえそれが助けた奴に言うセリフか!？」

「あれくらいなら自力で避けられた!」

「さいですか……って!」

と言いつ終えるか終えないかの辺りで向こうの方から人が迫ってきた。ただし、速度は峠を攻めるのを軽く飛び越えるくらいのそれで、不覚にも一の脳裏に『おまわりさん捕まえてください。星はスピード違反です』のフレーズがよぎった。

(いやいや今そんなこと考えてる場合じゃないだろ!)

すぐさま背番号16を頭から消し去り目の前の戦闘に集中する。

今度は瀬奈の発言を汲んで勝手に避けたので二手に分かれた形にな

る。

「なあああままならねえ！」

「よく避けたなァ！ クーガー並のオレの攻撃をよォ」

「……クーガー並ってそれ自慢になるのか？ よく分かんない例えだし」

全く関係ない話だがそいつの喋りの速さは琉二が良い勝負だ。

「よく分かんねえのはお互い様だなァ。そんでもって『先陣戦陣』
とはオレのことよォ」

なんだか締まりのない語尾の延びた話し方。そしていろんな意味でバカそうなスキルの名前。

だってあいつまりみなごろしとかしたり不思議のダンジョンだと倍速行動で穴掘って不自然な穴作るし簡単に味方殺してレベル上がるしもう無茶苦茶。

「あー、いや、悪いな」

「はァ？ 何が悪いんだァ？」

突っ込んできていきなりスキルの紹介を始めた相手の後ろに、

「うらっ！」

「うごおっ！？」

後頭部にパンチ。なんかの禁じ手。

すでにぐらついて、もうこれだけで気絶しそうなものだが、

「とりやあっ！」

「おおーん!？」

……何をしたかはあえて伏せる。とりあえず右足と左足の間に片足を入れてそのまま何かにぶつかるまで全力で蹴り上げたと言っておく。

「はい、イチ！」

「そこで俺かよ……」

「うお、うおおおん……」

うづくまる珍妙な鳴き声を上げる物体Xに近づいて、一はそいつの腕に手を置いた。

「ホント、悪いな……今のあいちちょっとヤバいから」
「……………」

珍妙な鳴き声を上げる物体Xの意識を断ち、ずるずると引きずって場外へと放り出した。
使いすぎると最近は倒れることがあるので最小限の労力で済ませるに越したことはないのだ。

「あー、早速一人減ったか……」
「ちよつとイチ！」

呼ばれて振り返ると、瀬奈を見る前に別の方向からまた橙のものが飛んできた。

それは先ほどのダイナマイトとは少々形が変わっていてもっと細く
なっていてなんか鏟やじりがついているようにも見えるし反対の後ろ側には羽の
ようなものがついていてそれはまるで矢のように速く……矢
!？

「わっ……っとお!？」

寸前でかわしたときにはもう自分の反射神経の良さと運の良さとあと瀬奈に、感謝した。これからは信心深く生きますご先祖様。

「あーあ、もうあたし一人になっちゃった。まあいいか。勝つし」

そんな自信のある言葉をのたまったのはさっきのダイナマイトもどきと今の矢を放ったと思われる相手に、なんだか高飛車というか自己中心的な雰囲気を持っている。

^{エレガント}高貴の失敗作だろうか。

いや、そんなことを言ったら自分など問題作すぎると言われるのがオチだ。

「で？ あんた達はスキル使わないの？ 使えないの？ 使えないならさっさと降参した方が身のためになるけど。念のために言っておくとあたしのスキルは『^{フレイムワーク}火炎兵器』っていうからよろしく。別に知らなくてもいいからね？ うん、あんた達の無知を笑うつもりはこれっぽっちもないから」

（俺がさっきスキル使ってたのは無視か……あー、距離で言えば無いも同然か）

「あーあー一人でよくしゃべる。それと誰が降参だって？ そっちがじゃないの？」

瀬奈も負けじと余裕を見せようと腕を組んで……背伸びしていた。いやそこは違うだろう。断じて本気では……無いよな？

「あらそう。それならもう火傷してもしーらない。ぽーいっ」と

さっきのダイナマイト型の炎二つが放物線を描いて一と瀬奈に襲いかかる。瀬奈は早速軌道を読んで落地点から少し離れた。こういうカンは見習うところがあるかもしれない。

それに倣うようによけながら、一は相手の攻撃を手始めの小手調べかとも思ったが、

……違う。とカンではなく経験が告げていた。

上に引き付けられていた意識を相手に戻すと、一の視線に気づいたのか、にまあ、と歯をむき出しにして笑い、悠々と一のことなど意に介さず瀬奈に狙いを定めたことで確かな警鐘へと変わった。

「うわ、何でそんな芸のない攻撃すんの？　しかもさっきそれショボかつ——」

「いやちよつと待て、上はフェイクだ！」

「おっとそうはいかないわよ」

一は瀬奈をそこからもつと離れさせるために思わず駆け寄った。このままでは瀬奈がやられてしまう。それは避けたい。

「ん？　フェイクって何？」

単語を知らないとは思わなかった。

「うそっ!？」

そんな不毛なやりとりの内に相手の準備は既に整っていた。もう時間が無い。

「残念無念また来世で」

その一言でようやく瀬奈が向こうを向いた時、相手の弓、弦を象った炎に番えられた火矢が放たれた。

一は思っても無かった事態に焦りを増やしながら走る。

瀬奈は惚けた顔で今更のように気づいた矢を眺めていた。

「……ああもう！」

その表情をとらえながら一は神経を研ぎ澄ます。

規格外の瀬奈のことだからよけるかも、と一瞬希望を抱いた一だったがすぐに打ち消した。

瀬奈が突然の状況で反応することは、無い。このままではやられる。知っている、ではなく分かっている。

予想ではなく、推測。

『そんな事、とっくの昔に分かっている』

まるで三歳のころに染み着いたように、だがこの瞬間に一の頭の中にそのフレーズが刻まれた。

それは、一にとって不自然で合理的なことで、また中心であり異端でもあった。

そもそもそんな風に言えるのかも怪しいが、その言葉には裏切れない確かな質量があつて、一をどうしようもなく引きずり込むのは紛れもない真実だった。

そしてその原因は————

一は瞬きする時と同じ速さで目を閉じ、

……………。

.....、.....。
.....。
.....。

また目を開けた。

「――よし……間に合え！」

一は、瀬奈を助けるために『^{ハーネス}変化律』を発動した。

第38話 およそ千分の一の千分の一の千分の一掛ける二（前書き）

勢いで書いたことを公開（後悔）。

第38話 およそ千分の一の千分の一の千分の一掛ける二

こんちゃーおはよーぐっなーい！ おれさまヒアシだー早速お便り
コーナーいっちゃうかー！？

……お前はMCかパーソナリティーにでもなりたかったのか？

ノンノンつつこみどころはそこだけじゃあないっすよイチの兄貴。

まずリスナーがひとりしかー

今さっきまで俺は全力疾走していた気がするんだが何で脳内会議パーテイを開いているんだ？

無視かい、一瞬生きるおれの青春まるで無視かい。

さりげなく韻踏んでんじゃねえ。

あら、いつの間にかおれは怪獣並の大きさに？ 建物踏むなんて。

まさか宿屋（INN）のこと言ってるのか……？

怪獣だから東○インぐらいにでかくないと筆舌に尽くせるほど踏めないなー。

あー分かったからもう。

ううっ。イチが淡泊質に……。

なんだその物質かどうかも疑わしいあやふやな存在は。それで用件は何なんだよ。会う度に活動時間が広がってきてる気がするんだが。あ、それは最終的に24時間年中無休になるからそこはお気遣いなく遺漏なく。

むしろお前が気遣え。しかも遺漏とか思いつきで言ってるだろ。意味がまるで通じねえ。

……あら？ いいのかい？ おれが侵食して寝食を共にするのはもしかしてイチ的にはオツケー？

知らん。むしろお前が判断しろ。

じゃあ住む。

はいはい。じゃあ情報提供やちんせいきゅうの時間だ。さっきの質問の答えは？

うう……おれは今現実という名のベルリンの壁に激突してしまい頭

を痛めているのです……。

無駄話している時間はそんなにないよな？

じゃあ与太話は――キャアアア怖いよユー！　なんか雰囲気や
バいいい！　いやいや言うよ言うよ！？　……実は今会話してる
けどだいたい単語一つで1ピコ秒なんだよね！　コレってなんて高
性能！　もうコンピュータなんて戦前の異物！

……誤字修正機能は無いんだな。てかお前アホか？

アフオユーな！　アラフオーと言え！　もしくはアルフオート！

……さーてつとー、質問の答えと逝こうかー。

よくある間違いしてんじゃねえ。

へへへー。

照れる場面でもねえ。

照れてないよーだ。だってこれからおれがイチの伝道師になるって
いうもうキャツキャウフフな展開が待ち受けていると思うと……そ
りゃあもうねえ？

あーそろそろボケはスルーだな……伝道師ってつまり、

そうそうおれは来る日も来る日もはつくつハッスルしていたわけで
すよ。

……俺の脳内をか？　ぞつとしないな。

言うねえ言うねえ。そうだ調べた内容だけど、例えばねー、最後に
イチがおねしよしたのは……0歳6ヶ月！？　自立速っ！

覚えてねえぞそんな春の珍事。

おつとシーズンはオータムとフォールの間だって記憶されておりま
すがー。やはり間違えますよなそりゃあさすがに――

秋と秋の間だから春じゃねえか。

――……あらーそういうオチですか、って嘘ついたかこのやろー！

覚えてねーとか出任せかよ！　デマガセかよ！

うるせえ。偶然当たっただけだろ。

うつわーぜってー覚えてるよこいつーもうやんなるね。ヤンバルね。
イヤンクツクね。

とにかくお前はうるせえ。

じゃあお口にジッパーをば。なあなあところで社会の窓って小学生の教科書の名前にありそうじゃね？

国語ならあったような気がするけどな……。それよりもさっさと目的を果たせ。もう1000ピコぐらい無駄にしてるぞ。

つまりナノなのですね！

あーそうそう、あと10を9回掛けた時間対話してると1秒な。

すかっと受け流すなアホオ！　じゃあおれもさらっと言ってやるじ

えい。とりあえず今の段階で発掘できたのは、名付けるとしたらな、

『一式』^{いちしき}とでもつけときましようか？　……なんかカッコいくてム

カつくな。イチのくせに。

いや、自分の名前が入ってなにがカッコいいんだよ……。

だがしかしかしだが、そんなことは細則事項だからほっといて、

『これ』はなんだか実際に使われた後とかそんなような痕跡があるから多分すぐに使えると思うよ。なんか履歴はあったけど削除された、みたいな感じ。

使ったことがあるって……いつものじゃないのか？

いつものとは全く別物っすね博士。規格外のスキルみたいだから体になじんでいなくて記憶に残らないんじゃないっすか？　ほらさっきもあったじゃないっすか。思い出せないこと。きつと防御反応っすよあれ。

あー、あれがそうなのか？

そしてそこでおれが協力することによってあら不思議。魔法のステツキに早変わり——いやいやしないっすヨ？　見る見る使えるようになるんすよ。

学習装置ってか。

そこに聖書ってルビ振ったらアカンからやめときいよ？　パクリやからね？

分かってるから。

それとー、おれが協力するからには——。

分かってるって。俺も協力すればいいんだろ。
よおーし、いー返事。それじゃーばんがろーぜ。
あー、ガンバローな。

第38話 およそ千分の一の千分の一の千分の一掛ける二（後書き）

サムいおやぢギャグが止まらない。

第39話 体育祭と一式（前書き）

今回も大分勢いに任せて書いてしまった。後悔はしていない。

第39話 体育祭と一式

目を開けた。
眼が明けた。

真面一は今までになくはつきりとした意識でやけに軽く感じる身体を動かして、瀬奈と火でできた矢の間に滑り込んだ。

大雑把に瀬奈の脇腹をめがけて直進していた火矢はしかし一の振り払うような手刀で打ち落とされ、その用を成さなくなった。

矢を放った相手、榛葉^{しんば}美姫^{みき}は呆然とそれを眺めていた。

今まで矢をかわす相手は居ても、見切って叩く奴など見たことがない。

「な、何よ今の動き……見えなかったことは無いけど……」

それでも、普通の手刀ではない。

もちろんスキルだろうというのは分かる。だが、さっき使ったのは明らかに違う。

（……どうなってんの？ 触っただけでも実際に炎なんだし熱い素振りの一つでも――）

ちやうどそんなことを思考したその時、

「……あつつっ！！ 何で素手で触ったんだよ俺！？ 馬鹿だろさすがに！」

「あんたって裏切らないのね……」

お約束すぎるタイミングで一はリアクションをかましてくれた。今

この時に戦ってることを忘れかけるぐらいの緊張感の無さが伝わってくる。

その一は腕を必死で振ったり息を吹きかけたりしてようやく熱さを逃がしたと思うと、何かを思いついたような顔をして美姫から視線をそらし瀬奈の方に顔を向けた。

「はあ！？　ちょっと！」

いきなり相手を見無視する一の行動に割とキツめに怒った声を出してみた。が、一はまるで反応しない。

「というわけで瀬奈。どっか邪魔にならないところで待っていてくれ」
「……っ！」

その口が語る内容で美姫のことなど眼中にないということがはつきりと分かり、言葉にならない怒りがこみ上げる。

「わ……わかった」

自分だけで戦って勝つつもりらしく、プライドの高い（とは自覚していない）美姫をとことんおちよくる行動をとっていく一。そしてこちらは何を思っているのか瀬奈はいつものような渋々も嫌々も無くただ頷くだけ。

何なんだこの二人は。やる気あるのか、この場に立っていないがら。美姫は無視されたことに対する怒りを腹の内で煮え繰り返す。

（ム、ムカつく……なんだか知らないけどムカつくっ！）

「ちょっと……試合中に二人の世界作ってんじゃないわよ！　相手はあたしだっ！」

美姫は自分の存在を示すかのように大げさな動作で腕を横薙ぎに払った。

その前方には火だるまの状態で大砲が五門、堂々と並べ置かれていた。

目の前の気に食わない奴に全力をぶち込んでやるために。

――

「って、目的的にはここで棄権した方が達成しやすくていいんじゃないのか……？」

目的のってのは自分でもおかしいと思ったがどうせ誰も聞いていない。

（多分）一の態度にキレた相手。

そしてそいつの出した大河ドラマに出てくるような形をした大砲を見て一はそんなことをつぶやいたのだが、そういや瀬奈が罰ゲームがどうのこうのと言っていたの思い出し、ままならない溜め息をつく。

「瀬奈は……案外素直に行ったな……って」

ぼうつとしていたのか。ぼうつとしていたのだろう。瀬奈のアホウはこともあろうに場外にまで出てしまっていた。

数秒の後に本人も気づいたらしく「……ああっ！」と声を上げたが、ルールはルールということで瀬奈も敗北者のリストに名を連ねることに。幸いチーム戦なのでこれで負け、ということにはならない。

「何故にそうなる……」

「ふっふっふはははー。よそ見はするなと誰かに言われなかったのかな？」

こちらを向いていた大砲の一つがメラメラと燃える砲身から火を吹いた。

ただ、元々が炎なので単に弾けたようにしか見えない。

その砲身と同じ色、赤橙色の砲弾が至近距離で撃つには余りにも余りな速度で一に迫る。

即座に右に避け、後ろの地点で着弾、散らかるように炎上したのを見た一だが、振り返ると、また違う砲身が移動している一の軌道を捕らえていた。

「まさか5連続でその威力とかいうオチか……？」

「まだまだスピードは上がるわよ！ さっきみたいによけてみる？」

二発目が放たれた。もし一がブレーキをかけて反転してもすぐさま狙えるように三発目も準備しての攻撃。

まだ四も五も出ていない。それに再装填がどうなっているのかということも推測の域を出ない。

だが一は接近のタイミングを今とした。

「うお……っ」と

「よおしそこお！」

一にとっては幸運なことにその三発目はどんなに速かろうが地上の移動のみに重点を、と想定したものだった。

（当たっ……）

それ故に無意識に意識から外していた『縦の移動』への反応が遅れた。

「つと、高く……」

「なっ……」

一は三発目が放たれる直前に美姫に向かいながら地を蹴り、そこからさらに空中で『浮き上がり』ゲームでよくある二段ジャンプの要領でさらに高さを稼いで砲撃を躲した。

あつと言う間に人の身長の倍はあろうかという高さに身一つで達し、一は着地点を見極める。

「いや、今度は当てるっ！」

四発目の砲身がこちらを向いた。もちろん重力の影響も折り込み済み。

しかし、またしても砲弾は外れることになる。

「ここで落ちて……」

身動きの取れないはずの空中で一は落下を速めて着地。

「そのまま……速く」

その勢いのまま美姫の眼前に飛び込んだ。

いきなりの接近を許した美姫は先ほどの瀬奈のように呆然として一を見ていた。

近くで見ると、虹彩がちらちらと弱々しくもはっきりと白く発光している。強く発光する前のストロボのようにも見えるが、不規則に風に揺れる木漏れ日のようにも見える不思議な光だ。

(……?)

そんなものに一瞬だけ気を取られた。奪われた。

それは結果からすれば考えても意味の無いものだったが、この試合には決定的だった。

一の手が眼前にあった。

「……はっ」

「これだけ近かったら撃てない……よな？」

一は平手の中指で美姫の眉間をちよんとつつき、そのまま意識を断った。

「おっと」

ジェントルマンなので美姫が地面に倒れる前に抱き止めてから丁寧に横たえる。

「……柄にもねえなあ。こんなやり方」

勝ち名乗りを受けて、一は息を吐いた。

「いやー反則じゃないのかなあ existence は」

その頃1—A担任の留居守は職員特権を活かして手に入れた鍵で行けるようになった屋上から高みの見物と洒落込んでいた。

陰湿な長髪を屋上の陽に晒しながら、はノートパソコンの画面を開

いていた。そこには学校の各グループとその戦力や勝率、そしてオッズが表示されていた。

頭の中は今日もお金でいっぱい。他は知らない。たとえば髪の毛を切らなくたって自分は困らないし、話し方が暗くても何を言っているか相手が分かればそれでいい。

「折角Aの勝利に張ったのにこれじゃあダメダメもいいところだよねこりゃ」

現在クラスの中ではDが一位。部活の方ではサッカーとテニスが人海戦術で抜きつ抜かれつの攻防を繰り返しているようだ。

この男、何を隠そう、自分のクラスを勝たせてボーナスウツハウハでいい思いをするのと同時にインサイダーな賭けをして儲けようと企んでいるのだ。

部活の方は毎年分からないから適当に大穴でも当たれば儲けもんと規模の小さい陸上部に入れた。

「さーって、すべてはあの計算違いなスキルを持ったあいつのせいだということだ。うん、彼と……君にも出てもらうかな」

気配無く後ろに控えていた女子生徒が淡々と答える。

「お金が貰えればたとえあなたが違法なことに手を出していようが一向に構わないですけど、出場選手の変更って大丈夫なんですか？」

「この場合大丈夫という言葉にはルール上という意味とオレの身が危ないという意味の二つぐらいがあるけど、一つ目の方は『選手の都合によりやむを得ない事情が発生した』で大丈夫。もう一つはオレがヘマしなきゃ大丈夫。ということでした。了解？」

「了解しました。ところで……」

「なんだい？」

間を置いたことで返ってきた相変わらずの、属性をつけるとしたら『冥』な声に女子生徒はビビりかけるが、我慢する。

「っ……あなたはお金を集めて何をするつもりなんです？」

「それはオレにとってお金になる質問かい？」

「いや、そうではないですけど……」

「つまり、そういうこと」

こちらを茶化しているのか。と思った。

これほど信じるに足りない先生もなかなかいない。

「はあ……」

「さて、オレはこれから色々と作戦を考えとくから後のことはよろしく頼まれという」

要するにこの後の集合と解散はお前がやれ、ということらしい。

「わかりました」

やはり女子生徒は淡々と答えてその場を後にした。

残ったのは本当に留居守一人。

「まだこれじゃあ勝てないっばいからなー、もう少しひねらないといけないなあ。あーあ、Dの担任になってればこんな苦労しなくて済んだかもしれないー」と悔いてみるけどどうにもならない不肖留居守なのでした。って言うてみたり」

ノートパソコンの横に、誰の仕業かハエが1匹落ちていた。

第39話 体育祭と一式（後書き）

ようやく一日目の内容は終了。

一話挟んで二日目は……意外と早く終わるかも？

それと、どうも最近私生活が忙しいのでそろそろ週一ペースに戻ります。期待していたりする方がいたらと思うと申し訳ないのですが云々。……とにかくいきなり途絶えることは無いので、どうかよろしく願います。

第40話 眠れないのは……（前書き）

いつもの長さに戻りました。

第40話 眠れないのは……

体育祭の一日目はいくらか危ういこともあったものの何とか平穏無事に終えることが出来た。

特に閉会の言葉も無く、突然『おらおら全校生徒プラスセンコーのアンニャロウたちさあさいよいよゴミ掃除のオッサンが早く帰れ素早く帰れいち早く帰れオーラを出してるぞ。今すぐ帰らないと社会のゴミとして分別してやんよ』という放送が遠慮なく全校に響いただけで唐突に終わったというのが平穏なのかどうかはその場にいた誰もが全く自信がないようだが。

そんな感じで体育祭が終わったことも少し手伝い、日の暮れる前には休む用意が完了。

『さあヒットポイントとテクニカルポイントの回復だ』と逝きたい——いやいや活きたい、あれ……？ 生きたい……これもおかしい……そうだ、行きたい、うん、これだ——ところだったのだが。

「……………」

午後10時。

「……………ふんふん、成る程」

子の刻。

「……………まいった。もう在庫がねえ」

丑三つ時。

一はパタン、と今日14回目の動作を繰り返した。

ついに積ん読を制覇した！

「いや、何がうれしいんだ……………ん？」

そこで溜め息を吐いた一に呼応するように玄関の方で誰かが鍵を開けた音がしたのでそちらに意識を向ける。

「いや、瀬奈だよな、ってチェーンかけてたんだった」

初対面の後で合鍵を渡しているのに開けてくることに対して別に驚きはしない。

ただ今日に限って気まぐれにもドアとその枠を繋ぐチェーンをしていたので鍵だけで入ることは出来ないでこちらから出迎えるしかない。

ゆっくりと床から腰を上げかけたその時、

ガキン、ツバアアアアアンバアアアン！

という音がして外から「うわああああっ!？」と声が聞こえた。

「んなオーバーな……………」

一が玄関に出ると、ドアは鍵の開いたままで閉まっておりますチェーンはとりあえず健在（その寿命は数ヶ月は縮んでいる気がするが）、後は、ボロい新聞受けのふたがベロを出すように垂れ下がっている。

とりあえずチェーンを外してドアを開けて外に片足踏み出す。
そこには相変わらず身の丈に合わない寝間着を着た瀬奈が目を感じ
両手で耳をふさいでうずくまっていた。

「あー、なんだか悪いな」

「うう、もういやだ……さっきの自分を取り消したい」

「なんなんだよ」

「とにかく入れて……」

と言いながら立ち上がろうともしないのでさてどうしたもんかと思
案する。

「……いつになったら立って歩くようになるんだ？」

「北京原人」

さいですか。

ちなみに正解は多分、アウストラロピテクスだ。

「閉めていいか？ 流石に用もないのに人の部屋を訪ねるのは違う
気がするんだが」

そう言って身を引いて扉を閉める振りをすると瀬奈が絞るように声
を出した。

「……用ある。入る」

「じゃあ立てよ」

一がそう言うのと瀬奈はようやく立ち上がった。そのまま一を見……
睨んだ。

「ところでさ」

「何だ？」

「さっきの音……何？」

確かチェーンに引っかけた音がした後に結構大きめの音が響いてさらにその後に瀬奈がびっくりした声を上げていた、と言うことを思い出す。

「あー、あれな。このドア結構古いから新聞受けの留め具が外れやすくなっててほら、丁度こんな感じにフタがめくれてドアとぶつかったんだよ」

「あっそう」

「折角説明したのにそれか」

「とりあえず迎撃兵器じゃないならいい」

実際はセールスだって撃退できないのだが。

「さて……」

と、ダイニングに敷いた座布団に座った一は切り出す。

瀬奈は今は一つしかない座椅子に座っている。以前は二つあったのだがいつの間にか片方減っていたのだ。

ここからは盗むのだとしたらと言う仮定の下での推論だが、窓に穴を開けたりする侵入方法でないのを確認できた以上、一は当然この部屋の鍵を持っている人物だと当たりをつけている。

そしてお隣——どっちの方かはあえて言及しないが——の部屋に全く同じものがちょうど同じ時期に入荷されたのだ。使用者の感想は「いやー使い心地がイーネ！ 全くもって！ それにしても偶然だ

ね。最近アウトレットってはやってるじゃん。そこでいー感じにくたびれたのがあってさ——」だった。これが10分続いたのに驚いた。

しかしまあなんというか、結局のところ大事に使われているようにだし、元々の一の感情の波が少ない気質もあるので、そこまで咎める気にもなれず、むしろもつといい持ち主に出会えて本望だろう、ぐらいの気持ちでいる。というか犯行が余りにも白々しいのが『何事も計画ぐらいは立てましよう』が信条の一にとってはあきれかえるばかりの事態でどうでもよくなった、ともいえる。

と、居なくなつた座椅子についてこれだけの思うところがある時点で意外に未練がある一。

そんなことを考えていたせいか、黙っている一に瀬奈がタイミングを計って話しかけた。

「ん？ 何でそんなにためるの？ お手洗い？」

「いやいや生まれてこの方この一、人前で便所になど行ったことはないぞ」

「なにやってんの……」

意外とマジな話。単に運がいいのかは知らない……掛け詞では決してない。気づいても無視して。

「変な方に流れない内に話を戻すか。で、こんな時間に何でまた来るんだ？」

「なんか……寝れない」

奇遇だな。

「あれか？ 遠足修学旅行部活の大会エトセトラ……の前日は興奮して寝れない……っていう」

一はちょっとノってみるがそれを瀬奈はスルーした。

「不眠症かもしれない」

「それって窓口が違わないか？」

『さていつからここはお悩み相談所になったのだろうか』という疑問も湧かないではないが、なんだかふざけるのも馬鹿らしい気分だったので（なにせ文庫本20冊以上を読み切る偉業を達成した精神状態）、一は今、適当に話し相手にでもなってやろうかという心境。最近はや所の事務の細分化があつてたらい回しにされる年金老人がいつの間にか走馬燈をぐるぐる回り……嘘。

「こんな時間にどんな窓口がやってるの……」

「だからそもそも俺も窓口はやっていないつもりなんだが」

「じゃあ寝てろ。こんな時間に起きるんじゃない」

自称『不眠症』のせいかな、なんだかドライになってきた。そもそも潤っていた記憶すら怪しいのだが。

「それよりおまえだろ。明日も試合なのにそんなんでいいのか？」

「鏡見て言つてよ……」

うん、これは本格的にドライだ。

「それより言つたじゃんわたし」

「何を」

文脈ぐらゐは無いとさしもの一も分からないことは山ほどある。

「『助けて』って」

「……あー」

なんだか重要なワードだったような気がするが、確かあの時は……。

「あれってあの生活習慣の時だけの限定じゃなかったのかよ」

「そうだったけ？ そんな昔は覚えてないね」

どうせ言葉の矛盾に突っ込んだところで結果が変わらないのは目に
見えてるので省く、意識から。

一は今この時間に寝ていない己を呪いながら溜め息を吐いた。

「はあ……分かったよ。じゃあ早速俺に出来ることだけさっさと言
つとくと、疑似的……『似せ物』の麻酔をかける。あるいは……」

「あるいは？」

「不眠症ってのは、いわゆる神経の病みたいな面もあるから、俺の
スキルを使ってその辺の診断まがいをする……ぐらいかな」

「ヤブ医者」

「……まあそんなもんだよな。で、どうすんだ？」

「なんかどっちもヤダ……ってそういえば」

瀬奈が一の目をまじまじと見つめている。顔でないところがミソだ。

「どうした？」

「ちよっと鏡見てきて」

「……今更自分に向かって何を言えと」

「そうじゃない。はやく」

なんだかよくわからない内にせかされてダイニングを追い出され洗
面所に立ったが、特にいつもと変わったところは無い。

鏡に映っているのはいつも朝になって最初に出会う中肉中背の黄色人種。黒髪の直毛に眼は茶褐色の虹彩。なんだか眼が暖かい気もするが本の読み過ぎで疲れているのだろう、どうせ。ダイニングで待機している瀬奈に呼びかけた。

「別にいつもと変わらないぞー？」

「はあ？ そんなはずない」

何がそんなはずないのか全くわからない。

白い仮面を被るわけじゃあるまいし、人間のパーツはそんな簡単に気分なんかで変わらない。

戻ると、瀬奈が訝^{いぶか}しげにこちらを見る。

「おっかしいな……あの時はこんな色じゃなかったんだけど」

「……？」

眼が、なのだろう。そこばかり、それこそ穴があくほど見ているのだから。

一はここにきてようやく知識と記憶を掘り起こして考える。じゃあ今までなんだったのかと言えば、フィーリング。勘と感覚以外の何者でもない。

なおもぶつぶつ言っている瀬奈に一は呼びかけた。

「なあ瀬奈」

「なに。今考えてるの」

「奇遇だな。俺もだ。ところで、今色がどうか言ったよな？」

「それ以外に何も言っていないね」

「ぶっちゃけそれ、何色だった？」

「赤色。こっちは何でそっちが見えないのか分かんないんだけど」

赤色ってどっかのアルビノ、もしくは一方通行みたいだ、というのは置いて。

一にとっては都合よく予想の片方に当たった。もう片方だったら個人的にいい気分ではなかった。

「よし、瀬奈。全部分かった」
「……」

疑惑の瞳。でも惑わされない。
一は断定して瀬奈に言う。

「寝れない理由ってのは『うるさい』とか『まぶしい』だろ」
「……うん、ってどうして分かったの!？」

「ある筋からの情報とか、な……アレはこれ以上無いヒントだった」
驚きの表情の瀬奈がさらにハツとする。

「ちょっと待って、どっかでわたしの情報が出回ってるの!？」

自分の失言に気づいた一。思わず瀬奈から目をそらした。

「あー、気にしないでいいぞ。俺の耳目に入ったわけでもないし誰かに話したこともないし――」

嘘ではない。

「まだ筆談の可能性とかある!」
「とにかく、出回っているわけでもないし俺は命が惜しいからそれを漏らすことはない。いいか？」

一の言い分に納得したのか、はたまた命を賭けたのが決め手だったのか瀬奈はそれ以上追求してこなかった。

「まあ今はいいや。で？　それで結局、解決するの？」

「する……んだろうな。まあ、風璃の時とは状況がだいぶ違うし、上手くいくだろ」

あれはあれで失敗かどうか判断の付かない所があるが。

「なんか不安になるんだけど……ってイチ、ふーりんに何したの！？」

瀬奈が今更のように驚く。

そうだ、もう一人の小さいヤツだった風璃のことを話したのは。

「あー、じゃあその話は風璃に聞いてくれ」

「よし、次会ったときに聞いて返答次第ではイチを滅ぼすってことで」

一はその時になったら全力で隠れさせてもらうことを今ここに心の中で誓った。

「で、こうなるとおまえにもある程度情報公開しないといけないな……あー、俺が補助をしなければいいのか。まあ今はいいか、それは」

真剣な空気を感じ取ったのか、瀬奈が黙った。それを見て一は話し始める。

「とりあえずおまえのスキルで出来るのは、かなり大雑把に見て3、

いや、多少の例外を含めると4なのか？ ……まああまりこの辺は信用しない方がいいな。まあどんなにやってもそれ以上の広さの枠は要らないだろうな。まあ多才なことには変わりはないよな。さて、この辺はほぼ確定事項だから言うが……いや、よく考えるともう例外以外は確定しているな。というわけでおまえの使えるのは3つ以上。内容は『――』と『――』と、最後に『――』。言っ
てしまえばそれまでなんだよな、こういうのって」
「……ごめん。その3つに共通点が見えないんだけど」
「どれも同じ『――』。まあ中卒の知識じゃないよな……」
そこで一拍置いて、一は告げる。

「さて、こんだけ分かったらあとは自分で何とかしてくれ」

「え？ 手伝ってくれるんじゃないの？」

「イメージは『固まって』きただろ。もう俺がいる意味はあんまり無いぞ？」

「だって……そんなすぐに出来るの？」

「とりあえずそのスキルを抑えて寝るぐらいなら正体が分かっているれば大丈夫だろ」

「でも……」

珍しく弱気な瀬奈。いや、弱気に見える瀬奈。

それを見て一はちよっと、ほんのちよっと、元気付けてやりたくな
った。

「別に焦ることはないからな？ 何かあったら俺が『助けて』やる
から」

瀬奈はそれを聞いて、目を見開いて、一瞬喜んだように見えて。

結局、朝になるまで瀬奈は一の所に来なかった。

第40話 眠れないのは……（後書き）

というわけで大変申し訳ないのですが次回の更新からいつものに戻ります（半分近くこの間隔で「いつもの」も変ですが）。やはり進行形で書くのはむづかしい……。反省してます。

それはそうと、団地住まいの方で実際にあんな事でフタが外れる新聞受けはどのくらいあるのでしょうか？ ドアを開ける度にビツクリするんですよアレ。

第41話 体育祭、二日目（前書き）

お待たせいたしました。やっぱりこのペースの方が確実でした。

第41話 体育祭、二日目

「ふぁ……ねむ」

「そういや結局何時に寝たんだった？」

「3時から記憶がないからその辺かな……ふぁあああ」

学校へ行く道々を話しながら一と瀬奈はゆっくりと歩いている。片方が寝ぼけ千鳥足なのでもう片方が車に轢かれないように見ている構図だ。

「じゃあ上手く行っただな」

「まあね。でもそこまで長く起きてたこと無いから……ふぁ」

欠伸が途絶えることのない瀬奈は規則的だが不安定な歩みで一の油断を許さない。

「おい、そっちは車道だぞ」

「あ、うん……」

瀬奈を呼び戻して建物側の方に寄せ、自分は瀬奈を壁で挟む位置で歩く。

と背後から段々と雄叫びのような声が聞こえてきた。

「ぬうううおおおおお！」

というか雄叫びそのものだった。

瀬奈と同じく一のお隣である琉二が『紅いジャム』を塗った食パンをくわえて走ってきた。

ぐららあがぁ、ぐららあがぁ。

「何がしたいんだ……」

「おおおおおおマジメエエエぬおおおおお———」
「行っちゃった……ふああああ」

琉二の走りは一の目測によると、ここの道路の制限速度30キロを上回っているので、まあ運が悪ければ捕まるだろう。

「……何がしたいんだ」

もう一度つぶやいた。

———

と、果たして意味のあったかどうか知れない走りを披露していた琉二に追いついたのはやはり学校。

ペース配分を間違って疲れが出始めたのか、なんだか昨日よりだる気の漂うクラスに混じって一、瀬奈、琉二の三人でなんのこともなく喋って暇な時間を過ごしあった。

琉二が今朝走っていたのは結局あの食パンが原因らしく、一が『紅い』と表したのは間違っていなかったようだ。

たぶん、あのジャムは……うん、自家製なんだろう。この世の物を辛いものと辛くないもので二分するあの母ちゃん特製。

残念らしいことに琉二の味覚は父親譲りらしい。つまりいっぱしの一般。いつも家での食事の時にはお祈りを欠かさないらしい……一もやっていたので人のことは言えないのだが。

まあ体を動かす『だけ』で紛れるのだから後天的にかなりの耐性を持っているのは間違いない。さらに言えば、先日のシチューモドキなどあえて一般、お客さん向けにアレンジされたものだから身内に

とってこれほどつらい話もない。

それはさておき、あの速度じゃあぶつかった奴が骨折するんじゃないかと問うたところ「ふっ、そんな出会いは邪道だぜ。男ならピンチの女の子を助けてこそ第一印象が良い、だろ？」とかおっしゃった。

いつの間に出会いの話になったんだ、もしかして自分は騙されているのか、とも思ったが、それは記憶の在庫コーナーの中にある『琉二の話（削除可）』にラブコメの始まりパターンの一つとして蓄積されていたので、そこと照らし合わせることでなんとか理解できた。はあ、これはつまり女の子との初対面について語っていたんだな。なるほどなるほど……結局その話に至る過程はわからなかったのだが。

「さて午前に俺が出る競技は……うん、無いな」

「オレはあるぜ。4・2195キロマラソン」

「ずいぶんと時間に優しいなオイ」

「まあそれはあんまどうでもいいんだけどなあ」

一のコメントを琉二はしかしスルーした。だからといって別に一が困ることはないけれど。

そしてその一の言葉を無かったようにした琉二（状態…たらこ唇）はため息をついた。

「だけどなあ、その前になあ……だけどなあ」

「なんだよ、連呼するほど嫌なのかよ」

琉二は下を向いて影を落とすだけ落として、

「うちの家族が来るんですぜ……」

「あー、それは……」

それは何ともコメントし難い事実だった。

琉二の母親は性格は普通なのだがどうも味覚においては何だか天才的なきらいがあるらしい。この時のきらいは用法として大丈夫だろう（嫌い）。

片や姐さんは……いや、姉はというと、

「おーいたいた。りゅうー、姉ちゃんが来てやったぞー、ほら喜べ、泣け、叫べ」

……なぜか教室に来てしまっていた。

「ヒイツ」

隣の席で座っていた琉二が小さな悲鳴を上げて飛び退いた。

「……大丈夫かよ」

一もお上さんがお越しになっているのに座っている道理は無いだろうと立ち上がり窓際に体を引かせる。出来得るだけ離れようという本心は置いとして。

険険ガクガク……と顔に書いて畏怖している琉二を横目で眺めながらも一はこの自称…姉ちゃん、称号…魔王（性別♀）……に対する限界いっぱい、かつ悟られないような警戒を怠らない。

もっともそれでこの人の何かが妨げられたことはただの一度もないのだが。

その冬雨はファッションふやめという単語とはあまり縁がないらしく、近くの大量生産ものを扱っている店の服……フリースやらゆったりめのズボンを着て琉二の席に横向きに腰を下ろし、両腕を机とイスの背に乘せて気分は玉座。頭が高え。控えろ俺たち。

「いやーここもぜんっぜん変わんないねえ。心なしか机が小さくなつたような気……もしないなあ。流石の冬雨さんも身長は伸びないからなーはははは」

いいえ、あなたは確実にこの数年で5センチ以上伸びていると私めの意外と正確な記憶による照合で断定できます。と心の中でレスを送る一。いや、届くな。

「おっとそこにいるのはハジメくんじゃあないか。今は気分がいいから相手してあげよう。さあそこに直りなさい、そこに座りなさいよ是非に」

レスが届かない代わりに目を付けられてしまった。

態度がくるしゅうないぞと言っている。ような気がした。

「はい……」

一はその席の横にある自分の席に、自分なりにかしこまって着席。さて、今から何の相手をさせられるのか。一方通行な暴力もこの人にいたっては可能性の一つに上るんじゃないだろうか。

「今日は日曜だ」

なんと言うことはない話題から始まった。

これといって話題にストックがあるわけではないので適当に相槌を打つことにする。

「そうですね」

「晴れ……ていないか。曇りだ」

そう言われて後ろの窓の向こうを見る一。

「……そうですね」

この流れは……あれか？　テレフォンなんたらか？

「まあ、雨が降っていないなきゃ何でも運動会日和か」

「そうですね」

「ところで出番はあるのかな？」

「そうですね……え？」

なんか（この人が言うとうとうしようもなく）不穏な言葉が聞こえた。
出番？　何それおいしいの？　という疑問にオイシイと答えられる
奴はテレビに行けよ入れよ是非に、と一は思った。

目の前にいる冬雨（様々々々々！）は口角を少しつり上げ、

「返事を間違えたようだね？」

言葉と同時に怖気がするほどの殺気が閃影の如くクラス全体に駆け
巡り教室中に畏怖の念がじわりと沸き上がる。

その殺気の余波からいち早く抜け出した一は沈黙が続くのを避ける
ために即座に答える。

「っ、そうですね」

「まあ、よろしい」

ほっ、とクラス中が安堵。

さっきのはあれか、新ルール登場その名も覇気、ってか。

「さあて、他の舎弟の様子も見に行かないとまずいから……付いてくる？」

口振りからするにどうやら一は舎弟の一人らしい。

たとえばその扱いが嫌だと言ったところで屈服させられぶっ潰され納得させられるのがオチだ。

わざわざそんな目に遭うかも知れない危険物と一緒に構内を歩き回るなんて、なんて愚かな。

一はそんな思考を読み取られないように、努めて笑顔（つまり平素の顔……）で答える。

「いや、ちょっと試合控えてるんで、遠慮させてもらいます」

「おっと奇遇だね」

『何がですか？』と聞きかけた一だが、しかしそんな反射のような問いが口から出る前に持ち前の神速の思考回路で押さえ、飲み込んだ。

そんな一を知ってか知らずか、冬雨は琉二に聞こえるような声量で「あーあー誰かうちの役立たずの弟と代わってくんないかねえ」なんてクラス中に響かせている。

頼むから止めてほしい、アナタの覇気に触れて誰かの気が狂れたらどうしてくれるんだ。

幸いにして誰かが『ぎゃぴー！』とか叫んでくれるようなこともなく、脅威、驚異の人外存在はそれこそ神出鬼没のように過ぎていった。

たちまちに1-Dの空気にナギ節が訪れた。要するにみんながみんなみんなしてホッとしたということだ。

「……なぜに俺が絡まれたのか分からん」

一が一人つぶやくと琉二がわからんぜ、という顔で聞いてきた。

「マジメとしてはどう考えてんだぜ？」

「……単にこの中での数少ない知り合い枠の一人ってことじゃないのか？ 本当に単にそれだけで瀬奈でも琉二でもよかったんだろ」

冬雨を避けるような一に琉二は困ったように口を閉じて鼻で息をはいた。

「コイツさりげなく一回も殴られたこととかねえんだけど……その辺気付いてねえんだろうな……ぜい」

聞こえてはいるのだが、何かを要求している風でも無いので一はスルーした。

2日目の午前は前日に倣って普通……というのもおかしいのだが、とにかく琉二が出るというマラソンと、十数名の参加する団体競技、さらにある催し物で予定が埋まっている。

「……あー、まぶしい」

「ふぁ……にやむい」

立って並んでいる二人の内の一人ー、一は手で庇ひさしを作り、もう一人ー、瀬奈は手で欠伸を覆った。

2日目は暇な奴はとことん暇なものだからという理由で校庭に出て選手を応援しよう、と誰か情熱溢れきったクラスメートが言い出したので、不幸にも暇を謳うたいまくっていた一らは「そんじゃあ久々に下界さ降りるべさ」と風璃の号令の下、疎開のようにやる気なく（

実際の戦時中にそれがどうだったかを知っているわけではないが）
1—Dの群れは会話をしながらというまとまりのない状態で校庭に
解き放たれた。

「にやむいって何だよ」

「眠いって言おうとしたらあくびが出たんだからしょうがないでし
よ。そっちこそ何がまぶしいの。ひきこもり気取り？」

「ひきこもりに失礼だろ。まぶしかったんだからいいじゃねえか」

「ああもううるさいなー。いちいちあくびにまでつつこまないでよ。
自分だって同じことされたらいやでしょ」

なるほど、確かに自分がそんな扱いを受けたらと思うと目の前の約
10センチ強下の視界の存在（微妙な婉曲表現）が怒るのも無理は
ないと思うてしまう。

「あー悪かった悪かった。色々あるよな欠伸にも」

「しらじらしい……」

うむ、自分でもそうとしか思えん。

「というか、そもそもここに來たのって応援なんだよな。なのに誰
も……」

誰も彼もくっちゃべっていてトラックを意識して見ている人など全
くいない。

一体何のためにクラスそろって出たんだと呆れつつ一は今まで見て
いなかったトラックに視線を向けた。

「……あー、頑張ってるのな。琉二」

一の視界の中で行われている競技はさつき話題に上った4. 2195キロマラソン。

トップは……いや、ツートップは——サッカーみたいな言い方だな——琉二と誰か別の一年。

はため

傍目には面白いことに「やあぁーっほやつほやつほやあぁあぁあ
ほおおおうーとやややあぁあぁあぁあ!」 「うえい
うえいうえいうえいうええええええええええええええええ
！いいいいいいいいいい——ってなんぞこの区切
り自分でも分からんぜええええええええええどうおおうりゃななな
なななななななななあっ！」などと怒濤の勢いで叫び声コンテストと
首位争いを繰り広げている。

青春の１ページ（付箋付き）。

「……全力疾走と複式呼吸ってずいぶん代謝が良さそうだな」

適当に座れる場所を見つけ、だら～とひなたぼっこに意識を向けた一を見ながら瀬奈はやや脱力しながら言う。

「見るトコそこ……？」

他に何を見ればいいのか。

現代のコレステロール社会を生きる高校生の脂肪分という重荷を舐めるな……いや、標準以上には持っていないが。

「あいつは持久力も耐久力も回復力も馬鹿げているからなあ」

「そういえばいつもヒドい目にあっても気づいたら復活してるね」

「だから俺とか風璃は慣れすぎて心配もできない。あー可哀想な俺たち」

たたずまいというか、醸し出す雰囲氣が既に縁側老人となつた一。

なにやら諸行無常を悟ったようにも見える。

そうしているうちに空砲の音が一位のゴールを知らせた。

「あー終わった終わった。で、次は何だ？」

「さあ？ 興味ないし」

本当はスキルを使って引き出しに鍵かけた記憶を引っ張り出せば思
い出せるのだが、何となくの気まぐれでやめておいた。

別に今この瞬間に思い出す必要もないのだからこういうのもいいだ
ろう、と思う。むしろ普通は思い出せなくていいんじゃないだろう
か。

そんな一たちの会話に呼応するように放送が流れた。

『レディースあーんジェントルウーメーションとムシケラに告ぐー、
これから――』

もうすっかり慣れてしまった内容で、さらには告げるようになった。
立てこもってんのはそっちだろう。

どうやらリスナーとして一は対象外らしいので一は無視をすること
にした。

どうしても聞く必要のある放送だったら後で瀬奈に聞けばいいのだ
し、この手のモノはあいにく気を詰めないと聞こえないので無視す
るのは一にとって簡単だった。

一日目はあんなことがあったわけだし。

……あんなことと言えば、あれから留居守が目立って何か仕掛けて
きたとかそういうことが無い。まあ今日は固まって行動している
から下手なことも出来ないのだろうが、こうも普通に進行すると気
を張っているこちらが疲れる。

というのもあり、しばらく脱力している一なのだが、そのせいで、
後々に意外と重要な内容の放送を聞き逃すことになった。

『ペア戦の1－Aの選手の交代がありまーすよつと。あと体育の古^{ふる}里^{さと}先生が体調不良とかいうゆゆしきかがわしき理由で退場なされ
ましたー、――ー』

第42話 体育祭、暗黒時代

琉二が鼻差で負けたのを後で知り――

「――いやおいそこはその場で知っといてくれい」

「なんで」

「うっ……マジメいつからそのような率直な性格に」

「あー、そうか？」

「そうだぜ、お前中間テストの頃からキャラが変わって――」

――引き続き校庭で風雅を味わっている、という錯覚を起こしている――

「……………」

ただその風雅な気分も今や風前の灯火。

その原因の出所は表情の判別が出来ないぐらいに離れた校庭の真ん中。

そこにいるのは雰囲気と気分と緊張感を圧倒的に支配する存在。

「……………」

「……………ねえ、あれ」

皆まで言うな、と一は無言で語り瀬奈を黙殺した。

「何でだ……………」

片手でこめかみ二つを挟む。頭が痛い。

後で聞いた話によると、これは『バスタード』とかいう適当すぎる

ネーミングのイベントで（なにしろ『雑種』）、一般の方にもやる気のある人には闘っていたかどうかという内容らしく、場合によっては高校生のそれとは格の違うスパーデンジャラスハイテンションバトルが繰り広げられるのだとか。

と説明したところで、目の前の人物に関してそんなことは……そんな言葉、どうしてもよくて、どうにも通じない。そんな存在なのだ。

「いや、洒落になんねえだろ。いくら何でもこれは……」

首をぶんぶんと振る。

……そんなことをしてもこの事実を振り切れないのは当たり前で、もちろんそんなあり得ない高望みなんて抱いていない（いや、出来ることなら無かったことにしてほしいとは思っているのだが）。ただ整理をつけたかっただけ。

（……よし、段々落ち着いてきたぞ。絶望的な惨状（予定）が悲観的な状況（予測）ぐらいにはなった）

どちらにしろマイナス方面だ。

「あなたがそこにいる理由が分からないんですが。冬雨^{ふやめ}さん……」

肩を落としたため息をついた。

それでも絶対が絶対であることには変わりなく、これは間違いなくヤバイ。公共の場で堂々と暴れていい存在ではないのだと一は思っている。

「あのさーイチ」

暗黒面に吸い込まれていた一を現実に戻したのは隣に座っていた瀬奈。

自分の他に話しかける友達はいないのかとも思うが、一がその辺まで考えていると、油断して客観的に見ても過保護な思考になりかける事があるので止めておく。

「ん……あー、悪い、何かにとらわれてた」

「へーそう。それは良かったね。見とれてた、と」

……何だ？ と一は一瞬だけ瞳の動きを止めた。
かみ合っていない会話を余所に瀬奈は続けた。

「……うん、いいや。あれってルーニーのおねーさんだよね？」

「俺の見ている景色が正しければ、そうなるな」

回りくどい一の返答に瀬奈は『なに言ってるの』的な視線で応じた。

「じゃあ、なんだか知らないけどあの場所にいるってことは……やっぱ試合するの？」

「するん……だろうなあ」

一はついに第三者の意見を述べられ、認めたくないという成分がおおいに盛られた表情を作った。

それを見かねたのかどうか分からないが、瀬奈が聞いてきた。

「で、さっきから何？ そのろこつにイヤそ〜な態度。何かあるの？」

「いや、まあ……あの人は極まってる存在だから、こんな所に出ても無意味だと思うんだよなあ……」

具体性を欠く一の言葉に首を傾げる瀬奈。

「無意味？」

「そうそう、俺の知る限りおよそ近接の戦闘においてアレより上も右も居ないし、現れたとしてもそれも相当のルール違反だろうな」
「……？」

「あーいや、要するにこんな所で闘っても勝ちが決まりきってるし、別にあの人は炭酸かアルコール以外の物で釣られるような性格でもないし……」

「なにそのビール好き」

「あと肴は辛くないと認めないらしいぞ。……とにかくそんなわけで、出場して何になるんだって俺は言いたいけど、やっぱり言えないよなあ……」

「はあ？ 言えばいいじゃん」

瀬奈は分かっているようなので、一はさわらぬ神に祟りなしというありがたいお言葉があるので冬雨のすることには口出し手出しするのを己に禁じている。と説明した。

「神って……」

「たとえるなら破壊神だな、その時は」

これは誰にも否定させねえ、と無駄に意気込む一。
それをなかったことにした瀬奈は冬雨の方を向く。

「あ、始まるみたい」

「頼むから怪我で済んでくれよ相手さん……」

一は割と真剣にトラックの中心に念を送った。

結局打ち砕かれた。

一の淡い平和願望は。

「ああ……」

残念とばかりに一はうめいた。

それはもうばかげた光景でなんと表現したらいいか……圧倒的に防ぐという概念をぶち壊し、大儀であることを感じることでしか淀まない足取りを当然とし、仕舞には戦意喪失して無抵抗の相手を蹴っ飛ばし、その勢いだけで相手の腰を支点にくの字を通り越して文字通りの二つ折りにたたんだ（どっちの向きにたたんだのかは黙秘権を行使させてもらう）。

その光景はその場にいた全員に対し『救いはない』という言葉で塗り込む程の、いわゆる一種の『つまらなさ』だった。

「やっぱ無理だろ。あんなのいくら納得しても無理だろ……」

「あっそう」

あきれる瀬奈を余所に、ぐだぐだ状態の一は既に折れた心をさらにポキポキ折り続けて気分を落ち込ませていく。

横目に見ると救護班が腰の死んだぶっ壊れた携帯のような負傷者を担架で運んでいた。

見ず知らずの方がせめて黙祷を捧げておく。

それくらいしか一には出来ないのだ。

「……まあ、何が悲しいってあの人の成長に俺が荷担したことなんだよな」

「ん、なんか言った？」

「懺悔……という名の独り言」

「はあ？」

瀬奈の見下すように見上げる視線が痛かった。

———
その後もなんだか次元がズレた戦いが繰り広げられた一般の部……
もといバスタードは校庭に経費で済ませられない痕跡をえぐり付け
て一応の終わりを見せた。

あらかた一年の出る競技が終わったので「くわーうえろおうずえー
くわえろおうぜえーい」とマーチをかける風璃を先頭に、ぞろぞろ
と誰一人欠けることのない集団で1－Dに戻った。

その統率のとれた指揮は誰からか、風璃にハーメルンの笛吹きの特
号が与えられたのは余談。

「マジメー、最近どうよ？」

「何がだよ」

琉二が着席するなり話しかけてきた。

「フッ、察しろよ。話題が思いつかないんだぜ」

「そんなこと察して俺が何を話すんだ？」

最近脳内を駆け回っている奇妙な存在とか変な話題ならややあるが

それを語って聞かせるほど頭の沸いた存在ではない。……いや、ある意味沸いていると言えるか。

「それもそうか。マジメは年中変わんねえからな」

「さすがに衣替えとかはしてるからな」

「んなの分かってるぜ。そういう話じゃねえよ。気分とかだよ」
「気分とかって言われても知らねえよ」

それにしても……、と思いを巡らせる一。

最近、変わっているのだろうか？ ……変わっているのだろう。思い当たる節はある。ただ、それがどのぐらいまで周りの変化で、どのぐらいから内面の変化なのか——なまじ『沸いた』脳内ではそういう定義すら怪しいのだが——という線引きが難しい。その線引きがどうしたのか、といえば、

「どっから俺なのか、ってことだよな……」

「ああああ、またマジメが訳の分からんことを言い出したぜ」

さすがは琉二、俺のことを人一倍分かっている。

「まあ、考えたところでどうにもならないしな……いいや」

「おう、堂々と出立なさった一人の世界からようやくのご帰還ご苦労さままだぜ」

「おかげさまでな」

琉二の皮肉を適当に返す一。

「……やっぱマジメ最近変じゃね？」

「お前は昔っから変じゃね？」

さらに何も考えずに返した。
さすがに腹に据えかねたのか、琉二の顔にわずかに陰が宿った。

「あのなあ、言っていることと悪いことがあんだろ」

「じゃあ黙っていいか？」

「そうか……っておい、それって喋る内容に悪いことしかねえってか！？」

ツツコんでくるところを見るとまだ心の懷に大分余裕があるらしい。
一は少し乗ってみた。

「……………」

「そっから言っちゃあいけんのかい！」

この辺の気安さが琉二以外の友達には無い良いところだ。

「ところでよ」

「ん、話題あったのか」

琉二はしかし一の茶化しに乗らずに話を続けた。

……最近無視されやすい気がするのだが。

「お前午後にアレ出るだろ」

「あー、アレ？ うんうんアレ、出るらしいなアレ」

「テメエ分かってねえだろアレの意味」

ばれた。さすが。

正確に言えば分かっているのではなく考えていない。もっとダメか。

「アレってアレだろ。指示語の一つ」

「そんな専門用語オレは知らんぜ」

ボケ（お笑いの、ではない）の相棒を知らぬとは嘆かわしい奴よのお、と言うつもりはさらさらない。

「オレが言いたいのは対戦競技のことだぜ。午後の最初からあんだろ？ 今の内にメシ食っとけよ」

この体育祭は明確な昼の休憩が無いという妙な特徴があり、生徒は各自で暇な時間を見つけて食べるようにする。

単なる教師のサボりであると認識する生徒は居ても、統率がとれないこと以外に実害がないのもまた事実なのでだれも直訴しないのが現状だ。

むしろ自由で良いじゃん、と歓迎されている節がある。

「あーいや、もう食ったんだよな俺」

「……ほう？」

なにやら微妙な間、そして納得したようなそうでない声が琉二から出た。

「いやいやホントホント。ほらこの通り弁当箱もすっからかん」

一応のために持ってきた弁当箱を匏から取り出し、中身を見せる一。その中身は確かに食べ物と呼べる物体は無かった（あったとしてもプラスチックの仕切り板ぐらい）。

ただ浅ましいことにその弁当箱の内側はピカピカで脂とかご飯の糊すら付いていない、いわば『最初から何も入っていない』ような状

態だった。

いくら普段バカをやっている琉二だからといって、当然そのことに気づかないハズもなく、

「……確かにすっからかんだな。うん、食べかすが全く見あたんねえぜ」

「あー最近の箸はすごくてな。もう少しでナノテクの領域に足を踏み入れるんだと」

「お前の箸はマイクロファイバーか、はっはっはー」
「もうすぐナノファイバーだな、ははははは」

などと白々しい乾いた笑い声でお互いに間合いをはかる羽目になった。

先にそれを詰めてきたのは琉二。

「ってオレに賢いトークさせんじゃねえぜ。マジメ、腹減ってねえのか？」

「だからもう食っただろ」

しかし退き下がる一。

「あーそうかい。ま、オレの知ったこっちゃねえっちゃあねえよな」

それ以上の追求を諦めた琉二はあのはた迷惑なランニング登校中に買ったらしいコンビニ弁当を開け（その時琉二を相手したコンビニ店員には同情する）、それをがつつき始めた。

「まあ腹は減ってないから大丈夫だろ。戦は出来るぞ」

「おお、マジメが意欲的に戦おうとするたあ、これはますます怪しいぜ」

目を光らせ、あごに親指と人差し指で作ったL字を当ててかつつけた琉二を一は白い目で見る。

「ますますって何だ」

「ぬんだろう（何だろう）……な、つと。ごちそーさん」
「速いな……」

一は「ごちそーさん」と言うのと同時にビニール袋にプラ容器を突っ込むのは罰当たりなのだろうか、と目の前の光景に疑問を起こした。

「ふん、冷やし中華如きこの琉二には飲み物以下のゲルだぜ」

梅雨時に冷やし中華とは……。

「早いな。つーかゲルって液体よりはゼリーに近いぞ」

いつか喉を詰まらせるんじゃないやあなかるうか、などと要らん心配をかける一をよそに琉二は「おっとネイチャーコールが……」などと言ってトイレに向かった。

「……誰が賢いトークはしないって言ったんだ？」

取り残された一は自分でも気づかない内に目を揉みほぐしていた。決して疲れ目というわけではないのだが。

――
どうも日が長くなって一日の感じる長さが長くなったからといって

時間が経つ早さは変わらないものというのが当たり前なのだが、今一はその反対に時の長さを短く感じていた。隣には風璃が座っており「ふんふんふん♪ はーひふーへほー♪」とか歌っている。

「……結局すぐ降りてきたな」

「そんなこと無いっすよ ハジメちゃん」

「そうか？」

「へい、一刻ぐらいいやしたぜえ」

なぜ昔の時間で言うのか知らないが、とにかく一の実感では30分も教室にいた気がしない。

「そんなにいたか？ 全然休めていないんだけど」

「ふっ、ハジメちゃん……外でも人は休めるんだぜ」

琉二が格好付けるとしらけるがこいつが格好付けるとすべてがネタにしか見えない。

「真面一って奴は部屋で休みたいんだよ」

衣食住だけは最低限守りたい一。なんだか話題がそれているのも気にしていない。

「秘密の部屋で？」

「死ぬだろ」

休めないし、蛇いるし。

「おっとあの先生の髪の毛は実は……」

「秘密のヘアーとか言わせんじゃねえ（つてかネタ古いだろ……）。それに指さすな。後で因縁付けられても知らねえぞ」

「わーん、ヘアーはアタシのセリフだじえいよ。この非道の六十五、ネタ殺しい！」

そう言いながら風璃は右手の拳を立てて、そのまま一の上腕を叩き、そこから拳を折って第二撃を叩き込んだ。

……どうやら風璃は下諏訪にでも行ってきたらしい。根拠は無いが。

「意味分かんねえ……いろんな意味で」

「ふっふっふー、極めるとはこういうことサ」

「知らねえよ……」

本気でついていけそうにないと思い始める一。

「これであと1ヶ月後にはハジメちゃん秘孔がはじけてキテレツな叫び声とともに飛び散るだろう……」

「まあ、予言の正確さはノストラダムスと良い勝負だろうな、それ」

一はこれ以上はなし、と言いたげに天を仰いだ。

そんなバカな話をしている内にも時間はどんどん過ぎていき、試合が始まった。

そしてそのすぐ後、1-Dから脱落者が出た。

第42話 体育祭、暗黒時代（後書き）

逃避日記（不定期）

この小説はバイトと学校のスキマ産業のタマモノです。
えーとつまり、オフの日が欲しい……。

という一言。

第43話 体育祭、爆発（前書き）

今回ほどテキトーな話は（多分）ない。

第43話 体育祭、爆発

正午を丁度またいだ時間になってようやく本日のメインの種目である試合の、それぞれの決勝（一応）が順番に始まった。いや、正確にはとっくに1つ目は終わっている。

「で、これか……」

一は土のない地面に腰を下ろし試合を眺めていた。さっきまで。

「わーんセナちゃん！」

「ふーうりいーん！」

では今はどうかと言うと、目の前に繰り広げられているような面白い寸劇の数少ない観客の一人となっている。というよりも、むしろ一だけが見ている。

その寸劇の内容は瀬奈と脱落者……風璃の二人がひしと抱き合って悲しみを分かちあっているというものだ。

本人たちが真剣に振る舞ってようがいまいが普通の人はコレには関わりたくないだろう。

誰も見ていないのをいいことに気迫だけがエスカレートしていく二人……ではなく、瀬奈だけ。

「おおよ……負けちゃったよー私。残念だよえーい」

しかしそれでもやはり風璃はいつも通りだった。負けてもマイペースというのはある意味尊敬できる。

「よしよしふーりん敵は取ったげる。このわたしが本気を出してあ

の1—Aから勝利を奪い返してくるっ」

そしてこっちが何でか知らないが気分の高揚している瀬奈という生き物。

どうやらこの生き物は死んでもいない敵討ちで燃えることが出来るらしい、と一は頭ごなしに解釈することにした。

……いやまあ、ホントは違うんだろうけれど。流れとかそんなところなんだろうけどさ。

「よくやるよお前ら……」

一はそのリベンジ体質の瀬奈がどんどん漲っているのを感じた。なんか肌がびりびりする（気がする）。

とりあえず間違っても接触の無いようにしよう一は心に誓った。

「しかし、向こうにも精神系のスキルがあったとはなあ……」

風璃はこと物理現象の扱いに関しては最強と言っても無理はない実力の持ち主だが、以前自分で言っていたように精神的な方面において全く関わりないのでそっちをぶつけられるともろい面がある。

その辺を相手——留居守率いる1—Aのことだが——が見越してぶつけたのだとしたら……。

「それにしてもピンポイントというか……」

配置を考えるのが上手い。だろうか。一は腕を組んで思考する。

目下のところ一の敵である守は1—Aの担任という地位を使って、本来戦闘向きのスキルが使える者を置くべきところにあえて精神感応のスキルを置いた。

それだけと言うわけではないが、こちらに見えないような立ち回り、

無駄を作らない事の運び方など、やること一つ一つにそつがない。唯一の例外は中間試験の時の顔合わせぐらいだろう。

奴は……いや、奴が、策士だ。きっと。自信ないけど。似た臭いがする。

俺と同じ『他人を活かす』役割。

「……まあやり方が決定的に違うんだが」

「なにひとりごとやってんの？」

横から呼びかけられて意識を再び現実に戻した。

どうやら瀬奈がこちらをずっと見ていたようで、考えごとをしていた一を不思議そうに見ている。

不意に、聞いてみたくなった。

本当に突然。今までの脈絡とか関係無しに。

「あー、最近の俺ってなんか変わってるか？」

「はあ？ 何で急にそんなこと……別にいつも変なんだし対して気にすることないんじゃないの」

「あーそう。……そういえばおまえは最近普通だよな」

最初は飯時にぶっ倒れるとかいうちんちくりんな癖があったのに今ではすっかり普通の高校生だ。

……別に悪い事ではないのだが。

再び思考に走りかけた頭を無理矢理戻すと、瀬奈がよく見るイラつき顔でこちらを見据えていた。

「そ・れ・はあ、わたしが普通じゃなかったと言っているのかなあ？」

なんか激昂のスイッチが入りかけた瀬奈を一は慌てて制する。

「いやいや結局あのおよそ確実にほか人にはないであろう少なくとも一般ではない体質は何だったんだろうなあと考えていたわけだ、だけだ」

まさか瀬奈を制するための自分の言語が制せられないとはなんたる矛盾だ真面一よ。

瀬奈は一のダサイ弁解を許したのかそれに呆れたのか「はあ……」
とため息をついた。

と同時にトラックの方から爆音が轟いた。

「!？」

さらに数瞬遅れて押し退けるような風が何か細かい欠片を巻き込んで辺り一帯に広がる。

その風は物という物を撫でて砂埃を巻き上げ、辺りの視界を煙けむにした。

当然外で、しかも戦場の近くにいた生徒なんかはそのため目を開けていることもままならない。

同じく外の、割と離れたところにいた一は最初こそ驚いたが、すぐに平静を取り戻して事態の把握に努める。

「誰だよ、爆発なんてアイツみたいなことする奴は……」

そういえばアイツが一番手を焼いたなあ、と思考を過去に遡さかのぼらせていると「うきゅー……」などと間拔けな声が聞こえた。

爆心地の方から後方に振り返ると瀬奈が両手をこちらに投げ出して

うつ伏せに引き延ばされていた。

「あー、大丈夫か瀬奈？」

「ただいまの風速25メートル……わたしの経験から言ってこれは間違いない……」

「……異様な経験則だな」

こいつはどこかで人には知れない苦勞をしているようだ。特に台風とかで。

風が収まってしばらく――十秒だったか三分だったかも分からなかったが――したところで瀬奈ががばっと顔を上げた。

「つて、これ誰の仕業？」

「あそこの『もや』がかかっているとどこにいろやつだろ、この流れからして。多分もう少ししたら分かるだろ」

二人はそのまま状況を静観することに。

だんだんとトラックの煙が晴れてきてそこにいたのは――

「けっ、何が1―D大したこと無い、だ。おめえらの方がダセェしシヨボかったじゃねえか。第一この俺を無名扱いするってのがアホくせえ、いやシヨンベンくせえ。テメエらみんなしてガキか？ お仕置きが恋しいお年頃かよ。ドMかテメエら。俺キレさせてその体にヤキ入れようってか？ 大した東京湾根性じゃねえかつ……ケホッ。ああ畜生、さすがにこん中にずっといるわけにもいかねえな、今のご時世こういうほこりっぽいのが案外バカになんねえしよ、アスベストとか冗談じゃねえし。で、しいーんぱあーんさあーん？ 試合終了でいーんだよなー、グリーンだよなー？ ……っていねえし。まあいいや、こいつ引っ張りだしてから出りゃ確実だしな。あーあー救護班が優秀で良かった良かった。心置きなくぶっ放して気

分爽快だなこりゃ。しっかしまったく何だってこいつはこうも重いんだ。デブってんじゃねえぞコイツ——」

っのだ かちと
角田徒人。一の顔見知り。口が悪い。身長とキレやすさは瀬奈と良
い勝負。

そして、そのスキルは、『ファイアボルト木端微塵』。

それが1―Dの風紀委員。

――
遡ること数分。

角田徒人は、少なくとも表面上、行儀良く対戦相手と相対していた。精神衛生はこの上なくドロドロしていた。

「えーとお互いに規定の位置まで離れて。先生が合図したら試合開始。いいな」

「あん？ 昨日と違う先生ですねェ？」

口の礼儀がなっていないのはいつも通り。

指摘された審判役の先生は心の中で『チッ、この反抗期真っ盛りのガキが！ ああそうだよ悪いかこのどチビ！ 俺だってこんなこたあしたかねえんだよさっさと消えろその分子みてえなタツパのくせしてしゃしゃってんじゃねえよ！』と、表情にこそ出ないが意外にもタメを張っている。

徒人はまあいいか、と開始位置まで歩こうとした。

しかし相手がそれを制するように言葉を投げかけた。

「はあ……何でこんなチビがこの俺の相手なのかねえ」

その明らかに失望の籠められた声に徒人は振り返り、とりあえずガンを飛ばして続きを待つ。

「おっと聞こえたか、悪い悪い。独り言のつもりだったんだが」

相手は徒人の中学生以下の気迫のこもったガンがどれだけ恐ろしいかに気づかない。

徒人がタイミング良く欠伸をしている間にも相手は続ける。

「うんうんだがしかしなあ、何だったんださっきの1—Dの女子……斉藤だったか？ 決勝とは思えないほどあっさり負けてんのな。スキルが使えるんなら多少の抵抗ぐらいしてみろよってんだよな」

さらに精神汚染が進んだ。反比例するように相手への外的な興味のベクトルを収めていく。

徒人が欠伸で突き上げた腕をそのまま伸ばしながら見ているのを確認して、相手のA組代表はニヤリと口角を釣り上げる。

「……おやあ、だんまり？ もしかして身内を侮辱されてキレちゃった？ 参ったなあ、程々にしとけて言われてんだけどこれで本気出せるよー。それで？ 名前は？」

ここまで一人で語っておいて今更名前を聞くという挑発にも、冷静極まりない徒人は普段の喋りを押さえて自分の名前だけを言っている。

その声は必要以上に聞こえることのない、とても小さなものだった。

「はーん、聞いたこと無いねえ。ていうかもしかして逆にビビってるのか？ そのだんまり」

「……ここは逆に焼くか」

「……いい加減に試合を始めるから離れなさいっ」

誰にも聞こえなかった不穏な徒人のセリフを最後に会話は審判の合図で打ち切られ、互いに10メートルぐらいの距離を置いて向かい合う。

さらに独り言の聞こえない状況で徒人は独り嘯く。

「キレてるかだと？ おもしれえな、どうして分かった」

しかしその間に既に試合は始まり、向こうの见えない攻撃——いわゆる念動力というものだが——が一般の方の戦いですっかりダメになった地面を叩きつけて積もった塵を巻き上げる。

視界がややぼやけて相手の表情が見えなくなり、影だけが見える。

幸運なことに徒人にはお詔^{あつら}え向きな状況だ。おかげでほとんど力という力を使わなくて済みそうだ。

むしろここまできると相手の『不運』を讀えなくなる。

徒人としては永遠にそんなことをするつもりはないのだが。

「ワザワザ俺を挑発するわよりによって侮辱するチョイスが『それ』っていうポカするわ俺と相性よくねえしそもそもって場所にまで恵まれないわ……これで雨でも降ってたら少しくらい違っていただろうになぁ？」

徒人は戦鬪の緊張どころか余裕すら感じて、微かに微笑みを浮かべていた。

「さあて……いい具合に視界が悪い内に使い古しのつまらないネタを一丁行くかぁ」

見つける意味は無いのだが霞んだ視界の中で徒人の目が相手の輪郭を見据えた。

相手に聞かせるつもりはさらさら無いセリフを、柄にもなく、今までのだんまりを返上するように謳ってみる。

「お客様1名さんイラッシャイマセー——」

塵と塵がぶつかり擦れる。

「酸素不足と爆発にはどうかご用心ドーズ——」

擦れ合って火花が散る。

「念のため炭にはならねえからご安心クダサーイー——」

火花が塵の舞う空気中を伝播し爆発となる。

「ただチツと痛いのはご容赦イタダキマース——」

しかしその広がりは徒人には向かず、相手へと指向性を持つてのみ拡散する。

「粉塵爆発の秒読みご確認をドーズォ、おあいその時間だお客様ア——」

直後、一瞬にして爆雷が徒人以外の周辺を飲み込んだ。

——
ということがあった数分後。

「あゝスッキリした。俺のスッキリだなコリヤ」

そんなセリフを言い放ちながらとんでもない破壊願望をお抱えにな
っている人物が一の方に来た。

一瞬にして一の周囲が危険区域^{レッドゾーン}へと早変わり。と認識したところで
自分には瞬歩も瞬身の術も、ましてや剃も無いのであしからず、
と否定的な方法での安全確保を諦める一。

「なに物騒なことやってんだよお前は……」

「おーおーハジメ君何だって？　ボクは至って極めて安全な人畜無
害ですよ？」

本当にスッキリしているらしく、心にもないことを言っただけの徒
人。……と、その身長と同じ人物がもう一人。

「なーにが無害よ。人の皮をかぶったアクマぐらいに違うんじゃないの？」

瀬奈が先ほど吹っ飛ばされたのを根に持っていたのか徒人に突っか
かる。

「あん？　誰だお前……ってクラス最小か」

いや、それは議論の余地がある。と一が突っ込むより、

「はあ！？　そっちじゃないの、背が低いのは！」

瀬奈の反射的な反論の方が速かった。

そのやりとりを聞いて、改めて端から二人を見比べてみると……う

ん？ ……あー、わかんねえや。という結論に至った。

「あんだと？ そんなら白黒はつきりつけてやろうか？」

「望むところだっ」

混乱しているわけでも記憶喪失な訳でもないのだが、一応、という単語があるので一は周囲の状況を確認する。

目の前、なんかカルシウム不足な二人がエキサイトしている。

近くの左右と後ろとエトセトラ……誰もいなさそう。

で、二人は今身長を比べようとしている。ついでに俺は『非常に甲乙つけがたい』という結論を持っている。

これらの情報から鑑みて、得られる結論は……、

「イチ！」

瀬奈が声を荒げて一に呼びかけた。

それに一は今までにあったかないかのスピードで返事をした。

「悪い、どっちも同じに見える」

「まだ何も言っていない！」

「俺は空気読めるんだよ」

「だったらわたしの方が高いと言うはずだ！」

そんなビッシイと指さされても一は「いや、それはおかしいだろ…

…」としか言えない。

「さあホントはどーっちいーだあ！？」

「まさか八百長なんてセコい真似しねえよなあ！？」

一の背より明らかに低いやつらに絡まれる図。客観的に見るといかに自分が情けないかがよく分かるのだろう。

と、そんな情けないやつが導く答えがロクなものであるはずがない。

「どっちも選べないだろオイ」

「なんで!？」

「普通に行けよ普通に!」

どっちつかずな一に憤慨する瀬奈と徒人。

何故身長にそこまで真剣に取り組めるんだろうか、とげんなりげんなりする一。げんなりげんなりって何だ。

「だから、分かんねえんだよ。髪の毛の量は瀬奈の方あるけど頭のとっぺんとか言い出すんなら……どうせ言い出すんだろ?」

「そういわれたら俺は言わないわけにはいかねえなあ」

徒人が当然だ、と腕を組み頷きながら言う。

「だよなあ……だからそこまで微妙な差だとはつきり言って偶然の差で変わるから無理。全員が全員こっちが高い、と言えないから」

同年代にも関わらず諭すように話す一だが、まだ瀬奈の抗議は続く。

「……誰がそんな細かいことを言えって言った?」

「いやむしろお前らのその身長に対する姿勢の方が細かいんじゃないやあ……ってなんだその身構え」

一が御託を述べている間に瀬奈の膝が少しずつ曲がり、両手を胸の前に据えて、気分はプロレス。

後には熱しやすく冷めやすい、役目を終えたと言わんばかりの態度の少年が一人残された。

第43話 体育祭、爆発（後書き）

11月9日ぐらいにパソコンが昇天とかぬかしましたがなんかファ
ンがどーたらこーたらとか言うもんだったのであっけなく復活。
えー、なんか色々ダメな作者をどうかよろしくお願いします。

第44話 体育祭、巻き返し（前書き）

今回から鞆連の口調を少し変更しました。ちょっとアレで通すのは今更ながら無茶を感じたので……すいません。
というわけで鞆連のターン。

第44話 体育祭、巻き返し

「試合前に何してんだお前等は……」

一はそんなことを言ってきた相手に頭を下げる。

「いや、なんというか怪我しないけれど全く自分が死にかけた思いをしていたところを助けていただきありがとうございます」

一が深謝した相手はマイナー部活こと暗密部あんみつぶの副部長、伊東長舟。あれからしばらく、第三者の視点では浜辺やお花畑で追いかける映像映像（というより『しばらくそのままお待ち下さい』的な何か）が流れているというこの世の終わりを感じていたところに副部長の手を煩わせてしまい恐縮おそづというかなんというか。

「全く……もうすぐ部長あいつの試合だから止めたんだ。さっさと応援なり観戦かんせんなりしろ」

どうやら最初からそれが目的だったらしい。

一は適当にかつ礼儀を欠かない程度に返事をしてからその場に胡座あぐらで座りその横に長舟も座る。

「それにしても、お前さんはずいぶん変わった中身だな」
「……え？」

唐突だった。

こちらを見ずに、見る必要のないかのように長舟は語る。

「ふむ。それに根幹は昨日の能力で土台は……成程。そうか、面白

い。二重に輪をかけた二重だな」

まるでこちらのことをすべて分かっているかのような、その上ではぐらかしている話し方だ、と一は感じた。

「一体何の話をしているんで……？」

すると長舟はいや、こちらの話と首を振り「ただお前さんの事を見直してただけのことだ」とのこと。

「これは来年の暗密部も安泰だな。……おっと、部長の試合が始まるな。ほら、声援の一つでも送ってやれ」

「いや、そんな柄じゃないんですけど」

エールなど人生で数えるほどしかやったことのない一は表情には出さないながらも戸惑う。

「そうか、じゃあお前さんの相棒にでも頼んでおこうかね」

「相棒？」

相棒って言うとかっこいい響きができるが、なんかこの状況においては良い響きがないのは気のせいかな？

そんな疑問を抱いている内に長舟は一人の部員を呼んだ。

「柳瀬、こいつの声で今からやる部長の試合を応援してやってくれ」

そのセリフで一はハッとした。

久々に思い出した。声帯模写の天才が身近にいたことを。

「あ、ちょっとそれって違うような————」

「りょーかいバツチリ準備おっけ」

さっきまで一をどうにかして屠ろうとしていた瀬奈が何の迷いもなく長舟の要請に応えるべく喉の調子を確認している。

それに合わせるように副部長の上、暗密部部長、水面^{みなも}靱連^{ほかる}が既に焦土と化した校庭の中心に相手と向かい合って佇んでいた。

なんて、状況を確認していると瀬奈が止める間もなく叫んだ。一声で。

「『フレーフレー、ぶ、ちょ、う！ A・I・S H I・T E・R U
！』」

一はカクツと首を傾けながら、靱連も似たようなタイミングで転けたのが見えた。

「もうちょい他になんか無かったのかよ……」

言うに事欠いてなにを告白しているんだ己の声は……もとい瀬奈は。体勢を立て直した靱連はこっちをにっこりやおら振り返り親指だけを立てて、そのまま手首を180度返し、口パクで『G o t o h e e l l ！』（地獄へ堕ちろ）』などと言っているように見えた。

いや、うん、見えただけだ。本当は違うんだきつと。

長舟は高笑いし、

「ハハハハ。ふられたな」

瀬奈がそれに同調する。

「やーいいイチふられてやんの」

一は持ち前の平静顔でそれらをやり過ごす。

「全く誰なんだろうな、こんな酔狂なことをしたのは」

既に無抵抗を決め込んだ一は受け流すだけ。レジスタンスという単語は一の中では愚か者と同義である。

「お前さんを除いて誰がいる」

「そうだよなんてあってあの声は誰がどう聞いてもイチだからね」

どうなんだこの二人の白々しさは。一としてはどうにもやりにくい居心地がし、無理矢理試合の方に意識を傾けることにした。

「あー、応援しないとな応援。そうだよ応援だよ今すべきことは。ほら相手とかなんか雰囲気古き良きニッポンって感じで強そうだしこれはもう応援しないと勝てないんじゃないでしょうか部長でも」

本当に無理矢理だった。

何故か功を奏したらしく、長舟と瀬奈の興味はどうにか逸れてきたようだ。

と思っていると突然長舟が立ち上がった。

「悪いな、次の試合だから先に行ってくる」

まず瀬奈がそれにこたえて手を振った。

「いつてらっしゃーい」

「どうぞこちらにお構いなく行って下さい」

白々しさのお返しとばかりに一は長舟を快く送りだした。元はと言えばこの先輩が悪いのだ。これくらい大目に見てもらいたいもんだ。

「俺の試合のすぐ次がお前等だろ。いつそまとめて来るか？」

「いいボクには部長を応援するとかうかくも崇高な目的がありませんのでそちらへ今すぐお伺いすることは誠に申し訳ないのですが叶いません。どうぞ僕らのことなど気にせずよしなに試合の準備などどうぞ」

自分のことながらもうここまで来るとただのうざい奴だよなあ。と一は自分の白々っぷりに評を下す。

「うわ、うっざあ……」

「ふん、案外根に持つタイプだな。そんなことだと早晚嫌われるぞ」

言われてしまった。

そのまま長舟は本当に行ってしまった。

一はしばらくして何となくつぶやく。無意識にだが、瀬奈にも聞こえるように。

「ん？ 俺って誰かに好かれる性格してたか……？」

自分で言うのもなんだがこの無機質で受動的な性格、とても日常的に会話するには耐えないだろう。それこそ役に立つのはスキルぐらいのものだ。

そんな一の僅かな寂寥せきりょうに、期待通り、反応してくれる人物が一人。

「何言ってるの。イチの良さは性格じゃないでしょ」

「……」

何か良いことを言おうとしているのだろうか。
少し期待する一。

「その……」

言い終える前に、周囲がざわついたことで話は中断された。

既に開始された試合に、皆が注目していた。

その中心には相手と靱連、そして銀幕のような色の液体の流れが白い煙を下に流しながら靱連を取り巻き、檻として捕らえていた。既に靱連はすべての視界から見えなくなっていた。

――

試合前の口上ほど靱連にとって辛いことはなかった。

「やっぱり去年の優勝者がここまで来たわね……」

「ちなみに……お、一昨年も、勝ったぞ」

「はいはい相変わらず噛んでるわね」

こんな風にバカにされるからである。

これが英語だと流暢に発音できるから不思議だ。

さらに読み書きそろばんエトセトラ……も『日本語を話す』以外は人並み以上のだからなおのこと納得が行かない。ちなみにペーパーテストでは話すことはないのも助かっている。

そしてこの高校は面接が無いからという理由で選んだ。

いっそ海外にでも交換留学生として行っておけば良かった……などと後悔しても今は三年生。イコール受験生になった今では来世の夢でしかない。いやいっそ外国の大学を狙って……いいやそれよりも目の前の今に集中だ。

靱連は気を取り直して途切れ途切れの文句を述べる。

「早く、試合」

本当に必要最小限のことだけを言う。これ以上は無理っぽい。

「ん、そーね。こっちも一刻も早くリベンジしたいし」

こっちは一刻も早くこの恥ずかしいひとときをやり過ごしたい。という靱連の願いは通じ、試合はすぐに始められた。

そして靱連がやっと喋らなくて済む、とホッとしているつかの間に周りには『空気』でできた、いわゆる檻、もしくは鳥かごのようなものが作られていた。

「去年よりも……巧い」

ジャージのポケットに手を突っ込んだまま素直に感心する靱連。
相手のスキルは『液体空気^{ランニングエア}』。文字通り低温の液体になった空気を操る。

そのマイナス200℃近い温度のせいで靱連の立っている周辺は白い煙と霜を生み出して徐々に生き物の住めない環境に変化させてゆく。

「伊達に去年の試合で無様にやられたわけじゃあないのよ？」

たしかあの時はかんしゃく玉をそこら中にばらまいて気を取られている隙に吹っ飛ばしたとかそんな終わり方だった、と思い出す靱連。ちなみにかんしゃく玉（某ゲーム風に言えば音爆弾）の使用に関しては、スキルが認められてんなら道具の一つや二つ使っても問題な

くね？ と誰かが昔に喚いた結果認められた行為である。

「……」

あまり話したくはない、とばかり考えていた靱連はしかし次の一言で試合に集中せざるを得なくなった。

「あなたのスキル、テレポート系とか言われてるけど……そのスキル、間に物を挟むと実行できないんじゃない？」

凶星。まさにその通りだった。

靱連のスキル、『ダブルベクトル双次元』は物を転移、瞬間移動させる系統のスキルなのだが、元の位置と移動先の間に気体以外の異物がある場合には移動がキャンセルされてしまう。

「……」

靱連が黙っているのにも、やはりというか構わず空気……だった液体が白煙を纏いつつその視界を遮っていく。

ふと見上げるとやはり上の方も覆いかぶさるように『空気』が蓋をしていた。

そして靱連の視界は全てが暗くなる。

「空気も……物体、だよ？」

靱連は落ち着いてポケットから手を出して前へと進み、そのまま手に意識を集めながら前に突きを出した。

「さて……全方位を囲った包囲網は完成したし、これからじわじわと狭めていくわよ……」

と片保知佳^{かたほ ちか}が油断なく言ったか言わないか、その刹那、包囲網は破られた。一瞬だけ。

「嘘っ!？」

「まだ……次」

その一瞬で何か黒い影が飛び出して横にステップをとったのを目で追おうとしたが、見失った。

「あっ、自分を移動————」

「マンデイン……」

翻訳する気にならない単語を呟きながら鞆連は知佳の頭上に自身を転移させていた。

しかし知佳はその早業に劣らない反応を見せる。

「————っなんて簡単に終わるわけにはいかないでしょう!」

手を開いて頭上にかざし、自分と鞆連の間にある空気を液体にして隔てた。

「繰り返し……千日手」

浮いたまま鞆連は無機質な言葉を紡いで見えないところに存在を主張していた。

その陰で、ジャージの上着のポケットに手をつっ込んだ。

「どうせそこからまたいつもみたいにテレポ……つとお!？」

靱連がいる方を向いていた知佳の後ろから何かに打たれ……撃たれた。

通常の何倍もの速さでエアガンに使われるBB弾が散弾のように密度濃く知佳の背中を穿つ。

『空気』一枚隔てた向こう側で靱連はジャージの右ポケットからBB弾をいくつかこぼしながらもその右手から知佳の後ろに送る。

「裏の、裏」

背中で続く痛みに耐えながら知佳が上を見ると、先ほどと同じように知佳の『空気』に穴を『手で』こじ開けて靱連が落ちてきていた。

「ああもうさっきのと言いなんなのよ!　こんなにあっさり私の仕掛けを破っておいて、何がしたいの!？」

口では怒りながらも全く諦めていない知佳は両手をオーケストラの指揮でも始めるかのように振り上げ、同時に左右から『空気』がせり上がり靱連を挟み込もうとする。そのまま食らえば多分全身に酷い低温火傷だろう。

その文字通りに寒気をする攻撃に、靱連はジャージでよかった、などほとんど感覚で戦っているがゆえの余裕な思考に走っていた。そのせいか、

「When did I say that I can't move the air? (いつ私が空気を移動できないなんて言った?)」

などと靱連からすれば『長文を言いたかったから仕方なくつつかえ

ないように』喋った言葉も、知佳にとっては突然で、しかも優位に立っている相手から言われたのではただ洒落込んでいるだろテメー、としか見てももらえず、

「つふ……ふざけてんのかこのやろー!？」

なんか原始に帰ったように怒られた。

「……ふざけて、ない」

せっかくネタばらししているのに、と数少ない話し相手に対し、鞆連は少し残念そうな表情を向ける。

さっきの態度と矛盾するかもしれないが、それはそれ、これはこれ、である。

苦手だから話すのが嫌いなのであって、相手が自分に応じてくれるなら逆にそれもいい、というものだ。

そういうことを考えて真っ先に思い浮かべるのは自分を拒むことのないあの部屋。せめて卒業するまでは大事にしたい。と思う。

「だから、負けない……」

そこからの鞆連に『遊び』は無かった。

音も無くあつと言えぬ間に背後を取り、あつと言う間に知佳の背に触れた、

「つ—————かつ」

だけで場外まで飛ばした。

落下の衝撃か、急激な加速で気絶したのか、飛ばされた知佳は目を回して大の字に寝ていた。

「負けても、いいけど……家に、帰れない」

強い集団の中でしか生きられない少女、鞆連は今日も居場所を探している。

……この後長船が同じく余裕勝ちを決め（先輩半端ねえ）、遂に一、瀬奈の出番となり、すでにボロボロのフィールドと化した校庭のトラック真ん中に生徒4人が審判1人を挟んで左右対称に並び立つ。その試合の内容は、一はおろかギャラリーさえも2対2の勝負と思っていたのだが、あの留居守とるぐまもりがそれを許すはずもなかった。

「ふふふふふふ。いやいやそんなつまらない奴じゃあないと思っていたが……調べてみるとなかなか君の過去は面白いじゃないか真面一。特に中学時代なんか君の関わらないもめ事なんて無いぞ。」

『他力本領』『虎の威を駆る狐』フーリスト『催促』スーパーストップ『調停者』デビルウオッチ『鑑識』……

全部君の称号とは、いやはや恐れ入るね。それで『神経律』ハーネスと『変化律』ハーネスか。いくら一つだけ欠点が見え見えだからと言ってそれは反則だろう君。さてと、そういうわけでそんな化け物を敵に回したオレはさて、どうすべきか。決まっているだろう？ こっちは感情抜きに勘定抜きにしてとっかからないといけないに極きまっている。このままだと反則して反側して負けちゃうぞ、勝ちたいぞ。フッフ不負腐怖腑斧……嗚呼楽しい嬉しいいたのしいよ。もちろん金には果てしなく真実及ばないけれど、偶にはボランティアも本当に堪らないし貯まらない。これだから人生は、誠実さの欠片もなく、誠に実に、病めるのを止められない。面白いじゃないか……」

第44話 体育祭、巻き返し（後書き）

逃避日記。

ふと思いつきで「鞆連」って検索してみたら1ページ目でこの小説がヒットした。……マイナー過ぎるぞこの単語。

第45話 体育祭、一対……

やめろ。

ふざけるな。

引きずり下ろしてやる。

くっそーあのイカレ教師おれの大事な瀬奈になんてことを！ ふはははゆるしちやあおかないさあ！

お前ともう一人が言うのと冗談に聞こえるからそういうセリフはもうちよい真剣味を出せ……。

なんだよイチも怒ってんだろー？ 細やかなることは放っというてカーニバルフィーバーしろよーここはそういう空気だろー？

お前が（一応）そこまで怒ってるとかえって俺がそこまで怒る気がしなくなる。さっきまで何か物を投げそうだったのになんか落ち着いてきちまった。

何だよおれのせいにすんのかー？ じゃあ力貸してやんねー。

……分かっててそうしてんだろ。

オウイエエー！ いいーぜ……いいーぜ、ベエイベエ！

はいはい肯定な。

ちっ、バレたか。

人の頭覗き見しておいてよくやるよ……。

どうしても勝てなかったら出てくるから安心してバッチこーい！

お前本当に怒ってんだよな……？

イエース、ちよっとぜえいたくうーなびいーるう……、しかしそれが最善とは限らないのだー。

成る程ね……。
じゃ、バンガ。
ガンバ、な。

……仕方ない。

次善の策だ。

だからこれ以上は妥協しない。

最終種目、の最初。
1年生のペア戦、決勝。

「あー、実際どうなるか分かんないけど、これで勝った方が得点争いの流れを決めるのか……」
「らしいね」

一はまるで考える輩^{あし}となって佇みながら呟き、隣の瀬奈が平気な顔をして答える。

「俺には重い役目だな」
「負けたら私がコンビニの売り上げに貢献してさらにシュウチをさらすことになるんだから手を抜いたらようしやしないよ」
「……それも重いな」

確か要とそんな罰ゲームを決めていた。面倒なことに。

順位で決着をつけるって言っていたようだしこれで勝てば負けではないだろう。

……要が異様な得点を叩き出していたのが気になるところではあるが。

「まあこの間の試合も余裕だったし大丈夫でしょ」

瀬奈のその言葉に、しかし一ははっきりと肯定出来なかった。

今回の相手に限って言えば、本当になにが起こるか分かったもんじやない。

「で、その相手がまだ来ていないんだが……。あのー、不戦勝とかありなんですか？」

一は、試合の審判をやるには少し頼りない、ヒョロい先生にとりあえず今の状況への判断を下してもらおうように話しかけた。

その先生は心持ち偉そうな態度で一に目を向ける。

「すぐに来るからそのままじっとしてなさい」

命令口調が気に障ったのか、横で瀬奈がむっとした顔になったが、それだけで収めてくれた。

一が瀬奈に同じような顔をさせたら絶対無事では済まされないだろう。一は先生の幸運を人知れず呪った。それだけ思うところがあるのだ、瀬奈の暴力には。

その後全く動きのない試合の場に観客（校舎から高みの見物などをしている人達）がしらけだしたところになってようやく相手方が校舎の出入り口から姿を見せた。

「あゝあ遅くなっちゃった。悪いなお前ら」

片方はいつか一達の弁当の受け渡しの時に襲撃してきた左門さもんとかいうやつ。思い出したのはひとえに一の記憶力が良いせい……もとい、おかげだろう。

こっちはこの間の行動からして体育会系だな、と決めつける一。

「……………」

もう片方は見たことのない女子だった。暗い、のではなく（留居守が担任だけに、鬱色に染まっていけないとも限らないのでどうしてもその不安が拭えない）澄ました感じの、冷めた目線をこちらに向けている。英語の助力を借りるならクール、である。

「よし来たな。じゃあ早速試合を始めよう。……始め！」

え？ 俺？^{はじめ} と思う間もなく、である。

いきなりの開始に戸惑う一と瀬奈を余所に、左門が地を蹴り一に詰め寄ってきた。

「おらおらおら！ 慌てんじゃねえ！」

コーナーに追いつめたボクサーのように激しく途切れなく殴りかかってくる左門の両拳を一は両方の平手で捌く。

その捌いた手でスキルを使って左門の気絶をねらう一だが、どうにも上手く行かない。だが、一はその意味でも慌てることはなかった。たまに効かない相手がいるのだ。困ったことに。

「あー、いや、うん、まあ、俺は、持ち直すの、早いんだけど、な」

一は十分に後ろの限界を見極めた上で後ろへステップを刻み一旦距離を置いた。

「はーん、なかなか戦い慣れてるってか。だが、お前の相棒はもうダメのようだな」

「相棒って、ああ瀬奈の方か、って……!?!」

相手が奇襲を仕掛けるための挑発をしている可能性も捨てずに、一は横目で瀬奈のいた方を向く。

そこには瀬奈がぐったりと倒れていた。

その少し離れた場所に、相手の女子、広尾苗子^{ひろお なえこ}が立っていた。

「やっぱりスキルがないのにこんな試合に出るのは無謀だと思うんだけどなあ」

特になにをした風でもなく苗子は自然体のままただ立ち尽くしている、ように見える。

半ば呆然としかけている一に、何か『嫌悪感』は持たないけれど不快感のする『感覚が襲いかかってきた。』

「なに……くっ!?!」

「あれ? ああ、あなたは確か神経を使ったスキルだからあまり私のは効き目がないんだよね」

……ということは、瀬奈を落としたのは精神的な作用によるものか。予備動作もない相手に出来る限りの意識でもって気を配る一。

「おーい、オレに向けるなよー。それを」

その一を完全に気にせず試合は一旦中止だとしても言わんばかりな余裕の態度の左門。

一はそれに構わず、むしろラッキーと思いながら相手の分析に頭の回転を費やす。相手の気が逸れているなら儲けもんだ。

精神攻撃……よく風璃の方といい相手に当てられたもんだ。1クラスにそこまで居るといいうのも……。

「……まさか」

一は『今ここに居ない3人目』についての考察を密かにまとめた。

「ええ、こっただけ手の内を知っているのは不公平だと思うから今の内に言っておくね。私のスキルは『心身耗弱^{エクソースト}』で、彼は『心頭滅^{ハートレス}却^{レス}』。あなたと似たようなものだよ」

ちがう、そっちじゃない。ましてやパクリ疑惑でもない。

だけど、俺の気にもすることでもない、か。

「おいおいオレのもバラすのかよ」

「そいつはすごいな……」

適当に一は相槌を打って目の前への集中を再開する。

と、相手の立ち位置が妙なのに気づく。

「おい……出てないか？」

「ああ、出てるな。オレは出てないけどな」

苗子が四角い試合場の枠からはみ出た所に当然のように立っていたのだ。つまり、などと言うまでもなく失格のはずである。

「ああ、確かに線からはみ出るとそいつは負けとなるが、ペア戦に限って言えば片方が負けても試合に負けたことにはならない。よってこのまま続行する。ちなみに意識がある奴はもう片方が負けるまで、という条件が付くが、そのまま試合に参加することが出来るかな」

不随意的に一が審判の方を向くと、聞いてもいないのに答えてくれた。まるで用意していたようなセリフだな、と一は心中で皮肉る。なんとなく一は審判の態度が偏っているのをすでに感じていた。

「よくやるよ……ここまで伏線を張ってくれているってことは俺は礼でも言えばいいのか……？」

既に四面楚歌に近い状況で、それでも一はどうにかしようと冷静に状況を掴もうとする。

「さあーって、そろそろ仕切り直しとすつかあ！」

再び怒濤の勢いで猛攻を仕掛ける左門。疲れ知らずなのか、さつきよりもスピードが上がっている。

それでも連続した拳の攻撃、その所々にあるわずかな隙に一が反撃を加えようと、勢い余って振り抜いた相手の脇腹に正拳を叩き込もうとする。

しかし一の予想よりも速く左門の体が回転するのを見た瞬間、一は脚の力を地面前方に送り込んで下がる。

その読み通り、一の上体があつた位置を左門の回し蹴りが通過し、

「ちっ」と左門が呟いた。

「やっぱサシだとお前は何でも避けちまうな」

それを「どーも」と軽く流しながら、一の思考は行き詰まる。

最初に拳を捌いたときから手っとり早い方法である『^{ハーネス}神経律』を使
つての気絶を狙っているのだが、全く役に立っていない。

さすがは『^{ハートレス}心頭滅却』と言ったところか。どうやら肉体的にも精神的にも常に自分を保つようなスキルらしい。

「私のスキルも、まさか無視までは出来ないよね？」

左門に意識を向けていた一を再び『不快感』が脅かしてきた。^{おびや}

そっちにも意識を向けざるを得ない一は振り払うように頭からその『不快感』を追い出す。

その隙を突いてまた左門が今度は跳び蹴りで接近する。

かろうじて横にすべり、その着地に合わせて左手で裏拳を狙う一。
しかし、いくら反応速度が高い一でも、見えない所の動きは反応で
きない。

左門は逆に一の裏拳に合わせて丁度裏拳の当たる位置である肋骨の
脇と入れ替わりにして右拳を突き立てて一の左手首を寸分の狂いな
く打ち付け一の攻撃を終わらせると、左で一の頭を存分に殴った。

「ぐ……っ」

一はよろけた勢いでたたらを踏みながらもどうにか気を持ち直し、
ステップで距離を置く。

「おいおいその程度ってか？ そんなんじゃあ勝てないぞ、オレ
達には」

「……最近、こんな無茶、ばっかだな……」

そんな一の呟きが聞こえていないのか、左門は別の方を向く。

そっちは、瀬奈が倒れている場所。

「お、起きたか」

まさか。そんなヘマはないだろう。

一には相手が『思わず油断して一旦始末をつけた敵を放っておいた』などというそんな手抜きをするとは思えなかった。そんなことを徹底的に裏方である留居守がさせるとは、指導不足か。

「おい、瀬奈はそいつのスキルで、やられてるんじゃないの……か」

まだ少しふらふらする頭で言いながら瀬奈の方を見遣って、一はしばらくの間考える言葉を失った。

信じられなかった。こんなことをやることが。

「やだなあハジメ君。このオレがそんなミスをするとしても？」

その目には生気が宿っておらず、

「まさかまさか、ここまでが計画だ。君のための、そしてオレのための」

瀬奈の声で、瀬奈の口から、

「さあて、まだ本気ではないね？ 昨日見せた力はこんなものじゃあなかったはずだ」

留居守が――

「こんな状況で、君は勝てるのかな？」

――、やめろ。

「じゃあ、始めようか、ハジメ君」

ふざけるな。

「ああ、さっさと終わらせてやる」

引きずり下ろしてやる。

「ふーん、そこで怒るんだ」

だからどうした。俺をなんだと思っている――

――と思ったところで、絶妙のタイミングで、アイツが。

一は逸る心を抑え、常を取り戻す。

「いや、……………そうだな。ここで俺が怒るのも違うな。あー、よし、やろう」

「……………」

『瀬奈』が無機質に首を傾げたが、一は無視する。

まだ確信なんてもんじゃないが、負ける気がしない。むしろ時間が経つのと共に勝ちが向いてきている気がしさえする。

「その様子だと『俺』に狙いを絞ったみたいだが……………まあ、俺が先

生に採点するのもおこがましいな。さて、おしゃべりはこれくらいにしておこうか。……ホント、柄にもないな」

真面一は数ヶ月振りに使う。

決して自分自身の役には立たない、『他力本領』、『虎の威を駆る狐』と呼ばれた自分自身の本質、人の役に立てる力を。

第46話 体育祭、悪戯

「さて……」

状況の分析、1対3……いや、4。審判の化学の先生を入れれば5。はつきり言って人数差は大きい。

さらに細かく見るとこっちは近接でしか役に立たないクズで、向こうはそのクズよりケンカが強いのと、中距離からこっちに隙を作らせる能力者が一人ずつ。そして（不愉快なことに）スキルの応用で瀬奈に乗り移ったらしい留居守。と、ついでにそれを咎めない審判。

「意外と、とんでもなく、結構、勇み足、だったか……なー？ あ
ー……」

「ん？ どうしたハジメ君？ さっさとかかってきなさい」

一を苛立たせる原因が語りかけてきた。しかし一はもう『そんな話をする思考を捨てている。』

「……公衆の面前で女子を殴る男子がどれだけ冷めた目で見られるか分かってるか？」

暗に自分から瀬奈を攻撃しない、と言っている一の主張に守は遠く笑う。

「じゃあ、こっちから行こうかな」

作戦も何もない、瀬奈だけの突貫。

目の前で見ている一にしか分からないが、その動きはやはり本人のものではない、ましてや異常な程に強い瀬奈の本来の動きに比べれ

ば、どこか柔軟のない不自然なぎこちなさが出ていた。

その瀬奈が一の腹を、余裕を持った振り被りでそのまま勢いを乗せ、殴った。

一は強制的に漏れそうになる声を押さえながら腹を庇うように背中を丸め、視線を下に落とす。

「……なんだ、折角本気が見られると思ったのにこれじゃダメじゃないか。もう少し油断しても良かったかな。それともやり方を間違えた？ ……なんか詰まらなくなってきたな」

本当に自分に攻撃してこない事に呆れ、一への興味を失った守に、後ろから話しかける声が一つ。

「おいセンサー」

「なんだい左門君」

「オレにもやらしてくれて。何で一人でいいとこ取りしてんだよ」

一はそのセリフに少しどきつとした。

もちろんぞつとした、と言い換えられる方の、である。

「んー、いいよ。丁度飽きてきたところだから」

「さっすがセンス、分かってる」

そう言うなり左門は詰め寄ってきて右拳を振り被って一の頬を狙う。それを膝の力を脱力させて避ける一だが、振り切った上体を戻す勢いを使って繰り出された左が追い打ちをかけて一の脳を揺らす。

（くそ、ここで倒れると……すぐに『負け』にされかねない！）

倒れた勢いで一は転がり、時間と距離を稼ぐ。そのままの流れでス

ピードを殺しながら起き上がり、片膝を付いた姿勢になる。

幸い、感覚の丈夫なスキルであるため、神経を基からおびやかす攻撃でもない限り気絶はしないし、意識が朦朧もろろとすることもないので立ち上がるのは簡単だ。だがそこから次が……。

（『次』がチャンスなのに……くそ）

一は、早速諦めた。

早い判断だった。早すぎるわけではない。

その試合が行われている傍ら、少し距離を置いたところから斎藤風璃はその試合を信じられない、信じたくないといった風で見つめている。

「……何でセナちゃんがハジメちゃんを攻撃してるのさ」

その横には要、琉二かなめ、そこからもう少し離れた所に徒人かちと、と言った具合で並んでいる。

「なにあいっとうしたっていうの？ ウチと賭けしておいてなに負けようとしてんの。あり得くない？」

「つーか誰もマジメを気にしちゃいねえのかよ。特に風璃とか過保護者だろ、マジメの」

「いやあーだなあーじっちゃん、今も心臓破裂しそうなくらい心配ですよったい……という冗句はさておきさ。ハジメちゃんが狙ってること、じっちゃんも分かるでしょ？」

同意を求められたじっちゃん……琉二は難しそうな顔をして「狙い

は分かっちゃあいるぜ、だけどそれだとよお……」などとマジメのやってることは不可解だぜ、と言いたいらしいセリフをつらつら。

おもむろに徒人が琉二に聞いた。

風璃には聞けない。なぜか。推して知るべし。

「お前ら中学の頃からの付き合いなのか？」

「オレとは小学校からだぜ」

「ああそう、そんで？ あいつ、中学校でなにやらかしてたんだ？」

横で聞いていた風璃はさといねえ……さといって漢字でどう書くっけ？ と徒人に感心する。

「うーん、まあ言っても良いか……悪い事じゃないし。あいつ、おっそろしく一つのことに集中する事があるんだぜ、あるんだが……それが他人に向くとスゴかった」

「どう凄いんだ？」

琉二が喋ろうとしたのを突然風璃が遮って引き継いだ。

「それは私が言うべきさ」

「……」

（徒人からすれば）沸いて出た風璃……いや、（徒人からすれば）名前で呼ぶのすらおこがましい存在、の登場に何も言えなくなる徒人という名の、ヘタレ。

それに気づいているのか……気づいていないのだろう、風璃は続ける。

「その他人さんはねー、最強になれるんだよ。一時的にだけど」

風璃は懐かしむようにまた試合の方に視線を向ける。

「で、何でセナちゃんはハジメちゃんを攻撃してるのさ？ ……はっ、まさかまさかの痴話ゲンカ？ きゃっほーレベル高いねーお二人さんよー！」

「いや、それはなんか違う気がするぜ……」

早々と諦めた。自力で勝つことを。

「いや、まあ最初から『他力本領』なんだが……」

（仕方がないなー。ちよつとだけだぞ♪）

（お前ややこしくなるから出てくんな……）

というやりとりがあったとか無かったとか。

「はあ？ なんの話——っ！」

駆けた。一瞬の加速度。

急いで伸ばされた左門の手を振り切り一は放物線を描かずに跳ぶ。それだけ、力を借りて、一は飛びながら瀬奈の手を掴み、空中で停止、着地した。

「あれ？ 女子には手を出さないんじゃないっ！？」

守は己の体を離れた精神で操っている体に言いしれない違和感を覚えた。

それは繋いだ手からどんどん感覚が無くなっていく、侵食されていくようなものだった。

「まさか!？」

『さっさと出ていけ』

シンプルな一の意志。自分の意識がどんどん薄れていくのが分かった。

そもそも『テストで生徒の気を逸らした上で術中にはめる』守と『触れさえすれば相手が無効化できない限り必ず決める』一では、同じ条件ならば地力が上である一の方が有利なのだ。

精神を押し出されながら守は『やられた……!』という思考か呟きか分からないセリフを残して戦線から脱落した。

――

「あー、悪いな、瀬奈」

「……なんか気持ち悪かった」

「まあ、確かにあの声とサダコヘアーは、な……」

体の自由を奪われて感想がそれだけと言うのもなんだか頑張り甲斐がないというか。

「状況は分かってるか？」

「いちおう。それより、手」

瀬奈は繋がれた手を自分だけ開いて揺すってみせる。

放して、ということだろうか。

しかし一は掴んだまま、瀬奈の目を見て話す。

「また乗っ取られると厄介だから、試合が終わるまでこのまま……なんだが、いいか？」

「まあ、いいけど……手をつないで戦えるの？」

知らない瀬奈からすればもつともな疑問である。

一は平気な顔をした。平気な顔と言うと実際そうでないように聞こえるが、もちろん戦えるから平気な顔をしているのだ。

「琉二が『なんで打ち切りになったんだぜ！？』って言った漫画に手繫いで戦うのがあったから大丈夫だきつと……ってのは俺のつまらない冗談で」

カクツと瀬奈がこけた。こんな芸人が多くて困る。

「マジメにやってよ！」

「真面の目と書いてマジメ。俺がふざけていないのはこの目を見れば分かる、つと前置きはこのくらいにして……瀬奈」

一が神妙になったのを感じ取り、瀬奈は落ち着いて話を聞く姿勢になる。

「なに」

「おまえの全力を引き出す。いいか？」

「また神経使ってどうのこうのってやつ？ 今度はドーピング？」

脳内麻薬とかなら……ゴホンゴホン。

「いや、飽きるとかそういう問題じゃなくてだな……」

「別にそんなことは言っていないって……って、『全力』ってどういうこと？」

呼吸のおかしな質問に一はうなだれる。

「あー、もういいや、説明は後だ……。とにかく俺はおまえの邪魔をしないから、後は自由にしていいぞ」

一は精神を集中させ、目を閉じる。

最初瀬奈はついに一は言葉まで狂ったか、と訝^{いぶか}しげに見ていたが、徐々に表情は驚きに変わる。

「……え？」

「本当はもっとゆっくり見守るつもりだったが……ままならねえよな、ホント」

そのまま、呟く。

「そうだな、おまえの性格も込みで……^{ポルターガイスト}悪戯、とでも洒落てみるか」

それきり、一は口を開かなかった。

――――

『計画』からずれた行動に、状況が把握できなかった左門はひとまず相手の出方をうかがっていたのだが、どうやら失策だったようだ。

「なんだよあのセンサー、あっさり退場しやがってよお。使えねえ……」

こうなると自分と広尾で相手をするしかないようだ、と面倒くさそうになんだか仲良し小好しに手を繋いでいる一、瀬奈を見る。

左門にとって女を相手にするのはまあ、やぶさかではあるのだが、絶対に出来ない訳じゃない。

必要なら怪我をさせずに制する自信もあるし、実力もある。

ただし、それは相手が『桁違いな』スキルを使ってこないのが条件、という制限が付く。

そして、相手は奇しくもその桁違いだった。

消えた。2人とも。

「!？」

どういうことだ？ そんなスキル聞いていないぞ!？ 『どうやらハジメというやつは神経を使ったり、スピードを変化させて戦うらしい』ということは聞いていた。勿論神経を使うことも。それがどうしてこんな事を……もしや。

「おい広尾！ 今すぐこの辺にそのスキルを——っ！」

言う途中で腕を殴られた、いや、蹴られた？

分らない。なにせ見えないのだ。……多分もう一人のセナというやつが隠していたスキルの効果だろう。

だが、広尾には意図が伝わったはずだ。あいつが『心身耗弱^{エグゾースト}』を使えば必ず隙が出来る。そこをオレがだめ押しすれば——、

と考えていたところで、

「ダメだよそんな『腕』で頑張っちゃったら」

声がふりかかって、その意図することに気付き、叩かれた左腕を見

て、固まる。

肘から先、手首までの間の骨が砕けていた。

「な、なんだあああああ!？」

あの時の蹴り、もしくは殴り……には、そこまでの手応えは無かった。

痛みに関しては左門自身のスキル『心頭滅却』ハートレスが打ち消すので激痛が走るといったことはないが、これでは使いものにならない（一応救護班がいるので左門としては病院通いを心配することはないが）。

「降参するなら今の内だけど？」

また声。今度は降伏勧告。

舐めた挑発に沸騰しかけた血を押さえ、押さえたその血を無理矢理に巡らせて考え抜き、一つの答えに行き着く。

「……はっ、そうか。分かったぜえ。幻だろ、お前のスキルは」

それならば相手が消えること、自分の骨が砕けた（ように見える）ことに辻褄が合う。

だが、返答は期待したような沈黙や『あったりー』といったものはなかった。

「はあ、妄想と現実の区別もつかないって、どんだけ幸せなんだろうね」

ハズレ。

突きつけられたその現実^{すべ}に左門はなす術無く、見るべき対象のない視界をきよろきよろと見渡す。

「嘘だろ、女の蹴りで折れるほどヤワじゃねえ。やっぱり幻……まぼろし？」

ふと自分のことに思考が行き着く。

もう一度考えてみれば、自身のスキル『心頭滅却』は『精神の干渉を受けず、痛みやまやかし、錯覚を打ち消す』もの。幻なんてものはね除けて当然なのだ。

「1回、目を覚ました方がいいよ」

どこからか、左門の頭に手が乗せられ、そこからはもう、脳を揺さぶられた感覚を最後に左門の意識は暗転した。

「終わったー！」

その快哉を聞いた苗子はぽかんとしている。

「いつの間に……？」

自分の見ていた『風景』は、さっきまでお互い動かずの膠着状態だった。

それが急に様相を変えて、そのまま模様を入れ替えるように左門が倒れる光景が現れたのだった。

「……勝者、1―D」

一が立っていて、左門が打ち砕かれてはこちらは言い逃れでき

ない。

渋々、適当に宣言をした審判はこの状況を理解するのをすでに諦めていた。

「……？」

考えても、答えは出なかった。

あとで左門に聞いてみるしか無さそうだ。

――

『あーあ、油断した。まさかこっちから狙ってくるとは……思わなかったねー、失敗失敗。さーって、そろそろ戻るかな、っと』

留居守は、一に意識を追い出された後、自身の肉体に戻ったのだが、その自分の体が固定されていて動けなかった。

「むーっ!？」

いつのまにか誰かに猿ぐつわを噛まされ、どことも知れない教室の椅子に縛り付けられていた。

「ちょっとおいたが過ぎてましたね、留居先生？」

話しかけられて気づくと、前の視界から外れて右側に、見覚えのある――本当に『見覚え』しかない――同僚、敷石恭子がいた。

「まさか先生ご自身まで出場なさるとは……私も今から参加すれば間に合いますか？」

なにやらただならぬ悪意が自分に向けられていると悟った守は総毛立つ。

首をふるふると横に揺らして情けなく情けを買おうとする守。それに構わず近づいて来る恭子。

しかし守は心中でタイミングを計っていた。先ほど瀬奈にしたことをしようとしているのだ。

「しかしどうやら私のクラスが勝ったようですし、これ以上何かやってもしょうがないですね」

くると、背を向けて部屋から出ていく恭子。

（今だ！）

守は己のスキル、『精神細工』プログラマーを発動する、はずだった。

しかし、それは叶わず空回りし、自分の作ったイメージが霧散するというあんまりな結果に終わった。

「……やっぱり言っただけではダメみたいです」

残念だ、と言いたげな憐れみの表情で守に振り返る恭子。そして恭子のその後ろ、廊下から誰かがもう一人現れた。その人物を見て、守は今度こそ本当に驚愕する。

「ふーん、こいつが大事な弟分に手を出したやつ、ねえ……どんな奴かと思えば、ただの根暗、か」

（こ、こいつはさっきの！？）

絶対のシンボル、白楽冬雨。ここに現る。

「じゃあ後は頼んでもいいかしら、白楽さん」

「恩師の頼みとあつたらこのくらい軽い軽い」

二人の意外なつながりを知った守だが心中の目下最重要項目はそれではない。

（やばいやばいやばいこいつさっき試合に出ていただめだコレだけは敵に回しちやいけなかった！）

「貧弱の相手をするのは性に合わないんだけど制裁はやらないとつけあがるからねえ。懲らしめてやらないといけないねえ？」

ただ楽しんでいるだけのような笑みを浮かべながら冬雨は無抵抗な守へと手を伸ばした。

第46話 体育祭、悪戯（後書き）

せ、戦闘描写やりづれええ……という独り言。

あと、ハートレスは心無き者ではありません、という注釈。

報告。

勝手に書いててなんですが、「後書き」に当たる部分を作者ページの「活動報告」に書くことにしました。理由は、そっちの方が作品以外のことに触れやすいので。と言うわけでこの作品に集中したい方はこれからは面倒な後書きを見なくても済むようになりますよ、っと。

今は新作どうこうと悩んでいるヘジラでした。

第47話 俺、この体育祭が終わったらツツコミを磨くんだ……（前書き）

毎回思うんですがまさかこんな内容でいつもの文字数に到達するとは。

第47話 俺、この体育祭が終わったらツツコミを磨くんだ……

その後は閉会式まで、流れるように事が進んだ。

まず結果発表。クラス対抗は、なんかバトルでほとんどが上位に食い込んだD組の縦割りが2位のA組を振り切った形で優勝をものにした。よって今年の夏、D組は快適な空気、真夏の涼空間を約束された。グッジョブ。

次いで部活対抗は……何というか、こうして言うのとはばかられるのだが、人数の利で『帰宅部』がまさかのトップ（もちろんこの部活は形式上のそれであり、実際には存在しない『幽霊部』なもんだから優勝商品もへったくれもない）というつまらなさすぎる結果に終わった。

勝者の戦利品、部室のインフラ整備（超絶クラス）は成績順に高価なものを部室に分配していくことになり、部費に追加されるはずだったお金は比較的みんなが使う設備に回されることになった。

……次点で密かに暗密部がランクインしていた事実には部員以外誰も気づかなかったのは果たして暗密部という存在の特殊効果だろうか？ 嬉しいのやら空しいのやら微妙なところだ。

とにかく、快適なスクールライフが待っている事は喜んでおくべきか。

そして、夕焼け……は体育館に隠れて見えないが（まったくなぜこういう所は風情が無いんだろうかうちの高校は）赤く染まった空の下で今、一は他の全校生徒と同様、皆の前でお手本をしている生徒会長の動きを真似ながらストレッチに励んでいた。

ふと、思い出したことがあったので近くにいた瀬奈に話しかける。ちなみに背の順、とかは既に学校中あまねく崩壊している（しかし隊列はどこも成しているから不思議だ）。

「なあ、瀬奈」

「なに」

そういえば、と付け加えてから訪ねる。

「さっき言いかけてた、俺の良いところって何だよ？」

瀬奈はほとんど表情の変化を見せず、さして大したことを思い出したようではなく、何気ないことを喋るような……いや、何気ないことを喋るそのものの調子で言う。

「ああ、あれのこと？ あれは、ねえ……」

「ん？ 言いつらいことなのか？」

言葉を濁す瀬奈に、一は不快感を覚えなかった。

このいつも人様迷惑千万な瀬奈がためらいながらも自分をほめてくれるかもしれない。結構レアな体験ではなからうか。

その期待に似た一の心持ちも一瞬、瀬奈はすぐに態度を切り替えた。

「まあ、いいや……あれは、『いつも私の都合の良い時にご飯とか色々作ってくれるところ』が良いところって言おうとしたんだけど……ってどうしたのイチ？」

「いや、まあそんなとこだらうな、と」

と、ごまかした。まさか『助けてくれてありがとうね、イチ』とかなんだか奇妙な、甘い期待をしていたわけでもない。

というかほぼ確実にありえないだろう。

というか、何で期待を——

「……いつも、」

何かが瀬奈の口から弱々しく聞こえた。

「何だ？」

「いや、何でもない。それよりわたしのスキルって……あんな色々できるんだね」

瀬奈はストレッチとは関係なく手のひらをグーパーさせた。

……小さいな。

「光の変色、音の消音と発生、あと、衝撃の発生な……あそこまで汎用性と攻撃力のある能力もなかなか無いけどな」

一は前の生徒会長……小谷千里が上体を反らすのに合わせて自分も夕焼け色の空を見上げる。

うん、あれは夜になったら降り出す雲だ。さすがジューンブライド（半分違う）。

「さっき、一人で使おうとしたんだけど上手くいかなかった」

なんかむすつとしていたというのがセリフだけでなく雰囲気でも分かるほどに瀬奈は不満げな声を上げた。

「まあ、慣れれば自力で使えるようになるだろ」

「……あとどれぐらいかかるの」

左の手のひらを前に向け、逆さまになった指を右手で引く。次はその逆の手。

その間考えて、一は答えた。

「早くて一ヶ月。遅いと、というか怠けると一生……だろうな」
「……わたしそんなにうぜーだりー言う人に見える？」

侮辱の『ぶ』の字を言われるだけで反応する。これが柳瀬瀬奈。
既に生徒会長の方を向かずにこちらの方を見ながらストレッチしている。

おいおい瀬奈さんよ集団から逸脱して目立ってどうする……と一が
思ったのもつかの間、既に雑談している生徒が増え始めている。
なんだか自由空間だった。

「むしろ言うとしたら俺だよな……。まあ、怠けないなら一年か
からずにいけるだろ」

今まで会った奴でやる気のない奴以外は全部その期間内でちゃんと
形になった……。いや、その意味では一人だけ例外がいるのだが、今
その話は関係ない。

「一年……」

瀬奈はどこを見るでもなく視線を横に向けた。何だか表情が嫌なこ
とを思い出したような苦さを醸している。

そんな瀬奈の時間の長さを計るような沈黙を止めたい衝動に駆られ
るのを自覚しながら一は、言う。

「まあ、俺で良かったらいつでも見てやるよ」

なんとなく、キメたつもり、ではあったのだが瀬奈からの返答は、
素っ気ないものだった。

「あーそうありがとうねー」

一は即行で思いついたセリフを叩く。

「今すぐ俺の親切な気持ちを返せ」

「はいこれ」

ポケットティッシュをポケットから取り出し、渡してきた。

「俺の気持ち即物的!？」

柄にもなくひとりでに『!？』を使った一。

なんだなんだ何ゆえにそんなすつとんきよーな。

「……なにそのツツコミキャラ」

比喻など不要の真実不審者を見る目でこちらを見つめる瀬奈の哀れみの感情がひしひしと伝わってくる。

「いや、何となく……」

最近特にイメチェンなどという自分らしさの欠片もない行為に目覚めた、というわけではないのだが……なんというか——揺らいでいる——のだろうか。

と、シリアスぶった考えに走ってみる一。人間ちよつとしたことで簡単に変わるもんだろう……か。

「いや、うん、良いと思うよ。なんだかイチがよりイチらしくなっている気がする」

「自分らしさってなんだろうな!」

なんか本当に哀れまれているようだ。

もうここまで言われたらヤケだ、とばかりに大声を上げる一。

以下、大声を上げて羞恥プレイを晒したために知り合い赤の他人に
関わらず奇異の目白い目黒い目（……ん？）で見られ担任に軽く注
意されその間に体操が終わり教室に戻り解散した後そのまま一人で
家に帰ろうとしたところとある人物に絡まれ町内一周規模の遁走劇
を繰り広げた、という尋常ならざる出来事があったのだが、割愛。

――
家に帰り着き、靴も脱がないまま、玄関で一はげっそりしていた。

「疲れた……憑かれてないだけ百倍マシだと受け取ろう」

日足（という名の幽体のようなもの）というワードをすっかり忘れ
ている一。完全に『つかれている』。

ポジティブって素晴らしいと果てしなく実感できる瞬間、と休む間
もなく、

ばーん、と玄関のドアが開けられた。

「おっそい！ 今何時!？」

アイツなら絶対『そうねだいたいねえー』と言うだろう、という『
アイツ』に心当たりが二人（？）いる一。

そんな心情はさておき、瀬奈が玄関に死に体で存在していた一の後
ろに仁王立ちしていた。

振り返って一は段差の上に腰を下ろす。

「まだ8時も回っていないんだが……」

「わたしからすれば考えられない時間帯だって忘れてない!？」

忘れそうになるが、驚くべき事に瀬奈はついこの間まで、夕方6時より前に腹を満たしておかないと倒れるという珍妙奇特な体質を持っていたのだった。

それを一が中間テスト前日に治したことでこうして6時を過ぎても活動出来るようになったのだ。

ここで話を戻すと、当たり前前のことだが、長年の習慣というものは根強く残るらしい。

「……インスタントオツケーか？」

「却下。無効。死刑」

この世の無情さを噛みしめる一。

……てか死刑って。

「腹減っていないんだけどなあ……」

「奇遇ね、わたしもよ」

阿呆のような沈黙が1、2、3……。

「……え、マジでか!？」

「ま、まちがえたっ!」

「似合わねえよ……」

「うるさいっ!」

テキトーにどっかのセリフをまねるとこうなるんだぜー、という見本。

「さて、と……」

やおら立ち上がり、一達は瀬奈の部屋へと移動した。
その間に2回ほど暴力を振るわれたときにはさすがに涙腺が緩んだ。
これは割愛ではなく活殺。

――

部屋の中には、正確にはキッチンの周辺、特に換気扇のある天井の方に、昨日までは無かった白いものがこびり付いていた。

「……………」

それは、一般家庭ならおよそどこにでもあるものの成れの果てのように見える、実際そうだった。

「今度はどんなエキセントリックを？」

「な、なにを根拠ぬ」

「ぬ？」

「ぬ……ぬれぎぬだっ」

上手い繋ぎ方、だが甘い。

一は単純な予想から、冷蔵庫を覗いた。

その中には一般家庭がよく使うもので火にかける物と言ったらメジヤーなのが2つ。

一は自論……推理を展開する。

「さて、昨日より卵が2個減っている。調理するのはいつも俺。しかし俺はここにあった2つの卵の行方を知らない。さあこれらの情報から導き出せる回答は？ はい瀬奈さん！」

「イチの……脳味噌が終わっ——」

「それ以上は言うな!」

余計なツツコミを回避するためにツツコんだ一。
差し引きゼロ、プライスレス(?)。

「……なんかはっちゃけてる? イチ?」

「だから、疲れてるんだ……」

そのくせ腹は減っていないから今が企業戦士として売り時なのかもしれない。なんて。

「それでどうしたんだ? そこに洗い立ての鍋もあることだしおまえがゆで卵を作ろうとしていたのは分かるんだが……何でそれがこんな爆発になるんだよ」

すると瀬奈は怒りだした……卵に。

「だってさ、いくら何でも遅いから自分で料理しようとするじゃない! で、シンプルでおいしいって言ったらゆで卵じゃん。そんで水入れて卵入れてゆでるじゃん。そしたらいきなりあのひよっこが!」
「待て、まだ孵ってない。しかもあれは無精卵だ」

「じゃああの無精卵、が! だよ!? 爆発するって意味わかんない! わたしに何のうらみが!?」

たとえば捕食者に対する恨み、とか。養鶏業者の奇想天外テロリズム、とか。

「(少なくとも前者は)これから食われるものとして分からなくもない動機だ……」

「じゃあイチは地獄決定だ」

「主婦も主夫も天国には逝けねえのか!？」

悲しき事実（の捏造）。

「だから、早く作れ!」

「はいはい……」

最終的には身も蓋もなくなった瀬奈に一は従った。

「ハイは1回!」

「はい……」

弱い。圧倒的に弱いぞ真面一。と己を貶めながら料理を開始する一だった。

――

そんな具合でシンプルな料理（レトルト・インスタントはやはり無理だった）を作り食わせて、その食後。

「はー、やっと満足したー」

「（うっかり二人分作ったのにも通り食いやがった……まあ、オーライか）今日は疲れたからなー。早めに寝とけよ」

いっちよまえ風に腹を叩く瀬奈にいろいろ思うところのある一。
あえて何を、とは言わないが。

「はいはい」

……人の振り見て、とかは言うまい（ハイは1回！）。どうせ負けるに決まっている。

辛くも現実の厳しさを味わう前に回避した一は、ふと思い出したことを聞く。

「そういえば罰ゲームはどうなったんだ？」

瀬奈は最初何のことかという顔をしたがすぐに分かったようだ。

「え？ ああそれならイカンなことに両方とも成績は1位ってことで引き分けで終わった」

最後までつまらないとはどういうことか。
オチはどこだオチは。

「じゃあ何もないんだな」

「いや」

『は？』と言いそうになるのをすんでのことこらえた。

「それじゃあつまらないって事で二人で痛み分けすることになった」
「むしろ詰まんねえ!？」

ただのへんてこな風景しか思い浮かばない。

コンビニに二人で入る女子高生（これは普通）、ハバネロあたりを漁る二人（まあ、ちょっと逸脱）、そして買い占める二人（多分店員はやんごとなき事情を察してくれる）、店の外で互いにそれら激辛スナックを食べまくる二人（……一周回って普通、いや違うはずだ！）。

「じゃあ代わりに行ってきてよ。自腹で」

「その条件だと辛い物好きでも行かないと思うぞ」

ちなみに自腹じゃなかったら行ってみようかと考えたりしていたテ
キトーな一。

「ってかそれだと俺と九段で……デート？ 紛いなことになるよな
？」

そもそもそんなシチュエーション気分を味わったことすらない。

「やっぱいい」

思いついたことを言ったただけなのだが即座に否定……拒否の言葉が
返ってきた。

その言葉の意味を解釈しようとする一を遮るように瀬奈は乱暴に、
少しでも抵抗しようものなら蹴りとか入れたりするんじゃないかと
いう勢いで一を部屋から追い出した。

「つと、おい、なんだよいきなり？」

「はい明日はお休みだからゆっくり休もうねお休み！」

ただその表情はうつむき加減でよく見えなかった。
そのままドアが閉められた。

「――、――」

「……なあ、なんだあ？」

一はしばしばしばしばしばされたかのようにぽかんとし
ていた。

ちなみに『』を5つ目のしの後に入れると分かりやすい。かといって意味があるわけでもないのだが。

「最後、『また明日』って言ってた……よな？」

頭を搔いて、一はゆっくりようやく自分の部屋に落ち着く事が出来た。

長い二日間だった、と一はベッドの上で目を閉じた。

第48話 マラソンの凄い所は距離より時間だ

少し時を遡り、真面一のやや、いや、ややどころではなくややこしかった帰り道の話。

――
寝言を呟きながら、1人の少年が机に伏せていた顔をもたげた。

「おい、ちかよんじゃねえ……ん？ ……寝てたか」

体育祭が終わった教室で、のんびりと1―Dの解散を待っていた一ではあったが、各自解散であるとは思っていなかったため――周囲の会話を拾っていなかった一も悪いのだが――ぽつんと一人机に伏せている内に本当に眠ってしまうという間抜けをやらかしてしまった。

しかも放って置かれたのか、周りには誰も見当たらない。

「……誰かいてくれよ」

なんだか寝ぼけていたようで、半分ぐらいいいつも通り自分の意志というものが働いているのだが、もう半分が怪しい。

――ぶっちゃけ、日足の意識が落ちているらしい。

いやまあ、ようやく落ちてくれたというか、寝れなかったのも腹減らなかったのもそのせいなのだけれど。

突拍子もない話、一と日足の合わせ技、いわゆる一式がずっとかかりっぱなしだったのだ。

おかげで体内のエネルギーを消耗する事が無かった。

「いや、そんな事より、帰るか——と独り言を発するさみしい俺でした……」

数分後、薄情なクラスメートと、いつまで経っても進歩のない自分の両方を呪いつつ、すでに閉められていた校門を開けるのも面倒だな、と妙な思考が回った結果、自分の頭ほどの高さにある門に手を置いてそこを支点に自分の体を浮かせて門の外に放り出して落下、そしてすぐに着地したつま先から、

「はあ！？ あんたこんな時間まで何やってたの！？」
「わ……っだあ！？」

和田、ではない。自分のセリフにそんな空耳を真剣に感じてしまう脳味噌に喝を入れたくなる。

と、そんなことを考えながら、一は予期せぬタイミングで声をかけられたことによって、単純に、明快に、いっそすがすがしいくらいにコケたのだった。

つま先から着地し、そこからしなやかに（と、自分では思ってる）屈伸の要領で腰を落とし、重心の都合上そのまま後転するところを第三者に見られた事による反骨精神、と言うより気恥ずかしさで無理に前転し、手を突いて完全に止めた。土下座寸前の姿勢だった。なんというか、ドアラのジャンピング土下座と言うよりはホウ砂とかフィルムケースで作ったスライムのようなべちゃったとした着地の心地だったが、どうにか怪我はしなかった。

そして顔を上げた一は声をかけてきた相手をようやく見やる。

……………？ ……、誰だっけ——

「顔に『誰だっけ?』って——」

「書いてねえ!」

秘技、ツツコミ殺し。またの名を自滅への一手。

というか、なんだかこれは……この空気は——

「じゃああたしが誰だか分かってんでしょうね!?!」

「うっ……」

早速秘技破れたり。というか使う場面を思いつ切り間違えた。

一は申し訳なさから正座を結跏趺坐けっかふざに改めた……もちろん開き直っている。

「……一体どういう意図であたしの前で座禅のポーズをしているのか聞いてもいい?」

「一つは俺が思い出すのを待つて欲しいというのと、もう一つはもしダメだったときはあのお墓にいっぱい刺さってる棒、というか板で記憶障害を起こす煩惱を追いついて……」

——この空気は……、こっちがボケるべき空気か!?!

……完全におつむのネジが複数本抜けていた。

「いっそ墓に埋めてやろうかしら!?!」

「すいません本当に名前を聞いたことがないんです!」

「この間の試合の時に名乗っ……」

そういえば、と彼女——榛葉美姫しんば みきと後で懇切丁寧に漢字まで教えてくれた——は少しの間固まった。

自分が名乗っていなかったことによく気づいたらしい。

「……………」

「……あのー」

「あーもー！ うっさいわね！ あたしだって間違うわよ！」

「いや、それはいいんだが、俺のこと知ってるのか？」

するとその（一は見知らぬ）相手は目をまん丸に見開いて一旦沈黙、すぐにまた音量を上げた。

「……あんた昨日のこと忘れたの？ ほら、試合で会ったでしょ」

と美姫は言うが、今の一はネジが無い。もちろん比喻だが。

「試合……恥ずかしいな、あんな見るに耐えないものを見られたのか」

「シャイじゃない！」

「でもきつとみんな愛するように見守ってくれたんだろうな」

「慈愛って言いたいのか！？」

「さて、この話はこころ辺で終わりに……」

「仕舞いにしようたってそうはいかないわよ！」

とんでもないくだらなさだった。

そして一は半分が欠落したショックで頭のスピンの2分の1だったので思いついた言葉を留めるだけの判断能力がゆるんでいた。

ついでに常ならスキルを使って思い出していた記憶も何だか不調気味。楽をしているツケが回ってきたようだ。

「いやまあふざけは仕舞いにして……えー、昨日の試合だっけ？
って言う……あの時の」

もう一度見ると、同年代らしき女子はこちらが思い出すのを待っているようだった。

……え？ 自分で言った方が早くないか？ 何でそんな期待するよ
うな目なんだ？

「いい加減思い出した？」

「あー、確か瀬奈に股を蹴り上げられた……」

「……（ぶちっ）」

目の前のが大震災の初期微動の如く震えるのを見て一はようやく気づいた。

「ああたあしい、わあ、榛葉美姫だあああああ！」

美姫は片足で地面を思いっ切り踏み鳴らし叫びながら、その衝撃を伝えるように足下から火の粉を吹いた。

奇しくもそれを見て相手が誰だったかをようやく、致命的なタイミングで思い出した一。

どうせなら容姿を良く見ておけばよかったなあでもそこまでじろじろ見て不審者扱いされないかいやでも相手の印象はしっかりつけておかないと……ってあー、とにかく今は。

「万能地雷踏んでしまった……」

まさか性別を越えた人違いを起こすとは。
そりゃあ誰でも怒るだろう。

「何で、あんな、あたしの、ついでみたいな、キテレッツと、一緒にされ、なきゃいけないの、よっ!」

「むしろ今はそのキテレッツの名前が誰だったか気にな……うわっ!」

吹き荒れる火の粉が空中で集まり、まるでピンポン球のような小さな点——それが目算では軽く30を超えている——となって一のいる所めがけ集中して飛来した。

辛くも美姫に対して横方向に跳んで避けられたが、飛来した炎弾は一瞬止まり、再び後ろからそのまま飛んできた。

「言葉の区切りが変なのに攻撃には区切りがない!? それに——」

何だか機動戦士、それもストーリー終盤に出てきて反則級に強いやつ……を思い出す攻撃だ。

「どーせオールレンジとかくだらないこと言うつもりだったんでしよう!？」

「ご存じでしたかってまた来たハイ逃げるうううう!」

「逃がすかあ!」

逃げ出す一。追い駆ける美姫。

道を疾走し通行人を抜き去り建物の間を駆け抜け土手を奔走する二人は、ある意味阿吽の呼吸だった。

「誰か助けてくれよ……そうだ! ドップラー!」

「緊急車両のサイレンとか戦闘機のソニックブームに関連した現象の名前もしくは既に150年以上前に亡くなった物理学者に助けを求めてんじゃないわよ!」

「『もしくは』以下の情報知らねえ! ……いやそれより話を戻す

「嘘をつくなあああああ！」

「うわ！ 紅蓮地獄と大焦熱地獄が同時にやってきたあ！？」

「この半可通が適当なこと言うなあ！
片方全くの外れだこのお！」

「バレた!？」
しかも『半』が的確!

「そんなことより、さつさと、あやまれええええええええええ！」

「熱っ！ あっつ！ いや、刹那主義でもこの猛攻の中でそれは無

「一瞬で、それこそ刹那に空中土下座を決めない限り！」

「むしろ刹那主義なら後先考えずに謝れ、このっ！」

「確かに辞書の意味ではそうだった！
けれど、死ぬのは勘弁してくれ！」

「死んでも謝れええええええええええ！」

「地雷どころじゃなかった！ クレイモアだった！」

「この期に及んでほとんど同類語言ってんじゃないわよ！　まさか地雷と見せかけて剣のことじゃないでしょうね！」

「博識だー！ はっ、これが『君と一晩語り明かせば十年分の読書に勝る』というやつか！？」

「うるさい！　ってああもう！　何であたしが変な知識をひけらかさなくちゃいけないの！　てかあんたそんなキャラじゃなかったよね！？」

「あれはカツコつけてたんだ！」

「脱力系がよく言うわコラあ！」

「ああああ四方八方美人！　これって強調しただけなのになんかハ
ーレムっぽい！」

「その四字熟語の前半は炎に囲まれているって事で一応わかるけど残り半分とそれ組み合わせてわざわざあらぬ意味にしてるのは理解できないわあつ！　しかも誰か思いついてそうだし！」

「と言いつつ包囲網がどんどん狭いっ！ 頼むから起きてくれ日足ーっ！」

現在、夕方の6時。一方通行鬼ごっこは、まだ始まったばかり。そして、終了まであと1時間。

二布高校の生徒会室にノックをして入ってくる人1人。

「今日はありがとうね、……あれ？　どうしたの千里ちゃん」

未だに生徒会室に残っていた女の子を『千里ちゃん』と呼んだのは、数時間前に留居^{とめい}守に制裁を加えた1人、敷石^{しきいし}恭子。

さりげなく受け持ちのクラスと部活ともかなりの成績を上げて一番いい思いをしたと思われるこの人物は今、個人的な用事で生徒会室の扉を開けていた。

「あ、恭子叔母さん。今日2回目だね。あー、どうしたのかって言うと、ちよつとした見物^{みもの}をね……」

『おばさん』と言われ、しかし敷石はこの『姪』に限ってはそう呼ぶのも道理なので無闇に怒ることはない。まあ、だからといって実年齢（三十路とだけ言っておく）よりは結構下に見られるのでここ以外でおばさんと言われる機会もまあまあ無いのだが。

「何？　また人様のプライベートを覗いてるの？　度を過ぎると強制終了……」

「あぁー、やめてやめて。折角面白いのに」

敷石に強制されかけ、千里はぞんざいに拒絶した。

スキルに集中していると簡単な会話はともかく、どうしても他のことにまでそこまで頭が回らないのだ。

敷石もそれを分かっているのです、こういう状況での千里の言葉遣いにはあまり干渉しないようにしている。

「じゃあ、誰のを『見ている』のか教えてくれない？」

「うん、片方は叔母さんのクラスの生徒の真面一君で、もう片方は、昨日その生徒と戦った榛葉美姫ちゃん」

今は6時過ぎ。夕方に体育祭を終えた高校生が屋外で活動するには少々、長い時間ではなからうか。そもそも、

「この時間に男女2人ということは……」

「いやいや、全然。そっちの面白いじゃないよ」

敷石はらしくもなく、首を傾げた。

それに気付く風でもなく、千里は続ける。

「2人は元気なことに、曇天の下で追いかけっこしてるんだよねー」

「……楽しそうね」

2人が、なのか、目の前の生徒会長が、なのか。

どっちなのだろうか。

「いやー、だってこれは面白いよ。あつ、惜しい。おー、そこでえええ……っよけるう。ふい、危なかったあ」

方や追いかける方を応援し、また追いつめられると逃げる方に傾く。どうやら純粹に観戦しているらしい。

敷石としては、そっちはまあ、どうでも良かった。

「とにかく元気そうならそれでいいです」

それきり敷石は、特に長居する理由もないので後は残りの先生に任せて早めに帰ろう、と決心して生徒会室から出た。

敷石はそのまま廊下に出て、『逃げるように』歩く。無論、生徒会室から、ではない。

「それにしても、こういう星の下に生まれればあの子は……」

首を振って、そういう考えを打ち消す。

あの子は悪くない。悪いとしたら、償うとしたら、罰されるとしたら、責められるとしたら、自分だ。

今まで何もしなかった——決して期待せずに意識していたことはあるが——だから、当然だ。

私は、今、

ついてるのか、ついてないのか。

手遅れなのか、早すぎるのか、それとも、やっとなのか。

悲しいのか、嬉しいのか、それとも——

ふと、気づいた。

「どうしましょうか……この深刻な空気。自分の事ながらあわや鬱病寸前の思考でこんなシリアスな雰囲気にしたことに責任を感じるわね……」

誰にともなく、心のどこかで謝る敷石だった。

追いかけて、クライマックス。

あれから実際は10キロ以上、気分だけは時速20キロオーバーの世界記録ペースで走り続けた真面一と榛葉美姫。

ついに舞台までもクライマックスにふさわしくビルの上なんて所にまでたどり着いてしまった。

「はあっ、はあっ……もう、逃げ場は無いわ、よ」

「逆に言えば、こっから、逃げれば、もう追っては、来れない、な……」

「ふっ……最後に、聞くけど、謝らない、のね？」

「そんなの、言うまでも、無いだろ？」

互いにセリフが無駄にカッコよくなっているが、意識が朦朧^{もうろう}として
いることによる賜物^{たまもの}である。

もう何が発端でこんな追いかけっこをしているのかすら忘れていた。

「俺は逃げ切るん——っ」

ぐらりと。

一（トランス状態）は疲れ以外の要因でふらついた。

しかし、授業中に眠りかけて復活するかのようになり、ふらつきの向きを反対にして姿勢を元に戻した。

「つと……あー。最近、精神病まがいな事ばかりだな」

同時に、飛んだネジもだいぶ戻って来たようだ。

と意識を剃らしたのが最後。美姫（トランス状態）が全身全霊をかけて最後の攻撃を仕掛けていた。

「とお・どっ・めえ——！！」

「つていきなり無理難題ー！」

それはもう凄い攻撃だった。今までのすべてを凌駕するぐらい。とても俺一人では対応出来そうもない。ビルに追い込んだのはこの為だったのか、なんと周到な。ここまでの計算、正直予想していなかった。これがこいつの本気か……昨日の試合でこれをぶちかまされていたら勝てなかっただろう。成程、奥の手というのはこういう時のために取って置くのか。俺なんかとは違って先見に長けている。強力絶対無比かつ堅牢強固絶無。これは、うん。絶対絶命、いや、絶体絶命。意味的にはどっちでもいい気がするけど由来がそうだと言われちゃ絶対は反論できないな。凶星には勝てないって。

「つて最後の方折角の長考がずれてるし……」
「え————」

「まだ『とどめえー!』の続き!? この酸素の少ない空間で驚きの性能だ! さあいくら!? オー케이、ヨンキュッパで提供決定!」

……まだいくつかネジの回収が済んでいないようだった。

(……まずいぞ、この空気! いろんな意味で!)

「———っ!」

「あー言い終わった! こうなったら全力で逃げさせてもらうぜ!」
つてこれ琉二の語尾だった!

なんて面倒な語尾だ。
ポビュラー

「琉二このやろおおおおお!」

というのを最後に、ビルの屋上から金網を飛び越え人が1人、いわゆるヒモ無しバンジーを決めた。

時刻は、7時。

この後スタミナを使いきった誰かさんを引き取って家まで送り届ける心休まらないイベントがあるのだがそれは本当に割愛。

第48話 マラソンの凄い所は距離より時間だ（後書き）

感想、評価お願いします！

第49話 普通、コンビニは在庫を用意している（前書き）

ので、買い占めたら更なる恥をかかないうちにとっとと撤収しましょう。

第49話 普通、コンビニは在庫を用意している

体育祭の翌日。

月曜日。

振替休日。

上を見れば昨日の一の予想通りの、梅雨時真っ盛りの天気。
ただ、その一は今ここにはいない。
代わりに、瀬奈の所に一人のクラスメートがやってきた。

「はいはい来てやったよーセナっち。それで、マジでやんの？ 罰ゲーム」

「今さら何言ってるの。やるに決まってるじゃん」

雨。ただし無風、しかもしとしとと降る地雨。

風情があると言えはあるのだが、そんなものを感じるような感受性もない女子高生二人――瀬奈と要――にとっては、こんなうっとおしい、以前に、

「何もこんな天気の人に……うっぜーわぁー」

「ホント、しけてるよ……」

だけである。

現在、琉二の両親が大家をしている団地の2階。

その通路にいる二人は、雨にも負けず出費にも負けずに罰ゲームの為だけに集合したのだ。

（ついでに、そっちの長身な身長の方がとってもウザいなあ……）

心に留めておくことで諦める瀬奈。この手の話題は蒸し返す必要もないだろうと考えた結果である。

しかし、要は聡いことにその気配を察したのか、瀬奈に顔を近づけた。

「……あれえ？ 何か言ったあ？ 小さくて聞こえなかっただけかも知れないけど」

「ふん」と鼻を鳴らして、なおも自分より高い位置にある顔面を見上げて言う。

「『耳鼻科行ったら？』って言ったの」

しかし自分からその手の話題に触れるのも癪しやくなので別の挑発アブローチを試みる。

だがしかし、要は何を思ったか顔を元の高さに戻し、遠くを見るように額に手をかざしてきよろきよると辺りを見回す素振りをした。

「……おやあ？ セナっちはどこかなあ？」

そのセリフ（『柳瀬瀬奈って超とドが付くほどチビなんじゃね？ けっけっけー♪』）を認識し、よく噛みしめて、

必殺・因果応報フィードバックの開放。

「あれー？ いないのおツブア！？ 何すんのよ！？」

「（きつと）視界が広がるツボ。見えるようになったでしょ」

人体の急所である鳩尾みぞおちを狙ったのだが、いかんせん、結局のところ上手くいかなかった。

一にぶち込んだときはそれなりの威力を発揮したんだけど。と瀬奈は難しい顔をしながら回想する。
残念無念さたっぷりなその態度に要はとある袋の緒おが切れた。
無論、堪忍袋である。

「んなの知ったことか！ 謝れ！ 今ここで！ マジで痛かった！」
「じゃあ先にそっちが謝ってよ！ 悪いのはそっちでしょ！？」

「はあ！？ あれぐらいで怒る方が――痛っ」

要がそのセリフを言い終えることができず、痛みの走った箇所、脛すねの裏を見ると赤い引っかけ傷が3本、そして近くには何故か黒猫――ヤマト、ではなく、二代目のナデシコ――が超然とした身の置き方でそこにいた。

「あ、あの時の猫だ」

瀬奈は遅ればせながらその存在に気付き、さらにその個体が宿敵であると、完全に見極めた。

なにせファーストコンタクトが『フシャアアアア！』。

警戒心はこれ以上無く募り、結果として、イメージカットもそれだけ強力に刻み込まれているのだ。

しかし黒猫――一個飛んでナデシコ――は、興味を無くしたのか、人間らしく通路を進み、どこかへと去っていった。

「……何しに來たのあの猫？」

黒猫の正体も分からない要はいかにも『わけわかんねーし』といった風情でそのいなくなる様を見送った。

「（とりあえず絡まれなくてラッキー♪）……さあ？ とりあえず

用事だけさっさと済ませようよ」

「何で元気になってんのよあんたは……」

そうして形だけではあるが猫になだめられ、二人はようやく矛を収め、兼ねてからの予定を実行に移すことにした。

――

身長差40センチの傘が二つ、歩道で信号を待っていた。

「……ところでさー」

（密かに互いに品数の少ないコンビニを狙いながらの）道中で、瀬奈が要に話題を振るための言葉をかけたが、『なに？』等の要からの返事を一切待たずに質問をぶつける。

「かなかなはかなかな？」

「は？」

回文、レベル1……という限界。

「ごめん、つい思い浮かんだ。えっと、金々」

「ちよっと、その字面はキレていいよねえ！？
ウチがあたかもケチなキャラにされてるし！」

『かなかな』は瀬奈による要のあだ名である。
ちなみにセンスの向上する見込みはもう無い。

「とにかく……かなかな？」

「意味なく探ってんじゃねーよ！ 若干パクリ臭くなってるし！」

鉈で切り刻まれそうだ。誰のとは言わないが。

「かなかな！」

「はい！」

互いに呼吸をつかんだ！

「どうやって5メートル以上も跳んだの？」

「跳んだ？ ……ああ、高跳びの話？」

「そう、どうやってマサイ警察の手から逃げ延びたのか」

「それは高飛び！ しかもマサイって、ウチはケニア人か！」

ピョンピョン跳ねる所だけテレビで見たことによる短絡的過ぎる発想。

「やっぱりマサイともなるとジャンプ力が違うのかな？ かなかなは？」

「マサイから離れろ！ ウチは日本人だから！」

「じゃあどうして？」

「そっちが試合で何やったか教えてくれたら聞かせたげるよ」

「……えー？」

「当たり前でしょ！？」

正論。その問答無用の響きが瀬奈の心に深い傷を……そんな訳ない。

「あれはねー、目くらましして耳をだまして骨をくだいたんだけど

――」

「ああもういい、大体言いたいことは分かった」

瀬奈が説明を続けようとするのを要は打ち切った。

物事を出来るだけ簡単に理解したい要にしてみれば瀬奈の話は長ったらしい自慢を聞いているようで、面倒になったのだ。

多少の不満を感じながら瀬奈は要の言葉を待つことにした。

「じゃあ『それなりに』ウチもお返ししとくと、ウチだけ道具を使っただよね。それを使って跳んでウチは――」

「ズルじゃん」

一言で切り伏せられ一瞬言葉を詰まらせるが、要はすぐに立ち直った。

「だったらポイント取れてないから！　ちゃんと認められてるから！」

「……ふーん。じゃあ――」

「買収もしてないからね!？」

瀬奈は思考をまわりこまれた！

不快感が蓄積した！（さらに隠しステータス『知性』が下がった！）

「へー。……あ、もう着いた」

「ん、本当だ……じゃあ、行きますか」

反りが合わず、息が合う二人は傘を閉じ、コンビニへと入った。

「さあて……頂きますか」

「よし……来い」

カゴいっぱいに黒っぽい袋（『値段×量』を軽く計算した中で最終的に安くなりそうな種類）を店員に突き出した時に最も視線を集めたが、それも含めての罰ゲーム。

第1関門・羞恥、突破。

第2関門・金欠、突破。

第3関門・絶舌^{ぜっぜっ}——

「って何で最後だけネーミング思いつき死んでんの」

「いやだって、めんどくさいから」

「はあ……ま、何でもいーけど？」

段々と柳瀬瀬奈のことを分かってきた九段要。

現在、瀬奈の部屋で10袋ぐらいの激辛スナックがのさばっている。

その前に盆を出し、皿を2つのせて後は食べるだけ。

その食べる、がメインなのだが。

「お先に……」

要が食べる。

といっても最初の一口、辛さよりもむしろ旨さの方が口に広がる。

それに、辛いのは得意な方だ。

「お、意外とこれいけるかも……」

「……………」

その一方、もどかしくスナックを広げた皿を見る瀬奈。

要が慣れたように（実際この手の食べ物は慣れているが）手を動かしながら、瀬奈に質問する。

「ん、どした？ セナっち」

「い、いや……」

そのきよどきよどとした瀬奈の視線と動作から、要は「は、はくん」と、瀬奈の辛い物嫌いを瞬間で察した。

実際はもう少し特殊なことになっているのだが、さすがにそこに気付けというのは酷というものだ。

「ん〜？ 食べないの〜？ さっきまでの余裕の態度はどこに行ったのかな〜？」

「（分かってて言ってるなこんにゃろ……）ふ、ふん。今に見ているがいい！ 倍速で食べきって見せるわっ！」

「へ〜え。じゃあウチは今の内にさっさと食べとかないとな〜♪ あーいそがしいわぁ〜」

（瀬奈にとっては）無情にも要は着々と消化に専念しだした。

いつまでも止まっているわけにもいかないのです、おそろおそろ、おそろおそろおそろ、瀬奈は久々に辛い物を口に運んだ。

「う、うううう……っ！ ……？ …………」

たった一口なのにわざわざ何回も噛み締め、

処刑寸前のような悲愴な瀬奈の表情が一瞬呆け、

徐々に確かめるように神妙なものに変わっていった。

「！」

促音ぐらい入れればいいものを、エクスクラメーションマークだけで驚く瀬奈。

つまり、サイレントびっくり。

「あー辛い。うええ、まだこんなにあんの？ 何か飽きるわコレ。ってどした……え、えっ!？」

要が驚くのも無理はなかった。

さっきまで辛いものと認識しただけでびくついていた同い年の少女が、まるで悟りと解脱と開眼を同時に行ったかの如き勢いで食べていたのだ。

しかも10倍のペース(当要比)。

「うん……! よし、イける!」

「いやいや……何? その今まで『辛いもの実はダメなのに』的な雰囲気出したのにいきなりキャラ変えるって猫かぶりもいいところじゃ……ったあ!？」

という要の口上の合間に袋が1つ瀬奈の手から離れて宙に舞い上がる。

「1000000000000000上がりい!」

「いやいやいやいや! そんな間違い!？」

変換ミス一丁上がりい。

「さあ次!」

「はあ……それにしても速くない? ……いちおー知ってたけど」

「はっはっはーどうやら克服されたらしいよーこのいまいまわしい味覚! これで子供舌とは言わせない!」

忌々しい、忌まわしいが混ざっていることはともかく、

「その言い方だと……最近までマジで辛いもんだメだった？」

要は聞いたが、しかしそれが良くなかったのか、瀬奈の顔色が変わった。

「最近……いやっ!? ダメ! それ以上は聞かないで！」

落ち着きのなさを別の方向に向けた瀬奈は両手に着いたスナックのかすにも構わず頭を抱え、ぶんぶんと振る。

「え? どうしたの? さっきから……いやおかしいのはずっとだけど、今のはどうもトラウー——」

「そうそれでいいからこれ以上記憶を掘り起こさないで！」

記憶（隣人に案内されて大家の手製をイタだいた時のもの）がうつすらと蘇りかけ、あわてて脳内でかき消す瀬奈。

（この子……大丈夫? まさか危ない人じゃない……といいなあ、……なんて多少の縁しかない子を心配するウチなのでした）

要は心の中で軽薄を『装い』、瀬奈の様子をうかがう。

今は両手にびっしり赤いつぶつぶを付けてはいるが、動作の一つ一つが――、

（わざと、とは……まあさすがに思わないけど……）

「セナっちってさー」

瀬奈が顔を向けたのだけを確認し、返事を待たずに問いかける。

「誰かに告られたことある？」

「あーあーそれ以上の過去への追求は……って、へい？ 刻苦こつくは八苦？」

「あんたはどんだけ苦しんでるんですか、っと適当に突っ込んだいて……告白だって、こ・く・は・く。ちなみにウチは何回かあったけどすぐに別れた奴ばかりー、なんちゃって。……で？ そっちはどうなのよ」

要が親切に噛み砕いて質問を繰り返したのに、瀬奈は未だに意図が飲み込めないのか、真顔で要をしばらく見ていた。

「……ない」

「……へえ」

真顔から普段の顔に戻った後もしばらく考え込んで答えた瀬奈。要は意外そうに——実際意外だと思っているが——瀬奈を見る。

「って、何でそんなこと聞くの」

「え？ ああいや、そのねえ……ああ、こういうことぐらい何でもなくても聞いたりするでしょ？」

なんか半眼で睨んできたので少しうろたえてしまった。何か嫌なことでも思い出させたのだろうか。

「まあいいや、それよりさっさと終わらせようって」

「そうだね……ってそっちはもう半分終わり!？」

要のノルマはまだ10袋以上。

決して男子には聞かせられない音が口からあふれ出る要。
座椅子に背もたれて、ぐでーんとしている。

「……ちよつと、これは、食いすぎ、でしょ。……気持ちわる……」
「やっど? カップ麺が10杯作れるよ」

「別に10杯作るのに30分も要らないけど……あーあーニキビで
きそう……栄養バランス悪すぎなんですけど」

その要に対し、瀬奈は座布団を並べてそこに寝っ転がりながらテレビを眺めて（お昼時、とりあえず、となると大体が選ぶあの番組……）暇を潰していた。

丁度番組が終わったところで瀬奈はリモコンでテレビを切り、うつ伏せになって伸びる。

その様子を見て、周りの静けさを観察した要はさっきの疑問とは別の質問をする。

「そーいやセナっちってここに一人暮らし?」

「うん? そうだけど。かなかなは3人暮らし?」

「何で3人って決めつけ……ああ、そうか。その『かな』『カナ』『仮名』的な発想は予想してなかったわ。しかも分かりづれえしそれ。……ちなみに、家族は3世帯の6人暮らしだから」

そこで要は一呼吸置く。

「そんで、一人暮らしってことは自炊?」

「え? ……う、うん。もちろんそうに決まっているじゃ、じゃじゃん」

言葉以上にぶんぶん縦に振るう頭が挙動不審を増長しているの思わず吹き出しそうになる要。

（うっ、分っかりやす……でも、じゃあ誰？　って話だね……）

その答えは、すぐにやってきた。

ドアの向こうから「あーそー、動物と話せるようになったのかーそれはそれは笑えないぐらい凄い話だなあ、ははは……。で、今度は……旧式？　何でまたそんなへんてこな名前を……その安直なネーミングは誰のせいだ、って俺かよ。微妙に否定できないし……」とか何とか、携帯でも使ってるのか、そんな話し声が聞こえた――

（変な独り言……はぐれけんきゅういん？　というかマッドサイエンティスト……？）

――かと思ったら、その声が一番近くなった所、つまりこの部屋の玄関で鍵の刺さる音がした。

「って！　何で!？」

『条件反射』で立ち上がり、素早くドアから死角になる位置まで移動し、要は息を潜める。

瀬奈は一人暮らしと言っていたし、だとすると鍵を持っているのは大家ぐらいだろうが、合図もせずに気軽に入ってくる大家はいないだろう（と、ここまで要の推理）。

ここで改めて瀬奈の方――正確には瀬奈の反応――を見ると、

――あっ、ちゃあああ……、あああああああ！

十中八九、そんなことが顔に書いてあった。

最初、普通にドアが開いたのに気付いただけの表情だったが、途中から何か重大な事実に向面したらしき、信じられない形相になっていた。

（別に『恐いひと』が来たって訳じゃないっぽい？ ……ん？）

「おーい、昼飯作りに来たぞー……って、誰かいるのか？ 靴が…」

そこから5秒、皆が気付いた。

まず瀬奈が気付いて、支離滅裂。

「あ、えーと、これはね、自炊は嘘じゃなくてっ、訳があって……」
要が気付いた。というか、かなりビックリした。

「え！？ イチくん！？ これってもしかして……」

そして鍵を開けて入ってきた本人、一が類たぐいまれなる頭の回転を活用する前に、

「もしかしてもしかしてマジでマジでマジで！？ 同棲！？ キヤ
—————！！♪」

要の金切り声が、気持ちいいくらいに響き渡った。

「……『！』の後に『♪』っていいのかオイ。と、それはともかく
この状況は……あー、何となく分かったけど、それで俺にどうしろ

と……」

一は、さらに疲れた。

第50話 ねごしえーしょん……（前書き）

前回の、一の時系列。

第50話　ねごしえーしょん……

おい、この状況はどういうことだ。

説明すると長くなるかもしれないけど説明するよーなんだって一とおれはもうほとんど一心同体だからねー。

……今さらりと重大事実を発表しなかったか？

さて次の話題へゴー。

待ておい！　まさか俺の性格がここんところ急激に変わっているのは――

おれの影響が100パー。

俺の個性返せ！

無駄無駄がしかし！

意味分からん。

むだむ、だが、しかし！

あー、……あれ？

それはともかくイチがチート使った並に万能になってきている！

最悪だな！　展開として！

そして、突っ込みキャラはおれのせいじゃないからな！

え……じゃあ、あんまり性格変わってないのか？

そーそー、だんだんはっちゃけてきただけで。

俺の理性を返せ！

いや、むしろ面白味を与えたとさせていたただこうよ。

はあ、……あー、なんか話がこんがらがってきたぞ。

まーこの会話もあと数回ってところだろうねー。

……………。

さーて本題カモーン！　で、本題なんだっけ？

だから、俺は動物と話せるなんて面白スキルは身に付けた覚えはな

いぞ。

そーそれ！ 何だ物分かり最高だなイチ！
マジかよ。

こういうのってさ、割と古典的だけど大事だよなー。
はあ……何でドリトル化しなくちゃいけないんだよ。

おもしろければオールもーまんたい！ とにかく事実を認めなさい！
あーそー、動物と話せるようになったのかーそれはそれは笑えない
ぐらい凄い話だなあ、ははは……。

ノリいーねー。えへへへー♪ それほどのことでもー、あるけど
おー。

……で、もう一つの話題は何だ？

開発成功ー♪ 今度の名前は『旧式』。今の所、使いすぎは厳禁よ。
もう少し日を待て！

旧式？ 何でまたそんなへんてこな名前を……。

そんなの言わずもがなだって、まさにハイブリッド！

その安直なネーミングは誰のせいだ。

元はと言えばイチ。

って俺かよ。微妙に否定できないし……。

と口に出して話していたイチでした。

……………。

その日、一はしとしとの雨にも関わらず、傘を差して散歩をしていた。
た。

それは、要が瀬奈の部屋にたどり着く、数時間前のことだった。

「暇だ……部屋の本は漁り終わったし……金無いし、図書館にかり
に行くか」

散歩をしながら、目的地を決めた一は、方向を変えて、駅を挟んで反対側に位置する区立図書館に向かって歩きだした。

その途中、駅前に入る前、とある廃園の如き場所の近くを通りかかった時だった。

道ばたに段ボールが置いてあって、その上に

『にゃー』

その中に猫が、まあ、いかにもってなシチュエーションで、いわばそれはまるで、捨てられていた。

また、ビニール傘が段ボールの隅に取り付けられていたので、かうじて雨はしのげていた。

『にゃー』

一は猫を飼う余裕はない。

『にゃー』

瀬奈はいわゆる動物嫌われだ。

『にゃー』

琉二の家系は猫舌でなくともまっとうな猫まんまが食えないだろう。あー本当に残念だ。あんな鳩が豆鉄砲をよけるようなサバイバルなところからでも捨てられるのか。可哀想だなナデシコ本当に、というわけで無視^{スルー}————

『無視するんじやにゃあああああ！』

「!? どこから人の声!？」

一の索敵範囲^{テリトリー}に人影は見当たらなかった。あるのは相変わらず段ボールとビニール傘、と猫。

『だからここなのじゃ』

「捨て猫ヤマト……ナデシコか」

正確に誰に飼われている、とかは知らないが、段ボールなら捨て猫だろう。

『にゃー』

「お前、にゃーとそれ以外を言い分けているのか？　それ以前にお前は話すのか？」

『そうなのじゃ』

「……保健所と学会、二択か」

これは面倒なことになったなあと、一は節電モード（||やる気無し状態）に入った。

『にゃに考えてるのにゃ！？』

「公衆衛生^{サニテーション}の確保か科学的リサーチの生け贄か」

猫に英語を使ってみる。特に意図は無いが。

『意味はわからにゃいけどにゃにするかは分かったのにゃよ！？』

本当に『殺処分』か『研究材料として提出』かが分かったらしい。猫すげえ。

「どっちにするんだ？」

『どっちもいやにやけど、その「がっかい」にやとそっちがつるし
上げなのにな』

「……なんでだ？」

『おみゃーの話を誰も信じにやいからにや』

「つまり？」

『今みゃーと話せるのはおみゃーだけなのにな』

1人称・みゃー、に驚いた……じゃない。

「ごくまれ珍奇ザ・生命体……じゃないのかお前」

『にや？　　そういえばおみゃー、みゃーときちんと話してるのにや
？　　にやんとにやくしゃべってたけど』

さすがに思考レベルは猫そのものだった。というか前後していた。

「信じがたいことにどうやら状況的にはそうらしい」

『にや、さすがみゃーのパパが気に入っていただけあるのにや。み
ゃーも大好きなのにな。一目で気に入ったのにや』

「……先代^{ヤマト}といい、何故猫に好かれるんだ、俺」

アフロ化にそんな意図があったのかと複雑な気持ちになる。

いつしか段ボールの前に座り込んで話す一。何でか知らないがこの
猫の表情らしきものが見えるようになってきていた。

『というわけで連れてってなのにな』

たとえば今は、人間で言うところの笑顔。どんな意図かは知らない。
……俺、頭大丈夫？

「その前に聞くが、自分の状況分かってるのか？」

『さつきご主人がやたら臭くって、いつもみたいにいやにや予感がしたから、みゃーが離れたらいきなり捕まえられてこんにゃことにゃったのにゃ。もう動く気もしにゃいのにゃ』

「臭いって……酒に酔ってたのか？ 飼い主は」

『さけ……にゃー、そんな感じだったにゃ。にゃんか水みたいになつたけど、強烈に鼻にきたにゃ。あれがさけにゃのかにゃ？』

それ、日本酒。まさかイツキ飲みしていないだろうな……。

「まああいつなら大丈夫だろ。それはともかく、それでこんなことになってんのか……」

一は段ボールに書かれた文字を確認する。そこにはこう書いてあった。

？この子はおうちに持って帰ると猫耳メイドに変身します★？

マッキーで塗りつぶして書いてあったため、語尾は黒い星だった。

「その内本当に連れ去られるぞ。稲穂愛美さんよ……」

『あんにゃご主人、みゃーはこりごりにゃ！ どうすればいいのにゃ！？』

「座して待て。多分特殊な趣味を持った奴が連れ去ってくれる」

『じゃーやっぱりおみゃーなのになゃ』

猫に間接的侮辱をされる一。

「うちでは飼えないぞ。経済的に」

というか住人のすべてが、迫害ではないにしろ、動物愛護には向い

ていない人材にあふれている。

『お金はかけにゃいのにゃ。行儀よくするのにゃ』

「いや、飯代がだな……」

『ご主人に請求するがいいのにゃ』

「絶対に身柄要求されるぞ」

『養育費とかなんとか言ってゆすればいいのにゃ』

「お前……黒いな」

『黒猫なのにゃ』

「そうだった……はあ、とりあえずあの人の酔いが醒めるまでは面倒を見るか……」

『にゃーい!』

猫バンザイ。両手——いや両前足を挙げた猫・ナデシコ。

「あ、おい……」

そのまま段ボールから飛び出て四足をフルに使い、ひとときのパンサーとなって駆けていった。

「住所分かってんのか……?」

一はとりあえずネコ科の野生の勘（養殖の国産）を信じて家に帰ることにした。

「いや、勝手に信じたのは俺だけど……信じられないな」
『にゃー、遅かったにゃ』

まるでそこにいるのが当然のように、ナデシコは丸まって一の到着を待っていた。

本当に自力でここまでくるとは、野生（偽）、侮り難し。

「どうしてここが分かるんだ？」

『臭いにゃー』

「え……、くさいか？ 俺」

『あ、間違ったにゃ。臭いを追ってここまでこれたにゃ』

何だ、においか……。

字面で区別がつかないと苦勞する（何のためのルビだ）。

一は氣を取り直して話を続ける。

もはや『この現象』については落ち着いてから整理することに決めていた。

「猫ってそんな嗅覚あったか……？」

『細かいことは気にしにゃいにゃ』

「そう言う奴が詐欺に引つかかるんだが……」

いや、それこそ細かいことだろう。

一は猫相手の態度に反省した。

「まあいいか。それより、お前がうずくまってるその部屋なんだけどな」

一拍置いて、告げる。

『にゃ？』

「俺の部屋の一戸隣だ」

『……にゃん……』

しよげるナデシコ。折角たどり着いたのに最後にニアミスしてしまったことが堪えたらしい。

「まあ、そんな落ち込むなよ」

『こんにゃんじゃ「ブラックガイド夜道案内」の名折れにゃ!』

聞き慣れ……てるけど妙な単語が聞こえた。

「え……猫ってそんなかつこいい世界なのか?」

『にゃ。どこの世界にも伊達や酔狂はあるのにゃ』

「世界、遊びにあふれてるな……」

というか、平和だ。

『とまあそんにゃことは置いて』

「置いとけ。是非に」

『さつきこの前で誰か人間が揉めてたから仲裁しちやったのも無駄だったのかにゃ……』

「あー、後悔の続きか……って猫のお前がどうやって仲裁するんだ」

一番ありそうなのは愛玩属性満点のオーラで場を和ませる、とかだろうな、と当たりを取った一だったのがそれはあっけなく外れた。

『喧嘩両成敗ってにゃ感じで引っかいて……』

「暴力かよ」

『やろうとしたんにゃけど、一人やっただころでもう一人に近づけにゃくにやっただにゃ』

「……うん? まあ、それで無事だったんならいいけど」

『いつかの時もいやにゃ感じがしたし、みゃーはとても近づけにゃ』

いにゃ』

どうやらナデシコはそいつのことが苦手らしい、ということが分かった。

……おまえの事だ、瀬奈。きっと。

「さてと、いつまでもここにいてもしょうがないから入るか」

『雨に濡れたからシャワー頼むにゃ』

「日本に生まれたんだからもう少しへりくだった言い方があるだろ」

『みゃーはビチョビチョグシヨグシヨに濡れちゃったからおみゃーさんの丁寧なおててでみゃーの体をスミズミまで洗いにゃがしてくださいにゃ!』

「……………」

誰だ、何かのラインすれすれの言葉をこんな年端もいかない子猫（♀）に言わせたのは。

「…………俺だった…………」

『にゃ?』

なんかこう、異性……は種の壁で遮れるが、喋っているという事実がここにきて重く感じられた。

……ボイス付き……キツイ。

ちなみに連れて帰っても猫耳メイドには変身しなかった。

前略。

.....。

.....。

「察してくれ……」

『にゃ？ みゃーを気持ちよく洗って——』

「折角伏せてるんだ！ その件は終了^{くだり}！」

風呂場に3歳（♀）を真っ裸のまま連れ込み上から下までくまなくシャワーで洗い流し——

「地の文！ 止めろ！」

『さつきからにゃに言ってるにゃ？』

その一言で一は正気に返った。

「いやちよつと、世の不条理との戦いを……」

『にゃ、人間の世界は深いにゃ』

「正直気楽な動物がうらやましい」

『気楽じゃにゃいにゃ。縄張りにメシ。毎日が強肉弱食の毎日にゃ』

「どっちかの『毎日』削れよ」

『にゃー、おみゃーはいま読み過ぎしたにゃ。みゃーはさつき弱肉強食を間違えたにゃよ』

猫がそこ間違えたって何も困らないだろう。

「全部カバーしてたら日が暮れる……」

『それは大変だにゃ』

よく分からない猫の価値観だった。

『ところでみゃーは腹減ったにゃ』

「……………」

『だからおごつてにゃ』

単刀直入、それ以外無いような物言いで飼い主（暫定だが）に要求するナデシコだった。

「言葉が通用する（？）のをいいことに……」

現時点では裏が取れていないので、クエスチョンマークが抜けない一。

『早くしにゃいと爪を研いでカウントにゃ』

「追い出すぞ」

するとナデシコは礼儀正しく（？）両前足、後ろ足をそろえて座り直していた。

その神妙な態度に一は心中で少し警戒をする。

『みゃーは黒猫なのにゃ』

「それがどうした」

不幸を運んでくる説は一の中では否定されている。

『黒猫は崇るのにゃ』

「そんなのいくらでもでっち上げられるだろ」

少なくとも一はその手の噂は寡聞にして知らない。

『とにかくみゃーにご飯をくれないとみゃーはみだれひっかきをするにゃ』

ニャースかよ。

「はいはい……っと、そうだよ。こっちに食材無いんだった」

とある隣人の事情により、こちらで食べる必要性が事実上なくなってしまったので、そのままなし崩しでこちらの冷蔵庫にはすっかりものが無くなってしまっている（あるとしてもおやつぐらいだ）。そして、そのおやつにしたって猫に食わせるようなものは残ってなかった。

『にゃんだって!？　じゃあどうするにゃ!？』

「待てって」

『待ては犬の専売特許にゃ!』

ペットはそこで文句は言わないはずだろう。

一は玄関に出て靴を履いた。

「違う。だから待ってろ。今から適当に見繕ってくる。ついでに用事もあるからちよっとかかるかもしれない」

『にゃ………』

恨みがましい声を背に受けて一は部屋を出た。

1分もしない後に、耳をつんざかれるとも知らずに。

第51話 いまいち……或主

「俺……人嫌いになりそうだ」

「そんな大げさな……」

一が嘆き、瀬奈があきれた。

ナニコレどういうこと！？ とインフルエンザとカンフル剤を間違えるぐらいのあり得ない誤解（と思っている）に差し掛かる要から繰り出される要点のない怒濤の質問に出来得る限り答え、一はようやく解放されたのだった（答えの内容としては、偶然部屋が隣、瀬奈の自炊が嘘、やましいところは何もない、決してそういう関係ではない、誓って事実無根有名無実である等々様々e t c e t c……）。

感想はマスコミって怖すぎる、という微妙に的を外したものだ。疲れに疲れ果て、靴を脱いですぐの廊下にだらしなく倒れている一はようやく伏せていた顔を上げ、10分振りに自発的に口を開くことが出来た。

「そーいや何で九段がこんな所に……？」

「ウチ？ ウチはねー、罰ゲームでこっちまで来てやったんだけど、いやーこれは来て良かったね♪」

「あーそらよかったな。つーか罰ゲームって……アレかよ。だったら昼飯要らなかったのか。じゃあさっさと……があっ！？」

こういう時こそ落ち着いて行動することが大事、と学校で習った気がするので、不誠実ながらも一番被害の出ない選択肢である逃げを打ったのだが、やはりと言うか、経験則からしてこの状況で成功した例がない^{ためし}。

しかも調達をしないといけないから難易度倍増。こっちは一旦諦め

ていた。

さて状況はと言うと、一が逃げようと靴を履きかけたところで両肩をそれぞれ片手ずつ掴まれ、さらに片足ずつにつっかい棒のように二人の足が膝の裏にかかり膝カッコン。するりと足裏にかかった体重が抜け、きれいに後ろから倒れた……と言うより落ちた。

背中を全面的に満遍なく打ったせいか、肺が一瞬真空になった。

……うん、これは痛い。他にも箇所は頭とか腰とかいっぱいあるけどこれ、一番痛いのは同年代の女子にいじめられてる俺だ。仕返し出来ないし。

「――つごほっ！　がはっ！」

惜しむらくは履きかけの靴が膝カッコンの勢いで足からすっぽ抜け、天井に足形を残し、物的被害をもたらししたことか（代打（＝掃除人）俺、の確率大！）。

「まーまー、折角（ウチがこんな所まで）来（てようやくオモシロネタを見つけ）たんだしさー♪　もう少しここにいたってーじゃん」

意味を改変するレベルの補足をする丸括弧が一はとっても憎い。そしてもう1人、結託して一を引き留めた人物が、

「……（今この状況でわたし1人取り残されたら隣の粗大物が何するか分かったもんじゃないから絶対逃げんな）」

テレパシー……ではなく、目で語っていた。

しかも隣に聞こえないのを良いことに粗大物とか言いやがった。

「……誰が粗大物だっ？」

「あれ、バレた？」

しれっと認める辺りに瀬奈の悪意が感じられる。

「さつきといい今のといい、その顔に書いてあるんじゃないやあああ！」

何だか一の見たことのないキャラでキレた要。そもそもキレたのを見たような気がしないのだがそれはそれ。

「まあまあ落ち着いて。一休み一休み……木魚の音、ぽく・ぽく・ぽく――」

それから瀬奈は本当に木魚の音を奏で始めた。

ホントにその方面は多才なんですわー。などと感心さえするー。

「はー……なんかキレんのもアホらしくなってくるわ……それよりこれからは言質^{げんち}を取るんだからこれくらい無視してやれないと先が思いやられるしね」

「言質って……俺は被疑者かよ」

まだまだ続きそうな質問攻めの予感にげんなりするー。
その横で瀬奈が疑問符を浮かべた。

「ねえ、『げんち』って何？」

瀬奈が語彙不足だという言質が取れた。とか。

「あー、まあ……証拠的な扱いをされる言葉、の事な」
「……たとえば？」

「たとえば？ あー、なんだ、『お前俺のプリン食っただろ』『い

「いや食ってないぜ』『どんな味だった?』『まずてっぺんのカラメルソースが濃厚でなあ、だけど本体も素材がバツグンだというのが一口で分かる……ってしまったぜ!』『やっぱてめえか……』と、プリンを食ったことがバレてしまう琉二の言動がこの場合、言質だ」

ちなみに一の実体験。
というか実名公開。

「……へえ。で、何でそのげんちが今出てきたの」
「九段に聞いてくれ。なんか妙に賢いみたいだし」

そこで要が口を開いた。一としては最初っから言い出しっぺのこの人に説明してもらいたかったのだが。

「いやいや、ウチなんかバカだよ。今のも偶然知ってただけだし」
「はっ、よく言うよ。そんなセリフを言う人に限って賢いんだから世の中不公平だよねー」

「そこで何故おまえは拗ねるんだ……」
「すねてないっ!」

そう言って頬を膨らませる辺り、単純さがにじみ出ているなあ、と一は感じた。

「……ははーん、なるほどー♪」
「……なに」

そしてそれとは別に、いかにも真実、面白いものを見つけたような要とそれを訝いぶかっているのか、警戒するような間合いを取る瀬奈。

「セナっちはウチらの一応『れいり』に聞こえる『かんだん』に『ミスアウト』して『としん』してすねてるんだ？」

「都心……？　っ、だからすねてないって」

「分かったの『拗ねてる』だけか……」

せめて歓談ぐらいは分かって欲しかった、とは思う。
それより何だこの知的トーク。人が離れるのでは？

「う、うるさいっ」

「……あ、ああ……」

精神的に追い込まれ、涙目になった瀬奈の姿に、若干返事が遅れた一。

いや、なんて言うか、まあ、その。

そしてその一の様子に無言で喜色をあらわにする要だったが、その様子は二人に気付かれることはなかった。

「つていうかイチは分かってんの！？」

と瀬奈が聞いてきた。

「一応分かったけど……大した内容じゃないぞ？」

「言え！」

「だよな……えーっと、『柳瀬瀬奈は俺らのとりあえず賢そうに聞こえる会話に仲間外れになって羨ましくて拗ねてんだろ』だったか？」

「かなかなかなかにややこしいこと言うなっ！」

意味が分かった瞬間、瀬奈は要に襲いかかるという暴挙に出た。
一には導火線が見えなかった。というか、活火山かよ。

「またイミフな呼び方を……うわっ、ちょっと飛びかかっ……うっぎゃああああ髪が！　っーか首が痛い——っざけんなこのどチビがああああ！」

「ふはははやっぱりがデカいとそれだけやりやすくていいわあっ！」

一は初めて自分以外が瀬奈に頭を攻撃されるところを見た。
……なるほど、こんなにシュールな光景だったのか。

「っーか人の顔デカいみたいなこと言ってんじゃねー！」

「言っただもん勝ちい！」

「それは違う気がするぞ……」

そんな折、要が一旦沈黙し、ゴゴゴゴゴ！　と鳴動しだした。
それは一が少なからず畏怖するぐらいの噴火の予兆だった。

「！　おい瀬奈ヤバイぞ」

「ッ……いー加減に、しろコラああああ！」

「わ、わわわあああ！？」

要は器用に腕を動かし、自分の頭が変な方向に曲がらないように片手で押さえながら、前からしがみつく瀬奈の脇腹をがちり掴んで——、

「っ！　っぷ……ひゃひゃひゃひゃ——」

——くすぐった。

瀬奈はそれに過敏な反応を示し、息を止めて我慢しようとしたが、

ダメだった。

「……良かった、九段が肝心なところは大人でホントに良かった」

一は要の選択で暴力の応酬が回避されたことに安堵の息を漏らす。

「くっ……ふあははははは！ それは、やめ、いひひひひひひ――

――」

「ほらほら手を離さないとその責め苦は持続するよ♪」

要の指の回転数が増していく。

「ぜっ、たいに、はなす、もんか……！」

「おりゃおりゃおりゃ、脇が弱いなあ、このおっ」

突きの動きが加わる。

「ひゃあっ、いや、ひひひひひ……やめ、はははうっ!？」

「……見切った！ ここと！」

「ひゃあっ!？」

一には見切れない一点を突き、

「こことお！」

「ふいいいっ！」

さらに別の点を突き、

「ここだあっ！」

「はひゃううううっ！」

最後、脇腹にぐりぐりと指の動きをねじ込んだ。

……撤回。単に楽しんでるだけだった。

というか、男子の前でこうもあっけらかんと、恥ずかしげもなくじやれあう光景を見せつけているこいつらは一体何なんだと、自分という存在の希薄さに対する疑問――を180度回した事を考える一。

「たまにこういう時に無視されるよな俺……」

かと言って気にされても今更、対応の仕様が無いのだが。

「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃあああああ！」

「ひっ、ひっく……う、ううううう……」

瀬奈のそれで一は一気に静観をやめた。

「……おい、九段、その辺に――」

「えいつ、とおつ、ドリルドリルドリルうりやりやりや♪」

ある1名が空気を読まないせいで事態はどうしようもなく悪化した。
が。

――
十分後。

「おい……さすがにやり過ぎだっただろ」

「はい、反省してます」

現在、瀬奈を座布団の連なりに寝かせ、その瀬奈を座って看ている
一と、その近くで正座している要。
仕方なしに要と会話して時間を潰す。

……こいつは大人なのか？ それとも子供なのか？

「泣くまでやるなよ……」

「調子に乗ってました」

瀬奈の寝顔には、涙の跡がくつきり残っている。
一はため息をつく。

「はあ……」

「すいませんでした」

「瀬奈に謝れよ」

「さーせんでした！」

「何でフランクになる」

「イチ君とセナっち、2人の格の、違いかな……？」

「何だその忍び足」

「だって今イチ君の方が格上だし」

「……まるで俺が少しだけ不足しているみたいだな」

イマイチ君って。

「あ、ホントだ」

「今気づいたのかよ」

「うん、今一だね、今一つ」

「繰り返すな」

「さすがイマイチ君」

「それまさか定着させるつもりか……？」

「どーしよっかな？ っと」

「あー、まあどうでも良いか」

「ふーん、詰まんない。それがイマイチ君のやり方？」

「……さあ。意識したことはないけどな」

「ホントにイマイチ呼ばわりはどうでもいいんですかーっと……それにしてもよく寝るねーセナっち」

「そーだな」

自分でも気付かない内に空返事をしていた一。

「……イマイチ君」

「何だよ」

「うん、なんというか……とても言いづらいんだけど」

「……………」

「セナっちのこと、ガン見、しすぎじゃね？」

「……………！？ ………………！ ………………！？」

言われて気付いてハッとして混乱。

「いや、そんな百面相されても意味分かんねえし。ちゃんと喋んなさいよ」

「いやいやまさかそんなこと俺は認めないぞ断じてそんなストライクゾーンあり得ないここに宣言したいのだがどうだろう！？」

すると、ひきつった顔で引いている要が混乱している一に止めを刺した。

「……まさか、寝顔萌え」

「俗な言葉で言われたあああああ！」

居たたまれなくなり、叫びながらごろごろと手近な壁に激突。さら

に居たたまれないことに。

「え……マジで？　ぶっちゃけ引いてもいいですか？　つーか一気にキャラ崩れてない？」

「きつと錯覚！　色々と！」

「……うん、色々あるんだねイマイチ君にも」

「その解釈が一番辛いな……」

何より、精神面で。

「落ち着いているつもりでも、壁にひつついたままのその体勢じゃあ、ねえ」

「あー、それもそうだよな……」

指摘され、居直る。

「面目ないな……真面目と言われる俺が……これだと」

「ただの『真』だね」

「あー、詰まんねえ事言った……」

「接頭辞としてはかっこいいと思うけど？」

「真・真面一……最悪だ」

「そのチョイスがね」

「なんか終わった……俺」

「いやいや、新たな一步を踏み出していて素晴らしいよ」

「面白キャラは俺の路線じゃない」

だったらとつくに真面白あきらとでも名乗ってる。

……かっこええ。

「今日だけでかなりはっちゃけたと思うんですけど」

「それが……心当たりは昨日からなんだ……」

お悩み相談室、開始。

「いや、ウチに言われてもどうしようもないし」

「だよな……」

相談室、お開き。

「あー、そういやこれからどうするんだ？ 罰ゲームは終わったんだろ？」

「そうだね、セナっちにイマイチ君がフェチを持っていると――」

その瞬間、（しょうもない）戦いの火蓋が切られた！
以下、地の文激減。

「なんてことを！」

「……そんなつつこみ聞いたことないかも」

「どうでもいいから早く冗談だと言ってくれ！」

「ジョンだって！」

「速い冗談だ！」

「いやいやジョーダンだって」

「さすが英語圏！ 冗句に強い名前が多い！」

「冗談の構え！」

「ウケ狙いかと思いきや飄々と生き残りそうだな！」

「ジョーダンの構え！」

「スラムダンク決められそうだ！」

「え？ それくらいならウチできるよ？」

「驚異の身体能力か！？」

「ウチの見立てではセナっちもできるよ？」

「人類（特に低身長）の夢広がった!？」

「いや、やっぱ出来ないやつは出来ないっしょ」

「夢、打ち砕かれた……」

「……ドリームとブレイクって意外と似てない？」

「唐突に何を言うんだ!？」 確かにスペルは共通点の方が多いが!

「そうそう、小文字のbとdは線対称だし、あとは最後の文字の違いだけ。結論として、夢は簡単に壊れるってこと」

「気付かせておいて残酷なことを言うなあお前は!」

「あとウチが知ってるネタだと……複数の笑顔の間は1マイル」

「笑顔と笑顔の間にそれほどの距離が!？」 次の笑顔まで1マイル
苦難の道なのか!？」

「違う違う、1マイル笑顔が横たわるんだってさ」

「スマイル0円も裸足で逃げるぞ!」

「つていうのはウチのでっち上げだから、真に受けといて」

「イヤに決まってるだろ! なんだその『これは欠陥商品ですから買って下さい。さらに今ならクーリングオフもお断り』並みに矛盾した発言は!」

「PL法は適用されないから」

「当たり前だ! そもそも俺が被害を出させない!」

「というわけでウチはこれからセナっちにイマイチ君の性癖を――」

「待て! まさか事実……とはちよつと違うが! それどころか俺についてあることないことでっち上げるつもりか!？」

「す、鋭い……!」

「明らかに明らかな伏線だっただろうが!」

「なるほど……ゴメン。ウチは今までイマイチ君を路傍の石と勘違いしていたわ。そして、それはこれからも同じ……」

「謝っという続けるな! しかも勘違いの対象が赤の他人レベル!

? 俺と九段は知り合いじゃなかったのか!？」

「え? いや、そう聞かれるとウチとしては答えに窮するというか……別にウチらそこまでの関係じゃないし……」

「他人以上友達未満!? ひどい8文字熟語だ!」

「そして、皆とそんな関係が続けることから、彼はこう呼ばれるようになった。『イマイチ』と……」

「ネーミングに悲しい過去!? 俺本当に人嫌いだったのかよ!? ってかいきなり地の文出すな!」

「そして、イマイチは悲しみのあまり旅に出た……当然、誰にも捜されなかった」

「みんな『旅に出ます。さがさないで下さい』の書き置きを信じ込んでしまった!?」

「そして、イマイチは新たなあだ名を得た……そう、『ポカパマズ』」

「ドラクエ3!? 俺は勇者の父親だったのか!?!」

「えっ!? イマイチ君、所持持ちだったの?」

「またでっち上げか! 止めろ!」

「そして、子供の名前は……」

「日本人の子供にアルスなんて名前死んでも付けねえ!」

「或主^{あるす}」

「やめろおおおお!」

お互い、顔には出さないが体力の限界を迎えたところで、

「う、るっさああああああい!」

眠れる獅子ことデウス・エクス・マキナⅡセナ、降臨。

「あー、起きたか」

「じゃーセナっち、またねー」

帰ろうとした要だったが、

「逃・が・す・かあああああああああ！」

「きゃあああああああ！」

「いや、仕返しされるだろ……そりゃ」

くすぐったんだし。因果応報だ。

「いたたたたたたたっ！ イマイチ君はっ、寝顔フリーク！」
「マジで言ったな！？」

等々。

とまあ、平和な振替休日だった。

第52話 しかし何も起こらなかった（前書き）

ほとんど漫才のような構成になってしまった……。

あと、後書きに無償の広告があります。

第52話　しかし何も起こらなかった

「おっはおっはおっはーハジメちゃん元気だったー？」

「という挨拶を昼休みにするな！」

火曜日の昼休み。

教室中に風璃の声が響きわたる。そのあとの一の声の方が大きかったが。

「って……そうだよ、お前がいたんだった……」

この風璃、ボケとしては多分今の一の知り合いの中では最強の部類に入るのではないだろうか。

瀬奈も要もまだ人としての理性が残っていたが、まさかこいつほど、恥を捨てられるとは思えない。

「おお、なにに？　ダンスパーチーのお誘いかい？」

「俺はそんな華麗なる一族になった覚えはない。ってかぱーちーって」

シババニースインクリッジュもとうとう落ちるところまで落ちてしまったらしい、と変な嘆きを心で唱える一。

「……むむむむむ？」

風璃があ、1-Dの教室でえ、一の顔をお、見たあ。……という滞在記。

見ればやけにたくさん『む』を言っている風璃だが、さらに極めつけて「むう、むん、むみい」などと言われると、度を超して近寄

りがたい。

そして風璃は爽やかにこう言った。

「むにゅ、むぁ、みょ〜？」

『いや、爽やかに言われても』とはとても言えない一だった。

「……どうしたんだよ。そんなに人の顔をじろじろと」

「あらやだ、じろじろとなんて。ぺろぺろと舐め回すように見ていただけですよ」

「な悪い！」

身が竦む思いがした。

「来たぁあああああ！」

「目葉！？」

絶叫。

視線をあまねく一手に引き受ける！

「ああ——————」

「長い！ しかもそのネタ一回使った！」

言われるや否や、風璃は息継ぎもなしに叫ぶ。

「何だって！？ この私に不覚をとらせるだど！？」

誰もそんな使役はしていない。

ついでに一番不覚なのは周りの暖かい視線が風璃自身に注がれているという事にその本人は気づいていないらしい。

「いやーそっか。うんうん、分かった。ハジメちゃんが突っ込みで行くと決まった以上、私はボケ倒すことに決めたのさ」

「言っておきながら早速ボケてねえ!」

我ながら厳しい注文をしたと、一は言いながら思った。

「おみごと! さあハジメちゃん何番!？」

「その時は『そのとーり!』とか言わないとだめなんじゃないのか?」

あれって確か、最初必ず参加者に真ん中の13番を選ばせたような気がするけど……西洋文化だったらどうするのだろうか。

「違う! その時ハジメちゃんは『残念! 正解はそのとーりだ!』と言わないといけなかった。ついでに言えばあの人そんなにそのとーりばかり言ってるわけじゃないよ。だからおみごとも正解」

「何で突っ込み方を教わらなきゃいけないんだ!？」

異様にこの内容はハードルが高かったらしい。

「ふ、よもや教えることは何もないだろう。さあ! その目で世界を見てこい!」

今度は師匠キャラ。

「『よもや〜だろう』って、なんか不安を感じるな! 普通は最早じゃないのか?」

「そういえば『最中』ってややこしいよねん」

「なんだその思考回路!？」

たまにこういう奴、1人や2人——どころではなく、いる気がする。

「真っ最中って書いたりするし、お菓子にもあるし」

「『さいちゅう』、『さなか』、『もなか』な。それがどうしたんだ？」

「わーお、薄識」

「逆に！？ しかも意味もなくバカにされた！」

軽々と辞書には載っていないがどこかに使われたような単語をこのクラスメートは使ってしまった。

「ごめん、うん、甜菜てんさいだね、ハジメちゃん甜菜！」

「俺は生まれてからずっと北海道に存在したことがない！」

なぜここで砂糖大根なのか、一には理解することが出来なかった。

「島人サイコー！」
しまんちゅ

「お前は沖縄県民だったのか！？」

初耳だった。

というかいつまで経っても話題が転がり苔蒸さないという非常事態に直面していた。

「うん、知り合いが島人」

「山とれんががすり替わってる！」

「知ってる？ 沖縄って剣道盛んなんでん」

「……知らないな」

これも初耳だった。

「だってみんな言ってるよ。『めんそーれー』」

「それ店員の挨拶！『いらっしやいませ』だろ！」

面そうれい！　なんて言ってる奴、生まれてこの方15年と端数、聞いた事ない。胴と小手はどこに消え失せた。

「もし『ちばりようたろう』って人がいたら『頑張れ太郎』ってなるんだとも言ってたよ。その友人はY O」

「友人は何吹き込んでるんだ！」

『ちばりよー』と『太郎』。

「『一増して』は『ハジミヤティヤーサイ』」

「あー、沖縄では『初めまして』ってのはそう言うのか。……あれ？」

何だか知らないが変な気分だった。知らない間に自分が増えていた気がするが、やっぱり気のせいだったのだろうか。

「それはともかく中間テスト、どんなだったのさハジメちゃん」

「文脈がない！」

「おろ？」

「とぼけるな！」

話のつなぎ方が最悪だった。

「さては……赤か!？」

「いや……」

「んな？　含みがある三点リーダーだね」

『……』の一つ一つのこと。

まあ、風璃なら喋っても平気だろう。

「俺は暗記で回避できるんだけど、左の瀬奈がな……」

一は横目で隣の席を見る。そこにはやはり瀬奈がいて、現在憔悴中。

「私も知ってるわそれー。ミスっちったね」

普段からよく話す2人なので、当然テストの結果の共有ぐらいは行っているようだ。

「いや、慰めてやれよ……」

「最初からやってるSay!」

語尾からして、ちゃんと喋って慰めているらしい。

「それにしてもまだ死んでるんだが……」

「誰か聖水ぶっかけたのかな？」

「それイジメだろ!？」

冗談だと分かっているけどさすがにびっくりする。

トイレに引きこもったいじめられっこを……これ以上の記述は無意味だろう。

それにしても聖水とは……あいつはゾンビだとも言うのか。……いつか自分で宣言していたような気もするが。

と、耳がぴくりと動き、そんな会話をしている一と風璃に向かっ

て、瀬奈が厭世家のような、それでいて虚無家のような顔をこちらに向け、「今は、ちょっと、黙れ、さもなくばすべて死ぬぞ」と視線で一を射抜いた。……随意に。

一は風璃が気楽に食べるのを横目に、針を扱うように箸を操りながら弁当を食した。その間、瀬奈も黙々と弁当を食べた。ただし一に比べて10倍速で食い終わっていたが。

食後、声を潜め、改めて2人は会話を再開した。

「とうかさー、ハジメちゃんの気に病むことなのくえ？」
「……くえ？」

くちばしでも付いているかのような語尾だった。
金と銀、のエンゼルがたまにくちばしに付いてるやつ。

「あ、違った、気に病むことなのけ？」
「……方言か」

確かに、その文脈はあるにはあった。

「あー、それで、あいつが赤だった話だよな……俺が勉強を見ておきながらこれだからな。俺のやり方がまずかったと認識すべきだろ。少なくとも俺は」

折角体質を直して起きる時間を増やしても、結果がこれでは裏目だ。

しかし風璃は一が落ち込むのを許しはしなかった。

「ふん。この私を前にシリアスモードは御法度よ！」

「なに!？」

一はそんな不文律、初めて知った。ダジャレではない。
……って、人にひたすら笑いを追求するって、ただの面倒な人か？

「どうか学校の試験如きでしよげてんじゃねー！」

「どうせ俺は真面目ですよ！」

無意識にそういうことを考えてしまうんだ、悪いか。

一は自分の質が少し嫌になっ^{たち}てきた。しかし、これ以上変えるつもりもない。

「もっとトランポリンに！」

「そこはちゃんぽらんだ！」

一の語感の連想はある意味、体操の選手に失礼だった。

「ムーンサルト！」

「最早ただの連想ゲーム!？」

「サマーソルト！」

「似てるか!？」

生憎一はスポーツ関連には疎いので、そのボケが的確かどうか、判断できなかった。

「何を言うか! ムーンサルトは体操とプロレスにあり、サマーソルトはやはりプロレスにあるんだよハジメちゃん！」

「知らねえよ！」

どっちもゲームでは聞いたことがあるが、本物がどういったもの

であるか分からない。

「そしてハジメちゃん！」

「……なんだよ」

段々疲れてきた一に、申し訳なさそうに風璃は告げた。

「後ろに、オーバーリミッツしたオーラがばちこーんしてるから気を付けなさいなよ」

一は『ばちこーんって何だおい』と言う前に空気を讀んだ！

「そうだここは逃げるが……かちッ!？」

「イ〜チ〜? ふ・ちゅ・う・い、で不幸な目に遭ったわたしを置いて、どこに逃げるって〜?」

捕まった。しかもネズミ捕りすら圧倒する握力で、一の襟首を意のままに操るという規格外。

現在の瀬奈の状態を書き出すと……混乱・バーサク・くらやみ（しかし都合の良いものは見える）・やけど（触った奴になる）・マヒ（痛覚とか、高等な思考とか）・どく（を振りまく）・ゾンビ（スター状態の）・のろい&カーズ（ただし他人を呪う）……他にもいっぱいあるゾ！

一は、輪廻の輪から外れることを覚悟した。

「あー、ちょっとあの世まで、散歩を……」

なんて、気の利いた自虐アドリブまで披露できてしまう自分をぶっ飛ばしたくなる。

「あーそう。それはいい心がけだね。手伝おっか？」

瀬奈は本格的に怒ってらっしゃるようだ。
なんと、目が悲愴に笑っている。

……怖すぎる。

「……なあ瀬奈。自棄^{やけ}になるのは分からなくてもないが、八つ当たりは止めろよ」

「どうせわたしの悲しさなんてイチには分からないだろう……」

「案外冷静!？」

ここでこの余裕のあるセリフ……はめられたのか？
これではまるで試験をダシにして俺でストレス発・散！ ではないか。

「じゃあハジメちゃん、カンパ」

「出資はしねえぞ!？ それとも農作物を守れてか!？ まさか、見極めろと!？」

本当はガンバと言ってほしい一。決して『カンパ』や『寒波』、
『看破』ではない。

「うーん、全部!」

「なに気前よく選んでんだよ!」

風璃は既に高みの見物。

「さーてイチは悲しいわたしのためにどんなことをしてくれるのかな？」

「さてはそれが目的だったのか!？」

風璃はこの瀬奈の無計画なくらみに噛んでいないだろうが……。無茶な要求だったら、たとえばらぼうに格上（だとは認めている）の存在であろうと、争ってでも取り下げる決意を一は固める。

「じゃあイチが何でもいいと言うので――」
「それは幻聴だ！」

瀬奈が一に対して聞く耳を持たないせいで、全く話が良い方向に進まない。

と思ったら、

「何でもいいので……どうしよう？」

などと言いだした。

……いや、こっちがどうしよう、だ。

瀬奈の目はまっすぐこっちを見ているのだが、本人は内心、かなり迷っているようだった。

「あー、おい、なにも考えてないのかよ」

常日頃、暴力に苛こまれ続けてきた身としては、何だか拍子抜けである。いや、スタンスは今も昔も暴力反対だが。

「なんか、どうでも良くなった……」

……ええ？

ええええええええええ？

そんなふぬけた発言に、一はどうしていいか分からなくなった。未だかつてない邪悪な……ではなく（これ分かる奴いるのか……

？）、おとなしさに、戸惑いを隠せない。

だって、あの瀬奈だぞ？

いつも油を塗った導火線みたいに火付きが激しいし、体力が馬鹿にあるからいったん破裂する度に首は変形しかけるし、生活習慣は死活問題になるほどあり得なかったし、それで料理は出来ないし、そのくせこっちまで単身で来るし、誰かに頼っていないと1日と持たないし、何か変なのを宿していたし、勉強は出来ないし、自分勝手で、辛いものは食べられなかったけどつい最近普通のものは克服して、一の料理には必ず1つ難癖をつけながらも食べるときはちょっとだけ笑顔で、ブロッコリーは嫌いで、でも頑張って食べ、その後『とっておき』と言って好物で口直しをする、でも食い物以外で何か嫌なことがあると襲いかかってきて、小さいし、人前で簡単に寝るし、怒るし……

……ごほん。

とにかく、その瀬奈が、どうしてここで一を『どうにかしない』？

「ど、どうしたんだよ。あれか？ 無気力症候群か？ そんなに精神にダメージがあったのか？」

「いや、そんなんじゃないくて……」

じゃあ、何なんだ？ とは、聞ける空気ではなかった。

「よく、わかんない」

ついに、そっぽを向いて、つまり、こちらに後頭部を向け、机に置いた腕の上に頭を乗せてしまった。

「……あー、まあ、きっとそういうこともあるよな」

そうして一は、分からないものを保留した。
一方の瀬奈も、どうしていいか分からない。
そんな微妙な空気の中で予鈴の音が鳴った。

ただ、確実に、時と共に、ゆっくりと、変わっているらしい。

第52話 しかし何も起こらなかった（後書き）

あどばーたいずめんと。

只今、作者が短期的に連載しているファンタジーものの小説もありますのでそちらの方もよろしければ見ていってください。

作者の判断では、人によってはこっちの小説より面白いかもしれませんが。

第53話　そして事故は起こった（前書き）

投稿の時勢と真反対。

第53話　そして事故は起こった

7月。

日の光を遮るものの何一つない空。

既に夏服の移行期間も終了し、本格的な蒸せるような夏が日本にやってきた。

梅雨も程々になってきた頃、真面一などの人員を擁する1-Dの面々は校舎に併設されたプールで体育教師・古里先生により、当然水泳の授業を受けていた。

今は『クラスのおおよその泳力を見る』という目的で、各々が好きに泳いでいいという自由時間だった。

「ああー！？　九段てめえ何か反則してねえか！？　この結果はあり得ないぜ！」

「なーに言ってるの。そっちが致命的におっそいだけじゃないんデスカー？　白楽君？」

片側のサイドに2コース分だけコースロープで区切られた25メートルの一直線では、もっぱら『2コース』という性質上、神聖なる競泳の場となっている。

その競泳者の中、白楽琉二と九段要は共にこのクラスの男女別でそれぞれが最速の誉れ高いようで、当然の成り行きなのか分からないが、ここで勝負をしていた。最速らしく自由形^{フリー}で。

ここに来て3戦中、琉二が最初に1勝、要は残りの2勝。どれもコンマ1秒を見極める判定がなければ分からないような勝負だった。後続が泳いでくる中、もめ続ける2人。

「もう一勝負だろここは！」

「いつでもドーゾ？　これくらいで勝ち誇るのも馬鹿らしいしねー。」

こてんぱんにでもしてあげないとねー」

「言ったな!？」

他の人も並んでいるのに、もう3度目の順番抜きである。

クラスメートも慣れたもので、この2人の勝負の観戦をメインにする人もいるぐらいである。それほどに速いのだ、この2人は。

その横、大きく開いた遊泳区域では、ぷっかー、と自然体で斉藤風璃が浮かんでいた。

かれこれ10分以上この姿勢を保っていた。ここまで来るともう、宗教の修行の域である。

「ああーなんかスナック菓子食いたくなってきたー、ね」

「も、持ってこようか!？」

その隣、何とかその独自すぎる空気に付いてこようとする人物・角田徒人は自分に回ってくるボールを漏らさずキャッチする気負いで会話を作ろうと涙ぐましい努力をしていた。

「いやいやーそこまでさせっちゃあ時間を取ってしまいしかも間に合わずしかも下手しちゃ怒られるっちな」

「う……そう、だね」

小さいが火力抜群の男・徒人、風璃にだけは非常に及び腰なのだ。全くもってどう接近していいのかわからない。

さつきから意外にある胸だったり、服の上からではわからないプロポーションに目が行き、見蕩れかけ、しかし頭をぶんぶんと分速3万回の振動をさせる。

（だめだだめだだめだ！　ここで負けたらいけない気がするっ！　お、俺は……俺はっ……！）

『見た目』よりは背伸びした感はあるが、年相応のかなり純情な葛藤であった。

ひとしきり脳内で騒ぎ終えて、ため息をつく。1人で盛り上がりたり、悶々としたり、落ち込んだり。自分が分からなくなってくる。

「俺って……どうしてこう」

だが、あきらめたくはない。それだけは確かだった。

（俺が『こう』なのに、あいつは普通に話すよな……この間とか漫才やってたし、何なんだこの2人の関係は？）

参考として、風璃ともう1人の事を考えて、徒人はもう1人に視線を向けた。

「……で、何で休んでるんだ？」

その目された一は、プールサイドに設置された10人ほどが入れる屋根の下で胡座あぐらをかき、後ろ手で床を突いて養生していた。ひどい言い草をすれば、単に精神が疲れているだけである。

「あっつ……はあ」

ただの面倒くさがりとも言える。

「あー、琉二が3敗目……負け癖がついてきたな」

「おい、マジメ！ 今のどっちが勝った!？」
「……九段」

億劫の染み着いた顔で答える一だが、誰も気に留めない。
絶対鬱になっても誰も心配してくれなさそうだ。ならないが。

「ほーらやっぱしウチじゃん」
「何でだああああ！」

ついでに、コンマ1秒を見極めていた。
スキルがあればこそ、動体視力。無駄に高性能だった。

「あー、平和だな……」

空を見上げた。紫外線満点。この中にブルーレイも混ざっているのかと思うと、少し面白かった。周りの冷ややかな反応を予想すると、とても口には出せないが。

もちろん紫外線とか、そんなことが目で分かるわけではない（見えないからこそ紫外線だ）。ものの例えだった。

（……あいつには見えてんのか？）

一は最近『そんなこと』を何かにつけて考えるようになっていた。いや、最近ではないような気もする。だからと言って出会ってすぐの頃は『それ』とは違うような……。

頭をかきむしろうとして、しかし頭には水泳キャップがあることに気付き、やめた。

「あーもう、なんなんだよいったい……たっ」

顔面にビーチボールが存外な勢いで当たり、一は天を仰がされた。子供のような笑い声が遅れて聞こえた。

「あっはっはーヒットしたー♪」

一は投擲犯・瀬奈をその視界に認めた。

「……戦争がいつまでも終わらない理由が今分かった……！」

普段なら適当に流すところを、一は勢いに任せて参加することにした。

誰かがどこから持ってきたビーチボールにより、遊泳区域はいつしか水中ドッジボールの戦場となって1－Dのメンバーを巻き込んでいた。

プールサイドとコースロープで外周の代わりとし、25メートルの半分のラインを中心に2チームに別れてボールを投げ合い、当てられた者はプールサイドで外野をする。それ以外は普通のドッジボールと同じルール。

「おりゃあ！」

「あたっ、……だあー、やられた。後は頼んだぞ！」

かなり避けづらい。漢字で書くとドッジボール避球なのに、である。

「瀬奈、よくもやったな……！」

「ふっふっふ……あれくらいよけられない方が悪いって」

「ならこれはどうだ!」

一は特大の山なりの軌道でボールを投げた。

「……? そんなの当たるわけが……っ!? 危ないっ!」
「え……あいたっ!」

外野が一のボールを受け取り、簡単に瀬奈のチームの1人にボールを当てた。

このゲーム、水中に比べて当然陸地が動きやすいのと、1メートル以上ある高低差によって、外野がもの凄い攻撃力を持つ。

「よくもやったな!? イチのくせに」

「後半は余計だ!」

「シュート!」

「うおっ!? 危ねえな!」

言いつつ、ちゃっかりつるつる滑るボールを両手でしっかりとキヤッチしていた一。今度は自分で攻める。水面ギリギリの軌道。

「ふっ、水遁の術!」

「何!?!」

何のことはない、ただ水面下に身を潜めただけである。だが、さすがに体積がほとんど空気のボールでは水中の標的にはまず当てられない。

しかし、ずっと息を止められる人間はいない。

「浮かんでくるまで待つんだ!」

「おーし来い!」

こんな所でリーダーシップを発揮するような質ではない一だが、その指示は的確なので、とりあえず形の上では指令塔だった。

なにやら水中でちょこまかとした動きを見せた後、一の投げたボールを取った味方の外野手に向かって水流が噴射されたのだった。

「ぶばあっ!？」

「あつたり」

え・い・え・い・えい！」

水中から瀬奈が悠々と現れ、さらに陣地後方から風璃が顔を出した。

「風璃! スキルはゲームがつまらなくなるから止めろよ!」

の存在はついで消えゆくのか……おおよ」

風璃。

瀬奈が軽く調子に乗ってそんなことを吹聴した。それを一は企みと共に受け取った。

ボールは、相手の外野に渡っていた。それは見事にこちらの味方に当たってしまった。しかしあまり跳ねなかったのでボールはこちらに留まる。

一は、涙をのんで散っていった味方の残滓ざんしを受け取り、それを瀬奈に向ける。

「敵討ちだ!」

浮力のせいでロクに下半身の力が伝達しないが、それでも十分な威力の乗った球が瀬奈の顔面の前で、その両手にがっちり受け止められた。

一は体制を崩し、まだ完全に受けきれない状況だった。そこを瀬奈は見逃さなかった。

「もらったああああ!」

しかし、それが一の狙いだった。

一は片手で何の苦もなく、ボールを受け止めた。

「ええ!?!」

「旧式……これくらいなら大丈夫だろ」

驚く瀬奈の隙を突いて、一はさっとボールを投げ、見事に当てて外野に送った。

瀬奈が上がるのを見遣り、一は向き直る。

「よし、これ後は要注意は風璃ぐらいだ――」

一はひとまずの安堵をしたが、それがいけなかった。

風璃が外野に向かってボールを投げたのだ。その行く先は……、

「ふはははは……、復習するは我にあり……」

なんと言おうか、古典的な間違いだった。復讐だろう。おそらく。ボールを受け取った瀬奈は、気味悪く、不気味な波動をゆらめかせ、一に狙いを定めた。

「いやおまえの場合中間とかの意味でそれも大事なんだけど……うおわああ!？」

「とおお——りゃあ!」

あろうことか、助走をつけて一のほぼ真上にまで来ていた。ジャンプシュートだった。

「って跳びすぎだろ!？」

「着水まではオツツツケイ!」

弓のように反り返り、また鞭のようにしなりながら、瀬奈は一にボールを……いや、

「あっ」

「……あれ?」

ボールで、殴った。

「ばくうっ!？」

そのまま一は水没してその勢いで水底に尻餅を付いた。

一は物理的な衝撃では気絶しないので、溺れる心配はなかったが、

なにぶんとっさの出来事だったので、

(……空気がねえ!)

水上を目指し、上昇しようとして、頭頂部が何かに当たった。思いの外、固い音が一の頭に響いた。

予想外の痛さに、再び沈んだ。しかし、呼吸の余裕もそこまでない。

(いった……うつ!?) 速く上がらねえと本当に息が! それに状況が分からねえぞ!?)

一はゴーグルが外れているのを思い出しながら水底を蹴って空中に顔を出した。

そこには、

「……瀬奈!?’」

が、浮かんでいた。「大丈夫!?’」「おい!?’」だらりと。「どうした!?’」「大変! なっちゃんが……!」うつ伏せで、力無く。「マジ!?’ どうして!?’」「さっき、頭をぶつけて……」ぴくりとも……。

さっき一が不本意ながらも頭をぶつけたのは、瀬奈だったのだ。

(俺の……俺のせいで!?)

それを見て、一は頭から何かがさっと引いた。それが、血の気だったか理性だったか、一には分からなかった。分からなかったというよりは、考えなかった。考えなかったから、一は————

第54話 微妙な距離感（前書き）

いつもより長め。

第54話 微妙な距離感

（なーにを、やったんだ。俺は……）

一は、反省していた。

そこでの出来事を、一はうつすらとした記憶でしか思い出せない。なんでも、もの凄い勢いで瀬奈を陸おかに上げて――

――呼吸の確認、胸が上下、していない、顎を上げて軌道確保した、脈は、ある、次、痙攣は、していない、『どうしたんだ！？』体育教師の声、『うるさい黙ってろ！』、瀬奈の額に手を当てる、クラスメートの1人が備え付けのAEDを持ってくる、『いらねえ！』、自分の力を込める、水を吐いた、呼吸、した、回復体位に、させた、そして、誰も近づけない、近づけさせない、顔が、姿が、拒絶しそうで、叫びそうで、怒りそうで、泣きそうで、『起きろ！起きろ！起きろよ！』、周りは黙り、しばらく、瀬奈が起き、すぐに、一は気分が悪いと言ってプールを抜け出し――

――らしい。

我ながら、目眩めまいがする出来事だ。

「で、ここ、か……」

制服姿で、一は保健室の真っ白な天井から、視線を移す。その先には意外と着る人のスタイルが試されるコスプレ、ナース姿の稲穂いなほ愛美。
まなみ。

「また目眩が……」

確かにこの人を客観的に見て美人だと言うことは一もやぶさかでもないのだが、その判断と目眩は関係がない。

……社会常識的に保健室にはナースはいてはいけなはずだが……そうだ、ここがおかしいんだ。きっと。

「とまあ、私が聞いたのはそんな話☆」

「説得力に欠けるからその語尾は抜いて下さいませんでしょうかねえ！」

未だ抜けない、訳の分からない——ではない——苛立ちを隠さずに、一はそう言った。

とつくに水泳は終わり、一はいつの間にか保健室で眠っていたらしく、昼休みすら過ぎた最後の授業の時間によく起きて、丁度そこにいた愛美になぜ自分がここにいいのかを聞いていた。

それによると、一は必死になって瀬奈を助けて、そのまま一人でここまで来て勝手に寝てしまったらしい（さすがに着替える理性は残っていたようだ）。さらには昼休みに、瀬奈を始め、風璃や琉二、要まで見舞いに来たらしい。

で、その時に一の様子がどうだったかを聞いた、とのこと。

「しょうがないな。今のはかなり失礼だったけど、今回は病人ってことで大目に見てあげましょうかねえ？」

「あー、いや、すいません」

よく考えると、一が愛美の所で働いていることは大目に見る要素にはなっていないかった。

それを口出しするのを控えて、一はようやく冷静さを取り戻し始めた。

やがて、愛美が考えながら、真剣な語りを始める。

「うーん、先生としては何とも言いがたいけれど、ひとまず人命救助出来たことは、誉めておきましょう」

「……ありがとうございます」

一は、そう言うておくぐらいしか出来ない。

「でも、方法は、無理矢理過ぎるでしょう。自発呼吸を『待つ』のではなく『させる』なんてやり方、画期的だけど、今までやったこともないでしょう。確実ではありません」

「それは、あれが1番だと思ったからで……」

一は諭されていることに気付き、気付きながらも反論した。

その反論は、無視された。ではなく無視してくれた。

「そして、責任者である前に大人である先生を拒んで、一君と同じくらい柳瀬さんのことを心配していたみんなを遠ざけたのは、間違っています」

「……………」

今度は、何も言えなかった。言えば、子供のような言い訳しか出てこない。多分、きっと。そもそも行為が子供のようなだったと思う。すると、愛美は質問してきた。

「なんで、1人でやろうとしたのかな？」

これは、答えられる。

「それは……助けられる自信があったからです」

ただ、言えないものが多すぎたので、理由でないような理由になっ
てしまった。

「じゃあ、自信があったのに、どうしてそんなに慌てて助けたのか
な？」

「それは……俺のせいだと、」

……認めてしまった。最初に動いた理由を。言いたくなかったの
に、言ってしまった。

気付かず自分でも考えないようにしていたのに、である。

瀬奈を自分のせいで傷つけたと思ったから、どうしてもそれを拭
いたかった。

まあ、本当はそれだけではないが。

「うーん、確か、一君が保護者代わりみたいなのをしているんだ
っけ？ 柳瀬さんの」

「まあ、そんなところ、です」

その次の理由――さっき話せなかったもの――は、どうしても話
すわけにはいかない。絶対に軽蔑されると思ったからだ。

「……じゃあ、なんでここまで来たのかな？ 休むだけならプール
サイドでも出来るはずだし、実際ここに来て吐き気もなかったよね。
それに、仮にも保護者の一君は柳瀬さんを見ていないと、実際問題
は別にして、責任ってものがあるでしょう？」

「それは……」

その時の自分に、言いようなない罪悪感を――言えない。
まさか、いきなり自分がこんなことになるとは、思いもしなかつ

た。どうしてそんな風に――

「まあどんだけ最悪でも私がいる限り大丈夫だけどねー☆」

「……………」

……すっかり失念していた。この人のスキルを。

そもそもこんな所で縮こまっているような人材ではないのだ。

しかし、愛美はそのことに思い至らなかった一を責めるようなことはしなかった。

「……よし、分かった。大体見当もついてるし、では私が処方箋を出してあげよう☆」

「処方箋って……」

あなたはナースだけでなく薬剤師だったんですか。これで外科医とかいったら……いや、すでにブラックジャック並みなのだった。

「その気持ちを大切にしなさい。以上☆」

「……………」

一瞬目から鱗が落ちたようで、しかしまた張り付いたような心地だった。

その気持ちを？ どの気持ちをだ？ 恐れた気持ちか？ 荒れた気持ちか？ それとも一心不乱だった気持ちか？ いや、違うだろう。そんなことではまた諭される。

助けたい――出来れば自分が――と思った気持ちだろう、きっと。

「過保護なのか？ 俺は……」

「んー、そんなことはないと思は思うよ」

そうなのだろうか？　だって、誰も触れさせなかったって、よく考えればとんでもなく狂気じみている……モンスターペアレントか、己は。

「多分、みんなその内過保護になっちゃうよ。もしかしたら、ただ」

「おいおい……」

それはまずくないだろうか……とはいえ想像の話なので、深く考えてもしようがないことなのだろう。

一はその辺で思考を打ち切った。

「さあ、ズル休みは終わり。さっさと行きなさい☆」

せつつかれたわけでは無いが、一は追い出されるようにして保健室を出た。

――
1－Dの教室に入ると、すでに授業が終わっており、担任が教壇に立っていた。

空気を乱した存在・一のことをクラスのみんなが見つめた。見るな、と言っても無駄だろう。

ちなみに一が注目されている理由は教室に割って入ってきたことではないのだが、本人はあまり意識していない。

すぐに促されて自分の席に座り、連絡を聞きながら手早く荷物の整理をする。

と、視線を感じた。

「ん、琉二か？」

「……ハッ！」

短く切った肺活量だけで一は蹴された。

……何だ！？ 何が起こった！？ 何がこいつを怒らせた！？

「え……どうしたんだ琉二？」

「オレとのからみが出ねえぜ……」

……目立ちたいのか。

「お前面白いのか？」

「ふん、なめるなよ。暴力を振るわされたら右に出る者はいないぜ」
「……Mかよ」

『暴力を振るわせたら』だったらこいつはとてもお見せできない
ような人物だったが、これはこれであまりお見せしたくなる……
…。

「というわけでオレをなぐれ——」

「無理なキャラ捏造はやめろ」

というか、ホームルームの途中で戻ってきていきなり隣の席を殴
るってどんなヤンキー学校だ。ここは偏差値が平均より高めの高校
のはずだぞ。

……その割に変な奴が集まりすぎた気もしなくもない。

「あーあ、こっから学園異能バトルへのルートだったのによー」

「絶対それはない」

まずはその幻想をぶっ壊す！ ……だったか。

「とまあ、こんなもんだな」

「終わりかよ！」

しかし返事は予想外の所からきた。

「ええ、終わりです」

「へ……？」

ついにホームルームでエクスクラメーションマークを発してしまった一だったが、それに合わせたような声が被さってきた。アラフオー担任敷石恭子のものだ。

「それで、早く終礼を済ませたいのですが」

「え、あーはい」

急いで立ち上がる一と琉二。周りはすでに起立している。

「気をつけー、れーい」

机を下げて一は琉二と話を続けようとしたが、部活があるらしく、ここでお別れとなった。

風璃もバイトがあると言ってちやかちかと帰っていき、試しに誘ってみた徒人にはにべもなく断られ（一応風紀委員で用事はあるらしい）、まさか要にまで――帰りがけの会話を楽しもうと、まるでナンパ師のようなことをやりかけて、しかしあきらめた。

しかたなく、というか他に人がいないという理由を付けて一はようやく話しかける。

「なあ、瀬奈」

返事は、かなり遅れてきた。

「……………え、なに？」

机を下げてから全く変わらぬ位置に瀬奈はいた。

「えーと、帰るか、とりあえず」

勝手にではあるが、微妙な距離というものを感じながら、帰りながら話そうかと、軽く言ってみたつもりだったのだが、

「ううん……先に帰ってていい」

返事は、突き放すものだった。一が歩み寄ったかも微妙だったが。

「あー、じゃあ、お先」

一は内心どうしていいか分からないまま、重い足取り、野球で言えば、盗塁を狙うランナーの心境で動かす。その意識は2塁ベースではなく、ピッチャーと1塁——まあ、一の中では同じ扱いのそれら——に向いていた。いつでも戻れる用意だけ、できている。

はずだったのだが、

「……………」

「……………」

下駄箱で靴を履き換え、校門を出て道を歩き、その足は確実に2塁、自分の家に近づいているのに、その後ろで、

（用事、あるとは言って、無かったな……）

1 罊が、瀬奈の気配が、にじり寄ってくる。なんとなく、分かる。このままでは盗罊してしまうぞ、と意識しながら、しかし直接振り返ってみるのははばかられ、ただ視覚以外の感覚でのみ感じ取ろうとする。かといって聴覚が役に立っているわけでは、ない。一の精神に住んでいる、日足の感覚でなんとなく、分かった。

（気配って……あるんだな）

不思議な感覚だった。普段は分からないが、他の刺激が微弱な時には、じわじわと伝わってくる。

その気配は、音を立てず、もしかしたら姿すら隠しているかもしれないが、確実に一との距離を保ったままである。

――

そんな状態のまま、最終的に盗罊、成功。
なのになんか失敗した気分。

「あー、ああああああ……」

一は自室のベッドの上でうめいた。

「どうすりゃ、いいんだ……!？」

なんだ？ 避けられてんのか!？ 俺はこのまま晩飯作りに行っているのか!？ などといつの間にかいらぬ悩みまで抱えてしまっている。

ここに来て、他人との距離を測るような付き合いをしてこなかっ

たツケが怒濤のように押し寄せる。常の自然体ではいられない。
動揺が激しい。

「いや……作らせるわけにはいかない、のか？」

この間なんか卵爆弾をしでかしたぐらいである（しかもレンジではなくきちんと茹でたにも関わらず、だ）。

もう一は調理に関しては、ほとんど瀬奈の成功を諦めている。

「放ってはおけないし……結局、行くしかないよなあ……」

行かなければいけないと、行きたくないわけでもないのに自分に
言い聞かせ、一は身を起こした。

――

「瀬奈……？」

「む……ええっ！？　もうそんな時間だっ……たね」

リビングで一言かけてからキッチンに移るのがこのところの習慣
なのだが、いつものような『んー』とか『遅い！』といった反応で
はなかったことに、ますます違和感が膨らむ。

「……（ええい、儘よ！）なあ、どうしたんだ？」

「どうしたって、何が？」

その違和感をかき消すように振る舞う瀬奈。

「なんというか、上の空ってというか、反応が鈍かったというか……
おまえ、溺れてから」

一の言葉を切るようにいきなり瀬奈はぐるんぐると片腕をぶん回した。

「はっはっはーこの通り体調に問題はないから！ それより腹減ったから、早く何か作ってよ」

「今日は確か、鮭だったな」

「未成年の飲酒は法律で禁止されており、正常な『成長』に悪影響を及ぼす可能性があり――」

「いや、飲み物じゃなくて、魚だから」

それに、気にし過ぎだろう。特に身長。

そんなのどうでもいいのに。たかが身長だろうが。もう気にするのは止めにしようぜ。

と、色々と考えすぎたことに気づく一。

「ふーん。ま、そんなとこだろうと思ってたけど」

いつの間にか、瀬奈は普段の調子に戻っていた。

一は聞き出すのを諦め、キッチンに立つ。

作るのはオリジナリティの無い、ご飯に焼き鮭、なめこ、わかめ、豆腐の入った合わせ味噌の味噌汁、豚肉と野菜炒め。

そうして一が黙々と作り終えた料理を食卓に並べる。

並べるところで、ふと、思った。この生活をして、久々にわいた疑問。

「……これぐらいなら、おまえが手伝ってくれてもいいんじゃないのか？」

「……………」

……む、無視かよ！

一の望みは、実質何も圧力をかけられていないのに儚く息を絶やした。

「ほら、早くしないと冷めるぞ」

「……………ふぁっ？」

まただ。

「……本当におまえ、大丈夫か？」

「いただきますーす」

「さっきから現を抜かしたっていうか、言い方は悪いけど若干ボケてるんじゃないか……………って速えよ！」

一が問う間に合掌を終え、さらに、

「ごちそうさまー」

「おまえの胃袋は宇宙なのか！？」

ノリ突っ込みを言う間に食事を終えてしまった。残りは一の方だけである。呆れながら細々と食べる一に、座ったままの瀬奈が話しかける。

「今日はさ、ごめん」

「…………？」

口をもごもごさせながらとりあえず疑問符を浮かべる一。その拍子に、口の中の鮭が牙を…………骨を突き立てた。

…………喉に太めの骨が刺さった！

「もごっ！」

「イチ！？ 大丈夫！？」

一の異常を察し、瀬奈が駆け寄ってきた。

「えええと、こういうときは、水だっけ……そうだ！ さするんだ！」

間違ってる！ と言ったら口の中が暴発しそうな状況で、瀬奈は無情にも吐き気の対処法を敢行した。

全く役に立たないさずりが嬉しいのか悲しいのか、むなしいのか落ち着くのか、複雑な心境の一だが、結局手堅くご飯を噛まずに飲み込むことで骨を押し流した。

「……っああ……、あのなあ瀬奈……さするのは違うからな。吐かせる気かよ」

「あれ？ 違ったの？」

どうやら本気で吐き気と誤解していたらしい。いや、よくよく考えれば喉を詰まらせたようにしか見えないのだから、そこまで有り得ない発想ではないのかもしれないが。

「あー、そうか……別に気持ち悪くなったんじゃないけど、骨が刺さったんだよ」

「ご、ごめん」

また謝られた。どうも瀬奈に下手に出られるのは、気分が悪い。かといって高圧的な態度をよしとするわけでもないが。

「……なんかそれ、らしくないぞ」

本当に。いつも楽しそうなのが瀬奈だと思っていたのに、これだと調子が狂う。

「だって……」

「だって？」

「怒って、ない？」

……俺がいつおまえに対して怒ったんだ？

一は記憶を探るが、ふざけでどうした、突っ込みでどうしたぐらいしか思い出せない。

「……俺が怒る理由がないだろ」

「じゃあ、水泳の時のあれは……」

「あれって言う……ドッジボールの件か？」
くだり

あれもふざけの部類に入るだろう、とは思うのだが。

「その最後、っていうか……わたしが寝てる間になんかあったの？」

疑問をさらに疑問で返された。一がそれに答える前に、瀬奈が思い出して喋る。

「ってああそうだ、ありがとうね。助けてくれたんでしょ」

「あー、まあ、当然のことをしたまでというか……出過ぎた真似だったというか」

本当、これは反省しないといけない。

いくら『怖かった』とはいえ……。

「それで……イチは、何で保健室に行ったの……？」

それを、瀬奈はとても不安そうに聞いてきた。

……あー、そうだったのか。

「……あれは、あの時の自分にイラッとしたというか、何やってんだと自己嫌悪に陥ったというか……」

違う、これは求められている回答ではないだろう。

「……とにかく、おまえのせいじゃない。俺が勝手に先走って、それで、おまえが目覚ましてから、そこに居辛くなっただけだ」

全て自分のせいではない。

(……って、何を庇ってるんだ？ 俺は)

ふと、瀬奈を気遣っていたことに気付く。何がそうさせているのか、と聞かれても、今は何とも言えない。同情のような気もするし、違うようなものも感じている。

「ふーん……」

それから瀬奈は考える仕草をして、

「もしかして、わたしが好きだったりする？」

「!？」

いきなり、平然と、そう言った。どの口が？ テーブルを挟んで目の前の口が、だ。しかも意外とためらいがない。

どこからそういう発想になるのかと一は驚いて瀬奈を凝視した。
動揺、再び襲来。

「ばっ、か……！ 人の親切をそう解釈しやがって……！ 俺がお
まえを助けるのはなあ……！」

「助けるのは？」

しれっとした笑顔で聞き返す瀬奈。その笑顔がなんだか余裕すら
感じられるというか、楽しんでいるようにも一には見えた。

その笑顔がとても心地よかったのは一体、なんなのだろうか。

一はここで、無駄だと思いながらも切り返す。

「……ってそうじゃねえ！ 逆だ逆、俺が手伝わなかったらどうす
るつもりだったんだよ？」

「さあ？ どうしよう？」

何の不安も感じていない顔だった。一は声にならない呻きを上げ、
ため息をついた。

「はあ……あー、そうだ、期末どうするんだ？ 案外近いぞ」

「あ、それは……頼んだ！」

「自力でどうにかしようとは思わないのかよ」

どうにも、目が離せなくなっている。

まだ、この関係は続きそうだ。

第55話 式のある日は天気が悪い（前書き）

ひたすら突っ込んでます。

第55話 式のある日は天気が悪い

蒸し暑い空気、それを最悪たらしめる雨が降る平日。

2週間が経ち、海の日を間近に控えた二布高校は今、ウキウキと雨季^{うきつき}の空気が混じり合う中で終業式の日を迎えていた。

「やほーわーい、ジ・エンド！ カルマ！ んーッセレモニー！」
「……終業式スゴいことになってんな」

そのウキウキの代表格、斉藤風璃はそれから「ビジネスアルバイトトラバーユラヴォーロラボータギブミーマネー！」と奇喜鬼気のテンションで『夏休みめっちゃ働きてー！』と意思表示している。ちなみに声自体はそれほど響いていないので幸い周囲に不快がなかったりは今の所は無い。目立ってはいるが。

そしてそれを『業^{カルマ}って1年の内に3回も始まったり終わったりしてんのかよ』と思いながら無気力な目で眺めている一。

覇気は当然全くと言っていいほどに無いのだが、逆に陰気でもなく、なんというか、空気だった。

「セレモニー！」

「そんなに嬉しいか」

「セメタリー！」

「意味を考えて言え！ しかも微妙に上手くねえよ！」

墓地。カードゲームとかで出てきた。

「テリトリー」

「よーしこれ以上近づくなよ！ だって縄張りだからな！」

「テトリス」

「ほとんど原形留めてねえ！」

対立しているかは知らないが、個人的にはあの手のゲームはぷよぷよ派。

「ええ！？ オイ！」

「確かに『セレモニー』の母音はそうだけど！」

湿気は季節の都合でひどくうっとおしい。しかし、この階層では唯一、1-Dの教室の中だけは涼しく爽やかな気流が穏やかに回り、程良く熱を冷まし湿気を払う。

「しゃーて、枕はこの辺にして……そう言うハジメちゃんは夏休み嬉しくないのかいな？」

枕とか訳の分からない単語が出てきたが一はスルーして話を進める。

落語は守備範囲外だ。

「少なくとも労働をしたくて夏休みを待ってるわけじゃないからな」「な、なんですとー。な、なんだってー」

「『！』か促音を付けろ！ 驚きが表現しきれていない！ しかも一人二役やめろ」

「ところで驚きと轟きって似てるよね」

「あー確かに似てるなあそれが一体全体どうしたんだ！？」

縦横無尽の加速度に一は頭がぐらりとした感覚を覚え、その勢いに乗せられて大声を発してしまった。

……というかこれはそのお前の言った枕じゃないのか？

「わお、ユー目立ツ事スルネー」

「さっきのお前程じゃないけどな！」

「それでセナちゃんの所にいらなくていいのさ？」

「……あ、のなあ、」

どうも『あの事件』以来、一は瀬奈を好きであるらしい、という噂がまことしやかに、というか状況証拠扱いでクラス中で立っているらしいのだ。

一としては無根の事実を主張したい（つまり主張出来ない）のだが、旗色は悪いようだ。

「おおっとハジメちゃんは認めていないんだったつけい。失敬」

「……………」

「いやいやそんなににらまないでゝなあ。ちゃーんと線引きはしっかりしかとするさ」

何とも曖昧な表現だった。

しかとするのか、シカトするのか。

「だからあれは保護者としていうかだな……」

「……そういえばさー、セナちゃんの両親、というか家庭ってどんななんだろうね」

風見鶏よりも方向を変える頻度がすごい。

「また連想ゲームかよ……」

と言いつつ一はその辺の事情を考えを巡らせる。

万力の締め付けの如き瀬奈の親指と人差し指のみの圧力に手首を苦しめられながら色々な意味で難しいセリフをやったのけた一。むしろバグッたようにさえ見える。

……意味もなく無駄に傷ついた気がする。まあ、絶対に気のせいではないのだろう。

「……つとああゴメン、ちょっと我を忘れてて」

「随分な言い訳だな！ そのちよつとで俺はここまでのリアクションを要求されるのか！」

ちなみに指圧された箇所が白ではなく赤紫であること、ついさっきまで覚えのない、爪形がそこに出来ていることを除けば、特に身体に異状は見られない。

「ハジメちゃん。ズレてるじゃえ」

「突っ込みがか？」

「うんにゃ、存在が」

「もうそれはいじめと言っていいいか？」

存在がズレてるって、結構キツイ……。

「……、くっくくく……さあ次はズガイコツを――」

「だから我を忘れんな！ おまえは（きっと）立派な精神を持った人間だろ！？ 分かったら人体錬成はやめろ！」

なんかカルシウムの危機が思いの外もの凄かったので、心なし必死に（頭蓋骨という漢字が分からない）瀬奈を落착かせようとする一。

「そうだね、どうせなら『ある』人から奪った方が……」

「そこで琉二や九段にそのギンギラギンにかつ全然さりげなくない目線に向けるなよ!？」

「古っ! ダサっ! キモっ! 消えろっ!」

「なぜそこには過剰でシビアな反応!？」

瀬奈は昭和ネタに厳しかった。……って待てよ、こいつ自身も古いネタを使ったことがあったような……? まあいいか。

そして心なし、そう、心なし落ち込んだ一に瀬奈は一言、理由を述べた。

「いや、気分」

「……………」

意外と、かなりストレートに傷ついた。

最近は気分で行動する輩が^{やから}やたらと多いが、なんとなくで毒舌、いや暴言を吐き出されるのは受け止める側としてやめてほしいと切に思った一。

一が言い返すのを諦めて黙っていると、その瀬奈の頭の上に机代わりにと両腕を組んで乗せて、要が人を馬鹿にする笑みを浮かべた。

「まーぶっちゃけ赤点で補習になったとか、そんなところでしょ？」

何を今更って感じだよねえ? つーかこいつ、案外気持ちいいわあ……さすがマスコットセナっち」

そのままクッションの感触を試すように瀬奈の頭をぽふぽふと連打した。のもつかの間、

「ふっ!」

「おうふ!?! ぜ、ゼロ距離……!」

要の死角から瀬奈の肘打ちが当たった。その衝撃が脇腹……ではなく骨盤の片方を起点に（身長差で当たり所がそんな箇所になる）要を打ち碎いて、崩した。

早過ぎる退場だった。

瀬奈は崩れ落ちる要を「ふん」と言ってみ下した。

「やっぱりダメだね。骨が弱い」

「だから何でボーンハンターなんだ……？」

「腰……抜けた」

「ふん、そんなんだからレントゲンに写らないんだよ」

「そんな奴聞いたことねえ！」

軽くホラーだ。

——以下、脳内劇場——『ど、どうでしたか……？』『ええ、これが〇〇さんのレントゲン写真です』『う、嘘だ……！』『最初は私も目を疑いました』『な、無い……』『そうです。あなたの骨はコラーゲンなのです』——コラーゲン、邪魔すんな。軟骨に帰れ。——
一は軽い寸劇を通り抜け、現実には舞い戻る。

「結局ダメだったのかよ……だから見てやろうかって言ったのに」

「いや、それくらい1人でやりたい」

「……あーそう。じゃあ補習、頑張れよ」

「だから、何でそうやってわたしがホシューホシューって決めつけてるの。イチは何？ ドライアイスでも口に入れてるの？」

「喋るどころじゃねえ！ つーか今日はやけに毒舌だな！？」

雨季雨季としたオーラも関係しているのかもしれないが、これはキツイ。

「そう？　いつもと変わらないけど」

「じゃあ何で背景が暗いんだよ？」

「実は昨日、死神と契約を……」

「俺の手に負えねえことすんな！」

「それでイチの寿命の半分を削ってわたしに回したから、実は今ものすっごく謝りたい気持ちがある半分の優しさと打ち消し合ってもないんだ」

「勇気と愛が相殺した！？　……っていうか、つまり寿命を盗んだけどそれについてはノーコメントってことで良いんだな！？」

「そう……だっけ？」

確認に対して、丁寧にも首を傾げた。分かっているのかいないのか……いや、笑っているところがわざとだと告げている。

その前に何なんだこの会話、と思わなくもない一。

「言ったことぐらい覚えておけよ！」

「うわー小悪役っぽいセリフ」

「いや、なんかニュアンスが違う気がするぞ」

同音異義語、だろうか。

「というわけでわたしは補習じゃないからよろしくう！」

と、風璃にアドリブを振った瀬奈。当然風璃は正しく反応する。

「ヨロシクウ！　ほらハジメちゃんもノって！」

「……夜露死苦ようしく」

卑しく小さな反撃だった。

……個人的には『露』より『炉』の方が攻撃力がありそうなのだ

が、今更過ぎるだろう。

「って本当に回避したのか？ 赤点」

「ギリギリだけどね。いやー危なかった」

「頑張ったな」

「偉いぞーセナちゃん！ なでなでー」

そう言って風璃はわしゃわしゃと瀬奈の髪をもみくちやにし、瀬奈は「ちょ、ちょっとふーりんやめて！」と大人しく抵抗していた。
……なぜ風璃にだけは優しいんだ？

どうも、不当な格差が存在するようだ。

――
終業式の後。正確には放課後。

“さて夏休みの暗密部の活動についてなのだが……”

風璃の言うところの業を終わらせる式・終業式が終わり、通知票やら大掃除やらなんやらとイベントを消化していき、さあ自由へエスケープ！ というところで瀬奈、風璃もろとも担任に捕まった。

その暗密部顧問の先生曰く「話し合いがあるから逃げずに来るように」とのこと。

そういった経緯で、一を含めた暗密部員の3人は部室へ集合となつて、今、会議中。

体育祭の後、部室は空調設備が完備され、冷蔵庫もコンパクトかつスタイリッシュな新品へと変身した。しかし一はあまりそれらを利用しないのでそれに比例して恩恵も少ない。そして雑多な中に相変わらず目に付く『禁』の文字と棺桶……いや、物入れだということ

とは分かつてはいるのだが、不安は不安だ。入手ルートはオカルトじゃなからうか、などと心配になる。

“部費が余ったのでどこかに合宿と称して出かけようと思うんだけど、どうかな？”

「部長。ちよつといいですか」

“何？ 真面くん”

「かろうじて俺と長船先輩しか意味を取れていないんですが……」

“……そうみたい”

という、英語でのスピーチ。

どうも^{ほかる}韃連先輩は英語が達者で日本語は噛み噛みというか、まあ、そんな感じらしい。

そのせいでここは日常会話に英語が混ざるといふ異文化地帯になっていた。

ちなみにそれに適応できているのは男性陣のみ。ほか2人はゆっくりな部長の日本語を後から楽しむか、通訳を通して聞き取りなり会話なりをする事でコミュニケーションを図っている。

「はあ……あまり得意じゃないんだけどな、英語。今ならセンターのリスニングも満点取れそうな気がしてくる」

「いっそ海外にいけそうな気すらしてきますよね……」

「全くだ」

その男性陣の半分、長舟^{おさふね}はあまり積極的に話に参加せず、ほとんど傍観を決め込んでおり、今のうちにたまりに溜め息混じりの愚痴をこぼす程度である。

……なんか俺とキャラ被ってねえか？

「で、どんな話だったの？」

「余った部費でどっか出かけるんだと」

言うや否や、まず風璃が反応した。

「海！」

そして瀬奈が呼吸を合わせた「山！」「川！」「森！」「島！」
「温泉！」「キャンプ！」「観光！」「レジャー！」「電車！」
「バス！」「飛行機！」「船！」「写真！」「土産！」「思い出！」
「饞別！」「寺！」「自然！」「やめい！」「！」「！」「一瞬、止まる。」

盛り上がっていたところを悪いと思わなくもなかったが、これ以上見ていられなくなったので打ち切った。

思わぬ方向からの威圧する声にびっくりした2人は竦んで、まん丸の目で一を見た。

「話がまとまらないだろ……ほら、部長が困ってる」

「それより多分イチの変わりように驚いてるんだと思うけど……」

「まさかそんなはずは……って部長はどこに……」

もちろんさっきまでいた位置にはいなかった。そしてあたり360度を見回すが、これまたいなかった。

困って、という訳ではないが長舟を見た（なんとなく頼れそうな気がするのだ）。その長舟は目を閉じたまま腕を組んだ姿勢、反対の肘の内側にある手から親指がピツ、と上を――天井を指していた。
……なんだその格好良さ？

釣られて上を向くと、天井に開いた四角い穴から――いつかの天井裏の連絡通路の出入り口の1つだ――すうーっと靉連が目から上だけを覗かせていた。

「あいつはびっくりすると隠れる癖があるんだ。あまり気にしてやるな」

「え、そんな小動物のような設定が……」
「……………」

ビビりからきたのか、もしくは一の発言に対する複雑な心境なのかわからないが、沈黙が一にのしかかる。

「えー、あー、すみません」

なんだか発する雰囲気が怒っているようにも感じられる。やがて軀連はくぐもった声で決断を、文字通り下した。

“決めた……合宿は、私の親戚の所で行う”

「ちょっと待て、どこからそういう発想になった」

異議を唱えたのは長舟。さっきの風格品格を一旦置いてけぼりにして、見方によっては慌てているようにも見える動きでその身を起こした。

“勿論、ここから”

「何を格好良いこと言ってるんですか」

“そう、これからの私はしがない案内人……”

「ただし、地獄へのだな」

「じ、地獄……？」

“その名も地獄ヘルステアクト案内人……”

「……案内人案内人って確かに字面似てるけど……というかボケだったのか!？」

英語から翻訳して理解するのが大変だ、というのがキツいところ

だ。

“行き先は決まった……さあ、楽しみだ……都会の喧噪けんそうから離れ長閑どかな田園調布……”

「田園地帯です！」

まさか23区が都会の喧噪から離れているとは言えまい。

“長閑な田園地帯……殺伐とした殺風景……蘇る虎馬……否、トラウマ”

「さっきから思ってたんですがこれ英訳できるのか!？」

直訳しても絶対伝わらない。しかもそれとは別に不吉なワードがそこかしこにある。

「問題はそこではないんだが……」

斯くして夏休みの活動予定、1つ確定。

「で、何を話してたの？」

夏休みの双壁極大イベントの内、1つが襲いかかってくることが決定した、とも言う。

というわけで、これから2つ、夏休みの山場が始まる。

第56話 昔をなつかしんで

7月を今日を入れてあと3日残した日、つまり29日。

夕方と言うにはやや早い時間に、とあるバス停……の看板だけが置いてある場所に、国鉄の駅から走るバスが1台、乗客を降ろすために停車した。

その中から面白味を欠いた少年・真面一は小振りのバックを引っ提げてバスから降りた。

顔に疲労の色はないが、倦怠感がにじみ出ていた。どうやら楽しんでいないようだということが伺える。

そしてその表情のまま、辺りにぐるりと視線を向ける。

「コンビニすらねえ……」

周囲を見て思わず口から漏れたセリフは、間違いのような事実だった。コンビニどころか家の存在すら微妙だった。

見渡す限り、というか感じられる限り、田舎。

立地的にはいわゆる海無し県、コンクリの舗装された道路だけが立派で、後はもう、近代日本にあるまじきものだった。

辺り一帯の平地の広がりや乾ききった田んぼでほとんどが埋め尽くされ、山と山の距離を二等分するように丁度良く幅2メートルほどの小川が流れている。所々に時代劇で農民の家として使われそうな（というか本当にそこに人が住んでいたらちよつと文明のレベルを疑いかねないような）木造の小屋がぽつん、ぽつん……とそれはもうイナガワのようなリズムで配置され、ゆえに人気ひとけもない。一はゴルフ場にすればいいものを……とは思うのだがどうもこの地域にはそういった開発・金儲けの匂いすら漂わないらしい。

本当にここは日本かと疑いたくなる光景だった。

吹き溜まりではなく、吹き曝さらしのような場所だった。

人口密度上位ランカー国・日本にまだこんなところがあったのか。

「やっほーッ！」ほーッ！」ほーッ！」ほーッ！」ほーッ！」ほーッ！」

いきなり後ろから、まるで漫画の吹き出しに押されるような感覚を覚えながら一は前のめりにバランスを崩しかけた。

つんのめった姿勢から持ち直し、後ろを振り返る。

「自分で山彦^{やまびこ}を作るな！　つか、びっくりした……！」

「いやー山といたらやっほーでしょ」

「その愚考が雪山でも通用すればいいな」

雪崩とかに吞まれないかと本気で心配に……いや、不安になる。絶対に巻き込まれる気がする。それも十中八九ぐらいの確率で。しかもどこかでそれ関連の法則が確立しているのではとあらぬ推測にまで及んでしまうというこの嫌な思考パターン。

（不幸体質っていう言葉では片付けたくないけどなあ……。単に不安しいってことでいいか）

そしてビックバン級のセルフエコーを決めてくれたのは、やっぱり柳瀬瀬奈だった。そしてこの希薄な人口密度という空間を『どこかー！ーん！』とでも効果音がつきそうな大声を出すことで楽しんでいた。

多分さっき降りたバスの運転手にも聞こえている。ごめんなさい。

「人よりむしろお化けが住んでいそうなプレイス……私は今、萌えるのさ」

「一体どこにそんな要素があった!?!」

その後ろ、斉藤風璃は斉藤風璃で意味が分からなかった。……何故わざわざそこで燃えない。天邪鬼あまのじやくかよ。

ゴーストタウン萌え……まず冗談でもない限りあり得ない精神だった。ゴーストバスターか。

それら1年を遠巻きに見ていた3人の内、1人が近づいてきた。

「遠足気分もまあ悪くはないし、俺も悪いとは言わないがな……油断するなよ、お前等」

「先輩、この間から不吉ですよ……言い方からしてここに來た事があるみたいですけど、何があったんですか」

「……喋るとどうなるかだけ教えておこうか」

つまり、話の核を外された。

本当、嫌な予感しかない。

「喋った者は舌を抜かれ眼球は干涸ひからび、鼓膜は……いや耳小骨が碎かれ鼻の穴が1つになり、最後に皮膚をピーラーで剥かれる」

「……五感すべてにダメージ!？」

それでも殺されない辺りが怖い。

残酷すぎることをつらつらと述べたのは伊藤長舟。

何というか、得体の知れない自然体とでも言えればいいのか、何か一般人とは一線を画し、超然としている。

「さあ こっ から あ 10 っ分」

「真ん中の『あ』は何ですか!？ 単数形ですか!？」

「あ、そうぎ」

「10の56乗!？」

亀の歩みでも日本列島を余裕で横断できる規模だった（1億を7回かけるぐらい）。

さらに言えば輪廻転生ですら収まりそうにない時間（100兆を4回かけるぐらい）。

「嘘」

「なんだ、嘘だったのか……」

“ 正確には1時間30分 ”

「妙にリアルで嫌な数字が出てきた……」

水面鞆連。みなも ぼかる 日本語が不得手で英語に堪能な、生粋の日本人。
本当は帰国子女なんじゃないかとも思うのだが、違うらしい。

「はいはい整列ー。前へ倣え」

「たった5人ですか……？」

「そうです、5人でやってみましょう」

最後にバスから降りてきたのは担任・敷石恭子。

忘れかけるのだが、何を隠そう暗密部の顧問。率直に言って引率。生徒だけで部活動は成り立たないのだ。

その顧問の整列で前から順に、瀬奈、風璃、一、鞆連、長舟と並び、道路沿いに目的地に向かって行進を始めた。

順番は言わずもがなと言うか、言わぬが花と言うか……。

「で、どこに向かうんですか」

「結局交通費とお泊まりセットの用意ー、ぐらいしかしてないんですけど」

もちろん合宿のしおりなんて物もない。そして現在の服装は統一性を持たせるためか、全員学校指定のジャージ姿である。

駅前で少人数のジャージがどれだけ恥ずかしいか、思い出しただけで……特に何もなかった。

「これから分かりますから、大丈夫ですよ」

一、瀬奈、風璃の1年は、今回のイベントについて詳しいことを聞かされていない。というか語らないので知る由がなかった。

かといって3年に訊こうとすれば、靱連は教えないの一点張り、長舟は何か良くないことを匂わせるだけである。こちらとしてはどんなものが待ち受けているのか分からず、対処のしようがないのだ。いや、対処という単語を使うぐらいには推測をつけることができるが、具体的な方法となると、何もない。

「あー、何もないってのはむしろこの風景だよな……」

人のいない度井仲県みたいだ……などと思いを馳せていると、

「……トリアル」

「？」

肩に感触があって振り返って誰だろうと見ようとするが――順当に考えれば真後ろに並んでいた靱連なのだろうが――一がそれを確認することはついぞ出来なかった。

「――あでっ」

次の瞬間、頭を地面にぶつけた。

最初、何が起きたか分からなかった。肩を掴まれたからといって他の部位に触られたわけでもないの、まさか柔道とか合気道でもないだろう。むしろ掴まれた以外には特に感覚としては感じなかった。

た。

と言うわけでこれはおよそ一番有り得る可能性として挙げられるのは――

「何故にふわっとしてびゅんっと飛んでくるっと回ってどさっとなつてぽつんとされたんでしょうか!？」

ことごとく即席で擬音を連ねた一だったが誰も誉めることはなかった。

一緒に落ちたバッグを置き去りに立ち上がり、『対岸』にいる鞆連に向かって叫ぶ。

というのも鞆連は『ダブルベクトル双次元』という、物体を『空間的な道を通らせずに移動させる』……まあよくありそうなテレポートのスキルを持っているのだ。

己の体感した独特の浮遊感はそれによるものであると、一は経験で分かった。

そして一が叫んだ直後、

「――きゃ!」「――うえい!」

瀬奈が一の背後から膝を折り畳んだ姿勢で強襲。そのさらに後ろから風璃も同じく勢いを持って突然現れたが、こちらは空中で制動をかけて上手く地面に着地。

便利だよなあ……と、そんなことを思ってる一（瀬奈に蹴り飛ばされて川に水没済み）が向こう岸に目を向けると、鞆連がクロッキ―帳をどこからか持ち出し（当然持ってきたリュックの中にあつたのだろうか）黒ペンでADよろしくカンペを作成していた。

そこにはこう書いてあった――さあ目的地まで競争だ♪――……まず、土地勘と経験値から勝ち目がない。

「びゅう、っと」

「東日本の旅行センター!？」

2つの意味で上から数えて3人組は疾風もびっくりのスピードでおそらく目的地の方向に走り去っていった。

「……行っちゃった」

「ていうか何で蹴った。瀬奈」

「いやさー困ったーよ」

そもそも向こうに地力が有り過ぎる。

というかそれ以前に、

「……道、分かるか？」

「ハジメちゃんが分からないものを私が分かるはずないよ、とのお達しです」

「ふーりんのその語尾がむしろ分からないよ」

かろうじて方向と大雑把な道筋だけは分からなくもないが、さらに悪いことに、

「……山入ってったぞあの3人」

よりによって素人には危険なゾーン。

「だからどうしたの？」

「……いや、いい」

「わーいピクニック開始ー……んん？ オリエンテーションか？
まあいいかー♪」

「どっちでも良くねえ……」

どう考えてもこの面子って俺が引率するパターンだよな、つか森林の中って視界不良だし夜になると本格的にヤバいことになるんじゃない？ と最悪の展開しか予想できない一だった。

———
といった置き去りから3時間。

木、林、森、山間。かろうじて樹海ではない。そんな雰囲気の場合。

「やっと、着いたあ……」

「誰かが道を間違えなかったらここまで時間を食うこともなかったけどな」

「うるさいなあ」

「お二人さん……元氣すぎるじえい」

「お前ははしやぎすぎただけだろ」

「罰ゲームとかあったらやだなー……」

どうやらそれらしき建物に辿り着くことには成功したようだ。

木、林、森、山間、の中。

すっかり傾いた日もほとんど入らない、物陰に何があるのか見えないような暗さ。その中に木造2階建ての藁葺わらぶきが見えた。もし昼間なら年月によって黒ずんだ木の色を窺うことができただろうが、それすら今はわからない。

そして、ある意味不自然に建物の周りに広がったスペース——それこそ、人と人が戦っても問題がないほどの広さ——に違和感を覚えることも出来ただろうが、視界不良の一にはそこまでの気配りをしろというのは少し酷だった。

さらに言えば、一行はすでに危機を1回乗り切った後である。

途中で3人そろって死んだフリをするような、とても精神衛生を汚すこと極まりない事件があったのだが、これは割愛。

そう、大方の予想通りの出来事だ。英語風に言えば、ベアーメナスといったところだ。ちなみにメナスはファントム・メナスのメナス。

「まさかスキルが効かないとはねー。びっくらこいたね」

「いや、そういう知識はあっただろ」

「そうだけどY Oー、実際に見るのとH Aー、違うじゃんK Aー」
「よくある語尾だがその発音は聞いたことねえ」

ちなみに『そうだけどワイオー、じっさいにみるとエイチエー、ちがうじゃんケイエー』と発音していた。

どれだけ異文化に適応できていないんだ。

「もう、限界S A」

今度はサービスエリアと言いながら、風璃はへばった。

ちようにど相対する形で一の方に倒れ込んできたため、抱き留めることで支えた。

また何かネタでも仕込んでんのかと、うがった考えで様子をうかがうが、直接触れた感触で本気でぐったりしていることがわかる。

「……体力無いのな」

もしかしたら、中学の時より落ちているかもしれない。

「見て呉^くれは女子高生、頭脳は子供、体力はインドアもびっくり、その名はハジメちゃん」

「俺になすりつけんな!」

とんでもない飛び火だった。

いやまあ、要するに、思うように体がついてこないと言いたいのだろう。きつと。

とうか『見た目女子高生で（脳年齢）Ⅱ（実年齢）—10歳でさらにタウリン1000ミリグラム依存症』って俺はどんだけ今までのイメージ覆してるんだと一は思わなくもなかった。

とはいえ、琉二のように引きずる訳にもいかないので（ちなみに引きずる引きずられるの立場が逆転することも有り得るので、これに関して一だけが鬼畜呼ばわりされる筋合いはない）一がこれをどうしたものか、と悩んでいると、

「さあハジメちゃん、私を捨てて行け！」

「意外と元気だな」

しかも殿^{しんがり}フラグが発生していた。

「口は疲れとは別口なんだよハジメちゃん」

「甘いものは別腹みたいに言うな」

まるで手八丁口八百丁だ。

手一丁ではないところがミソ。

「ちなみに私はブラックコーヒー派」

「誰も聞いてねえ！」

「ハジメちゃんは甘党なんだよ」

「誰に言ってる！ ていうか嘔吐^{おうと}くな！」

かといって辛党^{しんおと}だと言うつもりは全くない。ましてや塩党^{しおと}でもない。

真面一は健全。アルコールは神経の敵。

それはさておき、一には食べ物の好き嫌いが無いので、甘党というのはとりあえず嘘である。

風璃は未だ一の肩で支えられたまま、顔を上げた。

「ちいっ……もう何もオレの目には見えないぜ……ネロ」

「パトラッシュそんな男前だったのか!？」

ここでふと、パトラッシュがオスカメスカふと疑問に思った一だったが、止めた。頭の中に判断材料が無かった。

「いや、冗談じゃなくレッドはめのまえがまっくらになった」

「手持ちがいなくなったのか――」

と、ここでようやく一も気付いた。

視界が、ゼロになっていた。

単純な光の少なさ、では無かった。さっきまでうつすらとではあるが、足下や道、大まかな建物の輪郭ぐらいはわかっていたのだ。それがいつの間にか真っ暗、手元すら見えなくなっていた。

目をつむっているのではないかという錯覚すら起こしそうであるが、決してそんなことはない。

そんなことがあっても、一自身は錯覚しない。

……というか、レッドとか入れるなよ、風璃。所持金取られたみたいだ。

「……どういうことだ?」

「さあ? 会話の内に夜になったんじゃないのかいな――とボケるわけにもいかねーよこれどーすんのねーえ?」

「いや、それより……瀬奈、どこ行ったー？」

呼びかけてしばらく待ったが、返事は来なかった。
これは……そういうパターンか？

「……およ、キジも鳴かずば打たれまいのセナちゃんが返事をしないなんて」

「意味ねえ称号つけるなよ」

というより意味わかんなかった。

さて、と雰囲気を一変させる2人。

風璃は周りに気を配り、一に耳打ちをした。

——何かじゃなくて、誰かが潜んでるよ。

それを聞いた一は警戒から荷物を雑に地面に落とし、風璃を抱き寄せた。

（うお、ハジメちゃん……）

（しっ……）

一の緊張感が伝わったのか、風璃はひそひそ声で話を続けた。

（しかしこれは照れるぜ）

（何が！？ いやちよつと待てこれはそういう意味じゃない！）

潜まった会話。

（いや違ったかな……取れるぜ）

（それこそ何がだ！？ パーツか！？）

こっそりした会話。

（ああ、見蕩れるの蕩れるの方で）

（そっちに持っていきたかっただけか!？）

隠れた会話。

（いやゴメン。マジメな話、どうせならアレで）

（あれって……これか？）

体勢を少し変える。

（そう。キマってるねー）

（あー、何というか……俺だとしようもなく絵にならねえな）

いわゆる、お姫様抱っこだった。

無論風璃を連れて建物に入る為、ではない。

（ふっはっはーお姫様抱っこで戦うスタイルが主流の主人公なんて
そうそういないないBar）

（俺が主人公って相当詰まらないんだろうな、その物語。それとい
ないないBarって……）

お姫様抱っことはいえ、これを男子にまでやったりしたことがあ
るから、我ながら気持ち悪い。

（……そんじゃ、手、借りるぞ）

（むしろ駆ってると思うんだけどなー）

そして、一は跳び、飛んだ。足下に空気の渦を展開させて。
突風……というには静かすぎる風に乗り一は『敵』へとまっすぐ
に向かった。

その風の操作は、普段の彼女よりもさらに丁寧緻密で、更なるし
なやかさ、したたかさを否応無く本人に感じさせる程に高度であっ
た。

演算の規模が、違う。

（しかし久しぶりだな……『無形形無』フルーエントは）
（いつでも使っているのに―）

ものが見えない状況、誰だかわからない相手に狙われながら、そ
んな軽口が叩ける程度には余裕な2人であった。

が、

空中を滑るように飛ぶ一の前で――確認できていた居場所よりも
さらに近い――気配が膨れ上がり、そのまま貫く勢いで一に迫った。

「!？」

軌道修正は、行われなかった。

第56話 昔をなつかしんで（後書き）

バトルパート、久しぶり。

第57話 まともなのにまともなしょうぶにならない（前書き）

ギリギリ、土曜日に投稿……。

うん、このパターンがおそらく2月の最頻値になると思います。すいません。

第57話 まともなのにまともなしょうぶにならない

目標とは別に、さらに近くにいた伏兵に驚くのを自身の思考速度が上回った。

「向かい風ゴー！」

そんな風璃の言葉と共に、迫る敵（？）を単なる空気圧で吹っ飛ばす。

『感覚』でそれを確認し、捕捉していたもう一人のいるところへ横抱きの体勢のまままで飛ぶ。

「追い風カモン！」

さっきと同じように自分への追い風ではない。

茂みの中から――茂みごと、塊が飛ばされて来る。

『ふん、甘い！』

目前で声がしたかと思うと、軽い破裂音がして、目を刺すような光が2人を襲った。

暗く、視界に頼れない状況から一瞬だけ昼間すら超える光量に目が眩み、今度は判断が遅れた。

同じ声が上から淡々と告げる。

『墜^つ墮^{いだ}』

「ぐうつ！」

がちん、とわずかに開いていた一の顎が閉じられ、その隙間から、

絞り出すようなうめきが漏れる。

それは一の頭上で垂直に繰り出された、突き刺さるような蹴りによるものだったが、一は視界を封じられていたので気づけなかった。重いも軽いもわからない。ただ、舌を出していたら危うく噛んでいたぐらいの勢いは感じられた。

そしてその勢いに押されて叩き落とされ――ない。

接地面ギリギリで浮かびながら、落下の速度を徐々に水平に流し、利用して距離を取っていた。

「痛って……サンキュ、風璃」

「いやー油断したねーさあ切り換えてこー」

風璃のスキル『無^{フルーメント}形無』は、厳密には風や水を操るのではなく、

『流体を押し留める力』である。

それにより地面との間に『圧縮した空気のカッション』を発生させ、使うことで落下の勢いを逸らしたのだ。

実際に目に見える軌道はカーブを描いており、落下からの追撃を避けるという判断からだった。

開けた場所から木々の中へと避難する。

「さっきとは逆の構図だな……」

気づけば、また視界は真っ暗に戻っていた。一は相手の1人は光の系統のスキルだろうと当りをつける。もう1人はまだ復帰した様子がないので、今は放って置いても――

「うえ

何を言おうとしたのか、風璃の声が途切れた。
今まで腕に抱えていた感触が、消え失せた。

ぽっかりと。

「風璃!？」

暗がりですりになった動揺も多少あって、驚き風璃を呼ぶ一だが、返事はなかった。

空気の支えを失い、地に足をつける一。

こうなると、動きづらいという点で林に突っ込んだのは失策の色が濃い。それに風璃のこの消え方……と、それらの思考を、1ミリでまとめる一。

(いや待て、この突発的な消え方は何度も経験しているだろ)

思い出したのは空間転移、テレポートという単語。

それで切り離されたと考えれば、消えたという現象は不自然ではない。問題はどこに連れ去られたか――

『地執』
ちしき

「!？」

今度は信じられないところから声がした。

声の源は土の中、だった。

……まさか地球が喋るとかCMみたいなことは無いだろう。『分別? それ以前にゴミなんか塵1つ出すんじゃねーよクソ人間むしろお前等が塵になれ。今から噴火しまくって二酸化炭素増やしまくってやろうか。自浄してやっぞオラ』とか言うのならば、信じていたかもしれないのだが、今はどうでもいい。

なんて事を考えている内に、

「やられた……くそ！」

あつと言う間に足下がゆがみ、ずぼっ、とそのまま空箱を思いっ切り突き破ったような感覚と共に膝まで沈んだ。

足の踏ん張りが利かず、持ち上がらない。

不味い状況だった。相手と近接した状況で戦うのが全ての一にあって機動力を奪われることは攻め手を失うことと同義である。

そして辺りを黒の帳とばりと静寂が包む。

害意を持った気配は、未だしっかりとある。

「……狙うしかない、か」

といっても全然確実ではない。ただのカウンター狙いだ。

一が沈んでから、既に分単位的时间が経過していた。

「……………」

待つ。

……………。

120の沈黙に耐え、ついに、

「——ッ！」

感じた方向に腕を差し向ける。一自身のスキルによる、生き物なら触れただけで失神させる、スタンガン要らずの攻撃。

その向きは左——斜め後ろ——のさらに下——下！？

丁度一の腰辺りまでの高さに、気配の中心があった。まさか這って進んでいる速さではない。そんな悪魔祓いや漂流教室でしか聞いたことがない。それよりむしろ考えられる可能性は——！

ただ声を当てられただけで、生まれて初めて死にそんな思い——
いや、精神が死んだ、と感じながら一は、意識を落とした。

『……………』

夢を見た。キラーン。

って何を地の文やってんだ。

だって出番ねーんだもんよー。

あと数回って宣言したんだからあんま出ない方がいいんじゃないのか？

あー、あれ適当に言った。

そうか……って何でだよ！

名残惜しんでくれるかなー、と。つい。

確かに惜しんだぞその場で！ いつもより長めの沈黙で！

いやーおれ涙ちよちよぎれたね。

この空間で涙とかわかるか！

だって嘘だもん。

っ……てめえ……。

素ってコワイねー、さっきの反動？ ま、本当にあと数回で発掘

作業の方は細かな修正を除いて完了、って感じだけど。

で、今日の用件は？

それなんだけどねー、おれもスキル持ってたんだよ。引っ越してから気付いた。

……それが今のとどう関係するんだ？

ところでさ、イチは『3点リーダー×2』を使いすぎだよ。

関係ねえ話だな！

つまり、動物と会話できるのはおれのスキル。

成程。お前は話が前後するんだな。

ちなみに名前は『不デッドノア不死ライザ』

無駄に不吉だな。あいつには及ばないけど。

イチ、無理に沈黙という名の3点リーダーを控えなくてもいいよ？

無理してねえ！

ま、格好付けだけだね。さてと、ここは慣習に倣もくしきって目式と名付けよう。

全然目と関係ないな。

格好良ければ全て良し！

だったらお前一人でヘキサゴンかホストに行ってる！

最終目標はペンタゴン。

段違いにハードル上がったな！

つか気付いた？ あいつ、動物だったよ。

また無理矢理戻したな。で、動物、か……。

気付かなかった？ 「」が『』になってたのには。

俺がそこに気付いたら破綻するぞ！？

読者は気付くよ？

ここに来てメタストーリーな発言だな！ ドクシャって何語か知

らないけどな！

大丈夫。おれのスタンスはあやふやだから。

……それ大丈夫って言うのか？

じゃあ小しょうじょうぶ丈夫で。

駄目だな！

なら大だいぜいじゃく脆弱で。

なお悪い！

しかし真面目にやるっていうのもそれはそれで大変だね。

勝手に『まともめ』とか読み上げるな。

失敬、というか虚敬きょけいだったね。

……字の意味を考えて言ってるのか？

親しき仲に礼儀はあっても敬意はいらないよね、っていう話。何なんだよ。ってか話を微妙に変えるな。すり替えるな。

あー、あとね。

何だ？

イチが意識落とした時、っていうか今ね、おれ表に表れてんだけど大丈夫？

大脆弱だああああああアッ！

(……嘘だけど)

――
「俺の経歴に精神病の文字は入れさせねええええ……え？」

目が覚めると、というかショックで飛び跳ねる一。

と、見慣れぬ風景が目に入った（叫んだ自分が客観的に見て1番見慣れないことは置いといて）。

まず自分の寝ていた場所は連結された座布団の上で、さらに足下には新聞紙が間に入れられており、ジャージの土気が座布団に付くのを防いでいた。

前方には障子があり、縁側と真っ暗な外が少し覗いていた。その他三方は襖ふすまで、床は畳。どうやら日本家屋らしいということは推測がついた。

それで、最後に、

「何でそんなに後退あとずさりってんだ？」

「びつつつくり、したあ……」

瀬奈が部屋の隅にさっと（さっと、という表現かどうかは気付く前なのでわからなかったが）逃げ込んでいた。

一の声掛けを合図にしたかのように呼吸を再開して落ち着きを取り戻したのか、瀬奈はゆっくりと座り直した。

「で、ここは……あの家の中でいいのか？」
「うん。なんか鞞連部長ほかるの実家みたい」

まさか瀬奈の実家とか的外れなことは思っ
てはいなかったけど、
ちよつとした驚きだ。

「実家って……こんな閑古鳥が鳴く所にか？」

「日本最後の秘境、って言ってたよ」

「秘境にバスは通ってないだろ、普通」

「そう？」

「そうだよ」

その内、こいつの口から『南極って飛行機で行けると
思ってた』とか飛び出してきそうだな、と考える一。

「そういう瀬奈はどうしたんだ？ あの後」

「あの後？」

「ほら、この家の前で分断されただろ？」

「ああ。なんかよくわかんない所に飛ばされて、誰か来たけどぶっ飛ばした」

「……マジかよ」

自分はあれだけ大仰にやられたのにこっちはそんな描写だけで済むとか、どんな格差だ。

相手は何もしなかったのかできなかったのか、それとも瀬奈が強すぎたのか、判断の分かれるところではあるが。

「で、風璃は？」

「鞞連部長とやりあって、引き分けたらしいよ」

引き分け。

双次元VS無形形無。

……言葉もない。どうしようもない。センスの欠片もない。

「この場合、どっちが凄いんだ……？」

下級生が引き分けたのが凄いのか、それとも一が知る中で最強ク
ラスのスキルにレポートで太刀打ちしたのが凄いのか。

……俺にはわからねえ。

「どっちもでいいじゃん。それより、玄関の前でぶっ倒れてたけど、
イチはまさか……」

「してやられた、ってとこだな」

しかも相手が人間じゃないし。

段々と顔向けできなくなる。というか情けない気持ちになる。

「相手って、消去法でちょーしゅー先輩？」

何だかチャーシューみたいな発音だった。

ちなみにちょーしゅーと言っているのは副部長の伊東長舟のこと
である。

例によって瀬奈が会う人会う人に付けている。

また、部長のあだ名については、なかなかしっくりくるのが見つ
からないらしく、今は部長で通している。

「いや、それは無いだろ」

高さがメートル未満の存在という条件がすでに幼児以外のほとん
どの人間の可能性を排除している。

「じゃあ、誰？」

「誰って言うか……動物だったか？ 4足歩行の」

「へえ……」

興味深そうに瀬奈が続きを促すので一はあったことを盛大に漏らしながら話した。細大漏らさずに話すこともできるのだが、あまり必要を感じなかったので止めておいた。

『その動物』が喋ったといったことを喋ると無駄に信用を失いかねないのも理由の1つだ（瀬奈は一が動物と喋れたりするのを知らない、というか一が話す気になれない）。

「待てよ……部長が風璃と戦った？」

そもそもいきなりの戦いだったが、思えばどんな理由でそうなったのかはわからず仕舞いだったのだ。

まあ、穏やかならざる理由できたのだとは思えてしまうのだが……。

「うん。2人とも今はどっか行ってる」

「いやそうじゃなくて……何だ？ 今回の予定の内、ってことか？」

暗密部の、合宿の予定。

こうやって戦わせるのが予定だったのだろうか。

そうなる、その目的は何だ？ 何を要求している？ と疑問が渦巻く一に、

「まー、どうでもいいんじゃない？ 無事なんだし」

と、瀬奈は樂觀的な一言を放った。

「……どうでもいいんじゃないくて、どうしようもないんだけどな」

それから何の進展もない雑談を続けて20分ほど経っただろうか、そのぐらいのタイミングで障子の向こうに電気が付き、影が映り、それが真ん中で止まり、開いた。

『お、起きてるな。2人共、晩飯の時間だ。……おい、何をポカンとしている。俺とはさつき会っただろう。おっと自己紹介がまだだったな。俺はコタロウと呼ばれている。不肖ながらここで世話になっている身だ。短い間だが、よろしく頼む』

そこにいたのは、白と灰色の毛並みの狼——もしくはは一を打ち負かした存在——だった。

第58話 犬でないとも言いきれない

狼。

食肉目イヌ科。

体毛は灰色気味の茶色から、ほぼ白色というものでいる。

肉食故にシカなど他の動物、または家畜を襲う。

群れ・集団、もしくは家族で生活し、季節によりその規模は異なる。

しかし童謡や物語で描かれる『オオカミ』は集団性の影を潜め一転、孤高の狩人、一匹狼として描かれることがしばしばある。

『おい、早くしろ。むしろ速くしろ。とにかく疾くしろ。そんなことより速くしろ。飯が冷めるぞ』

しかしこのコタロウと名乗った生き物は果たして日本原産のニホンオオカミなのかと聞かれると、限りなく怪しい。

絶滅したという説もその根拠に入るのだが、見た目も一般に聞く狼とは違っていた。

毛並みは白と灰で、特に背面は色が濃い。これは普通。

顔全体は人懐っこさを一切無くしたように鋭く、もし人に生まれていたら、格好良い、もしくは恐いという意見で真っ二つに割れそうで、スパツといいそうな切れ味を持った感じ。

特に目つきは言わずもがな。さらにぴんと立った耳ですら何か切れそうである。鼻先だけが唯一、柔らかさそうと言える部位だった。そしてここが一番変なのだが、尻尾。

自分の鼻先に届くのではというほどに長く、鞭のようにしなやか、先端に近づくほど、鋭い。

それが2本。

枝分かれではなく、きっちり2つ。襖を開けたのも、この尻尾の

ようだ。尻尾が2つというところ、むしろ化け猫みたいだが、あまり気にしてもしょうがないのだろう。

とまあこんな風に、普通とは違っていた。

ただ、一は直感で、これがさっきのと同じであると看破した。人では無いというのは正解だった。

「なんか付いてこいって言ってるみたいだけど……」

「いや、まあなんかそんな雰囲気だよな」

やはり、動物言語は瀬奈には通じていないようだった。

『ふん、これだけ呼んで来ないなら俺は知らん』

こちらに尻を向け、尻尾を2本しなせながら歩き去って行く狼こと、コタロウ。

「そういえばそろそろ晩ご飯の時間だね」

聞こえていないので見離されたとも知らず、そんなことを思いだした瀬奈。

「あー、そう言ってたな」

「言ってた？ 誰が？」

「あー、気のせいだった」

失言を適当に取り繕う一。

動物と話せるなどと脈絡の無い荒唐無稽な話（スキルと言えばそれで適当な説明は付くのだろうが）、簡単には言いにくい。

……ドリトル（映画の方）みたいなことになりたくないな……。

「なに、さつき夢でも見てたから？」

「あー、まあそんなとこだ」

瀬奈の解釈を一は適当に肯定しておいた。

「なんだっけ、イチが精神病にされそうになってた……ぷっ」

「おまえにだけは言われたくねえな」

吹き出す瀬奈を白い目で見る一。

会ったばかりの頃のあれはむしろ瀬奈が精神科に受診したことがあっても良さそうなものだ。

生活リズムが一定……というより、固定。

既に原因は排除されているとは言え、それが原因でこうしたことになっているのだから、馬鹿にできない。

……こうして考えると、日足、お前はやっぱりウイルスだな。

「おっと、付いてかねえと」

一は思い出したように身を起こした。

2人は縁側を通り、夕食を食べに行く。

茶の間に着くと、風璃が歓迎してくれた。

「おーめざーめかいハジメちゃーん？」

「お前はいつも元気だな……」

「元気がなければ何もできないのだよ！」

「そいつは良かったな……」

心配するまでもなく風璃は全くの無事だった。
お盆を両手と頭に乘せているところを見る限り、配膳の手伝いを
しているようだ。

「……器用だな」

「このぐらいスキル無しでできるのだよ」

「できねえよ」

普通の人は、であるが。

どこかの国には頭にでかいカゴを載せて歩く女性が見られるところがあると言うが、それでもまさか晩御飯ではあるまい。あとは曲芸士とかサーカスカ。

「ヒドウイねーハジメちゃんちゃん」

「お話の終わりみたいに『ちゃんちゃん』とか言うな。あと話し込んでいてなんだが、早く置いとけ」

「りょうかー……おっと」

「わ!？」

と、風璃がいきなり前かがみによろけた。

一は頭のお盆（ご飯3人前・味噌汁3人前・おかず6人前のオーバーソウル）を人類の域を越えようかという反射神経でキャッチーできた！

ただし、味噌汁は救えなかった……掬えなかった！

「——ういうえをう」

「俺の『わ!？』に繋げてくれてどうも！」

そしてW I W U W E W O W Uと発音した風璃はそのまま両手のお盆をちゃぶ台——と言っても磯野家や星家にあるような、ひっくり

返せそうな丸形ではなく、とても1人では運べそうにない重厚な長方形だが――に置いた。その両方には残りの人数分全てが乗っかっていていた。

……何を大役引き受けてるんだ、風璃。お前がコケるとリーマンショックだったのか（これはさすがにつまらない……）。

「ありやりや……ごめんよハジメちゃんちゃんちゃん」

「なんか増えてるぞ」

「そんなこたあ気にしないのさハジメちゃん×4」

「略すな」

本当に『はじめちゃんかけるよん』とか言ってた。

「ようこそ、超ド級田舎に、去年に引き続いていらっしやいました」

そこに一の見知らぬ女性が、髪を結び、格好は胴着と袴はかまというシンプルな出で立ちで現れた。

おそらく台所のある方からゆったりと入ってきていた。おそらくその方向に台所があるのだろう。

その人は一に軽く会釈をして、述べた。

「あー、え……と、お世話になります？」

ついつい疑問になった一に対し、その女性はにこやかに微笑む。

優しそうな人だな、と一が思ったのも束の間、

「ええ、私は鞆連ぼかるの母で、閑風かんふうと申します……ってこんな堅苦しいのは岩盤ぐらいのもんじゃない！」

はっちゃけた。はっちゃけちゃった。

気がついたときには一は靱連の母親（とは思えない人物）に肩をばんばん叩かれまくっていた。

この人、容姿を除いて靱連との共通点がほとんど見あたらない。

「いやー少年、一少年、唯一の負け組だって？ まあ気にしない気にしない、いいことあるって。弧太狼こたろうが相手じゃ1人では勝てる方がおかしいんだからーあっはっはっはー、あー何か知らないけど傑作だわー、笑える、爆笑」

ひとしきり笑い終えたかと思えば、突然「あ、そうそうちなみにこの和服っぽい服装はかつこよさと機能性と特殊能力を重視しているからあまり防御力は期待できないよ」などと続けて言う様に、一はものを言う気力がこそぎ落とされた。

……このハイテンションはついていけねえ……。

「閑風さん、さっきと違ってていねいなしゃべり方するからびっくりした……」

「やあだなあ瀬奈少女。これは少女に向けたびっくり作戦だったんだから」

「えっ、そうだったんですか？」

「だからもっと驚いてくれないとねえ？」

「わあ、びっくり！」

「いいねえそのわざとらしさ！ 逆に心地いい！」

そのまま、一には理解できない領域で2人は会話を続けた。

それから、靱連、長舟と集まり、揃って夕食ということになった。コタロウはいつの間にかいたのか、座布団の上で丸まり、油断なく

（としか思えない雰囲気で）目をつむっていた。
一は食べ終わってから、質問する。

「で、どうして全員が戦わされる羽目になったんですか」

一が食べるのが遅いので、周りはすでに雑談ばかりだったが、すぐに皆は聞く姿勢になった。

「もちろん、罰ゲームだ」

長舟がそれに淡々と答えた。

「そうっすか……」

「というのは建前だ」

長舟の翻しにがくつ、と1年3人の動きが揃った。
……瀬奈はともかく、風璃、お前は合わせただろ。

「バレた？」

「バレバレだ……じゃあ本音は何なんですか」

「隠すほどのことではない」

「じゃあ教えてくれてもいいじゃないですか」

「……言い方が悪かったな、隠れるほどのことではない。だから教えない」

「……ん？」

推して知るべし、ということだろうか。

「それとっておくが、これから休めるなどと思ってはいないだろうな？」

「と、言うと……」

「実は休めるんだ」

また3人がガクツとなった——のと同時に3人の座っている場所だけ、ガコン、と床が四角の切れ目を作って30センチほど落ちた。

「なあっ!？」

「きゃっ!」

一と瀬奈は、普通に驚き、風璃は、

「釣られて掛かって落とし穴っ!」

などと独自の世界で叫んでいた。

……お前に動揺はないのか？

「ない!」

「言い切ったよコイツ……。ていうかさっきから副部長たち悪いです」

「まあ、休めるがしかし、こういう造りになっているから注意しろ、ということぐらいか」

「先に言って下さい!」

「正直面白かった、ウケた、笑止千万だ」

それにしても表情が淡泊だったのだが、これは果たして笑っているのだろうか？

よく考えたらさっきの閑風の『傑作だわー、笑える、爆笑』に張り合っているような気がする。

「ふぁっふぁっふぁー、ここは忍者屋敷になっているから気をつけて礼するんだぞー？」

「れ、礼？」

神社か何かなのだろうか。

「直れと着席も忘れずになー？」

「……………」

閑風はご機嫌にそんな事を言った。

起立、ないんだな……と思った一だが、ここで突っ込んだらいけない気がした。このままではこの人のペースに巻き込まれる。

『……甘い』

「ん？」

慣れない声に一はよく考えずに聞き返していた。

「おーおー弧太狼がもの言いたそうにしてるなー」

そこに都合良く、最も一緒に生活していそうな閑風が気づいた。

「何か知らないけど彼はこっちの意図がわかるらしくてねー、最初
は苦労したけど、今では愛する家族の一員って感じだ！」

『よく言う……』

言葉少なに、コタロウは閑風を睨んでまた、一に視線を戻す。

『もう我慢ならん……お前を鍛える』

「え？」

周りから見れば、ただ一を見てコタロウが身を起こしたただけなのだが、コタロウは一に通じているのがわかっていていいのかいなのか、続ける。

『徹底的に比率を最適にして熱し打ち付けて叩き延ばし研ぎ澄まし繰り返し、輝くまで、鍛える。それには時間が足りない』

やはり周りにはウウウウ……と唸っているようにしか聞こえないのだが、一は狼からそんな言葉が漏れることに驚きを隠せないと同時に、また襲われそうであるという恐怖感が蘇っていた。

「ちょっと……待っ」

『待った無しだ!』

「わわわわわっ!」

グワアウツ! とコタロウは捕食者そのものの勢いで一に飛び掛かる。

びっくりする周囲を後目しりめに一は部屋から逃げ出し、廊下に出て、間取りもわからないまま走っていった。

取り残された集団の中で、瀬奈が意外そうに呟いた。

「……イチがこわがってる?」

「あれが上位の存在、というやつだな」

長舟が含んだように言った。

瀬奈には一があのコタロウとかいう狼に負けている、ということ以上の意味を捉えることは、できなかった。

「上位……?」

「長舟少年言うことが違うねー。さっすが去年唯一の達成者」

閑風がはやすが、長舟は複雑な表情を見せた。

「……他がやる気なかっただけで、俺が凄いわけじゃない」

「いやいやいや、こんな前時代的な場所で今時の若者が乗り切っただけでも凄い凄いよ」

「まあ、俺のことはどうでもいいんだ……今はあいつの番だ。というかそもそも何でいきなりここに連れてきたんだ……部長さんよ」
“つい、イラッとムシヤクシャして”

ここでは喋らなければ気配の片鱗すらつかめない存在感を持つ鞆連がそんなことを言った。

……俺と似ているだけに、いやに気を配るな、あいつには……。

長舟は先輩としての面倒見の良さを自覚しながら、鞆連を軽くなじる。

「そんなんで振り回される1年が可哀想だとは……、思っていないからこんなことになってんのか」

“一応、そろそろ後進を育てないと、ということは前々から考えてはいたんだけど”

「その1号が真面、か……1人に対して随分大がかりだなあ?」

“あまりにも弧太狼とマッチしていたから、この期間を逃す手は無い、と”

「マッチ、ねえ。そうじゃないな……」

“?”

意味ありげに長舟がそんな相槌を打ったが、鞆連にはその意図は

伝わらなかった。

そして誰にも伝えるつもりもない、伝わらないように独り言を漏らす。

「あいつは、ワイルドカードだよ、俺と同じ」

「これっ、って、食われる、の間違いじゃないのか!？」

靴下で走っているの、油断するたびに足が滑る。

手が床に着く回数が曲がる回数の2〜3倍になる程に必死に逃げる一だが、乱暴に追いまくるコタロウとの距離はどんどん詰まる。

振り返って、後ろを見るたびに威圧が膨れ上がっていくような錯覚すら覚える。

鍛えるって何だ？ 追いかけてこで体力つけるのがこいつのトレ

ーニングなのか？ そんな疑問が浮かぶ、前に、

……恐れ！

ひとえに、それだけで逃げていた。一種の生存本能かもしれない。そんなものを感じさせるほどに、あの時の恐怖は意外と一の奥深くに入り込んでいた。ついさっきまでその恐怖を何も忘れていたぐらいに。条件反射のカテゴリだ、と一は思った。

およそ生物の領域とは思えなかった。何かを踏み越えているのは間違いない。

具体的に何をどうしたわけでもないのに、たった一回で刻み込んだ。

一体これの正体は何なんだ？

そんな風に一が己の恐怖を分析していると、後ろから声が掛かった。

『外に出ろ！　そこを左に行って突き当たりを右に行けばあとはそれとなく玄関だとわかる……と言っても無駄だろうな——』

「玄関に出ればいいんですねわかりました！」

やけくそ気味にそう叫んだ途端、

ぴたり、と。

迫り追いかけてくる気配が止んだ。

振り返ってみれば、やはり止まっている。

『——む？　わかるのか？』

心なしか、陰も少し取れたようだった。これならまだ落ち着いて話ができそうだったが、しかし一は息が切れているので、会話どころではない。

「はあ、はあ……」

『成程……ならば話は早い』

端から見れば、家の中で猫又擬きの狼が牙を剥き出しにして、無味乾燥な面をした人間を食らおうとしているようにも見える壮絶な画だったが、当事者は至って真剣である。

『迅速に表に出ろ。お前の弱さは我慢ならない』

「はあ……というか、鍛えるって、どういう」

『ふん、あいつもそんな程度にやる気がなかったな。全く人間ってのはどいつもこいつもよくわからんな』

一が迅速に表に出ると（玄関には一の履いてきた靴があった。誰の仕業だ？）、コタロウは言った。

『さて、順当にサバイバルするぞ』

何が順当なのか、さっぱりわからなかった。

第58話 犬でないと言い切れない（後書き）

別にバトル主体に流れるわけではありませんよ？

第59話 こういゝのを山簞りと言うのか(前書き)

後書きでお知らせします。

第59話　こういうのを山簞りと言うのか

現在、コタロウの進むがままに山道……というより獣道を歩いて
いた。

「サバイバルって……何するんだ？」という一の疑問にに対して、
コタロウはこう言った。

『なに、大したことはない。この中で他人の力を借りずに生きれば
いい。サバイバルは人を一番強くするからな』

「この中って、具体的にはどの領域なんだ？」

『おいおい、俺はお前の師匠をやろうという存在だぞ。もう少し言
葉遣いはどうにかして欲しいもんだな』

普通は狼さんにやあ遣う言葉も通じないものじゃあねえのかい、
という一の心中は伝わらなかった。

『とはいえ俺と話せる存在というのがそもそも希少だからな。言葉
遣いは、まあいいだろう。いちいちくちくと俺の堪忍袋を刺激す
るという点に目をつむればな』

『暗に気にしますよアピール』を堂々としていた。

……まあ、以後気をつけよう。

『さて、領域の話だったな……真実を言えば、具体的には決めてい
ない』

「決めていないって……」

『ここはいわゆる陸の無人島みたいなものだからな。そこまで考え
る必要もないだろう』

「ああ……なるほど」

適当にぶらついている限り、人里にぶつかる事もないのだろう。
……人里という言い方ができるこの場所もどうかと思ったけど。

『それに、お前の行動で何か支障が出るようならば俺が口出ししてやるからその辺は心配するな』

既にこんな状況になっている時点で、一は心配することを諦めているのだが、それは別。

『さて、問いだ。夕食後のこの時間、お前は何をすべきか？』

「寝床を今からでも確保すること……とか？」

『ふん、自信ないんだな』

と、明らかに一にもわかるぐらい、鼻で笑われた。

「最近の若者は自信のさじ加減ができていないんだよ」

『都会のことは知らん』

「で、答えは？」

『不正解だ』

きっぱりと言われた。

理由を尋ねると、

『お前、睡眠は必要ないだろう？ 食事も熱源という意味の炭水化物に限って言えば半永久的に取る意味がない。野菜のビタミンぐらいは必要かもしれないが、まあそれも普通よりは回数が必要としないだろう。とにかく、お前にはその辺の「生きる」は、あまりに生物から離れていると言っているだろう』

なんかいきなり言われた。

一には何の準備もできていなかった。

「えっと、ちょっと待てよ……」

『ああ、待ってやる。これはお前の時間だからな』

一は頭に片手を当て、もう片手でコタロウに制止の合図をかけていた。これで帽子ハットがあれば、某ダンサーっぽく見えないこともない。

「俺のこと……知ってるのか？」

『知ってるとは、どういう意味で言っている？』

「前から知っていたのか、それとも一回見ただけで看破したか」

『成程……確かに頭の回転も速いな。あいつほど食えない存在ではないが、こいつもかなり食えない存在だな』

逆質問されたり、飛躍したりと、なんだか噛み合わない会話だった。

一の方が諦め、コタロウに合わせるのが先だった。

「あいつって……？」

『あの家でお前の近くに男が1人いただろう。あれは俺の元弟子だ』

「男って……副部長？」

『副部長は知らんが、伊東と名乗っている奴だ』

「……………」

『あいつが対人最強だとするなら、お前は対物最強だな』

「対物最強って……」

『勘違いするなよ。これからなるんだからな』

一が何事かを思う前に、先回りして答えられた。

……アンチマテリアル対物最強ぐらいしか思い浮かばなかった。

『精神的な方の強さは、お前の場合はどう、伸び代というやつがほとんど無い。それに引き替えまだ全然伸びていないものが、』

「対物……、物理的作用……か？」

物を燃やしたり、凍らせたり、電気を使ったり、物を浮かせたり飛ばしたり。

現象の、世界。

『そうだ。本来ならば全く芽生えすらなかったそれを引きだしているものが何かは知らんが……目的はそこだ』

「目的はわかったんだけど……それが何でサバイバルに繋がるんだ？」

『それはだな……おっと来たぞ』

首を傾げた一の耳に、ガサゴソつという茂みの音が入り込んだ。

『おい、コタロウ！ 今日こそは勝負だ！』

『俺をあの目玉の某の^{なにがし}様と呼ぶのは……やっぱりノイか。悪いな。今日は別の相手がいるんだ』

「……猪？」

茂みから飛び出たのは、これまた人間ではなく、一の見た通りそのまま猪で、見た目にはコタロウほどの違和感を覚えるようなものはあまりない。

牙が生えていることから、たぶん雄だろう。

『ふん、そんなもの知るか！ お前に負けたままできると収まりが付かないんだよお！』

そう言いながら小さい体を、前足つけたままに頭を目一杯上げることで大きく見せようとしていた。

……デフォルメされてたら、今の動作は可愛かったんだろうけどなあ……。

『相も変わらず幼稚だな。……なら、これならどうだ？ 「俺を倒したくば、まずこいつが相手だ」』

動きには表れなかったが、それが自分を指していることは、さすがに流れてわかった。

ただ、ちよつと事態についていくのに時間が必要なだけで、

『よっしゃあ人間！ 恨みはないけど死んでくれ！』

「殺すのか!？」

『ペットはともかく、動物界に殺害の罪があると思っているのか？』

「いや……確かにそうだけど」

言われれば、弱肉強食とは元々自然界の例外の無い例えだった。

と、思考する一の前で、いきなりノイが突進してきた。

『ふりゃあああああ!』

……も、もうちよい間をくれよ！ という一の心の叫びは届く訳もなく、夜目にあってわかりづらい距離をどつと詰められた。

見たところ何の迷いもなく真っ直ぐにこちらに向かってくる。小さいとはいえ、一の膝より高い位置に天辺てっぺんがあるので、やはりそれなりに人を危ぶめるには十分な体軀だった。ぶつかったら『ぶつかっちゃった♪ てへ♪』では済まないだろう。コタロウの時ほどではないにしろ、それでも並以上には恐怖を感じさせられるほどの勢いだった。

「なんだってんだ、よ……！」

しかし、それは直線的な動きだったために、単純に一は横っ跳びに避けようとした。いや、

『あつたりいいいいいい！』

「いっ……！？」

『避けようとしてしまった』がために、もしくは対応を誤ったがために、腹部への直撃を受けてしまった。向きが曲がるなんて温いものではなく、直前で軌道が一の胴体めがけて『折れた』。跳躍のようにも見えたが、それにしてもブレーキの動作が全くといっていいほど、なかった。

直撃し、さっきの晩飯どころか、血液すら出てきそうな吐き気が襲ってくるのを直感した一は力を回し、脚力『ではなく』後ろに飛び、木にぶつかる直前、空中で停止、着地。ひとまず体勢を整えようとしますが、ノイが着地と同時に突撃を再開する。

ここにきて、一はコタロウが消えたことに気付くが、それを考える暇はなさそうだった。

『さらに続こう！』

「……旧式！」

一は脅威に向かい、手をかざす。と、一の手を警戒してか、また折れ曲がり、手の動きだけでは届かない別の角度——足下の後ろ、から衝撃が伝わってきた。

だが、今度は攻撃を受けてもなお、1ミリたりとも動かない。

『お……止められた？』

「……はあっ、はあ」

代わりに呼気が白くなる。気づけば顔面も手足も何もかもが、火照っていた。

たった2回で容量を超えた。

旧式の限界のサインだった。

……そんなに威力あったのか、こいつ!?

「やっぱ——」

『とつとめえい!』

着地を済ませたノイが不可避の突撃を再び繰り返し、それを一はどうすることも出来ずに、食らった。

吹っ飛ばされて——いや、吹っ飛んで、体の何カ所かを強かに打って、最後は岩に背中をぶつけ、弾き止められた。

……骨折は免れた——けど、まずいな……。

『おりよ、まだ動けるのか? じゃ、負けを認めるか?』

「いや、最初から勝つつもりはないんだけど……」

『じゃあ認めろおおおお!』

話を聞けえええええ! という一の抗議が口をつく前に再び猛進が————逸れた。

『うおおおおお前どこまで逃げるううううう待てえええええ!』

明後日に向かって、ノイは走り去った。

今日に残された一は、全身から湯気を立ち上らせてボロ雑巾のように打ち捨てられていた。

全身所々に打撲の痕が残り、人気のない山、ついさっき程ではな

いにしろ、何気に生命の危機であった。
そこに、

『駄目だったか……これは幸先が悪いな。という訳で悪いついでに、
予定が変わったと言っておこう』

いつの間にか鬼没したコタロウが、神出していた。

……こいつ、何考えてやがる？ 俺を殺す気か？

『ふん、その目を見れば大方言いたいことは山ほど分かる。「貴方の偉大さがよく分かりました今からは是非鍛えて下さい」だろう？』
「他種族と通じ合うのが無理だと分かった今、是非お家に帰してくれないでしょうか？」

『なんだ、違うのか』

「どうか何でコタロウが偉大なんだよ」

『俺はいつでも偉大だ』

……ナルシスト？ と一が白い目でコタロウを見ていると、

『なんだその目は。また山中で気絶したいか』

数時間前の怖い何かを再び放出した。

「すいませんでした！」

『ふん、従順だな』

と言われても何も言い返せない一。完全に白旗を振っていた。

『で、何が足りないか、分かったか？』

「射程距離……はもう諦めてるからいいとして、攻撃力、とか？」

自分でも適当に言った感が拭えない答えだったが、コタロウはそれに『まあ、そうだ』と言った。

……そんなんでいいのかよ。

『よりの確に言えば、「出力」だな。完成していない、とも取れるが』

「……本人としてはこれから何ができるようになればいいのか、丸わかりなんだが……」

要するに、旧式の反対、なのだが……。

こればかりは、多分、これまでのようには行かないだろう。

『ああ、別に意味の分からない特訓を強いるつもりはないからな。そんなことで止められても困る』

「さっきもの凄く止めたくなくなってしまったんだが……」

『なら今から俺が呼び戻してやろうか？』

遠くで『どこにいるうううう！』と某猪の鳴き声が聞こえた。

「……遠慮します」

『本当は命の危機というものが鍛えるのに一番効果的なんだがな。別にそこまでする理由はないのだろう？』

「というか、そもそも強くなる必要も俺は感じていないんだけど……」

これは嘘のない、一の本心である。

特に敵がいるわけでもないし、別段最強無敵を夢見る男子でもないので、強くなること自体に反対はしなくとも、好みもしない。親が誰かに殺された訳でもなく、途轍とてつもない金額を詐取されたことも

ない。奇抜でもなく、……ただ、気力がない。

動かされることすら、厭いとわない。

我が儘ではなく他が儘、である。

抵抗力、情性共に、およそゼロ。

従順と言われても仕方がない。

『ふん、食えないな。肉を食っているのかも怪しい』

「草食系、草食系」

軽く払うように手を振りながらとぼけた一（未だに寝っ転がっているため格好が付かない）をコタロウは『どちらかと言えば、無食だな』と評した。

……誰が上手いこと言えと？

「よっこいせつと……で、これからどうするかってのは、ただひたすらに俺のレベルアップか？」

『ああ、お前は戦ってレベルが上がるようなタイプじゃないことも分かったしな。何かの拍子に突然跳ね上がるのならそれを待つしかない。そうだな……結跏趺坐けっかふざ、出来るか？』

あまり馴染みのない単語が飛び出てきた。

一が意味を知った上で「それはできない」と言うと、

『だったら半跏趺坐はんかふざにしろ。もし胡座あぐらがしたかったら胡座でも良い』

「じゃあ……胡座の方で」

慣れている方を選んだ。

……何故に四足歩行の動物が結跏趺坐とか知っているのか……まあいいや。

道も何もないところ、単に猪に吹っ飛ばされて着地した地点で一

は人を弟子にとる奇妙な狼の言いつけで座することになった。はっきり言って座り心地と呼べるものすらない。最低限、石を取っ払うのだけは許可が下りたが、それでも十分に苦行だった。場所、姿勢共に略式甚だしい座禅だった。

……別に仏教って訳じゃないんだろぅけどな。

「……で、これをどれくらい続けられ？」

一は、数時間……今晚……いや、翌朝ぐらいなら許容範囲、と百歩ぐらい譲りながら踏んでいたのだが、

『一生をその場で過ごす覚悟で臨め』

無情に宣告された。

……もう、意味わからん。

覚悟で臨めってことは本気でそのつもりがないのだろうということとはわかるのだが、気の遠くなる話だった。

『別に寝ずにいられるのだろう？　ならずっと試行錯誤しても問題はあるまい』

「……………」

確かに『^{ハーネス}変化律』を使えば寝ないでいることは可能なのだが、ずっと集中できるかといえば、そうではない。それこそ神経や集中が切れる。

『ああ、周りのことなら俺が露払いをしてやるから安心しろ。死なない程度には面倒を見てやる』

「……どうも」

『どの道、あと3日はある。少なくともその間は何か出来るように』

なるまでは立たせないから、そのつもりで居ろ』

「……………」

常日頃から大抵のことを面倒くさい面倒くさいと思いつづけていた一だが、いざ何もできないとなると、これもまた面倒くさいなあ、と思ったのだった。

真面一、諦めは良い方である。

第59話 こういいうのを山籠りと言うのか（後書き）

先週の活動報告をほぼそのまま載せます。

~~~~~

正直な所を申し上げますと、ここ最近ピンチです。イチについて用意ドンの方が、です。

大まかな指針は持っているのですが、どれだけ面白くなるか、とか、これ行き当たりばったりもいいところだろっていうのが最近余りにも自分で目に付きます。

ここでちよつと、オーディエンスを一応使ってみたいと思います。

Q: Hegiraは『イチに』を続けるべきか、それともアイデアをしばらく練って出直してくるべきか？

回答方式は感想、活動報告へのレス、メッセージボックスなど、作者に届けば何でもいいです。

2月中には答えを出そうかと思ってます。

もし何も意見が来なければ、おそらく遠慮なく、何より申し訳なく思いながら練り直します。武者修行ならぬ作者修行します。アマチュアですが。

~~~~~

というわけです。

勝手なことで申し訳ないのですが、気分的にはほとんど休載するつもりです。

練るとしたら多分、1ヶ月とかでは済まないと思います。年単位の

時間はかけないつもりですが、半年……は最悪かかるかもしれません。その頃は特に忙しくなりそうなので。

正直どっちが読者のためになるのか（あるいは自分のためになるのか）わからないので、意見、一言あれば、出来るだけ多くの人から欲しいところです。

もし休載することになったときは、どうかお許し下さい。
長々と、失礼しました。

2010年2月21日

作者の悩んだ末の閃き（前書き）

残念、続きではありません。お知らせです。申し訳ありません。

作者の悩んだ末の閃き

あー、ゴホン。てすてーす。……はい、マイクの調子はいいいみたいです。

えー、本日は友引ということで、お日柄は良いはずなんです、さくっと検索したところ、この正午の時間は凶、のようです。これの更新時間です。

まあというわけで本日この時間、お日柄は悪いのですが、方針を箇条書きでまとめます。

とりあえず、どうぞ。

- ・ 改稿します。
- ・ 今までの分は、改稿されるときに全て取り下げます。
- ・ おそらくこのURLのままで行くので、検索する必要はたぶん無いです。
- ・ 新しいペンネーム（今はH e g i r aではない）に変えます。
- ・ （まさかとは思うけど）保存がしたい方は期日までにどうぞ。
- ・ 期日は6月末日の予定です。7月より前に載せるつもりです。
- ・ 更新ペースはあえて不定期にします（申し訳ありません！）。
- ・ とりあえず未完結の警告が出ないように頑張る。
- ・ ストーリーはある程度変化してしまいます。ですが基本的なところは変えないつもりです。
- ・ コメディ一辺倒……ではなくなるか？

まあ、こんなところです。

~~~~~追加事項~~~~~

削除を試みたところ、『〜でない場合の削除はおやめ下さい』と

いう表示がありましたので、（当然それにこちらの意図は該当していなかったわけで）これはこのまま残して完結ということにしておきます。

改稿した拙作のタイトルは『第二の手　　Second hand』  
』（2010／6／29現在）です。

タグはつつけるのが苦手なので（さっき失敗した）、面倒ですが、検索の一手間をお願いします。

……誰か教えて！。

## 作者の悩んだ末の閃き（後書き）

なぜだろう 俳句があるのに 二百文字

……ああ、ツイッターに載せられないのか。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8727g/>

---

イチについて用意ドン

2010年10月11日00時22分発行